

---

# テイルズ・オブ・ジアビスサーガ

魔帝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テイルズ・オブ・ジァビスサーガ

### 【Nコード】

N6369N

### 【作者名】

魔帝

### 【あらすじ】

ゼノサーガの世界から来た、半分機械のイブキとKOS・MOSがジァビスの世界でローレライの願いを聞く！

## プロローグ（前書き）

初めまして、魔帝です。ド素人の半端ものですが、宜しくお願いします。

## プロローグ

ここは、とある部屋。

ここでは、三人の少年と少女を守りながら沢山の化け物、グノーシス と戦う二人の青年と美女がいた。

「クソ！しつこいんだよ！！いい加減にしやがれ！！！」

「イブキ、もう少しです！頑張ってください！！！」

「っ！！ K O S - M O S ! 左だ！！！」

「っ！！ ハアア！！！」

イブキと呼ばれた黒髪の青年は、自分に声をかけてくれた K O S - M O S と言う長い青髪の美女の左から、グノーシスが迫って来るのに気がつき、注意をする。

すると、K O S - M O S は直ぐに右手に持っているガトリングガンでグノーシスを撃ち落とした。

「助かりました……。イブキ、ありがとうございます。」

「いいって。それより……ケイオス！！まだなのか！！もう限界に近いぞ！！！」

守っている三人の中の一人の銀髪の少年、ケイオスにイブキが叫んだ。

ケイオスは他の二人と一緒に、グノーシス達をある所へと連れて行く為の作業をしていた。

「まだダメだ！！何とか持ちこたえて！！！」

「クツ！……ッ!? KOS - MOS!!!」

ケイオスの返答に顔をしかめていたら、KOS - MOSが巨大なグノーシス二体に攻撃を受けていた。

「チクシヨウ!!!」

イブキは直ぐに駆けつけていったが、距離があるため直ぐに助けられなかった。

その間に一体のグノーシスは尻尾でKOS - MOSを突き刺そうとしていた。

「クソオオオ!!!間に合えエエエ!!!」

グシャン!!!

その尻尾は戸惑いなく振り下ろされ、体を貫いた。

「ア……ア……イ……ブ……キ……?」

だがその尻尾はKOS - MOSではなく、間に合ったイブキの体を貫いていた。

「ガハアッ!!!」

イブキの体の半分は機械で出来ており、心臓の部分には、ブラスト・コア というものがあるのだが、尻尾はそれを完璧に貫いていた。

「イヤアアアアアアアアア!!!」

KOS - MOSは泣き叫ぶとガトリングガンでグノーシスを撃ち抜

き、イブキを助け出した。

しかし、コアを完全に潰され、もう死にかけていた。

「イブキ!!しっかりしてください!!!」

KOS・MOSは、必死に呼びかけながらイブキを抱きかかえた。

「クッ!!ハア、ハア……ウツ!!」

だがイブキはほとんど体が動かなくなり、感覚が無くなってきている。

(クソ……、こんな所で死ねないのに……!)

「イブキ、お願いです!!!死なないでください!!!あなたが死んだら、私はツ!!!」

「ウツ!!ハア、KOS・MOS……もつと……お前と……ハア、ハア……居たかった……。」

「まだ居れます!!!だから最後までに言わないでください!!!」

「悪い……愛して……『コスモス』」

「ツ!!?イブキ!!?イブキ!!お願いします!!!目を開けて下さい!!!イブキ!!!イブキイイ……!!!」

イブキは最後にKOS・MOSの名を人間に言うような言い方で、愛しいように呼び、息をひきとった。

## プロローグ（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

感想があればドシドシ書いてください！！

頑張ります！

## プロローグ2（前書き）

プロローグ2です。

今回は会話ばかりです。

宜しく願います！



## プロローグ2

- とある空間 -

この真っ白い空間に一人の人間のような機械のような人が漂っていた。

その人の体の心臓部分はポツカリと穴があいていた。

「ウ…、ここは…どこだ？」

イブキは目を覚まし、ここが何処なのか辺りを見渡したが、何も無かった。

（何処だ？ここ。いや、それ以前に何で俺はこうして動いて喋れている？コアを貫かれて、死んだはず…。）

確かにイブキのコアは貫かれて、もう動かない筈なのに動いている。どうゆうことか考えていると、突然オレンジ色のような光が現れて、人の形になった。

イブキが警戒していると、突然頭に直接声が響いてきた。

人で在り、人で在らざる者よ。その力で我と我の友を救ってくれ。

（何だ！？これは！？まさか、あの光が！？）

そうだ。我だ。

（……………その頼み事の前にいくつか聞きだいたいことがある。）

だが、決して取り乱さないイブキ。

なんだ？

（俺は死んだはずだ。なぜここにいる？）

それは、私の力でここに連れて来たからだ。

（なるほど……。……。コスモスは？）

イブキは自分が死んだ後のことが気になり聞いてみた。

彼女は……。彼らを守る為に特攻し、敵諸共吹き飛んだ……。

（なッ！？ふざけるな！！そんな事があつてたまるか！！！！）

事実だ。

（クソッ！！ コスモス……俺は、お前を……。）

イブキがコスモスの事で悔やんでいると、光が……

ソナタが頼みを聞いてくれるのなら、彼女も一緒に連れて行く事が出来るか？

（本当か！！？嘘じゃ無いんだろうな！！？）

ああ……ソナタが聞いてくれるのなら、約束しよう。……少し卑怯な

言い方だね。

(イヤ、良いだろう。お前の頼みを聞こう。)

イブキはコスモスが助かるのなら何でもすると決心した。

ありがとう。…頼み事だが、ある世界に行ってもらい、我と我の友を救ってもらいたいのだが？

(お前とお前の友を？どういう状況なんだ？)

友は戦争を止める為に我と契約し、2000年先までの未来を予言し、人々を救ったのだが、フランシス・ダートと言う者が彼女を妬み裏切り、友を投獄したのだ。そこで君に助け出して欲しい。

(わかった。お前は？)

我の事は……実はまだ2000年も先の事なんだが…。

(ハア！？なにを言ってるんだ！？流石に俺でも生きていられないぞ！！！)

何、大丈夫だ。我の力で不老にする。

(不死ではないのか？)

ああ、体を真っ二つにされたり、コアを潰されたら死ぬ。

(そうかよ…。わかった。2000年でも20000年でも待つてやるよ。)

ありがとう。

（イヤ、コスモスが生きられるのなら問題ない。で、その友とお前の名は？）

我はローレライ。そして友の名は、ユリア・ジュエ。

（オーライ。絶対に助けてやるからな。）

ありがとう。……礼つと言つてはなんだが、向ここの世界に行つても、E・S以外の転送とエーテルドライブは使えるようにしておく。E・Sはどうやら我の力では無理そうだ。…それと、ちょっとしたサプライズを送る。

（何だ？それは？）

お楽しみだ。では、頼んだぞ。

（フン…了解。）

そして、イブキは惑星オールドドラントへと向かった。

## プロローグ2（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

感想があればどうぞー！ー！

## 設定（前書き）

主人公の設定です。

## 設定

名前：イブキ・ヤマト

性別：男

年齢：22

髪：漆黒のショート

顔：上の中

目：深い青色

身長：179

服装：黒の半袖、黒のズボン、黒のロングコート、黒のブーツ。  
コートは、腹の辺りにあるベルトと、腰のベルトを締め、腰からマ  
ント状になっている。長さはかかとよりも少し短い。

武器：日本刀、長剣、スマートガトリングカスタマイズ×2、超高

エネルギーバスターライフル×2、ブラスターガン×2。

好きな物

魚、甘い物、苦い物、静かな所、ポニーテール。

嫌いな物

酸っぱい物、ウルサイ所。

性格：少しクールな、不良っぽい感じ。  
女に弱い。

体：両腕、右足はKOSIMOSの起動実験の時の暴走をで、引き裂かれ、機械にした。その時に、心臓もやられ、死にかけていたが、ブラスト・コア と言うものを心臓代わりに埋め込まれ、奇跡的に生き延びた。

ブラスト・コア

イブキの心臓代わりの物。血も送れる。  
生命力を光の力に変えて、武器に纏わしたり、直接放つたりして攻撃も出来る。オールドドラントに来てからは第七音素になった。



技

B・D ブラスト・ドライブ 斬光霸

光の力を刀に纏わし、斬撃を飛ばす技。加減次第で、巨大化等も可。

B・D 龍霸槍

簡単に言えば、強力な光龍槍。これも、加減次第で巨大化等も可。

秘奥技

ブラスト・ドライブ

膨大な光の力を片腕に、溜め、その腕を突き出し、放つ奥義。ル  
ークのロスト・フォン・ドライブと似ている。

B・D ゼロ

膨大な光の力を片腕に溜め、それを地面に突き刺し、大噴火の様に  
敵を消し去る、超広域殲滅技。

???

??????

## 再開と襲撃（前書き）

少し遅くなりましたが、更新です。  
ちょっど書き方を変えて見ました！

コスモスファンの皆さん！！先に誤るとききます！ゴメンナサイ！  
俺色に染めてしまいました。

## 再開と襲撃

目を開けると、そこは森の中だった。

(ここは…どこだ？コスモスは何処にいる？)

俺はあたりを見渡したが、コスモスらしき人影は無かった。  
これからどうしようと考えていたら、突然、激しい頭痛がした。

「ガアツ！？なツなんだ！？これは！？」

頭痛がすると同時に、ある情報が流れ込んできた。

「こ…れ…は？ この…世界の…情報？…グウウツ！！」

それは、この世界の全ての情報だった。どうやらローレイが俺のために情報を送り込んだようだ。  
しかし、あまりにも量の多さに頭が破裂しそうだった。

「ハア…ハア…ハア…クソツ！！もうちょい穏便にしろっての！  
…まさか、コスモスもこんな目に？もしそうだったら、ローレイめ…殺す。」

俺は割と本気でそう思った。

「まあいいや。兎に角、コスモスを探そう。こっちに来てる筈だ。」

・・・コスモス視点・・・

「ここは、何処なんでしょうか？」

私が目を開けると、森の中に居ました。私は、最後のグノーシスに特攻をかけて爆破したはずなのに……。

「ウツ!? 何ですか!? コレは!?!」

いきなり、頭に激痛がきた。私はアンドロイドの筈なのに……何故?すると、何かの情報が流れ込んで来ました。

「ハア……ハア……、どうやら此方の世界の情報だった様ですね……。」  
このお陰で私は全てを理解しました。この世界の事、ローレライ、役目……そして、アンドロイドの私が痛みを感じた理由も。

「なら、早くイブキを見つけないといけませんね。」

そして、私は……イブキと……フフッ

オット、いけませんね、いくら、私の体がこうなったからと言って、浮かれてはダメですね。

さあ、気を取り直して探しましょう。

ガサッ

「ツ!? 何ですか!?!」

突然、草村の中から数え切れない程の、魔物が出て来た。

少し多いですね……。ですが、ここで殺られるわけにはッ！  
私は、三連式ガトリングガンを両手に転送して打ち出した。

「ハアアア！！」

- - イブキ視点 - -

「どこにいるんだ？…つたく、ローレイめ、一緒の場所に出して  
くれたら良かったのに…。」

俺はコスモスを探しながら、ローレイに文句を言った。

ズガガガン！！！！

「ッ！？なんだ！？」

突然、近くからなにかの大きな音がしてきた。

「これは……まさか！？ コスモスッ！！」

俺はコスモスが戦っていると感じ、大急ぎで音がしている方向に向  
かった。

- - コスモス視点 - -

(クツ……倒してもすぐにわいて出て来る……。このままでは……)

私は只今とてもピンチです。魔物は増える一方ですし、それに……この体では少しやりずらいです。

何故ですって？

それは……今まで感覚が無かったから、気にはしませんでしたけど、その……胸が邪魔なのです！

動くたびに胸が激しく揺れて、とても気にしてしまつのです！よくシオンは動いていられたね……。尊敬出来ます。「ガアアアッ！！」

「ッ！？しまつ……」

ドカツー！！

クツ……油断しましたね……。後ろから飛びついてきたのに気がつきませんでした。背中にもろに喰らってしまいました。

背中からは血が出ていて、真っ赤だった。私はもう動けない。どうしたら……。。

「グルアアアッー！！」

魔物が二匹私に飛びついてきた。

(こんな……所で……。イブキ……！！)

「ハアアアアア！！！！」  
ザシュザシュ！

「えっ…？」

…イブキ視点…

「ハアアアア！！」

ハア…ハア…あ、危なかった…。

俺が音のする場所に駆けつけると、コスモスに魔物が飛びついていった所だった。とつさに魔物を斬りつけたから助かったが…。

（何故コスモスがこんな奴らに押されてるんだ？よく見ると、血ま  
で出てるし……って！？ 血！？なんで！？）

「コスモス、大丈夫か！？」

「イブキ…ハイ！背中を少しやられましたけど、大丈夫です！ ツ！  
」！」

「どこが大丈夫だ！！背中を向ける！！」

「す、すみません…。」

「謝るな…。エーテルドライブ。」

俺はコスモスの背中に治癒効果のエーテルをあてた。傷はすぐに治った。

「コスモス、よく頑張った。後は俺に任せろ！」

「ハイ。頼みます。」

俺はコスモスを下がらして、魔物共の前にでた。

「さあて、テメエら、よくも俺の大切な女に傷を付けてくれたな…。その罪、自らの命をもつてしても安いぞ!!!」

俺は、右手に刀、左手に剣を転送してきて、魔物共に突っ込んで行った。

「ウオオオオオオオオオオ!!!」

斬!!!斬斬!!!

俺は刀と剣を目にも止まらぬ速さで魔物共を斬りつけて行った。だが、一向に数が減らない。

(クツ!これじゃキリがないな。仕方ない、あれを使うか。幸い、コアは健在だ。これならいける!)

俺は、情報で味方識別「マーキング」と言う物を知ったため、それをコスモスにかけると、コアの力を上げた。

「コスモス!備えてろ!!!」

俺はコスモスに注意をすると、右腕に光の力を大量に流し込み、右



腕を振りかぶり地面に思いつきり突き刺した。

「B・Dウウウ、ゼロオオオ!!!」

そう叫ぶと、周りの地面が広範囲に渡って割れ、割れ目から大量の光が溢れだし、それがさらに強く輝き出した。

ズガアアオアアン!!!!!!!!!!

「ハア…ハア…フウ、久しぶりに使ったから疲れたぜ。」

そう呟く俺の周りには、もう魔物共は居なかった。  
俺が使ったのは、大量の光の力を地面に流し込み、大噴火させる、  
超広域殲滅技だ。

「……よし、森に被害無し。我ながら良くやった。」

しかも敵と認識した物だけという反則物。

「さて、コスモスは…っと、いたいた。」

「イブキ…。」

俺はコスモスを見つけると、ゆっくりと歩いて向かった。コスモスは只俺の名前を呼び見つけているだけだった。

「コスモス…、また…会えたな…。」

「はい…会え…ました…。」

俺がコスモスの前に来て言うと、コスモスは今にも泣きそうな顔で返してくれた。

「コスモス!!」

「イブキ!!」

俺達は我慢ができず、抱きしめ合った。

「コスモスッ…良かったッ…またッ…お前に会えてッ!!」

「イブキッ…私ものです!!…あなたにッ…会いたかった…!!」

「コスモス…。」

「イブキ…。」

俺達は見つめ合い、そして、顔を近づけた。  
二人の影は暫くの間重なっていた。

- - 数十分後 - -

俺達は暫くの間抱き合っていたが、段々と照れてきて、ゆっくりと離れた。

「あ〜え〜コスモス？ その…お前の体は一体どうしたんだ？」

俺は何とかこの気まずい雰囲気を脱しようとして、言葉を発したが、こんな質問って……。まあ、いいか。どうせ気になってたし。

「ああ、えつと、実は、ローレライがこの体の方が愛し合う者同士、都合が良いだろうと、人間に変えてくれました」

ああ、サプライズって、この事か。ローレライ…良いことしてくれるんじゃないか。

「そうか。別に変えなくても、側に居てくれるだけでも良かったのに、嬉しい事してくれるじゃないか。」

「そうですね。しかし、私はこの体の方が良いです。これですと、あなたと本当に人間らしい事が出来るのですから…。」

「コスモス…。」

「そつそれに、よつよつ夜のつ、あつああ相手もつ、でつでつ、できますからツ！！／／／／／」

ツ！？／／／／ なツ何を言うんだ！？いきなり！！／／／／

「えツ！？／／／ いやツ！／／／ええツ！！？／／／／」

「イブキ…／／／ ……その……好きに、して、いいですよ…／／／／」スル…

「ちょツ／／／ こんな所で脱ぐなツ！！／／／」

「一体どうし……ッ!？」

ガキイン!!

「ッ!？ 何ですか!？」

いきなり背後の草陰から、二つの影が飛び出してきて、俺達に遅い掛かってきた。とっさに刀と剣で防いだが……

「なッ何!？」

「えッ!？」

二人を襲った影……それは……まだ十四、五歳位の少年達だった。

## 二人の騎士（前書き）

スイマセン！！遅くなりました！！！！  
中々時間がなくてかけませんでした！！！！

## 二人の騎士

俺は今、二人の少年と対峙している。

一人は赤髪で、剣を持った少年。

もう一人は、金髪で、刀を持った少年。

どちらも、中々の腕を持っている様だが、俺達よりは下だな。

「チツ！防がれたか！！ヴァルター！！コイツら、出来るぞ！！」

「うん！本気で行かないと！！」

赤髪の少年が、金髪の少年に向かって叫び、金髪の少年がそれに返した。

ん？ヴァルター？

（ちょっと待てよ？今、ヴァルターって言わなかったか？確か、ユリアを守る騎士の一人のはずだ。と言うことは、赤髪の方は、フレイル・アルバートか。何故二人が俺達に攻撃を仕掛けてくる？）

「おい、お前ら！何故俺達に攻撃する！？」

「惚けるな！！ お前ら、フランシスの回し者だろツ！！俺達を捕らえに来たんだろ！？」

「ハア!? 何勘違いしてんだ!! そんな訳あるかッ!!」

「嘘をつくなッ!! 行くぞッ!! ヴァルター!!」

「うん!!」

どうやらコイツらは、果てしなく勘違いをしている様だ。まあ、自分達の仲間が裏切り、主人を投獄されたからな。判断力が鈍っても仕方ない。……三流以下だが。

「ハア…。コスモス、下がってる。さっさと終わらす。」

「わかりました。……やりすぎないで下さいね。」

俺はコスモスを下がらせて、二人と対峙した。……手加減出来るかな？

「来い……すぐに終わらせてやる。サザンクロスの所に早く行きたいからな。」

「お前ッ!? ナメるなア!!」

俺は、少し挑発して怒らせた。

(フン……本当に三流以下だな。)

「魔神剣!!」

ヴァルターが技を放って来たが、遅すぎる。俺は体を少しそらして避けた。

「ハアアアッ!!」

続いて、フレイルが突っ込んで来たが、怒りで、動きが悪くなっていて遅い。

「双牙斬ッ!!」

(だから遅いつて…。)

俺はまた、体を軽く逸らし避けた。

しかし、避けたのは上段からの振りだけだった。双牙斬は、上段から斬り、そのまま斬り返しながら飛び上がる技だ。

フレイルは、とった!と思い、全力で斬り返した。

「甘い…。」

ガシッ!!!!

「なッ!?バカなッ!?!」

俺は右手の「指だけ」でそれを掴んだ。

「クソッ!!!離せ!!!」



「フレイル!? クソオー!!!」

ブウン!!!

「フン...」

ヴァルターが斬りつけて来たが、俺は剣を離し、バックステップで避けた。

「甘い、甘過ぎる。それでは俺を倒せないぞ。」

「ほざいてろッ!! ハア...アア!!」

「バカが...」

フレイルが怒り叫んで突っ込んで来るが、

(もう駄目だな...)

ユリアを守る騎士だから、どんな物か知りたがったが、ここまでとはな...。

「もう、お終いだ。」

そう言うと、俺はコアの力を発生させ、少し体から放ち、フレイルを吹き飛ばした。

「ウワアッ!?!」

「フレイル、大丈夫!?!」

「人の心配をしている場合か？」

「えっ!？」

俺は左手にある剣に光を纏わし、突きの構えをした。

「B・D 龍覇槍…。」

グワアアアアン!!!

突きを放つと、剣から龍の形をした光が放たれた。

ズドオオオオン!!!

「ワアアアアア!!!」

それは、ヴァルターが居た足下に当たり、爆発を起こした。  
ヴァルターは、そのまま吹き飛び意識を失った。

「ヴァルター…!!!」 お前エエエエエ!!!

「煩い。黙ってる。」

怒り狂っているフレイルにそう言うと、右手に刀をまた出して、刀身に光を纏わした。

「B・D 斬光覇…。」

ズザアアアン！！！！！！

「グワアアア！！！！」

刀を振るうと、それは光の斬撃となり、フレイルに飛んでいき、直撃した。

フレイルは吹っ飛び、そのまま木にぶつかり気絶した。

（これでも一割も出して無いんだがな……。）

「どっだけ弱いんだよ。」

俺はあまりにももの呆気なさに落胆した。

「……イブキ、やりすぎです。」

「そうか？こんな物だろ？」

「相手は子供ですよ？」

「でも一応、騎士だ。」

「……………」

「……悪かった。やりすぎた。だからその目は止めてくれ。」

「分かればいいのです。」

コスモスに注意され、反論したが、冷やかな目で見られ、たまら

ず謝った。

だって嫌だろ？好きな女にそうされたら…。

「よし、この二人を連れてサザンクロスの所に行くか。まずは、それからだ。」

俺はフレイルを、コスモスがヴァルターを背中に背負って、歩き出した。

サザンクロスの居場所？ローレイが教えてくれたさ。

## サザンクロス(前書き)

更新です。

文才がほしいです…。

## サザンクロス

ーサザンクロス邸ー

俺達は今、ある建物の前に居る。  
大きさは豪邸そのものだが、外見は、お世辞にも綺麗とは言えず、  
ボロボロだった。恐らく中も。

(なんだここ…。ゾビでも出そうだな)

「……取り敢えず、中に入ろう。」

「えっ、ここに…ですか…?」(プルプル)

(ん?震えてる?...まさか…。)

「コスモス、お前、もしかして…怖いのか?(ニヤ…)」

「そっ、そんな事ありません!私が怖がるなんて、あるわけありません!」

「フーン、そうだよな(ニヤニヤ)。」

「そうです!」

「じゃあ行くぞ。」

「はい！」

バキィ！！ボキィ！！ベキィ！！ キィ〜。...

……なんだよ、いまの音。扉を開けたただけだぞ？コスモス何かいまでもの凄くビクついてるぞ。

（床とか抜けないだろうな。）

俺は別の意味でこわくなった。

――玄関――

中は思ったよりしつかりしていた。が、とても汚かった。ホコリだらけだったり、蜘蛛の巣が所々張っていたりしていた。しかも、薄暗い。

（…汚いが、しつかりとしている様だな。コレなら、俺の心配は無いな。）

「暗いなあ。何か出たりして（ニヤリ）。」

「へっ変な事を言わないで下さい！！」

「ハツハツハツ！ 悪い悪い。出るわけ無いよな！ うん？なん

だ？あれ？」

「どつどれですか？」

「ほら、あの窓。あそこに何かある。」

「え？どこに「ワアアッ！！！」キャアア！！！」

「ハッハッハッハッ！！！」

「あっ！？／／だっ騙しましたね！？／／／／」

「ハッハッハッ！ 悪い悪い！ 余りにも怖がってたから、つい！  
アッハッハッハッ！」

「クウゝ…／／／（怒）」

そんな可愛い顔で怒っても怖くないって。

「よし、んじゃ、行くか、コス？ズボツ！！……。」

……床が……抜けた……。

「プツ……、大丈夫ですか？イブキ。（ニヤニヤ）」  
クソ……コスモスめ、仕返しとばかりに笑いやがって……。

（クソツ！！全然しっかりしてねーじゃんかよ！！ホントにボロイ  
な！！おい！！）

俺は、今日、ここに、ユリアを助けたら全力でこの家を立て直す事  
を宣言する……！！

—————



今俺達は、博士の部屋の前にいる。何故判るって？それは、扉に、  
『サザンクロスのお部屋』って、あるからだ…。

確か、情報通りなら、年齢は38の筈だ。…そんなオッサンがやら何か使っているなんて、思いたくない！！…そうコレはユリアが書いたんだ！そうなんだ！きつとそうだよ！先生想いな奴だよ！！

…まあ、現実逃避は此処までとして、ここに来るまで相当苦労した。それは俺の体が物語っている。

頭にはデカいたんこぶ、ズボンはビリビリに破れ、体には蜘蛛の巣が付き、トドメにびしょ濡れときた。

何があつたって？

思い出したくもない！階段を登っていたら、段を踏み抜き、下半身がハマって落ち掛けたり、何回も床を踏み抜いたりとか、上から小さいシャンデリアが頭に落ちてきたりとか、ドアを開けら何故か溜まっていたゴミがなだれてきたりとか、何故か廊下に落とし穴があつて、落ちたら水が溜まっていたりとかない！！

「と云うか、最後のは何だよ！？明らかに人工物だったぞ！？」

「プツ…イブキ…頑張ってください…（笑）。」 「何をだよ！？」

「と云うか、ずっと笑ってんじゃねえよ！！」

「すっすみません。…フフツ（笑）」

チクショー…。

って、そう言えば気絶している二人、全然目を覚まさねーな…。盾にしたりとかしたのに…。

「…兎に角、ここにサザンクロスが居る筈だ。絶対。と云うか居る。」

「

俺はそう願ひ(?)扉を開けた。

そこには、一人の男がいた。若干白髪混じりの黒髪で、ダンディーなオッサンが居た。

(ホントに博士か?)

そう疑ってしまう程、博士っぽくない。

だが、周りにある本やら、道具が博士と言う事を示している。

俺が周りを見て居ると、サザンクロスが喋ってきた。

「フッフッフツツ…よく此処まできたな。」「ああ…とても苦労したよ。此処まで来るのに。」

「フツ…、気に入って貰えたかな?数々のおもてなしは?」

「お前が仕向けたのか?!?!?」

コイツ…なんて奴だ。

「そんなワケないだろう。」

「違うのかよ!?!」

「当たり前だ。……………落とし穴以外は。」

「やはりお前が!?!?」

「嘘だ。」

「嘘かよ！……！」

「あれはユリアが作っていたな。」

「ユリアさ……ん！？アンタなにしてんの……！」

何なんだ！？このオツサンは！？ペースが狂う！ ユリアもホント  
何してくれちゃってんの！？

そこッ！コスモス、いい加減にわらうな！！

「まあまあ……。それより、二人を下ろしたらどうかね？」

「あ、ああ……。そうだな。」

何か流された気がしたが、まあ、取り敢えず部屋の隅に二人を置いた。

「さて、此処に来た理由を聞こうか？」

「今更だが、アンタ俺達がいきなり来たのに、驚かないんだな。……分かってたのか？」

「イヤ、ただ驚く事に慣れてしまったただだよ。……色々と見つけしまったりしたからな。」

そりゃそうか。

「俺達がここに来た理由は、ただ一つ。ユリアを助ける為に情報が欲しい。」

「ユリアを？」

「ああ。」

俺は、ここまでの経緯を話した。

「……………」

「そうか……。そんな事が。」

「信じるのか？」

「ああ。君達の間を見れば分かる。」

「さすが。話が分かる。」

「して、何の情報か欲しいのだ？この世界の全てを知っているのだらう？」

「俺達を知っているのは、どんな世界、どんな場所、どんな人と言う、説明みたいに知っている。だから、見たことも行った事も、ましてや顔なんか知らないんだ」

「成る程、君達は直接案内してほしい、もしくはユリアの顔と捕らえられている場所を教えて欲しいと。」

「そう言うことだ。直接なら一番いいんだが。」

「フム…、君達は余程自信があるようだね。」

「勿論。絶対だ。」

「よかるう。フレイル、ヴァルター、お前達はこの二人と一緒にユリアを助けに行ってくれ。」

サザンクロスはいつの間にか目を覚ましていた二人に言った。

「…本気ですか？こんな奴らの事を簡単に信じるんですか！？ローライに会ったって言う証拠も無いのに！！？」

「簡単にはない。私とユリアは人の本心を見る事が出来る。その事は、お前達も知っているはずだ。」

「しかし！！我々だけで等、出来るワケが「俺の力は、お前達のその体で感じた筈だ。」クツ……。」

フレイルが反対したが、俺とサザンクロスに言い返され、何も言えなくなつた。

「…分かりました。」

「ッ！？ヴァルター！？」

「フレイル、信じるしかないよ。今助けないと、もしかしたら、ユリア様は殺されるかもしれないよ？それに、この人達はやってくれるよ！僕はそう感じるんだ！」

「ヴァルター…。」

ヴァルターの言葉にフレイルは考え込んだ。

(中々…優秀じゃないか。ヴァルターの奴。)

「分かった。一緒に行く。だが！変な真似でもしてみろ！俺が斬ってやるからな！」

「フツ…その時はやね。では…行こうか。」

「頼んだぞ。」

「ああ。」

「おっと、そう言えば、まだ名前を聞いていなかったな。」

「イブキ・ヤマトだ。」

「コスモスです。」

そして、俺達はユリアを助けに向かった。

……って言うか、コスモス、ずっと黙っていたな…。

## 救出（前書き）

遅くなって本当にすみませんでした！！！！！！

今回はちょっと長めです！！！！

感想、宜しくお願いします！

## 救出

とある町

俺達は今、ユリアが囚われている町の中にいる。

この町の入口には、兵士がいたが……不本意だが、コスモスが兵士に話し掛け、気を引き付けさせ、その間に俺達三人が入り、コスモスもその後に入る、と言う作戦に出た。

この提案を出した時、コスモスは、「嫌です！！イブキ以外の男に色気など使うなんて！！」と、涙目で嬉しい事を言ってきたが、ヴァルターが、「それじゃ、それをする代わりに『イブキさんが一日コスモスさんの所有物になる』なんてどうですか？」と言ったら、「いつて参ります。」と、意気揚々に行きやがった。

……俺の意志は？

そんなこんなで、俺達はユリアが居る建物に着いた。

「さて、ここからだが、確認したい事がいくつか有る。ヴァルター。」

「何ですか？イブキさん。」

「この中に民間人は？」



「兵士たちだけで、居ません。」

「ユリアが居ると思われる場所は？」

「おそらく、一番下のフロアのどこかに居ると思います。あそこは、重罪人が連れて行かれる場所ですから。」

「広さは？」

「そんなに広くありませんが…結構入り組んでいます。」

「よし、なら作戦はいたって簡単だ。良く聞け。」

「いいから早く言え。」

「正面からの突撃、イツキに最下層まで行き、二手に別れ、ユリアを発見、救出。以上。」

「はあ！？まで！！なんだその作戦は！？無謀にも程があるぞ！！」

「そうですよ！！そんな事したら、ユリア様がどうなるか！？」

二人から猛反発がくるが、知ったこつちや無い。

「だから、俺の力を知らないワケ無いだろう？俺とコスモスの力でイツキに雑払うから、最下層まですぐに行ける。そして、最下層の入口を「ある物」で塞ぐ。そうすれば、誰も入って来れず、安心してユリアを探せる。」

「「ある物」ってなんだ？」

「それは、お楽しみだ。」

「…分かった。それでいってやる。」

「よし。…では、作戦開始!!」

俺は、両手にバスターライフル（某白い翼を持った機体を持つ物みたいなの）を二丁出し、デカイ扉に向けた。

キュイイイイン…

「…ブチ抜け。」

ズドオオオオン!!!!!!

ドデカイビームが発射され、扉を簡単に吹き飛ばした。

「よし!行くぞ!!コスモス!!」

「了解しました!」

俺とコスモスとは中に突っ込んで行った。

中は、いきなりの事で兵士たちが混乱している。好都合だ。

「コスモス!!!全ての武装を使ってもいい!!!だが、絶対殺すな!!!」

「分かりました!!」

兵士たちは殺してはいけない。何故なら、そんな事では、ユリアはきつと悲しみ、自分を追い詰める。そんな事、絶対にさせてはいけない。

「…っと、兵士たちが動き始めたな…。」

最初は混乱していて、兵士たちは動けなかったが、少し冷静さを取り戻し始め、奥からも出てきた。

「悪いが、時間がないからな…。まとめて吹き飛ばす。やるぞ、コスモス!!」

俺達は己の獲物を構えて、攻撃し始めた。

「吹き飛ばへ!!」

ズドオオン!!!ズドオオオン!!!ズドオオオオン!!!!!!

「うわああああああ!!!!!」

「Xバスター!!!!!!」

ズバアアアアアア!!!!!!

「ギヤアアアアアア!!!!!!」

「あつ悪魔だ…。」（ガタガタガタ）

フレイルとヴァルターは俺達（特に俺）を見てそう思ったらしい。



俺が叫ぶと、頭上に丸いゲートが現れて、そこから、赤い人型の様な四、五メートル程のロボットが出てきた。

「ギユイイン！！（エルデカイザー参上！！）」

「なっ何だこれは！！？」

「凄！！！！」（キラキラ）

フレイルは驚きの反応をし、ヴァルターは、目を輝かせていた。

「エルデカイザー！ここから先、一人も通すな！！それから！殺さない程度にな！！！」

「ガシイイン！（了解した！）」

エルデカイザーは、親指を立てて此方に向けてきた。

「よし、行くぞ！！！」

「エルデカイザー、頼みましたよ！」

「行くぞ、ヴァルター。」

「あっ、まってよ！フレイル！」

――

あれから俺達は二手に別れ、ユリアを探していた。  
俺はフレイルと、コスモスはヴァルターと。

コスモスが俺と行きたいと意見していたが、とある理由があるから、  
俺はそれを断りヴァルターと組ませた。

その時に凄く睨んできたのは余談だ。

「…なあ、なんで俺と組んだんだ？」

と、フレイルが突然聞いてきた。

「ん？ お前、俺が変な真似をしたら斬るんだろ？」

そう、これが理由だ。フレイルが最初、俺に向かって言ってきた言葉。コイツはまだ、俺を信用していない。だから、そのために俺と組ましている。

「それは…そうだが。」

「そう言うことだ。」

「……。」

それからフレイルは、一言も喋らなかつた。

- - - フレイル side - - -

俺は、コイツを絶対信用しないと決めていた。

コイツは、ローレイに会ったとか、ユリアを助けるだとか、会っていきなりそんな事を言ってきたんだ。だからって、ハイそうですかって、信じられるもんか。

でも……、コイツの戦う姿を見ていたら、本気でユリアを助け出そうとしていると感じた。

コイツの力も、とても凄くて、俺は少し憧れてしまった。

俺は、もしかしたらこの人を信じられるかもしれない。

そう思っていたら、無意識のうちに口を開いていた。

「…なあ、なんで俺と組んだんだ？」

なんで、こんな事聞いたんだろう？

俺はそう思いながら、答えを待った。

「ん？ お前、俺が変な真似をしたら斬るんだろ？」

「それは…そうだが。」

「そう言うことだ。」

もしかしたら俺はこの時、この人を慕い始めたかもしれない。

-. -. フレイルside out - . -

-. -. イブキside - . -

「通路が大きく二つに別れているな…。」

俺がどっちに進むか考えていたら…、

「俺が左に行く。だからアンタは右に行ってくれ。」

「はっ？ いいのか？ 俺を見張らないで？」



「別にいい。ここまで来たら、もう信用してやる。」

「…フツ。そうかい。そりゃあ、ありがと。」

「……頼んだぞ。」

「おう。」

俺はフレイルと別れ、右側の通路へ行った。

(……こっちは檻ばかりだな。こっちが当たりか?)

俺は一番奥まで進んだ。しかし、そこは行き止まりだった。

「チツ……。こっちじゃなかったか。」

俺はすぐに戻ろうとしたが、行き止まりの壁を見て、違和感を持った。

(……この壁だけ、少し色が違う……。この向こうに何かある。)

俺はこの壁を、触ったり、押したりしたが何も起こらなかった。  
俺はちょっとイラつき壁をおもいっきり蹴った。

バアコン！！！！ ガラガラガラ……。

……………ヒュ、ラッキー。  
壁が崩れて通路が出てきた。

(当たり前っばいな。)

俺は急いで奥に進んだ。

……ユリアside……

(ハア………ここに入って、どれくらい経ったかしら?)

私は、牢屋に入れられてから時間の感覚なくなってしまった。  
食事もあり出してくれないし、譜術を使おうにも特別な力がこの  
フロア全体に働いていて、使えない。  
でもきつと、出られる。そう信じて、私はずっと辛抱していた。

「  
」

私は外に出たいと願ながら、譜歌を歌った。

「……いい歌だな。」

「えっ…?」

突然、私の目の前に、真つ黒い格好の男の人が現れた。

- - - ユリア side out - - -

- - - イブキ side - - -

俺が通路を進んでいると、奥の方から歌声が聞こえてきた。

(綺麗な歌声だな…。)

俺はその歌につられて進んでいった。

歌につられて進んでいると、一つの檻に辿り着いた。  
そこには、薄暗くてよくわからないが、綺麗な栗色の長い髪の少女  
がいた。

歌は彼女が歌っている様だ。

「……いい歌だな。」

「えっ…?」

少女は気づいていなかったのか、声をかけると、驚いた様な顔をし、こちらを見た。

その顔は、フレイルから事前に聞いた通りの顔だった。

「確認するが、君がユリアか?」

「えっええ…、そうですけど……。」

「やっと見つけた。俺はイブキ・ヤマト。フレイル達と一緒に君を助けに来た。」

「えっ!!!?本当ですか!?!」

「ああ。さあ、少し離れてくれ。檻を壊す。」

「あつ、でもこの檻は特別でかんたんにはバキーン!! ……あれ?」

そんな事知ったこっちゃない。俺の腕は戦闘用の義手だ。本気を出せば、握力は500は超える。こんな檻、どうてこと無い。

「さあ、外に行きますか、姫様？」

「…フフツ。凄い人でしね。イブキ様は。」

「イブキでいいさ。…立てるか？」

「あゝえゝっと、その、ずっと座り込んでいたから、脚に力が入り難くて…。」

「そうか…。なら、ちよつと失礼するぞ？」

「えっ…ふあっ！？／／／／／」

俺はユリアの背中と、膝裏に手を回し、横抱きにした。……ぶつちやけ、お姫様抱っこだ。

「えっ！？／／／／ちよっ！！？／／／／まっ！！？／／／／／」

「あゝ、やっぱり恥ずかしいか？」

「コクコクコク！！！！／／／／／」

「じゃおんぶで…。」

「…／／／／／。」

そんなに恥ずかしかったか？随分とウブなんだ…。可愛い奴め。  
(人の事言えない)

—————

バキィ!!!

「ビクッ!? どっどっしたんですか!? コスモスさん!!! いきなり壁を殴って!?!」

「いえ、何故か、とてつもない殺意が溢れてきたので…。」

「そっそっですか…。(汗)」

—————

ブルッ!!!!!!? なっ何だ!?!今の寒気は!?!

「?...?どうかなさいました?」

「え!?!あ、いや、何でもない。」

「...?」

俺はユリアを背負いながら、来た道に戻っていた。

すると、前から足音が聞こえてきた。

俺とユリアは気を張った。

「ハア…ハア…、あつ!?ユリア様!!」

「えっ…フレイル!!」

その招待はフレイルだった。

「良かった…。ユリア様、無事でなによりです!」

「フレイル…、ごめんなさい。心配をかけて…。」

「いえッ!!そんな!!謝らないでください!!」

「フレイル…。(涙) ありがとう。」

「ユリア様…。」

(見つめ合う二人)

……あれ?俺空気?なんか二人の世界に入っちゃってる?

「おゝい、俺は?」

「あ、いたのか。」

「おい!!!?なんだよその態度!!!ユリアを助け出したの俺だぞ!」?

「ウム、ご苦労。」

「テメエ、このガキ!!!あの時の様になりたいか!??」

「ユリア様、この者に何かされませんでしたか?」

「ちょっと待て!!!何だよそれ!!!」

「え〜つと……ボンツ!!!/ / / / /」

「え、そこまで反応する!??少し抱いただけなのに!??」

「なっ!!!?だいた…? (抱く+男が女を+暗闇で「イヤアンな事」  
きつ貴様アーーーー!!!)」

「お前何か勘違いしてね!!!?絶対してるだろう!!!?ちよっ!  
?何剣を構えてんだ!?!?しまえつて!!!ちよっ、バアアーーーー  
ーーーー!!!?」

「…スマナイ、勘違いをしまして。」

「…イヤ、別にいいぞ。」





俺達が見たもの……それは……

「ギユイイン！！（真・無双雷神剣！！）」

ズカアアアン！！！！

「「「おおー！！！！！！」」」

「キユイン！！ガシイイン！！！！（トドメ！！神具夜機神剣！！！！）」

ズバアアアアン！！！！！！

「「「イェエエエエイ！！！！！！」」」

エルデカイザーが、壁や瓦礫等を、派手な技で破壊し、それを兵士達に興奮しながら見ているという、馬鹿な光景だった。

（何をやっているんだ！！）

「「スツツツゲエー！！！！」」（フレイルとヴァルター）

(ここにもいるし…。)

俺は呆れながらバスターライフルを転送してきて、兵士達に向けて放った。

「消えろ、馬鹿共。」

ズドオオオン!!!!

「「「うわあああああ!!!!!!」」」

「ガシイン!? キュオオン!! (ああ!? 皆————!!)」

「足止めご苦労。(怒)」

俺はエルデカイザーを強制的に戻した。

「…あの〜、あれh「言うな」えっいやでm「言わないでくれ!」

ユリアが何か言ってくるが、それを遮り、先に進んだ。

――  
俺達は、難とか脱出し、今は、サザンクロス邸がある森にいる。

「ハア、あらゆる意味で疲れた…。」

「…すみません…。」

「えっ！？ああ、いや！君の事じゃないから！！ホント！！」

「ですが…。」

「ああ、そのかたつ苦しい敬語はナシ！いいな！」

「えっしかし「返事は？」…ええ。」

「それでよし。それと、俺達は君を助けたかったから助けた。だから君が謝る必要は無い。」

「……ありがとう。／＼／＼／」

俺がユリアにそう言っていたら、コスモスの方から何かトゲのある視線を感じた。

「…コスモスさん？なんでそんな目でみるんだ？（汗）」

「いえ別に。(シレッと)」

「うっ!?!… なっ何でそんなに冷たいんだ?」

ほら、ヴァルターやユリアが怖がってるぞ?

「……では言わせて貰います。」

「はっハイ!!」

怖い!!

「…一体、いつまで、ユリアを、背負って、いるのですか?」怒

「………入っ?」

「ですから!!いつまでくっついて居るのですか!?!」

なっ何でそこまで怒ってんだよ…?」

「いつまでって……ユリアが歩けないって言うから、家に着くまでだが?」

「でしたら！フレイルかヴァルター、もしくは私に任せればいいでしょう!?!」

「いや、別に重くないし、これくらい自分で出来るから。」

「もしかしてあれですか!?!あなたは女の子と密着して、その感触を楽しんでいるんですか!?!そうなんでしょう!?!?」

「えっ!?!?////」

「なっ!?!?ばっ!?!?違う!?!?決してそんなワケではない!?!そこ!?!フレイルも誤解をするな!?!!」

コスモスがいきなり凄いことを言い出し、それを聞いたフレイルが剣を構えだしたので、誤解を解こうとした。

「「さあ!?!白状なさい(しろ)!?!」

「だから違うって言ってんだろ!?!」

(くそ、なんで俺がこんな目に…。)

「ヴァルター!?!助けてくれ!?!」

「「ギロツ!?!」(睨む二人)









## 設定その2 (前書き)

今更ですが、フレイル達の簡単な設定を。

## 設定その2

名前：フレイル・アルバート

年齢：15

身長：160

髪：赤色のショート

目：黒色

服装：読者の皆様のご想像で

性格：不良っぽい。しかし、根は真面目。忠誠心が強い。

好きな物：飯、剣術、運動

嫌いな物：家事、勉強、細かい作業

名前：ヴァルター・シグムント

年齢：14

身長：158

髪：金髪のショート

目：青色

服装：同じく読者の皆様のご想像にお任せします

性格：とても優しい。年齢にしては、ほんの少し幼い感じ。  
好きな物：飯、剣術、読書、博士やユリアの手伝い

嫌いな物：豆腐、怖い物

名前：サザンクロス

年齢：38

身長：189

髪：黒色のオールバック

目：茶色

服装：同じく（以下省略）

性格：とても穏やかで、どんな事にも驚かない。少し親バカ。ダン  
ディー。

好きな物：料理、弟子達、イブキをからかう事。

嫌いな物：掃除、弟子達をバカにする奴。

名前：ユリア・ジュエ

年齢：14

身長：158

髪：栗色の長髪で腰が隠れる程

目：透き通った青

服装：原作と同じ

性格：少し活発な女の子。可愛い物好き。怖がり。

好きな物：家事、可愛い物、コスモス（友人として）、イブキ（一人の男として）、にぎやかな所。

嫌いな物：怖い物、可愛くない物、争い事、人参。

## 帰還（前書き）

はあ、あ、やってしまった。

上手く書けたかな…？

皆さん、これからも読んでいってくださいね？

## 帰還

俺達は今、サザンクロス邸の前にいる。ここに着いた時はもう日が沈んでいた。

「……本当に、帰ってこれたのね。」

「ああ。やっとな……。」（泣）

ユリアの言葉に返した俺は、見事にボロボロだった。あの後二人に捕まり、めったうちにされた。器用にユリアだけ当てずに。（ちなみに、今も俺の背中。）  
あれはトラウマだな。うん。ほら、考えただけで足がガタガタ言ってるよ。

「……大丈夫ですか？イブキさん。」

「ああ……ナントかな。」

「おい、何グズグズしてる。早く入るぞ。」

「おう。……さあ、入ろうか。」



俺は扉に手を掛け、開いた。

パァン！！パァァン！！！！

「ッ！？なんだ！？」

「お帰り！！我が弟子よ！！！！待っていたぞ！！！！」

俺達が入ったら、いきなり大きな音がし、ビックリしていたら、サザンクロスが出て来て、そう言った。

「先生…一体これは…？」

「いや何、ユリアがやっと帰って来るのだ。祝の一つでもやろうかなと思っただけ。」

「失敗していたかもしれないんだぞ？」

「それは無い。君は絶対と言った。ならそれは絶対だ。」

「ハッ。えらく信用してくれるんだな。」

「当然。君の目を見ればな。」

「…ありがとよ。」

「イブキ、私はもう立てるわ。だから降ろして。」

「む？」

「ああ。…よつと。」

「先生。心配をお掛けしましてすみませんでした。それと…ただいま戻りました。」

「ウム。お帰り。しかしユリアよ、君に非は無い。よって謝ることはない。」

「…はい。」

「さて、祝いをする前に体を洗ってきなさい。まずはそれからだ。」

「あ、はい！」

「…おい、ここの風呂は大丈夫だろうな。」

もうあんな目に遭うのは嫌だからな。

「フツ…安心しろ。風呂や調理場、トイレ等はキレイだ。保証しよう。」

何でそこだけなんだよ。まあ、いいか。

「それじゃ、コスモス。一緒に入りましょ。」

「ええ。いいですよ。」

この二人はここに来るまでに随分と仲良くなったな。  
ああ、そうだ。

「コスモス。力加減を誤って壊すなよ。人間になっても、身体能力は前のままなんだからな。」

前は皿洗いの時によく握りつぶして、シオンに怒られていたからな。

「ムッ……。そんなことしません。」

「フーン(ニヤッ)」

「……ピン！ フフッ。そんなに心配でしたら、一緒に入りますか？(ニヤリ)」

「なあ！？／／／／／」「ええ！？／／／／／」

「ほう。」

「なっ何を言い出すんだ！？／／／／／そんな事、出来るわけ無いだろっ！／／／／／」

「いや、いいではないか。」

「はあ!?!」

「いや、お主とコスモスどのは恋人の様だし、ユリアとも親しそうではないか。」

「はあ!?!いやっ!!だからと言って入れるワケないだろ!!」

「そっそつです!!!!/!/!/!/!/まだ早すぎます/!/!/」

ユリア!?!それでは…。

「ほう、まだ、とな。と言うことはいずれは入るのだな?」

「あっ!!!!/!/!/!/いついえ!!!!/!/!/!/そう言うワケじゃ……なく………て……/!/!/!/」

「ハツハツハ!イブキどの、ユリアを宜しく頼むぞ!!」

「はあ!?!」

ちよっ!?!それは!!確かにユリアは可愛いが、俺には!!

「フッフッフ!楽しみだな。ユリアの花嫁s「グランドクロス!!  
/!/!/」ズドオオン グオオ!?!」

あっ…………。

「ハア…ハア…／／／／」

どうやらユリアが譜術、いや譜歌を歌った様だ。

「もう！！／／／先生のバカッ！！！！／／／／ 行きましょ！！  
／／／コスモス！！！！／／／／」

「あ、はい。」

「」「…………。」「」

「フッフッフ…………。ユリアめ、照れよつて。可愛い奴だ…………。」

「そう言う問題か？というか、大丈夫か？」

「フツ…………こんな事、日常茶飯事だ。」

どういつ日常を送ってたんだよ。

「それよりまだ礼を言ってなかったな。」

サザンクロスは真剣な表情になり、こちらを見てきた。

「ユリアを救ってくれて、本当にありがとうございます。君達は、私達の恩人だ。」

「いや、俺達はただやらなければならぬ事をしたまでだ。」

「それでもだ。君達には礼がしたい。何でも言ってくれ。」

「…わかった。なら、俺とコスモスをここに…お前達と暮らさせてくれないか？」

「お安いご用だ。」

「ありがとう。」

俺とサザンクロスは固い握手をした。

「……。」

「おっと。勝手に決めてしまったが、二人はそれで良かったのかな？」

サザンクロスは、ずっと黙って俺達を見ていたフレイルとヴァルターに聞いた。



「ッ!! ぼっ僕もお願いします!!」

(こいつら……。)

二人は土下座をして頼んできた。

「……力を求め過ぎるとその身を滅ぼすぞ？」

「そんな事はわかっています!! しかし!!… だからといって、  
力をつけなければ守りたい物も守れない!!…」

「本当に守る力が欲しいんだな？」

「はい!!」

「……。」

俺はサザンクロスを見た。  
サザンクロスは頷いた。



「いいだろう。お前達二人はこれから俺の弟子達だ。俺が教えらるる事は全て教えよう。」

「ッ！！！ ありがとうございます！！ 師匠！！！！！」

まさか、俺が弟子を持つ事になるなんてな。シオンやジン兄さん達が聞いたらどう思うだろうな。

「フツ……。二人の事を頼むぞ？イブキよ。」

「ああ。弟の様に接してやる。」

期待に伝えてやらないとな。

「さて！あいつらが上がったら俺達も入るか！！」

「「ええっ！？」」

「先ずはスキンシップからだ！！」

「「はっはい！！」」

「イブキ、お風呂空いたわよ。」

「いい気持ちでした。」

「おう！　いくぞ！お前ら！！」

「はい！！」

ア—ハツハツハツハ！！　ヤベエ！！なんか楽しいぞ！！

「…何かあったのですか？」

「いや何、家族という物はいい物のなだよ。」

「…？」

—————

「ほぐ、確かにキレイだな。」

サザンクロスが言っていた通り、ここはとてもキレイだった。しかも明るくて少し眩しいくらいに。

「はい！ユリア様が風呂と調理場とトイレだけはキレイにして欲しいと言っていたので！」

「それに、中もけっこう広いですよ！」

「そうなのか。……っていうか、お前ら何で敬語なんだ？」

ヴァルターはわかるが、フレイルが敬語とは……少しキモい。

「え？いや、それは師匠ですから……。」

「それは剣を教える時だけだ。今はプライベートだろ？」

「いや、しかし……。」

「いいから。俺の事は兄の様に思え！」

「ええ！？ううん？>ギロく……わかった。あっ兄上／／／」

「うん！兄さん！」

「よしよし！じゃあ入るか！！」

兄って呼ばれるのもいいな。そこーブラコン言うな！ えっ、言  
ってない？……まあいいか。

「えっと、服はここに入れてね。」

「ああ。」

俺は着ていたコートとシャツを脱ぎ、キレイにたたんで置いた。

「わあ〜。凄い筋肉。」

「確かに……。どうやったらそうなるんだよ？」

二人が俺の上半身を見て聞いてきた。

「ああ、この筋肉は本物じゃないよ。これは作り物だ。」

「えっ……？」

俺は俺の体について、話す事にした。

「俺はな、ある事件で両腕と右足を無くして、心臓もやられてな。俺の親友が助ける為に機械：この世界で言う譜業みたいなやつだ。それで腕と足を造って、心臓はコアっていうやつに付け替えて、奇跡的に一命をとりとめたんだ。この皮膚や筋肉はそれを隠す為に着けてるだけなんだ。」

「…ごめん。」

「ごめんなさい。」

二人が顔を俯いて謝ってきた。

「謝るなよ…。これで俺は大切な奴を守れたんだから。」

俺は二人にそう言い、服を全部脱いだ。

「ほら、早くしろよ?」

「「あ、ああ(うん)。」」

――

「うわっ!!広いな。」

俺の目には、五、六人入っても大丈夫なぐらいの広さがある風呂が写っていた。

(うわ〜ライオンまである。)

「へへ〜ん。凄いでしょ?」

「ああ、凄いな。早くつかりたい。」

俺達は体と頭を洗い、湯船につかった。

「フ〜。疲れが癒やされるな。」

「ああ…。(…)(…」

「う〜。(…」

上から俺、フレイル、ヴァルターの順。

ヴァルター、なんだよその顔…；

「…そういうば、兄さんって、この世界の人じゃないのに、どうして音素が使えるの？」

「あ、たしかに…。」

ヴァルターが突然俺に質問してきた。

ん？音素を？

「俺、音素なんか使ってたのか？」

「うん。ユリア様を助ける時に使ってた武器は音素を使ってなかったけど、僕達と戦ってた時は、体から溢れ出てたよ？」

「…ちなみに何の音素だ？」

「体から出てたのは第七音素。刀と剣に纏わせていたのは、第六音素。……もしかして、気づかなかった？」

「あっああ…。」

「どういう事だ？」

第七音素の事については、ローレライが施したと説明がつく。だが、そうすると、纏わせたのは第七音素の筈だ。何故、第六音素に？

これもローレライの力か？

「たぶん、ローレライがこの世界と体が合うようにしてくれんだろう。」

「フーン。」

「ローレライ……一体どんなやつなんだ……。」

「今度、コスモスと色々試してみよう。」



音素が扱えるかもしれない。そしたら、ユリアかサザンクロスに教  
わらないとな。

「さて、そろそろ出るか？腹も減ったし。」

「ああ。」

「うん！」

俺達は風呂から上がり、いつの間にか用意してあった着替えに着替  
えた。

……誰がしてくれたんだろう？

ちなみに、格好は、黒の半袖に黒のズボンだった。  
俺の好みをわかってるな。

……あん？フレイルとヴァルターの格好？  
自分で想像してくれたら嬉しいな。

-----

・・・食卓・・・

俺達はパーティーが行われる食卓に向かっていた。

「うん？……いい匂いがするな。」

「ホントだ〜。」

「ア〜腹減ったあ〜。」

食卓の扉を開くと、そこにはたくさんの料理があった。どれもこれも、もの凄くうまそうだ。

「おお、やっと主役が揃ったな。さあ、こちらに座ってくれ。」

「サザンクロス、これ全部お前が作ったのか？」

「ああそうだ。これでも料理が趣味だね。」

「ハハツ…凄いな。」

「ありがとう。さあ、座ってくれ。」

俺は言われた席に座った。

テーブルは長方形で、隣はコスモスで、俺の前にフレイル、コスモスの前にヴァルター、俺の左斜め前にサザンクロス、コスモスの右斜め前にユリアが座っている。

「旨そうだな、コスモ…ッ！？／／／／／」

俺は隣のコスモスに声をかけようとして、固まった。

なぜなら、前の世界では見れなかった、コスモスの格好だったからだ。

上は白い半袖のシャツ、下は膝上までのスカートだった。しかも、ユリアのらしく、胸の部分が少しピッチピチだった。いつも額や体につけている装備も全部外していて、新鮮だった。

（何で風呂に行くときに気づかなかったんだろう。）

「どづしたのですか？」

「えッ！？／／／いやっ！！／／／その！！／／／に…似合  
ってるな…／／／／／」

「えっ！？／／／／／ありがとうございます…！ごぞいます／／／／」

「…／／／／／」

「…イブキ、私は？」

「えっ？」

今度はユリアを見た。ユリアはコスモスと同じ格好だった。  
ただ、コスモスとは何か、別の可愛いらしさを感じる。

「あっああ…。よく似合ってるぞ。」

「むぐぐ、コスモスの時みたいに顔を赤くしないのね。……やっぱ  
り胸？」

「えっ！？／／／いやそれはっ！！／／／／」

「まあいいわ。それより早く始めましよ。先生。」

ユリアが今までずっとニヤニヤしていたサザンクロスにそういった。  
…って、こっちみんな…！

「ウム。ではこれより『祝！ユリア救出おめでとう会！』を始めます。」

「なんだよ、その名前……」

「まず私から、改めてユリアを助けていただいた二人に礼を言おう。……ありがとう。感謝している。」

「私からも改めて言わせて頂きます。本当にありがとうございます。」

「俺（僕）からも、ありがとうございます。」

俺とコスモスは苦笑した。

「本当に感謝している。ユリアは私の娘みたいな奴だからな。勿論、フレイルとヴァルターも。」

「……先生……」

うんうん、いい関係だな。



(嗚呼…俺はこの笑顔を一生守って行きたい。)

俺はそう思った。

少し離れて、近くの窓の所で飲みながらみんなを眺めていたら、隣で声がした。

「フツ…イイ顔だな、ユリアは。」

「ん？起きたのか。」

「ああ、私としたことが、つい酔ってしまったようだ。」

「……二度とするなよ。」

「わかってる。……にしても、あんなに笑っているユリアは初めてだ。」

「そうなのか？」

「ああ…。いつもの笑顔には、どことなく影があった。それが今はとても明るい。嬉しいことだ。おそらく、コスモス殿という友が出来たからだろう。……もう一つあるだろうが。」

「…そうか。俺も、コスモスのあの笑顔を見たのは、初めてだな。」

「コスモス殿も？」

「ああ…。コスモスはもともと、戦闘用アンドロイド…譜業の塊みたいな奴でな。擬似人格を搭載したとは言え、感情など皆無だった。」

そう…本当になかった。

俺はなんとか感情を教えようとしたが、ほとんどできなかった。それでも俺は、コスモスを愛していた。何故か判らない。だが、愛してしまっている故に、ずっとそばに居続けた。この身が何度も危険に晒されようとも。

そのおかげか、コスモスはほんの少しだけ、感情を理解し、俺のそばにいてくれた。

「あいつに完全な感情が出てきた時は、シオン…親友と話す暇などなかった。やっと話せたと思ったら、もう長いお別れの時だったからな。」

「そうか…。お前達もつらかったのだな。」

「そんな事ないさ。別れって言うっても、ただ少し長いだけ。いつか会えるからな。俺達は約束した。必ず、ロスト・エルサレムで会おうと。だから俺達は必ずそこへ行く。」



絶対に。あいつらとまた会う為に。

「そうか…いつかは私たちとも別れるのだな…。」

「ああ…。でも俺達はまだまだ行けない。なんせ、二千年以上も先にやることがあるからな。」

「二千年？そんなにいきるのか？」

「ああ、ローレライの力で不死ではないが、不老になったからな。」

「フフツ…フハツハツハツハツハッハッハッ！ いやはや、おもしろい奴だな、ローレライは。」

「だろ？」

俺とサザンクロスはそれからずっと酒を飲んだ。  
嗚呼、美味い。

「…ム？そろそろフレイル達は限界か。」

俺はフレイルらを見た。料理を手に持ちながら、顔を上下に揺らし

ている。

「まったく…喰いながら寝るなよ。　コスモス、お前らもそろそろ…  
…眠いん…じゃ…？」

「…／／／／／」

ど…どうしたんだ？顔を赤くして。  
よく見たらユリアもだし、一体…あ。

「あゝあ、こいつら、ジュースと間違っつて酒飲んでやがる…」

まったく、しょうがねえn　ボタン！！　はあ！？

「うおッ！？　おいユリア！しっかりしろ！！」

ユリアがいきなり椅子から落ちた。  
俺はユリアに駆け寄りユリアに呼び掛けた。



「寝ただけか…。脅かさないでく「あむ…。」ええッ!?!?!?!?!  
」

ちよっ!?!?!?耳たぶを噛むな!?!? ギユウウ… あああ!?!?!?そん  
なに引つ付くな!?!?胸があ!?!?胸があ!?!?!

「フム。お楽しみのような。では三人は私が運ぶとしよう。ああ、  
安心したまえ。後片付けは私がかたずけるし、君達の部屋は一番上  
で誰もいないからな。」

あら、そこまでしてくれるの?うん。最初二つはありがたいけど、  
最後の二つはいらない!?!?!ちよっ!?!?見捨てないで!?!?!!

「ハア…././././ハア…././././んっ…././././イブキ…./  
././././」

ちよお!?!?!?やばいよ!?!?やばいよ!?!?!このままじゃ(色んな意味で)  
やばいよ!?!?!

「くっ！…！かくなる上は…！ はっ！」

トッッ。

「うっ！？……。」

…フッ。危なかった。  
悪い、許せコスモス。

俺はコスモスを気絶させ、抱きかかえ、部屋へと向かった。

……サザンクロスが重要な言葉を言っていたのに気づかずに…。

――――

「え〜っと、部屋が一番上って言ってたな。」

俺は言われた場所に向かっていった。

（ちゃんとした部屋であってほしいな。）

そんな事を考えていたら、部屋についた。

「ここか……。ん？なんか書いてある……。なになに？ー『イブキとコスモスのお部屋（ハアート）』ーか……………へ？」

あ〜うん。何かの見間違いだ。いかな。少し酔いすぎてるのか  
な？よく見るんだ。

ー『イブキとコスモスのお部屋（ハアート）』ー



おっ！あった、あった。……………白い大きな一つのベッドが。

「……………ハア〜。もう何も言わない。」

俺はコスモスをベッドの上に寝かせた。

「フ〜。俺はどこで寝よ。」

辺りを見渡したが眠れる場所は無かった。

「うん……………あれ…？…私は……………」

「ん？目を覚ましたのか、コスモス。」

「あ、イブキ…。私は一体……………」

「お前、間違えて酒を飲んだんだよ。それでいきなり眠ったんだ。」

「そうですか…。すみません。ここまで、運んでくれたのですか？」



「ああ。」

「…重かったでしょう?」

「いや全然。重さなんか感じ無かったが?。」

「…ありがとうございます///」

何赤くなってんだ?

ああ、まだ酔いが醒めてないのか。

「あの、それで、イブキはどこで寝るのですか?」

「…どこで寝よ…」

「どうしてですか?」

「…この部屋、ベットが一つしかない。」

「えっ!?!?!?!」

ああ、ホントどうしょ。

もう、枕だけで床でねるか?

幸い、二つあるし…。

「…え、えっと／＼／＼／＼どっどっぞ／＼／＼／」

「……は？」

「ですから／＼／＼／…一緒に寝ましょう／＼／＼／」

「え…ええ！！？／＼／＼／いや、それは！？／＼／＼／」

「ダメ…ですか…？／＼／＼／」

うっ…そんな…。上目使いなんて…。どこで覚えたんだ…。

「わっわかった／＼／＼／それじゃ…失礼します／＼／」

俺はコスモスの右隣に入った。

（あゝ／＼／＼保つかない…理性…。）

「……／／／／」

……**気まずい**。

いや、寝るのに静かにするのは当たり前なのだが……。

**ギョツ**……。

(えっ！？／／／／／)

コスモスがいきなり抱きついてきた。

「コッコスモス／／／／／どうしたんだ？／／／／／」

「……。」

「一体どうし」「イブキ……もう私のそばから離れない出ください。」「ッ……。」

「コスモス…。」

「もう、あんな思いをするのは嫌です…。」

コスモスは泣きながら、俺にそう訴えかけてきた。

「……どこにも行かないさ。」

「イブキ……んっ!？」

俺はコスモスの唇に自分のそれをあてた。

「んっ……ちゅ……んっ……はぁ……、イブキ…。」

「俺はもう、お前のそばから離れたりしない。絶対にだ。俺はお前のそばでお前を一生守ってやる。」

「ッ!?!……ッウ……ヒック……ウウ……イブキい…。」

「コスモス…愛してる…。」

「イブキ…。」

この日、二つの影が重なり合った。

賑やかな朝（前書き）

……何がやりたいんだろっ……俺。

なんかスゴいグダグダになった気が…。

それから、これからはテスト一週間前で、テストが終わったら修学旅行につき、更新が遅くなるかもしれせん。

それではどうぞ！

賑やかな朝

チュン、チュン……

「うっ、うっ……。くっ……ッ……ふう……。朝か。」

俺は鳥の鳴き声が聞こえる中、この世界に来ての初めての朝を迎えた。

「さあして、起きるか。」

俺はベットから起き上がろうとして、手を突いた。

ムニ……

「ん？……ベットの感触にしては柔らかいし、張りがある……何だ





「(まっまさか……ッ!?)」

自分の体を見ると、コスモスと同じく裸だった。

「(おっ落ち着け!!よく考えるんだ!!よく思い出せ!)」

俺は昨日寝る前の事を思い浮かべた。

「(え〜と、確か昨日はコスモスと約束して、その時にキスをしちやて…それから……。)」

「そのままヤッっちゃったんだ…。」

「(あゝ、ヤバい…。その時のヴィジョンが鮮明に見える〜〜／＼／＼／＼)」

「ん、ん〜ん……………イブキ…おはようございます。」

「あっああ、おはよう。」

俺が昨日の事でショートしていたら、コスモスが起きた。

「……………ん／／／／／」

「ええっ！？／／／／／」

コスモスが目を瞑って、顔を差しだしてきた。  
こっこれは、所謂おはようのキスか！？

「……………／／／／／」

やばっ、可愛すぎる！

俺は覚悟を決めて、顔を近づけた。

「んっ…／／／／」

「…／／／／」

「（うっ／／／昨日の今日だけに恥ずい／／／／）」

「んっ…ぷはあ…／／／／コスモス…／／／／そろそろ起きよう  
／／／／／／」

「…はい／／／／」

俺とコスモスはベットから降りて、着替え始めた。

服装は、俺はいつもの格好のコートなし、コスモスもいつもの格好の装備なし。

……うん、これはこれでいい。

俺はコスモスに少し見とれてから、一緒に下へ降りて行った。

「む？ おはよう、二人とも。」

「おはよう、サザンクロス。」

「おはようございます。」

下に降りて、顔を洗い、食卓に向かったら、サザンクロスと会った。

「もうすぐ朝食が出来る。座って待っていてくれ。」

「ありがとうございます。」

言われたと通りに席に座り待っていると、フレイルとヴァルターが来た。

「あっ！おはよう！兄さん！姉さん！」

「おはよう、兄上、姉上。」

「ああ、おはよう。」

「おはようございます。」

姉とは、コスモスの事だ。昨日の晩にそう呼ぶ事にしたらしい。

「あ！サザンクロス先生、ユリア様！おはようございます！」

「おはようございます」

「ウム、おはよう。」

「ええ、おはよう、二人とも。」

丁度、サザンクロスとユリアが朝食を持ってやって来た。  
どうやらユリアも作っていた様だ。

「お！ユリアも作ったのか？」

「ええ。でも一品しか作ってないけれどね。」

「へえ〜楽しみだな。」

「さて、いただきますか。」

「「「「「「「「「「いただきます！」「」「」「」

ガツガツガツガツ！

フレイルとヴァルターは待つてましたと言わんばかりに朝食にガツついた。少しは落ち着けよ…。

「で、ユリアが作ったのはどれなんだ？」

「焼き魚よ。」

ちなみに朝食のメニューは、ライスにみそ汁に玉子焼きに焼き魚にサラダだ。俺達が居た世界と変わりなかった。

「ほお〜。なかなかうまそうに出来てんじゃない。」

「ありがとう。さ、食べて。」

「それじゃ、いただきます。」

俺はユリアが作った料理をよく味わって食べた。

「…じゅん…」

「……うめえ……。」

「本当！？良かったあ〜。」

「ああ美味い！！美味すぎる！！今まで食べて来た中で一番美味いかも！！」

本当に美味かった。それこそ、シオンが作ったカレーより美味いかもしれない程に。

「ちょっと……// // //褒めすぎよ……// // //」

「いや、本当だ！お前はいい嫁になるぞ！！」

「えっ！？// // //そっそうかなあ……// // //」

「ほお、ではイブキよ。お前が貰ってはどうかね？」

「っ……またそれか。だからな？俺にはコスモスが居るんだ。それはできないって……」

「……// // //」

コスモスは赤くなって、黙々とご飯を食べている。

…フツ、照れよって。

「むう…。良いではないか。英雄、色を好むと言っし…一人や二人増えて構わんだろう。」

「その話はおいとして、飯を食おう。俺はこの飯を味わいたい。」

「……チツ。」

今舌打ちしたよな？こいつ。

「しっかし…女はどうしてこんなに上手く料理が作れるんだ？たいていの男は無理なのに。……女の特権か？」

「ピクツ…。」

「別にそう言う訳じゃないわよ。出来る人も居れば、出来ない人も居るのよ?。」

「えっ、そうなのか?。」

「当たり前じゃない。」

「そうなのか。てっきり誰でも出来るのかと…。」



だって、みんな美味かったからな…。

「ピクピクッ…。」

「（どうしたんだろう？姉さん。さっきから何かに反応して。」

「むう、なら今まで食べてきた手料理は出来る人だったのか。」

ピシッ……。

俺がそう言った瞬間、その場の空気が凍った。主にユリアの辺りが。

「…それは聞き捨てならないわねえ……。誰？その人達？」

ユリアが笑顔で尋ねてきたが、何故か怖かった。

「えっ？あつああ、俺の幼なじみ（シオン）と母さんと仕事仲間（ヴェクター女社員達）です…。」

俺はユリアの笑顔が怖くて、つい敬語になってしまった。

「そう…。幼なじみに仕事仲間ね…。」

「あのう…何でそんなk「美味しかった？」…えっ？」

「だから、美味しかった？その手料理。」

……怖い。怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い…！！

もの凄く怖い…！！笑ってるのに目が笑ってない…！！しかもその目が、『私の方が美味しいって、言ってくれないと……剥ぐわよ（ニコッ）』って語ってんだよ…！？剥ぐって何を…！！！？ほら…！！フレイルとヴァルターの手も止まってるぞ…！？コスモスは何か俯いてるし、サザンクロスはニヤニヤしてるし…！！ちよっ、誰か助けて…！！

「で、どうなの？（ニコッ）」

「あなた様の手料理の方が美味しいであります…！！…！！…！！」

俺は生まれて初めて、年下の女の子に屈した。  
…だって死にたくないだろう？

「そう…。嬉しいわ。」

そう言って、こちらに笑顔を向けてくるが、俺には悪魔が笑っている様にしか見えない。

「はっ、はっはははははは、そっそれは良かった！あっそっだ！コスモス！お前は出来るのか？」

俺はなんとかユリアとの会話から逃れようとして、コスモスに話を振った。が…。

「……………」

会話が止まってしまった。

「あゝ、コスモス？どした？」

「……………せん。」

「えっ？」

「……………できません……………」

……………もしかして俺……………地雷踏んだ？  
いや、まて。

「あゝそうか。やったこと無かったな。そりゃ出来ないか。」

だったら仕方ないかゝ。

「……………違います……………」

……………えっ？

「私が以前、マリアだった時に何度か作った事があります…。」

「……それで？」

「それで、その…作った料理は全て……真っ黒でした…。」

……俺のバカ…。

「ああ……うん。ごめんな？…辛い過去を思い出させて…。」

「いえ……別にいいです…。」

ズー……。

ああ、どうしよう。コスモスの周りが暗くなって行く…。

「あゝあ、泣かしちゃった…。(ボソ)」

「し〜らね。(ボン)」

うっ、ヴァルターとフレイルの視線が痛い ;

「…いやですよね…。こんな女…。」

……何？

「何をゆう！！そんなわけない！！！！」

ガタツ！！

「ッ！？…イブキ？」

俺はコスモスの発言に思わず立ち上がり、叫んでしまった。

「俺はそんな事で決めたりしない！！俺はコスモスという存在に惚れたんだ！！料理なんて二の次の次の次だ！！！！そんな事気にするな！！！！」

「ア…イブキ／／／」

「それに、料理なんて練習すればいい。幸い、教えられる人がここに二人もいるんだからな。」

「…はい！…ありがとうございます！…！」

良かった。笑顔になってくれた。

「では…サザンクロス、ユリア。…私に料理を教えてください！！」

「ハツハツハ！…勿論いいだろう！！」

「えっええ…良いわよ。」

あつ、ユリアが少し引いてる…。やっぱり俺おかしかったかな…？でも後悔はしてない！！

「それにしても…フフ……二人は本当に愛し合っているのだな？」

「えっ！？／／／まっまあ…／／／／」

「…はい／＼／＼／」

あちゃー、面と向かって言われたらちよっと恥ずかしいな…。

「ハツハツハ…いや何、若い内はそうしていた方がいい。年をとるとそんなに出来んぞ。」

「ムツ…そんな事わない。」

「そうです。」

失礼な事を言つな、こいつ。  
俺達はまた食事を再開した。

「そうかね？だが若い時ただぞ？夜にあんなにできるのは…」（二）  
ヤッ（）」

「ブフーーーーーッ！……！！……！！？」

「わぁー！？」





しまったよ。」

「おい！答える！！何故知っている！！！！？」

「君達の部屋の下は私の部屋なのだが……なにぶん、この家はボロくてな……。音や振動が良く伝わってくるのだよ。」

「なっ！！！！？／／／／／」

「~~~~~ツ！！！！？／／／／／」

その事を知った、俺とコスモスはさらに顔を赤くした。  
コスモスに至っては体全身がなってそうだが。

「いやはや、あれは凄かったね。私の部屋が振動で潰れるかと思っただけだよ。しかも何回も繰り返すからな。確か……十三回ぐらいだったか？」

「そんなの聞くんじゃないやねえ————ツ！！！！！！／／／／／」

「十三回も！？……やっぱりイブキも男なのね……。でも、私も頑張るからね！！！」

「ちよつとお！？君は何を言ってるんだ！？」

「十三回？……フレイル、何が凄いの？」

「あっああ…それはな…。」

「はいそこッ！！何無垢で純粋な子に教えようとしてんだよ！！？  
教えるな！！」

「フフフフフ…まあいいではないか。立派な一人の男と言っ  
とだ。」

「もうお前は黙ってる！！そんなに俺をいじめたいのか！！！？」

「……。」

「おい！！何か言え！！」

「……………フツ（ニヤツ）」

「ウガアーーーーッ！！なぐりてえーーーーッ！！コイツ殴っちゃって  
いい！！……？」

「ハッハッハ！！やはりお前で遊ぶのは楽しいな！！」

「うあああああん！！……もうイヤだあーーーーッ！！……！！」

俺はその場で泣き崩れてしまった。

…俺、ここでやっていけるかな…（泣）

「頑張れ、兄上。」

「頑張つて、兄さん。」

「頑張つてね、イブキ。」

「頑張つて下さい、イブキ。」

「チクシヨオオオオオオオオオオ!!!!!!」

これが、この世界に来ての、初めての朝だった…。

忙しくも楽しい日（前書き）

皆さん！！遅くなって申し訳有りませんでした！！！！  
今日からまた、頑張って行きたいとおもいます。

## 忙しくも楽しい日

「おい！フレイル！！そこにある板を持って来てくれ！！」

「わかった！！」

「ヴァルター！！釘が足りない！！もっと持ってこい！！」

「うん！！」

「板を持って来たぞ！！」

「よし！！ここですっかり押さえててくれ！！」

……ああ皆さん、おはよう、こんにちは、こんばんは。

今朝、サザンクロスに散々いじめられたイブキ・ヤマトです。  
今俺が何をしているのかわかりますか？

それは……

「いやあく働いてるねえ〜。」

「うるさい！お前も手伝え！！元々はお前の家だろ！！！」

「ハツハ……。私に肉体労働はむかんだよ。私は料理と研究しかできんだ。それに、言い出したのはそちらだろう。」

「ああそうかい！そうですか！！そうですね！！家を直すと言ったのは俺でしたね！！！」

そう、初めてここに来た時に決意した、家のリフォームでした。

「チクシヨウ！！何でこんなに古くてボロいんだよ！？他の家はもっと機械的で便利で綺麗なのに！！！」

「えっと…先生が古い家がすきで…」

「手入れをしていないから…」

「好きならしろよ！！手入れぐらい！！！」





――数時間後――

「ハア…ハア…ハア…。」

後…半分…。よくやれたな…俺達。

「みんなー！お昼にしましょー！」

「お（は）…おう（はい）…」

ユリア達が昼飯を持って来てくれた。  
ちょうど良かった。もう限界だったんだよな。

「あゝやつと休憩だ…。」

「兄さん、休ましてくれないもんね…。」

「ああ、俺も限界だ。」

でもまだ半分残ってたよな…。  
はあ…。

「お疲れ様です、イブキ。」

「おう、ありがとう。」

コスモスが冷たい水に濡らしたタオルを渡してくれた。

「ああ〜気持ちいい。」

「どのくらい終わったのですか？」

「半分くらいだ。」

「もうそんなに終わったのですか？頑張りますね。」

「ああ、じゃないと野宿になるからな。」

近くの街に泊まりに行くなんて今は出来ないからな。

「それは……嫌です。」

「だろ？」

にしても、豪邸ぐらいの大きさだから普通よりも時間かかるし……  
日がある内に終わるか？

「はい、兎に角今は食事をとって元気だして。」

「ああ、サンキュー。」

そつだな、ユリアの言つとおり今は飯だ。  
ちなみに、サンドイッチとおにぎりだ。

「「「「「いただきます。」」」」」

「ん〜うめえ〜。」

「「バクバクバクバク!」」

俺はゆっくりと味わって食べているが、フレイルとヴァルターはガ  
ツツリと食べている。  
…おい、俺達のも残せよ?

「もう、もっとゆっくり食べなさいよ。」

「「バク……………バクバクバクバク!」」

ゆっくり喰わねえのかよ…」

「あっあの…イブキ…。これ…。」

「うん？」

コスモスが何かを差し出してきた。

「えっと…これは？」

「おにぎりとサンドイッチです。」

「コスモスが作ったのか？」

「…はい。」

なんと！？そんなのか！！？嬉しいぞこの野郎！！野郎じゃないけど。

「食べていいのか？」

「はっはい／＼／／／」

「ありがとうございます！…それじゃおにぎりから…いただきます。…パクッ。」

コスモスが握ってくれたおにぎりは、形は不格好だが、味は美味かった。

「…うん！！美味しいぞ、コスモス！」

「本当ですか！？」

「ああ。…でも何でこんなに小さいんだ？」

コスモスのおにぎりは他と違ってとても小さい。片手で完全に隠れるくらいに。それに、表面に米粒らしき形がない。

「えっと…／／／それは…／／／その…強く握り過ぎまして…  
／／／／／」

「ああ…なるほど。」

「…ふう。…」

「ッ！だっ大丈夫だってこれくらい！！美味しいから！！次はサン  
ドイツチをもらうな？」

「あっはい。」

サンドイッチの方はとてもキレイに出来ていた。

「上手く出来てんじゃん。いただきます!…パクッ。」

「どうですか?」

「うん!美味しい!これで料理が出来ないなんて信じらんねえ!」

「ありがとうございます!／＼／＼／＼」

「それにこれ、とてもきれいに切れてるじゃないか。どうやったんだ?」

コスモスのサンドイッチはもの凄くキレイに切りそろえていた。俺でも出来ない程に。

「はい、R・BLADEを使いました。」



「……へ？」

俺はユリアに視線を向けた。

「…ええ。右腕を剣に変えたと思ったら、勢いよく振りだして…。」

ガシッ！！

「えっイブキ？」

「コスモス、頼むから武装で料理するのは止めてください。お願いします。」

「あっはい…。わかりました…。」

よし！！これで家が壊れる事はない！！

「フム…残念だ。とても面白かったのに。」

今まで空気化していたサザンクロスが、とても残念そうに言った。

「頼むからやらせないでくれよ?」

「……………チッ」

やらす気だったのかよ…;

「さあ、休憩は終わりだ!」ここからは「一気にやるぞ!」…」

「「ええ〜!!?」」

「体力作りの修業だ!!」

「「はい!!師匠!!」」

フツ…ちよろい。

「頑張つて下さいね。」

「頑張つてね。」

「頑張りましたまえ。」

……サザンクロスの部屋だけ止めとくか？

「そんなことをしたら……分かってるな？」

「ゴメンナサイ。」

なっ何故分かった！？

「何故だろうな？（ニヤ）」

……もういや……。





俺達は後片付けをし、直したての家に入った。

「凄い……。まるで新築みたい……。」

「お褒めいただきありがとうございます。じゃあ、俺達は先に風呂に入らせてもらう。行くぞ、フレイル、ヴァルター。」

「ああ（はい）。」

俺達三人は風呂に向かった。

-----

カポン……。ザザアー！

「「「フ〜」」」。

「気

「持

「ち

「「「いい〜」」」

上から俺、フレイル、ヴァルター。  
俺達は今日の疲れを思いっきり癒やした。

「ああ〜天国に行く〜。」

「いつちやダメだよ?」

「……分かってるよ……。」

ちなみに、風呂は直す必要性がなかったのですそのままだ。

「明日からは本格的に修業を開始するからな。覚悟しとけよ?」

「ゴクッ……はい。」

「ああそれと、その時の描写は書かんからな。」

「ええっ!?!」

だって……ねえ?

「まあ、書くにはかくよ。あんましそのシーンは来ないけど。」

「(喜んで……いいのかな?)」

さあ、メタな発言はここまでにして、そろそろ上がるか。



「……………いただきます!!」「……………」

コスモス達も風呂に入って、夕食にした。  
今日は肉料理がメインだった。

「これは何の肉なんだ？」

「最高級ブウサギの肉だ。」

「へえ、これが……。」

ブウサギ……好きになりそうだ。

「イブキ、これをどうぞ。」

「ん？」

コスモスがまた何かを差し出してきた。

「これは？」

「私が焼いたブウサギです。」

「くれるのか？」

「はい！」

嬉しい。嬉しいんだが…これは…

「（真っ黒だ…）」

そう、真っ黒だった。本当に……。黒しかなかった。

「ちょっと焼きすぎたかもしれませんが……／＼／＼／＼でも、味は良いはずですよ！」

「……一応聞くが、何で焼いた？」

これは普通に焼けた感じではない。何かこう……。火に直接放り込んだようだ。

「サザンクロスとユリアが火を使っていて、空いていなかったのだから……ファイヤボルトで……／＼／＼／」

……。なあシオン。お前の親友はお前に似て、発想が凄いな。

「……コスモス、家の中では武器の使用もエーテルドライブも緊急時以外禁止な。」

「…はい。」

じゃないと家が無くなる。

「まあ兎に角…いただきます。」

「あつめしあがれ。」

俺はせっつかくコスモスが作ってくれた料理を、蔑ろにできず食べる  
事にした。

俺はフォークを肉に刺した。

ザクッ…

「（ザクッ！？音がおかしいだろう！？）」

おかしな音を響かせながら、なんとか一口サイズにわけた。

「…肉の部分が見えない。」

断面を見ると、中まで真っ黒で肉の部分がなかった。」

「…ゴクッ」

周りをチラッと見てみると、サザンクロスはこちらを見てニヤついでいて、コスモスは期待の眼差しを向け、ユリア達は心配そうにこちらを見ていた。

「（食べー！！食うのだー！！イブキ・ヤマトー！！愛する人が作ってくれた料理（？）なんだぞー？さあ、口に入れるのだー！！）」

「バクッ！…ガリッ！…ザクッ！…」

「…どつですか？」



「ああ！美味しい！！最初は激しくからかったが、後からどんどんもの凄い旨味がくる！！！！これは病み付きになるぞ！！！！」

「……嬉しいです／＼／＼／」

コスモスは両手を頬にあてて赤くした。  
うん、可愛い。

「……本当に美味しいの？」

「ああ、美味しい！！お前たちも食べえ！！」

「……それじゃあ……パクッ……！！……ッ！！……？」「」「」

ユリア達が肉を口に入れた瞬間、顔がもの凄く歪んだ。

「……ッ！！……あっ！！美味しい……！！」「」「」

そして、最後には笑顔になった。

「凄いわ!!コスモス!!こんな料理を作るなんて!!」

「ウム!!とても真似出来ない!!」

「ほんとだよ!!姉さん!!」

「美味しい!!」

「ありがとうございます!!」

嗚呼、俺って……こんな恋人をもって……幸せだぁー!!

そんな感じで夕食は終わった。

-----



「あゝ美味かった。」

「そうですね。」

俺はコスモスと一緒に部屋に戻っている。

今日は流石に疲れたので、早く休むためだ。

コスモスも休むらしい。……何か企んでいそうな顔だが。

それから部屋につき、中に入った。

「…キレイになっていますね。」

「だろ？フレイルとヴァルターを街まで走らせて、色々と買いに行かせたからな。ベットもふかふかだぞ。」

前の部屋はボロボロではなく、最高級ホテルのような感じになっている。

ここまでするのにくろっしたんだよな。

俺は思いっきりベットにダイブした。

「ああ、こりゃいいわ。」

「もう、あなたは子供ですか。」

コスモスがちょっと呆れながら言い、ベットに座った。

「いいじゃないか、別に。……前の世界でやったら、シオンが呆れて、ジン兄さんがだらしないってチネチネ説教してきたっけ……。」

俺はふと、シオン達の事を思い出した。

「……そうですね。」

「……あいつら、ちゃんとやってるかな……。」

「ちゃんとやっていますよ……。シオン達ならきっと……。」

「…だよな。」

俺はまたあいつらに会いたい。でも会えるとしても二千年以上も先だ。それに…もしかしたらもう会えないかもしれない。そう思うと胸が苦しくなる。でもあいつらと約束した。絶対に会おう。だから俺はコスモスとあいつらに会いに行く。なんとしてでも…。

「…さっ、もう寝よう。コスモス、明かりを消してくれ。」

「?何を言っているのですか?まだ寝ませんよ?」

「……………は?」

え…何を言ってるんだ?休むんじゃないかったのか?

「いや…俺はもう休みたいんだが…?」

「何を言っているのか、所有物のくせに。」

「ヒドッ!？何!？所有物って!？いったい何の話!？」

「忘れたのですか？ヴァルターが言っていたではありませんか。」

「ヴァルターが?.....ッ!？」

そくだ.....そう言えば.....ユリアが捕らえられている街の入口の兵士にコスモスが色仕掛けで気を引く代わりにヴァルターが『イブキさんが1日所有物になるのはどうですか』って言ってたじゃねえかあ  
――!!  
それが今になるなんて.....。

171

「あの...今日じゃなく拒否権はありませんよ」「ですよね〜」。

くそ...逆らえない.....(泣)

「と言っわけで.....えい!」

「うわ!?!」

コスモスがいきなり可愛いかけ声と共に、俺の上に跨ってきた。

「こっこここコスモス!?なにを!?!?!?!」

「何って……そんな……!?!?!?! 　ただ気持ちいいことを……!?!?!?!  
/ /」

「へえ!?!?!?!?!」

ちよっウソだろおい!?!そんなまさか!?!

「さあ……/ / / /ほら……/ / / /触って下さい……/ / / /」

コスモスは俺の手を取り、自分の胸にあてた。

「なっ！？／／／／」

俺は驚いて手に力を入れてしまった。  
その結果…

ムニユ…

「あん！／／／／」

「ぶっ！？／／／／」

しっしまった！！つい握ってしまった！！

「ハア…／／／／ハア…／／／／ハア…／／／／あん…／／／／」

……ヤバい。完全にスイッチ入っちゃってるよ……；



「……………」 (チーン)

「 (ニコニコ) 」

屍と化したイブキと上機嫌で肌が艶々のコスモスがいたとき。



忙しくも楽しい日（後書き）

どうでしたか？

コスモスが暴走してしまってますね。

この小説のコスモスはこんな感じで行きたいと思います。

それから、また新しい小説を書き始めたいと思っています。

掛け持ちは大変だと思いますが。頑張りたいです。何とか更新速度は変えない様にします。

それでは、また次回に…。



さて、今回は三人目（四人目？）のヒロインが登場します。

それでは、はじまりはじまり〜！！

お稻荷さま

……あれから5年。

え？早いって？まあ気にするな。特にこれと言った事はない。

ただ、フランスと和解放したり、フロード計画が完成寸前だったり、ローレイ教団を建て直したり、しかもそのトップ2、元帥になつたりしたただけだ。

で…今何をやっているかと言えば…

サワサワサワ……

「……………」

森の開けた場所に一人目を瞑つてたたずんでいる。

だがただ佇んでいる訳でわない。

両手には木刀を2本握っていて、周りの気配を感じとろうとしてい  
る。

ガサツ…

「ッ！そこだッ！！斬月破！！」

右手の木刀に第一音素を纏わし、黒い三日月の様な斬撃を、音がした方に飛ばした。

斬！！

「ッ！？チイ！！」

斬撃を飛ばした所からは一つの影が飛び出してきた。その影はそのまま周りを高速で駆けまわった。

「（……………少し速いな。……………ッ！！）」

突然、影が二つに増え、俺に突っ込んできた。

「ハアアアア！！」

「遅い!!」

二つの影が剣と刀を振り下ろして来たが、それを見切った俺は簡単に愛刀で受け止めた。

「クッ!!」

「また防がれた…。」

「まだまだだ。攻撃を仕掛けるときに影で二人になるのがわかったぞ。もつとタイミングを合わせる、フレイル、ヴァルター。」

そう俺は今、フレイルとヴァルターを鍛えてる所だ。

二人は五年間で劇的に強くなった。

今じゃあ、本気の俺と少し打ち合えるぐらいにまで。

二人は背丈も伸び、体も良い体格になった。……後少しで身長が抜かされそうだ（泣）

「さて、そろそろ昼飯の時間だし、次で最後にしよう。」

「「ッ。」「」

俺は木刀を一本捨て、突きの構えをとった。

「いくぞ。……風牙絶咬ッ!!」

「クッ!」

「うわあああ!?!」

ズバアアアアン!!!!

俺は目にも留まらない速さで滑る様に動き、突きを放った。しかし、フレイルはギリギリ避けたが、ヴァルターは避けれずまともに喰らった。

「ヴァルター、終了。次だ。」

「……！」

俺は木刀を腰に構えて、抜刀の体勢をとった。

「……………」

ダッ……

どちらも同時に地を蹴り、突っ込んだ。

「抜砕竜斬ッ！！」

「瞬刃剣ッ！！」

俺はフレイルの背後に駆け抜けながら、高速で居合い斬りを繰り返していき、フレイルは前進しながら突きを繰り返してきた。



斬ッ!!

「……………」

俺達は交差し、止まった。

「…………グッ!?いつてえええ!?」

「フン、俺の勝ちだな。」

勝負は俺が勝った。まあ、当たり前だな。

「さあ、今日の指南は終了。後は好きなようにしてくれ。」

「ええ〜!?午後も教えて下さいよう!」

「無茶言つなよ。午後から三日間仕事で家を空けなきゃいけないだからな。」

「ちえ〜〜。」

「さて、フレイル。何時までも痛がってないでとっとと帰るぞ。」

「……鬼。」

「よし、次からはフレイルのメニューを倍に」「ごめんなさい!!--」  
「わかればよし。」

-----

「……あつ!!--お帰りなさい!!--」

「ただいま、ユリア。」

「「ただいま戻りました。」」

俺達が家に帰ると、ユリアが出迎えてくれた。  
ユリアも五年という歳月で、ますます美人になった。身長も少し伸び、出るところは出て、引つ込むところは引つ込んでるし。胸なんかコスモス並みにデカくなった。  
ただ……

「ああ……いいなあ。私も譜術の特訓したいなあ。」

「止めてくれ。お前がしたら森が吹っ飛ぶ。」

体が成長した分、譜術の威力が格段に上がり、ただでさえ強力なのに大変な威力になってしまった。  
あの時は流石の俺も死にかけたな。

「いいじゃない。ちょっと運動したいのよ。ね??」

「?を付けてもダメだ。」

「……………ケチ。」

しかも、前より活発になってきた。

「ケチで結構。…とりあえず、昼飯を食べたいんだが？」

「あつ、それならもう出来てるわよ。」

「ありがとう。」

それから俺達はみんなで昼飯を食べた。

-----

「よし、行くぞ。」

「はい。」

「ええ。」

上から俺、コスモス、ユリア。

俺達は今から、ダアトへと向かおうとしている。ん？何故コスモスもって？それは、コスモスも教団員で俺の補佐役だからだ。因みに階級は謡士だ。結構上だぞ？

「いってらっしゃい！」

「お気をつけて。」

「土産は孫がいいな。」

「アホか！！」

たく…サザンクロスも相変わらずだな。五年で一つも変わらない、いや寧ろしつこくなってる。

「もう／＼／＼先生ったら…／＼／＼」

「はあ…とにかく行くこう。飛行機が出る。」

「はい（ええ）。」「」

教団へ行くにはホド島を出て、バダミヤ大陸へ行かなくてはならない。そのため飛行機…アルビオールだっけ？それに乗って1、2時間かけて向かう。

-----

「ーダアトー」

「ふう〜やっと着いた。」

「1111で疲れてびびりするのよ。これから仕事でしょ。」

「その通りですよ。」

「わかってるよ。」

とは言っても、元帥の仕事ってダルいんだよなあ。書類ばかりでちっとも面白くない。そんな事を考えながら教会へと向かった。

「あっ！ユリア様、イブキ様、コスモス様！こんにちは！」（町のおばちゃん）

「ああ、こんにちは。」

「「こんにちははー！」」

「おおっ！元帥さんよ！！相変わらず、美人さん達を引き連れてるねえ〜！！」（売店のおっちゃん）

「からかうなって。奥さんに言いつけるぞ？」

「それは勘弁！で、どっちが奥さんになるんだい？まさか両方かい？」

「……／／／／／」

「ハツハツハツハ！！テレちゃって！！ユリア様とコスモス様もウブだねえ〜！！」

「だからからかうなって。ほら、奥さんが睨んでるぞ。」

「うげっ！？やべえ〜……。それじゃ、今日も頑張ってくださいよ！！」

……とまあ、ダアトを歩いていたらこんな風に町の人達に喋りかけられる。それ程慕われてるって事なんだが……。今のみたいに辛かってくる奴がいるからなあ。大変だぜ。  
と、そうこうしている内に教会に着いた。

「お疲れ様です！！ユリア様！！ヤマト元帥！！コスモス謡士！！」

「ウム、ご苦労様。」

「ご苦労様です。」



……何か、俺が一番偉いみたいだな。まあいいか。

「さて…ユリア、仕事頑張れよ。」

「そっちこそ。コスモスも頑張ってね。」

「はい。」

俺達はユリアと別れて、自分達の仕事場へ向かった。コスモスは俺と一緒にいる。

「さてと、仕事はつと……オーマイゴッド……。」

俺の机の上には高さ50cm位の書類が三つ並んでいた。

これ……全部？

「はあ〜…めんどくせ…。」

「ちなみに、×時に会議がありますよ?」

「俺を殺す気ですか?」

「この程度で死なないでしょう? (ニコッ)」

「……はあ〜」

俺は覚悟を決めて仕事に取りかかった。

書類に目を通し、ペンを走らせ、判を押す。これをひたすらに繰り返す。やってやってやりまくる。

チラッとコスモスを見てみたら、右斜め前の机で俺の半分位の量をやってた。そして手元を見てみたら……

シユバババババババツッ!!

手の残像が見える程の速さで仕事をこなしていた。コスモスはもの凄く処理能力が速いんだよな。昔の名残か? って、仕事仕事。

…一時間後…

よし…後十枚…いける!!

「よ~~~~し、これで…ラスト「失礼します!!元帥、追加の書類です!!」…ここに置いといて…」

「はっ!!」

チクシヨウ…また来た…。しかも高さ約60cm…。

「フツ…フフ…フハハハハハ!!ヤツてやらあああ!!」

俺は手がどこぞの千本の手の神みたいになり、仕事に取りかかった。  
一方、コスモスは…

「ズズ……はあ……美味しいですね。」

優雅にお茶を飲んでいた。

-----

もう少し……後少し……後ちよい……

「終わったあー……あぁ……。」

やったぞ……遂にやった……。推定1500枚の書類を二時間でやって  
やった。

フッ……記録更新だ。

「お疲れ様です。はい、お茶です。」

「おお、ありがとう……。」「

コスモスがお茶を煎れてくれた。ほんと、気が利くよ。

「はあ、俺もう死んでもいい。」

「それはこの後の会議が終わってからにしてください。」

「……最近冷たくないか？」

「気のせいですよ(ニッコ)」

「泣いて……いいですか？」

-----

「……ふっ、この件は終了とする。」

「わかりました。」

今は会議で色々な問題について話し合っている。

……つつても、フロート計画も終了間際で、何の問題も無いし、話す事は殆ど無いんだがな。

「フ、他に何かあるか？」

ス…

「ん？何だ？」

一人の男性が挙手した。

「はい。実は、ダート付近で魔物の被害が続出して…。」

「フム…原因は？」

「わかりません。ですが、少し不審な点がありまして…。」

「なんだ？」

「はい、魔物の種類がバラバラでありながらも、集団で行動し、統率もとれています。それに、どうやら狙いが食料だけで、死人はおるか怪我人もいないのです。」

「それは…変だな。」

何故だ？何故そんな事が出来る？何かの力が働いているのか？

「…その魔物達の居場所はわかっているのか？」

「はい。調査隊によると、アラミス湧水洞付近の森のようです。…

…まさか元帥…。」

「（ニヤ〜）わかっちゃう？じゃそう言う事で！行くぞコスモス  
！…」

「はあ〜。わかりました。…ユリアにこの事を報告しておいてください。」

「はあ…。わかりました…。気をつけてください。」

「コスモス!!早く!!」

「少しは落ち着きなさい。」

ハツハツハ!!こういう仕事を待っていたんだー!!暴れてやる  
ー!!!! (魔物達が可哀想)

ーユリアsideー

ふう仕事って、大変ね。なんでこんなに書類と睨めっこしないといけないのかしら。

ピー (インターホンの音) 失礼します。ユリア様にご報告があります。

「...はい、ようござい。」



シユン…

「失礼します。」

一人の女性が入って来た。何の報告かしら？

「どうしたの？」

あっ、ここに書き忘れてる。書かなくちゃ…。

「はっ！実は、ヤマト元帥が魔物の討伐に行くとの事です。」

バキィ！！（ペンを握り潰した音）

「…何ですって？」

「は、はっ！やっヤマト元帥が、まっ魔物のとつとつと討伐に」何  
でよー!?」「ヒイツー!?」

「どうして私も連れて行ってくれないのよ!?」

「わっ私に言われましても(泣)」

「ああ〜ん!!私も暴れたい〜!!」

もお〜!!いつも自分だけだから!!私も誘ってくれたって  
いいじゃない。

「こうなったら、勝手に行くところかしら。…」

「いっいけませんよ!?!」

「む〜〜!?!」

「あっ、可愛い／＼／＼」

はあ…いいなあ。……帰ってきたら仕事増やしてあげようかしら。

—コリアside out—

—

—イブキside—

ビクウ!?

なっ何だ!?!この泣きたくなる感じは……。

「?どうかしたのですか?」

「あ、いや…何もないさ、コスモス。」

まあいいか。今はこつちだな。

「フム…数種類の魔物の足跡があるな…。この先か。」

今は森の入口に居るんだが、如何にも何か出そうな所だな。

「よし、ここは俺とコスモスが行くから、お前達はここで周りを見張れ。何かあった場合、譜術で知らせる事。尚、どんな時も一人では行動するな。最低3人で行動しろ。いいな？」

「……了解!!」「」「」

俺は連れてきた十数名の兵士達に命じ、森に入って行った。

「……どこまで続くんのだ？この足跡。」

「大分中に入って来ましたね…。」

足跡を辿って歩いてきたが、ずっと続くだけで何も無い。  
一体何処まで…？

「…ッ！コスモス、隠れる。」

俺はコスモスにそう言い、茂みに隠れた。  
俺の目の前には開けた場所があり、そこには巨大な大樹があり、その根元の近くに小さな泉があった。その景色はとても幻想的だった。足跡はここに集まってる様だ。

「（ここに何かあるのか？……ッ！！）」

辺りを見ていたら、大樹の根元の所から影が現れた。

「（あれは…人？何でこんな所に…。）」

その影は人だった。しかもどうやら少女の様だ。見た目十六、七歳

位だろうか。

俺が目を凝らして見ていると、突然少女が服（と言ってもぼろ布で隠す所を隠しているだけ）を脱ぎだした。

「ッ！？／＼／＼……うっ！？」

「……………」

目を凝らしてずっと見ていただけに、はっきりと見てしまった。慌てて顔を背けると、目の前にいるコスモスが冷たい目で見てきた。……………仕方ないだろう。

俺はその目に耐えられず、後退ってしまった。それがいけなかった。

バキィ！！

俺は後ろにあった枝を盛大に音をならしながら折ってしまった。

「ッ！？誰！？」

その音は少女まで聞こえてしまった。

「《何をやっているのですか…》。」

「《わっ悪い…。仕方無い、出るか。》」

俺とコスモスは茂みから出て、少女の前に出た。  
少女の容姿は、美人と言うより可愛い顔立ちで、髪は腰まである美しい金髪だった。

「人！？」

「ああ、怯えないでくれ。俺達h「いやっ…！こないで…！助けて…！」ッ…おっおい、落ち着け…！」

少女はいきなり怯えだし、叫び始めた。





ギャー！！ ガァー！！ シャァー！！

大群の魔物がやって来た。

「なっ何だこれは!？」

「何故こんなに!?!?!?!?!まさか!?!」

コスモスは何かに気づき、少女の方に向いた。  
……まさか、これはこの少女が?

「みんな!?!この人達を追い出して!?!」

「ッ!?!……やはりあなたが……。」

チツ……まさか魔物を操れるとは……。まさか、この子が今までの被害を?いや、そんな事よりも……

「コスモス！！ひとまずこいつらを何とかするぞ！！」

「はい！！」

この状況をどうにかしないと。

「ガァァ！！」

一体のウルフが飛びかかってきた。

「フン！掌底破！！」

俺はそれを避け、さらに掌底を喰らわせた。

「キャン！？」

それでこいつは墜ちた。

「ハアア!!!」

コスモスも魔物を三体同時に蹴り飛ばした。俺も敵に飛び込んで行き、技を繰り出した。

「刹牙!!!封翼衝!!!龍衝破!!!」

三段蹴り、拳に力を溜め斜め上からの打撃、そして龍の頭の形をした気を放った。

「ギャー!!!」

「ガウウ!!!」

「シャー！！！」

魔物は次々と倒れていった。

「ッ！コスモス！！後ろだ！！」

「ッ！ハアッ！！」

「ギャウ！」

コスモスは俺の声に気づき、回し蹴りを繰り返した。

「よし、一気に片付ける！」

それからはワンサイドゲームだった。

「ふ〜これで全部か…。」

「その様ですね…。」

「まったく、多過ぎなんだよ。まあ、技の練習にはなったな。」

「やっ…。」

「ヒイ!？」

少し離れた所に居た少女は、俺と目が合った瞬間怯えて腰をついた。俺は少女の側に歩み寄った。

「安心しろ。魔物達は気を失っているだけだ。」

「いや……こないで……いや…いや…！」

「だから落ち着けて。俺達は君を「死にたくない！死にたくないよお~~~~~」！」「ッ……………」

この子……。

―イブキside out―

―少女side―

いや、こわい、死にたくない！私は唯楽しく暮らしてただけなのに！  
なのに…私の“アレ”を見てからみんな私を化け物扱いして…。こ  
の人だつてきつとそうよ。私の事聞いて殺しに来たのよ。絶対そう  
よ。……そんなのいや…！

「こないで……！」

ズバアアアアン!!

「ッ!?グッ!?」

「ッ!?イブキ!?」

私は手を相手に向けて、譜術をぶつけてしまった。

「あっ……ころし……ちゃった……?そんな……ころすつもりなんてなかったのに……」。

でも……これで……ころされずに……」。

「……つたく!まさか、無詠唱でサンダーブレードを放てるとはな。しかも、普通より威力が高いな。」

「えっ!?!」

「……はあ……心配はいりませんでしたね。」

そんな……いきてる!?!どっしよう!?!このままじゃころされちゃ  
う!!

「大丈夫だ。俺は君を殺したりしないさ。」

……え?今…なんて…?

「殺さない。絶対にだ。だからほら、そんなに怯えないでくれ。」

「ころ…さ…ない?ほん…と…?」

「ああ、誓おう。」

…ころされない?私…死なないの?

「…ヒッグ…グス…ふええ…!」



「もう安心だから。」

そう言っつて私に手を差し伸べて来た。  
この人に着いていけば、私は助かる。  
私は差し伸べられた手をとっ

ウソダ

「えっ…?」

「?…どうした?」

そんな…どうして?

ダ  
ダマサレルナ ソウイッテ ワタシタチヲツカマエルツモリ

そんな…じゃあ私はどうしたら…。

ワタシトカワレ ワタシガオマエヲマモツテヤル

……うん、わかった。

ー少女 side outー

ーイブキ sideー

少女が俺の手を取ろうとした時、少女が声を上げ手が止まったと思っ  
たら、顔を伏せた。

「?…どうした?」

問い掛けても何も反応しなかった。  
俺は不審に思い、顔を覗き込もうとしたら……

「ハア!」

「ッ!？」

少女に蹴り飛ばされた。

「なっ!？イブキ!!大丈夫ですか!？」

コスモスが駆け寄ってきた。

「(クソッ…なんつー威力だ。右のボディがヤラれるとは…。)」

少女の蹴りは、右わき腹に当たり、右胸当たりの機械部分が潰れた。幸い、内臓器官等は無事だった。

「クソ…一体何だっただ。」

俺は蹴りを入れてきた少女を見た。  
見た瞬間、俺は気づいた。

「お前……………誰だ？」

「フン…お前に教える名など無い。」

そこに居たのは先程の少女よりも大人びいた美女だった。

機人と狐（前書き）

前のサブタイトル、余り関係なかったね。

さあ、今回は戦闘が始まるよ!!!

………あり？何か短い？

あっそうだ!!  
リリカルなのはの小説、書き始めました!!  
宜しければ、そちらも見てください!!!!

## 機人と狐

「お前……誰だ？」

「ふん……お前らに教える名など無い」

美しい女性に変わった少女は、先程までの弱々しい感じではなく、凛とし強気な感じになっていた。

「……二重人格か？」

いや、それなら体つきまでは変わらない。

「さて……私達を……いや“コイツ”を殺そうとした罪……死んで償ってもらおうぞ」

フッ…

「ッ！？何！？」

女がいきなり消えたと思ったら、俺の後ろに現れた。

「ハアアア！！」

「チィ！！」

ドゴォー！！

「…ほう、これを受け止めたか…。お前、ただ者ではないな？最初の蹴りで内臓を潰したつもりだったのだが…」

「…ああ、しっかりとダメージが伝わったさ。おかげで帰ったら面倒うな事になったわ」

「帰るつもりなのか？…フハハッ…お前らは此処で死ぬんだぞ？」

チツ…どうする…。アイツを気絶させて連れて行くか？それとも説得するか？どちらにせよ、骨が折れるな。……ええい！！どうにでもなれ！！

「おい女」

「ん？」

「ちよつと一つ、勝負しよつぜ」

「……何だと？」

「イブキ…何を？」

「内容は簡単だ。先に参ったと言わせたなら勝ち。負けた方は勝った奴の言つとおりにする。どうだ？」



「……………」

なあ、ぐんぐんするっ。

「…フツ、良いだろう、面白い。力の差を見せてやる」

…………よし、これで話しが出来るな。

「そうこなくっちゃな…。コスモス、手は出すな」

「…………はあ…………わかりました」

さて、いっちょヤルか…！

「行くぞ……………」

「ふん…何処からでも来い、男」

シュツ！

「何！？…ツ！？」

ドガア！！

俺は先程、女がやった様に背後に回って蹴りを入れた。

「くう…！コイツ！！」

女は何とか防ぎ、此方に突っ込んで来た。

「ハアアアアア！！！！」



「くっ！離せ！！」

「はっ！イヤだね！！」

俺は女が放った拳を片手で掴み、引き寄せた。その時にもう片方の腕を掴み女の背中に捻り回した。

「くそっ！離せ！！」

「お前、何故そこまで俺達を殺そうとする！？」

「お前らだけではない！！私達に近づく者全員殺してやる！！！」

「何故！？」

「そいつらが全員私達を化け物呼ばわりするからだ！！！」

その時女からは、明確な殺意と怒り、そして悲しみを感じた。

「アイツらは私達を見て化け物扱いし、暴力を振るわれ、追い払われ、拳げ句の果てには殺そうとやって来た!!!」

.....。

「だから私達はアイツらを許さない!!人間達を許さない!!絶対に信じない!!したら最後、私達は殺される!!」

「ッ……しまった!」

女が一瞬の間に腕を振り払い、離れた。

「だから私達の邪魔をする奴は絶対に殺す!!」

シュン!!

女は高速で背後に現れ、蹴りを入れてきた。

「…………馬鹿が!!」

ガシイイ!!!

「ッ!？」

俺は右手で足を掴んだ。

「暴力を振るわれた、殺されかけた。ああ、そりゃ殺意も抱くよな!  
!だがな!!人間全てがそんな奴らだと誰が言った!!!!!!?」

「なっ!？」

ドゴオンー!!

「かはあ…!!?」

俺は女の脚を掴んだまま右腕を振りかぶり、地面へと叩きつけた。

「お前らは全ての人間達を見て来たのか?全員が全員化け物だって言っただけなのか!!?」

「くっ…!!」

「言っただけだろ!!?誰かは違つと言った筈だ!!!」

「そんな訳ないだろ!!!」

「俺が違つと言っている!!!」

「ッ…!!?」

「俺はお前を化け物だとか思いはしない！！絶対にだ！！！！例えどんな事があるうと俺はお前らを一人一人の人間として見るさ！！！！」

「ふざけるな！！コレを見てもお前はそう言えるのか！？」

そう言うと女の頭からは人間の耳ではない耳が出て来た。これは…

…狐耳？

それから目が青から金色に変わり、瞳が縦に長くなり、牙も生え、爪も鋭くなり、最後に狐の尻尾が生えてきた。

俺はそれを見届け、一言だけ言った。

「…………… たったのそれだけか？」

「なっ何！？」

その一言は女にとって予想外で目を見開いた。



「たったのそれだけか！？その何処が化け物だ！？ただ可愛くなっただけだろうが！！！」

「なっ！？／／／／」

女は俺の言葉に何故か赤面した。

「そんなんで化け物？笑わせる…。それなら俺はどうなる！？」

「えっ……………？」

「俺には心臓が無い！両腕、右足は機械（譜業）！上半身は臓器以外殆ど機械（譜業）で出来ているんだぞ！？それにもう歳をとらない！これで俺はまともな人間か？否な！！もはや人間ではない！！」

「……………」

女は黙って俺の言葉を聞いていた。その顔はまるで信じられない様な顔をして。

「だから俺から見たらお前は立派な人間で一人の女性だ!!」

「……そんな事言うのはお前ぐらいだ。どうせ他の奴らは……」

「私もあなたはちゃんとした人間だと思いますよ?…勿論、イブキも」

「えっ…?」

離れて見ていたコスモスが此方に来て女に言った。

……ちゃっかりと俺も人間だと言ってくれたな……。

「私達だけではありません。私の親友も、家族も、皆あなたは人間の女性と受け入れてくれます」

「……そんなこと……」

俺は手を差し出した。

「来いよ。絶対に人だつて言ってくれから。もし言わない奴がいたら、俺がそいつをぶっ飛ばす！」

「あ……」

「きつと認めてくれますよ」

女は少し考える素振りをしてから、口を開いた。

「……くっ……もし言ってくれなかったら、全員吹き飛ばしますからな」

「好きにしろ」

女は俺の手をしっかりと握った。その顔は笑顔だった。俺は女を立てた。

「俺はイブキだ。イブキ・ヤマト」

「私はコスモスです」

「……私はテラだ」

テラか……。

「いい名前だな。だけどそれはお前たちの名前か？」

「ちょっと待ってる」

テラが顔を伏せたと思ったら、大人びていた顔がほんの少し幼くなつた。体つきも少し小さくなっていた。

「えっと……」

「あっ……えっと……テアです／＼／＼」

どうやらこっちの人格はテアと言っているらしい。

「テアか……。いい名前だな」

「うえっ！？／＼／＼あっありがとう……。ございます……。／＼／＼」

テアは顔を真っ赤にしつつ向いた。

………何だ？この可愛い小動物は……。耳とか生えてるから余計に………ハッ！？

「ジーー………」

こっコスモス……そんな冷たい目で睨まないでくれ……。何かが開く。

…と、ここで俺はある事に気づいた。いや、気づいてしまった。

「あっ！／／／／／」

「えっ？」

「どっしたのですか？」

「……………服……………／／／／／」

「えっ？……………」

説明しよう。

彼女と遭遇する前、彼女は何をしていたらろう。

そう、水浴びだ。つまり裸だ。そして俺達はそのまま戦闘に入った。

つまり彼女は今何も着ていないと言う訳で……………豊かな胸や、下半身の部分などがバッチリ見えている訳で……………

「あゝ取り敢えずこのコートを……」



こうして、俺と狐耳少女（女性）と出逢ったのである。



ちょっと休憩（前書き）

更新です。

今回、最後の方は微R18かも……。

それではごっごう……！！

## ちよつと休憩

「えっと…その…」

「いや…いいさ…。此方にも非があつた」

あの後、俺はなんとか復活し、着ていたコートをテアに渡した。  
それで、今は森の出口へと向かっている。

「そう言えば、お前は魔物を操れるんだな」

「え？あ、いえ。私はただ…魔物と話せるだけで、操ってるワケじ  
ゃ…」

「そうか…。それともう一つ、お前は魔物たちに食料を奪ってくれ  
って頼んだのか？」

俺がそう聞くと、テアは顔を伏せてしまった。

「……その…森に食べ物が無くなって来て…。それで魔物たちに話したら取って来ちゃって…。最初はいけないうって思ったけど……あの事を考えたら……その…」

どうやらテアは、最初は罪悪感を感じていたが、人間達にされて来た事への仕返しと思う様になり、罪悪感が消えて来てしまった様だ。

「それでもしてはいけない。そんな事したら関係の無い人まで巻き込まれてしまう。大人は少しは我慢出来るだろうが、子ども達は出来ない」

「……ごめんなさい」

「俺に謝るな。ダアトに着いたら皆に謝るんだ」

「……はい」

つつても、腐った奴らは許さないだろうな。……まあその時は俺とコスモスとユリアでございもゴホッゴホッ……お話するがな。

「ん……出口か……」

やっと森の出口に着いた。その先には兵達が指示通りに待機していた。

「ん？……！お帰りなさいませ元帥！……！ご無事で何よりです！……」

「ウム。すまない、少し時間がかかった」

「いえ！そんな事は……」

兵の一人が此方に気づき声をかけて来た。

「ん？……そちらの女性は……？」

「ああ…彼女はこの件の…んゝ加害者であり被害者、みたいな者だ」

「はあ…。では、どう致しましょう?」

「ああ、彼女は此方で保護する事にする。手出しはしないでくれ」

「はっ！了解しました!!」

さて、これで仕事は終わりかな？

「では帰還する。準備せよ!」

「はっ!」

兵は他の兵達に伝え、準備に入っていた。

「じゃあ、テア。ここの魔物たちに挨拶するか?当分の間は来れな

いぞ?」

「えっ、いいの?」

「当たり前だ」

テアは笑顔になり、実は付いて来ていた魔物たちの所へ行った。

まったく…純粹で良い娘だ。……彼女たちを化け物呼ばわりした奴らの気が知れんな。

245

「イブキ」

「なんだ? コスモス」

俺がテアを眺めていたら、コスモスが真剣な表情で声をかけて来た。

「単刀直入に言います。…ボディの損傷はどの位ですか？」

「……大したことはない」

「正直に」

「……右胸の辺りが完全に粉碎している。今も激痛が走る」

「ッ！？……直せるのですか？」

「わからん。スピアはまだ幾らか有るが、今はシオンが居ない。完全には直せないだろう」

「…そんな…」

先程の戦闘で蹴りを入れられた所が修復出来ない程に粉碎してしまった。幸い、臓器にダメージは無かったが。いつもならシオンに見てもらったが、居ない今、俺一人で直さないといけない。コスモスは構造を知らないし…。まあすぐ覚えそうだがな。

「何とかなるぞ」

「元帥！！準備が整いました！」

「よし。では帰るか！」

「はっ！」

「テア！もう行くぞ！！！」

「あ、うん！！…じゃあまたね、みんな！！！」

「『『ガウー！！！！』』」

俺達はダアトに向けて出発した。

-----



「あゝあ、やっと着いたか」

一時間くらいかけて俺達は帰還した。もう日は沈みかけていた。

「みんなご苦労さん！ーユリアには俺から報告しておく。明日の仕事に備えて、今日はもう休め。いいな？」

「「「はっ！お疲れ様でした！」「」」

……さて、ユリアに報告して俺も休むか。……部品を取り替えなくちゃ。はあゝ、今日は徹夜か……

「それでは、私はテアを連れてお風呂に入ります」

「ああ、まかせた。…テア、しっかり休めよ？」

「うん。ありがとう」

コスモスはテアと一緒に風呂へと向かった。

「さて、俺も行くか」

はあ…アイツ何て言うだろっな。

-----

ピピピ………

「ユリア、俺だ」

「あ、入って良いわよ」

「失礼する」

俺 はユリアの仕事場に入った。

「お帰り。どう？楽しかった？魔物たちとの遊びは…」

うっ…何か怒ってらっしやる…。

「おい…俺を戦闘狂みたいに言うな。後、魔物の討伐はしてない」

「ええ、知ってるわ」

「ええ！？何で!？」

「預言に書いてあった」

「…マジで…?」

「さあ？」

…くっ！仕返しのつもりか！

「ふふっ…冗談よ」

「だ、だよな？そんな事までわかる筈なんて無いよな？あ、あははははー！」

「密偵出してた？」

「何やってんだあああ！！？」

「何って…ちょっとしたストーカー？」

「聞くなよ！？て言うかちょっとしたストーカーって何！？完璧なストーカーだぞ！？これより上があんのかよ！？こえ〜よ！！！」

「まあまあ、良いじゃない」

なっ！？…サザンクロスだ……ここに…女サザンクロスがいる…。

「まあ知ってるなら話しが早い。少女を一人…いや二人、保護した。これで被害はもう無い」

「そう、わかったわ。ご苦労様」

「ああ。…俺はもう休むからな」

「わかったわ」

「じゃ、そゆことro」まだ話しは終わって無いわよ？」「……え？」

ああ……なんか嫌な予感……。

「あなた……これで何回目？女性関係の問題」

「ちょっと待てー!!それじゃ俺が軟派な最低野郎に聞こえるぞ!？」

「だって事実じゃない。教団に入ってからフラグを立てまくってるじゃない!かれこれ二千人位!！」

「え!?そうなの!？」

「しかも天然!?!?...コスモスが可哀想よ...」

「.....」

そうだったのか...。俺はそんな事を...。だから最近コスモスは冷たかったのか...。

「そうか...。気をつけるよ...」

「わかれば宜しい」

「これで終わりか？」

早くボディの修理をしたいんだが。

「あと一つ……。これは重要よ」

なんだ？ユリアがこんなに真剣な顔になるなんて……。一体何だ？

「保護した少女……」

「……ゴクッ……」

「……可愛い？」

ズゴオオ！！

「おい！何をいきなり！？」

「だって気になるじゃない!!……これ以上ライバルが増えたらやだもん(ボソツ)」

「何か言ったか?」

「何でも無い!!……で?どつなの?」

「あ、ああ……。えっと……テアは…可愛いな。テラは…美人だ」

「……ねえ、それ素で言ってる?」

「?ああ、そうだが?」

「……別にいいわ。で、今どこに居るの?」

「コスモスと此処の風呂に入ってる」

「何でそんな事聞くんか?……まさか……」。



「おい、まさか……ってあれ？どこ行った？」

目を離したらユリアが消えていた。

いつの間に!？

「まあいいか。さっさと直すか」

俺は気にせず、自分の部屋に帰った。

風呂場で大変な事が起きるなんて考えもせずに……。

- イブキ side out -

-----  
- ユリア side -

もう……イブキったら鈍感なんだから。ちっとも気付いてくれないし……。男の人ってみんなこうなのかしら？

まあ今はいいわ。

何と言っても、あのイブキが可愛いだの美人だのって言う女が来たんだから。確かめなくちゃね。

「……あ、まだ入ってる。よし、私も早く入らないと」

- ユリア side out -

- テア s i d e -

ザバアー！！

「ふう〜、あつたかあ〜い…」

本当に久しぶりだなあ、お風呂。いつも水浴びだったからなあ…。

「さあ、背中を向けて下さい。洗ってあげます」

「ありがとう、コスモスさん」

コスモスさんって優しいなあ…。綺麗だし…。スタイルいいし…。テラ位かな？いいなあ…。

「ねえ、コスモスさんって、イブキさんの恋人なの？」

私はちょっと、本当にちょっと気になって聞いてみた。

「えっ？／／／……はい……そうですよ……／／／」

「そっなんだ〜……」

……別に羨ましいなんて思ってないもん。

「ふふっ……もしかして、惚れてしまいましたか？」

「えっ！？／／／／いついや……／／／／そんな事は……／／／／ない  
……かも……／／／／しれなくも……ない……／／／／」

う〜／／／／だつてあんなカッコイイ顔で『いい名前だな……』な  
んて笑顔で言うんだもん！！／／／／それに……み、見られたし  
……／／／／  
でも……恋人が居るんじゃ……。

- なら奪えばいいだろう… -

ひゃっ!?!?... テラく、ビックリさせないでよお。

- ふん…。別に驚かそうなんて思ってなかった -

もう…... って、え!? 奪う!? そんな事は出来ないよ!!

- まあ、お前には無理か… -

…... もしかして…... テラも好きになったの?

- ばっ馬鹿な!?!? / / / / / そんな事は無い!! / / / / -

ふん…。

「コスモスさん。テラがね、イブキさんの事好きだって」

- なっ!?!?!? / / / / / くらっ!?! / / / / / 何を勝手に!?!? / / / / / -

「ふふっ…、そうですね。モテモテですね、イブキは。流石、私の恋人です」

「あれ？何も言わないの？」

「何故です？」

「だって恋人でしょ？だったら心配にならないの？」

私なら心配でたまらないけどなあ…。

「しませんよ」

「随分余裕だな…」

「余裕なんだね」

「いいえ、そういう訳ではありませんよ」

？どついつ事なんだろう？

「たまに嫉妬したりしますが、彼は絶対に裏切らないと知っていますから。それに……」

それに……？

「私が正妻で、後二、三人程度なら、作っても良いと思ってますしね。それも私が信用している人限定で……ね」

……わお……。案外凄い事言っただね、コスモスさんって。

……そうだな

テラも頑張ったら？

……じいちゃん……

シユン……

ん？誰が入って来た……

「あつ、いたいた！」

……誰？

「ユリア……。仕事は終わったのですか？」

「ええ、やっとね」

……知り合いなんだ……



「で…」の子が？」

「あ、はい。テア、こちらはこの教団のトップで、私の親友の…」

「ユリア・ジユエよ。宜しくね？」

えっ！？トップ！？じゃあ、イブキさんの上司！？

「はっはい！！テアです！よっ宜しくお願いします！！」

わあ…よく見たらこの人もコスモスさんと同じくらい美人な人…。  
胸も大きい…。

「ふん…イブキが言っていた通り、可愛いわねえ…」

えっ！？／／／可愛い！？／／／そんな…／／／イブキさん  
…そんな風に…／／／

- ..... バカが -

羨ましいんだ？

- なっ！！？ / / / 違う！！ / / / -

「この分だと、イブキの言うとおり、テラって子も美人そうね……」

..... だって。良かったね！！

- ..... 知らん / / / -

「にしても……あなた……胸……中々あるわね……」

モミ……

「ひゃん!?!?!?!」

「ゆ、ユリア?何故テアの胸を揉んでいるのですか?」

モ!!!モ!!!...

「んっ!?!?!?!?!あっ!?!?!?!」

「~~~~っ!?!?!可愛い!?!?!」

ギユウウウ!?!

「キャッ!?!?!?!?!」

えっ!?!?!えっ!?!?!何!?!?!どうして!?!?!

「ああ…そうでした…。ユリアは可愛いもの好きでしたね…」

「ああ…可愛い…！」

モミモミもじゅ…

「ひゃあああ！？／／／だ…だめ…／／／」

「肌も白いし、顔も可愛いし、声も良いし…最高だわ…！！」

だっだめえゝゝ／／／そんなにしたら…わたし…／／／

ぴょじ…

「ん？何これ？」



ちよっ!? だめ!! / / / ああん!! / / /

「あまり耳を触らないでえ〜〜!! / / /

「ああ…いい!…いいわ!!…もう最高!!…!!」

「ゆ、ユリア…もうその辺に…」

「コスモスさん!! 助けてえ〜!!」

「あっああ… / / / もう…だめえ… / / /

「サワサワモミモミ…」

「可愛い…」

「ふああああん！！！！／／／／」

はた…

「あっ！？テア！？！？しっかりして下さいー！？」

「テアちゃん！？！？しっかり！？」

うっっ！お嫁に行けないよっっ！！

……アホが…

恋人（前書き）

え、何か無理やりの気がします。すみません。

そしてグダグダの気がします。

それでも頑張って行きます!!



## 恋人

・風呂場・

「……「めんなさいね……」

「別に……“私”に被害は無かった」

「でも同じ体でしょ？」

「……そうだな……」

たく……ユリアがテアを弄り過ぎて強制的に私が出て来てしまった。

「でもまさか、人格の入れ替わりに条件が有るなんてね…」

「それはそうだ。でなければ、まともに生活などできん」

テアとテラが入れ替わる条件。

それは、任意は当然だが、極度の興奮状態に陥るか、体力が尽きるの三つだ。しかし、これはテアが表に出ている時の状況だ。テラが表の場合は自由だ。……ズルい？知るか。

「ねえ、テラってイブキと戦えたんでしょ？凄い身体能力なのね」

「そうですね。イブキのボディを破壊する程でしたね」

なんだ、今更か。

「まあ戦えたと言っても、アイツは本気なんか出していなかったがな。私が表に出てきたら身体能力が格段に上がる。だが譜術が物凄く弱い。反面、テアは譜術は最強だが身体能力がとてつもなく低い。」

「

「なる程、そうだったのですか。……………そのおかげでイブキが…  
(ボン)」

「?…私はもう上がるぞ。ちょっと用が有るからな」

「あ、そうなの?それじゃあね、テラ。テアちゃん謝っといてね?」

「…わかった」

はあ…。コイツらと一緒に居るのはしんどそうだな…。

- テラ said out -

- コスモス said -

テラはさっさと風呂場から出て行きました。

用とは一体何なのでしょう？

「……………世界って広いわね……………」

ユリアがいきなりそんな事を言い出しました。

「……………そうですね……………」

私はそれに答えました。

「……………」

それから少しの間、沈黙が続きました。聞こえるのはライオンの口から出る湯が、湯船に落ちる音だけでした。

「……………ねえ……………」

「…なんですか？」

ユリアが沈黙を破り、話し掛けて来ました。

「……………後二、三人は作ってもいいって……………本当？」

「……………聞いていたのですね？」

「……………うん……………」

「……………そうですね。聞かれましたか。ですが別に問題はありませんけどね。」

「……………本当ですよ」

「……そっか」

どことなく、ユリアは笑顔を浮かべました。

「……その想いを彼に伝えなさい」

「……えっ？」

「きつと…彼なら受け入れてくれますよ」

「え、でもコスモスは…」

「私が正妻なら良いのですよ」

これだけは譲れませんね。

「……ふふっ！そうだったわね。……ありがとう、コスモス」

「……ッ!?!」

・ ・ ・  
ありがとう、コスモス  
・ ・ ・

「……シオン……」

「え?何か言った?」

「あ……いえ……。何でもありません」

「……?」

「はい。……ほら、今すぐ行きなさい。おそらく、テラが言っていた用とはこれと同じですよ」

「ええ!?!嘘!?!早くしないと!?!ありがとう、コスモス!?!」

そう言い残すと、ユリアは大慌てで出て行きました。

「……………」

シオン……………。

私は一瞬、ユリアがシオンに見えてしまった…。私はそれ程心が弱っているのでしょうか……………。

「……………ふふ……………これではいけませんね」

私はイブキと共にローレライを救い出して、帰るのですから。

「こんな所で挫けてはいけませんね」

私はしばらく湯に浸かっていました。





ピー！

「私だ、入るぞ」

「…そんな事思ってた時がありました…」

テラがいきなり部屋に入って来た。

はあ、一体なんなんだよ？

「何の用だ？」

「……いや何、ちょっと……な……」

「…？」

なんだ？何か様子がおかしいな。

「なんだ？誰かに化け物って言われたか？」

「それは無い。むしろ友好的だった」

「まあそうだろう。この連中は俺が一から鍛え直したからな。心も綺麗になってるだろう」

最初はみんな腐ってたからな。今とは全く違うな。

「……そうか。それより、話がある」

「ん？なんだ？」

テラが真剣な顔になり此方を見つめた。

「お前、あの時私をただの人間で女だって、言ったよな？」

「あつああ、言った」

何で、今頃そんな話しを？

「嬉しかった…。私が…いや、テアがこうなってしまうてから初めて言われたんだ…」

「ん？…テア…が？」

「ああ…。こうなったのは私が…テラがテアに入ってしまったからなんだ…」

どういう事だ？テラがテアに入った？なら、元々二人は別々に生きて？

「まあ今はいい。それで本題何だが……」

「？まだ本題じゃ無かったのか？」

「違う。……その……／／／／／／／／／／」

……何で赤くなってるの？逆上せた？

「その……／／／／／／私と「ちょっと待ったああああ！！」ツ！？  
なんだ！？」

「ハア……ハア……ハア……」

「ゆっユリア……  
一体どうしたんだ？」

テラが何かを言おうとしている時、それを遮る様に飛び込んできた。

「テラ……！ちょっとこっち来て……！」

「嫌だ。今大事な「いいから!!」「おい!引つ張るな!!!」

ユリアはテラを部屋の隅まで引つ張って行った。

「テラ、あなたイブキに告白しようとしたわね?」

「な!?!何故バレた!?!」

「やっぱり…。コスモスの勘が当たったわね」

「アイツか…?」

「別にダメって言うてるんじゃないわよ」

「……………何?」

「ただそれに私も混ぜて欲しいだけ」

「……………ほっ」

……何だ？何をひそひそ話してんだ？……まさか俺を苛める計画！  
？……まさか。

「「イブキ！」」

「は、はい……！」

思わず敬語になってしまった。

「私と……恋人になって/なってくれ……！」

「……はあ……！！……？」

はあ！？ちよ！？ええ！？  
恋人！？何でいきなり！？

「ちょ！？いきなり何を！？」

「私、五年前からずっと好きだったの！！！！／／／／」

「なっ！？／／／／」

五年前！？じゃあ、最初から！？

「私は人間と言ってくれた時からだ！！！！／／／／」

こっちも！？

「い、いや……。嬉しいけど…。俺にはコスモスが…」

「そのコスモスが良いつて言ったの！！！！／／／／」

「ええ！？」



なっ何で！？もしかして捨てられた！？

「コスモスが『私が正妻なら後二、三人作っても良い』と言っただ！！！！」

「何言っちゃってんの！？」

お前はハーレムを作れと言ってるのか！？

「そっそんな、いきなり言われても…」

「答えてあげなさい、イブキ」

「ッ！コスモス！！」

コスモスが部屋に入って来た。

答えるって、そんな…。

「……………」

「…………… / / / /」

俺は……………

ユリアが好きだ。

勿論、コスモスを愛している。  
だが、ユリアと触れ合っていると、段々楽しくなってきた。それは最初は友として楽しかったが、それが延長していき、いつしか

一人の女と見ていた。だが、それでコスモスへの愛が薄くなった訳ではない。むしろ、益々愛している。

テラは……まだ逢ったばかりだから何とも言えない。テアもだ。しかし……俺はこの二人を何か特別に思っている。それが多分恋なんだろう。まだちゃんと理解出来ていないだけだろう。一目惚れなんてしたこと無いからな。

「……………フツ、我ながら軟派な男だな……」

「……………え？」

「コスモスだけでなく、他にも愛してしまうなんてな……」

「ツーじゃあ！？／／／／／」

「返事は！？／／／／／」

「……………YES、だ。これから宜しくな？ユリア、テラ、テア」

「……………ツ！ええ！！／／／／／」

「うん……！！！！」

ガバツ！！！！

二人がいきなり抱きついて来た。いつの間にかテアが出て来てるし。

「いつ変わったんだ？」

「YESって言った時、テアが変わってくれた……！！！！」

「……そうか」

優しいな、テアは。

「良かったですね、二人とも……」

「ええ……！！！！」

「テラも喜んでるよ!!! / / / /」

「……本当に良かったのか？ コスモス」

「何を今更言っているのですか。…ちゃんと私を正妻にしてくれたら良いのです」

「……そっか」

俺は、こんなにも幸せで良いのだろうか？ ……良いよな？ こればっかりは譲れない。

「やっ…」

ガチャン

「………コスモス？ 何故部屋の鍵を閉めるんだ？」

「決まっているじゃないですか」

……何か……いやな予感が……。

「今は夜です。そして、一つの部屋に恋人が集まっている。……そうしたら、やる事は一つです」

「……？……ッ！？／／／／／」

……さてよ……さてよ……さてよ……！……ちょっと待った！……何か！？  
アレをしると！？……三人を相手に！？……む」

「あなたに拒否権は有りません」

「やっぱりですか……！……！……！」

「あ、あの…イブキ？／／／／／」

「な、なんだ？」

ユリアが顔を赤くしてこっちを向いてきた。

そりゃいきなりは嫌だよな。

「あっあの…／／／／私…初めてだから…／／／優しくしてね  
？／／／／」

「そっちかー！ー！！」

「その…／／／私も…／／／」

チクシヨウ！！お前ら可愛過ぎて怒れない！！

「さあ、準備はいいですね？」

「「ええ!!／＼うん!!」」

ああ…、俺…明日まで生きてられるかな？

「ちよっ!!!!?無理だって!!?ちよ、アアーーーー!!!!!?!?」

俺はこの後、日が出るまで美味しくいただき、いただかれたとさ。

おまけ



「ふう、しんじく……」

「よし、テラ、交代」

「……………え？」

「フッフッフッ！テラとは記憶を共有するが何も感じ無いのでな。  
……………相手してもらおうぞ」

「ウソーン……………」

アアアアアアア……………！！



### 設定その3 (前書き)

後々変化するかも。

### 設定その3

名前：テア

性別：女

髪：金髪のロング

目：金色

身長：163

服装：黒を基調としたメイド服

武器：譜術

性格：とても優しく、世話をする事が大好き。少し天然。守ってあげたくなる女の子。

好きなもの：お世話、家事、子供、家族、甘い者、メイド。

嫌いなもの：怖いもの、高い場所、運動、一人で居る事。

備考：とある森でひっそりと暮らしていた少女。イブキとコスモスに出会い、保護され、今では恋人の一人。しかし、初めてメイドを見た時、運命を感じ、恋人でありながら進んでメイドの仕事をする。実は、ある事情によりテラという人格があり、入れ替わる事が出来る。それに連なり、狐耳や尻尾や牙が生えたり、爪が鋭くなったり、獣目になる事が出来る。尚、牙や爪は怒り狂った時にしか出さず、尻尾や耳だけを生やす事が多い。その外見はとても可愛い。普段は生やしていない。

譜術の天才で、無詠唱でもジェイドの本気の一步手前の威力であるが、身体能力はもの凄く低い。

魔物と話す事ができ、魔物との戦闘では躊躇してしまう。人の場合も仕方ないと割り切っているが、心を痛める。

名前：テラ

性格：女

髪：金髪のロング

目：金色

身長：175

服装：黒を基調とした動きやすい服（詳しくは本編で）

武器：体術

性格：クールで気が強い。家族思い。

好きなもの：子供、家族、可愛いもの。

嫌いなもの：面倒な事、家族を苛める奴。

備考：テアの中にいる人格。入れ替わると、テアは子供っぽい容姿に対しテラは大人の女性になり、身長も伸びる。身体能力が格段に上がり、イブキと渡り合える程。しかし譜術は扱えるが、一般兵以下。

テアがメイド服を着るのでテラになった時に何時も着替えたがる。初めてテアとテラを認めてくれたイブキに惚れ、今では恋人。

過去に狐の理由でテアが化け物と罵られた事があり、それは自分の

せいだと言い、テアを守ってきた。それに連なり、家族を大切にし、家族と認められた者には優しく接する。

テアと同じく、魔物と話せるが、障害となるなら容赦しない。

## 6年後（前書き）

すみません！！テストが終わっていざ書こうとしたらもう更新日1  
日前で、時間がありませんでした！！誠に申し訳ありませんでした  
！！



## 6年後

どうも。あの日、有り得ない様な告白で恋人が四人になった、イブキ・ヤマトです。いや、もう恋人じゃないか。

「父さーん!?!」

「ん?どうした、レオ?」

「フレイル義父さんが、父さんを探してたよ!」

「そうか、ありがとな」

「うん!」

もうお分かりだろう。俺はもう四人と結婚し、ユリアとの間に子供が出来た。名前はレオイラルド・アスト・フェンデ。何故ヤマトではなくフェンデになっているのかと言うと、フレイルの養子にした

からだ。実は、未だにユリアを狙う屑共いてまだ安心できない状態なのだ。そんな時、ユリアとの子供であるレオの事が知れ、狙われる可能性が高い。だから、カムフラージュとして戸籍上フェンデ家になっている。ああ、そうそう。フレイルとヴァルターも結婚している。どちらも美人さんだった。結婚と言えばサザンクロスだが、ユリアが恋人になった事を手紙で伝えたらしく、全てが終わった後家に帰ったら、大泣きしながら「よぐぞ！よぐぞ我が息子に」なっでくれだ！！これぼどうれじいごどばない！！

！と、俺に抱き付いて来た。あの時はマジびびった。でもまだその時は結婚していなかったから、それを伝えるとサザンクロスは「そうか！なら明日やれば良い！！」と言いやがった。翌日、マジでやりやがった。まあ、人数は身内しか居なかったがな。それからは隠居。教団を全てフレイルに任し、コスモス、ユリア、テア、テラの四人とイチヤイチャし、レオが産まれて早六年。もう俺は29歳。しかし、不老なのでコスモス共に外見に変わりなし。なんと驚くことにユリアもなし。寧ろ美に磨きが掛かった。テアとテラは、なんとあのお陰で寿命がどれくらい長いらしく、これまた変わりない。

「父さん、どうしたの？」

「ん？いやいや、何でもなしさ」

「そっか！」

いけない、いけない。どうやら思い出しに浸り過ぎていた様だ。さて、フレイルの所に行きますか。

「フレイル、どうしたんだ？」

「兄上……」

俺はフレイルの家、あっ、家はもう別々だからな？

俺と妻達はお馴染みの家、フレイルとヴァルターはホドの中心部にある、ドデカイ豪邸だ。そこにやって来た。

「どうした？元気がないぞ？」

フレイルの目元はクマがあり、酷かった。

「兄上…お願いg」断る「まだ何も言っていない!!」

俺はフレイルが何かを頼もつとした瞬間、全てを悟った。

「だから、俺はもう教団には戻らん」

「そこを何とか!!兄上が居なくなってから仕事の量が一気に増えたんだ!!せめて簡単な仕事だけでも!!」

「はぁ・・・フレイル、お前にはレオを養子にしてくれたり、色々と匿ってくれたり之恩があるが、俺は戻りたくない」

「何故!?!」

「コスモス達とイチャイチャしたい」

「こっちだってエレンとイチャイチャしたいわ!!なのに兄上だけ何時も何時も!!」

エレン・イルファ・フェンデ。フレイルの妻だ。

「このままじゃ愛想つかれて捨てられてしまう…それだけは絶対に嫌だ!!」

「……はあ、わかったわかった。当分は俺も仕事をしてやる。…つたく、そんな事聞かされたら断れないだろうが」

「ッ!!ありがとう、兄上!!」

はあ…言ったからにはちゃんとやらないとな。……アイツら何ていうだろうな。

「あなた、どうなったの？」

俺が考えていると、長い黒髪の美しい女性がやって来た。それはエレンだった。

「エレン！喜べ！！兄上が承諾してくれたぞ！！」

「まあ！！本当なの！？ありがとうございます、義兄様！！」

「いや何、大したことじゃない。当分はフレイルの時間を作ってるから、楽しめばいい」

「そうします！レオも入れて楽しみます！！」

「よし！今まで一緒に居れなかった分、楽しく過ごそう！！」

「はい！！」

…幸せそうだな。弟と妹が喜ぶ姿は良いもんだ。

「じゃあ、俺は帰る。明日から仕事に就く」

「ああ！ありがとう、兄上！今、馬車を用意させるから」

「助かる」

俺はフレイルの家を出て行った。

.....

「ただいま」

「おかえり父さん!!」

俺が家に帰ると、レオが飛びついて来た。本当はここではなく、フレイルの家に居るべきなんだがな。

「ただいまレオ。いい子にしてたか？」

「うん！あのね！コスモス母さんがね、ケーキを作ってくれたんだ」

「え…どんな色だった？」

「黒！！」

……よく食べたな、あの痛い料理を……。  
コスモスのあの料理は未だに健在。と言うより、さらに刺激が増した。それをわずか6歳で食べてしまうとは……。恐るべし、レオ。

「父さんの分もあるよ！」

「そうか。なら、早く食べたいな」

「じゃあ早く行こう！」

レオは俺の手を引っ張り、リビングへと向かった。



リビングに着くと、コスモスとユリアがお茶を飲みながら喋っていた。

「おかえりなさい、イブキ」

「おかえり」

「ただいま。ケーキ作ったんだって？俺にもくれよ」

「いいですよ。テアー！ケーキとお茶をお願いします！」

「はい！わかったー！」

コスモスは大きな声でテアを呼んだ。するとテアは、ケーキとお茶をすぐに運んで来た。……メイド服で。

「……まだそれ着てんの？」

「え〜？いいじゃない！好きなんだもん！」

「そうよ。とっても可愛いじゃない」

「…妻がメイド服着て、メイドの仕事するって……何かシユール」

そう、テアはメイド魂に目覚めてしまった。元々そうだった事が好きだったらしく、フレイルの邸に居たメイドを見た瞬間「私もメイドやる！ってかやらせて！」っと、言いだしてからずっとこうだ。しかも、可愛い物好きなユリアが大賛成をし、自分で作ったメイド服を着させている。因みに、テラは嫌がっている様だ。

「まあ、いいか。いただきます……ッ!？」

キタキタキタキタキタ！……この刺激！……この辛さ！……そして何故か出てくる最高級の甘味と美味さ！……やはり最高！……

「相変わらず美味しいな」

「ありがとうございます」

「ねえ、フレイルの用事って何だったの？」

俺がケーキを堪能していると、ユリアが聞いてきた。

「んあ？教団の仕事が多すぎるから、手伝ってくれってさ。それで引き受けた」

ピシッ！

「」「」「」

「.....」

あゝ、何かヤバい。そんな感じがする。

「そう.....私たちよりもフレイルもとい教団なのね.....」

「いや!!そんなことはない!!」

「やっぱりメイド服より教団服のほうがいいんだ・・・」

「それは関係ないだろう!？」

「.....」

「お願い!!なんか喋って!!黙って睨む方が怖いから!!」

この三人、結婚してからますます怖くなった。テアは打ち解けた分怖さが反比例の如く上がり、ユリアは笑みが過去と比べさらに黒くなり、コスモスはただでさえ鋭く冷たい視線がよりパワーアップした。

「仕方ないだろ...。フレイルとエレンとレオの時間を作ってやらな  
いといけないんだし...」

可哀想じゃん。

「……まあ、そうね」

「やっぱりメイド服だよね!？」

「さすがはイブキですね。優しいですね」

テア、お前はズレている。

「父さん、仕事行っちゃうの?」

レオが聞いてきた。 . . . ってか、よくさっきのに耐えたな。き  
つと大物になるわ。

「まあな。でもちゃんと会えるわ」

「本当?」

「ああ。だからエレン義母さんとちゃんといい子にしとくんた。そしたらまた俺達と会えるさ。わかった？」

「うん！」

いい子だ。レオ、頼むから母さん達みたいに怖くならないでくれよ。

「……そういえば、サザンクロスはどうした？」

「……部屋に籠りっぱなし」

サザンクロスは最近、自室に籠りっぱなしだ。どうやら何かの研究をしている様だ。部屋から出てくるのは、飯の時からトイレの時くらいだ。何を研究しているのか聞いても、何も答えてくれない。

「またか……。一体何やってんだ？」

「さあ？でもどうやら第七音素の研究みたいよ？」

「うん。なんか部屋から異様に音素を感じるもん」

ホント、何やってんだ？研究するのはいいが、心配をかけさせないでほしい。

ボタンー！

「ついに完成したぞー！ー！」

「うおー！ー？なんだ！？」

「あーおじいちゃんー！」

サザンクロスがいきなりドアを開けてやってきた。

「どうしたのですか？」

「ウム！コスモスよ、よくぞ聞いてくれた！」

サザンクロスは待つてましたと言わんばかりに笑顔になった。

「ついに……ついに完成したのだ！！」

「何が？」

「ローレライと何時、何所でも交信できる装置だ！！！！」

「はあ！？？」

マジで！？？よく出来たな！？？

「でもそれなら私の大譜歌で……」



確かに、ユリア譜歌でローレライをたまに召喚出来るな。

「それでは何時出来るかわからん。だがこれは何時でも出来るのだ！詳細は教えんがな。しかし……」

「しかし？」

「……一度しか使えん」

「テア。やっぱりメイド服っていいな」

「でしょ！？やっとわかってくれたー！！」

「コラ！無視をするな！」

だって一度だけだろ？それなら譜歌の方がよくな？

「そもそも何で交信すんだ？ 必要ないだろう」

ましてや一度きりなんて……意味あんのか？

「……今はまだお前たちには言えん」

サザンクロスは真剣な顔になり、呟いた。

「……サザンクロス？」

「ユリア。私は夕食はいらさないから、すんだら一人で私の部屋に来なさい」

「え？……わかりました」

ユリアにそう伝えた後、部屋に戻っていった。

この日、ユリアが夕食をすまし部屋に行くまで、誰もサザンクロス  
の姿を見なかった。

## 6年後（後書き）

過去編もそろそろ中盤が終わりそうです。

これからも頑張りますので、応援宜しくお願いします。

## 別れ（前書き）

今回で創西暦時代編は終わりです。

尚、この小説は私のオリジナルなので、創西暦時代での時間軸は公  
式と違います。今更ですが…。

それではどうぞ！

別れ

サザンクロスの研究が完成してから数日、今度はユリアまで様子がおかしくなった。何か思いつめた様な顔だ。

俺がどうしたのか聞いても、言葉を濁すだけだった。一体何だっただんだ？

そして数日後……それは起こった。

サザンクロスが倒れた。

医者に診せても原因は分からず、悪化の一途をたどっていった。

もう今ではベッドから起き上がる事も出来なくなった。

ある日、俺はユリアにサザンクロスが呼んでいると聞き、ユリアと一緒に向かった。

「サザンクロス、どうした？」

「ああ…実はな…お前に…言わなければならない事がある…」

サザンクロスは弱々しい声で喋った。

「何だ？」

「まず…最初に…私はもう…死ぬ…」

「ッ！？…何を言い出すんだ。絶対に元気になるぞ」

「…無理なのだよ」

「何故言いきれる！？」

俺はつい怒鳴ってしまった。

「…悪い」

「いいのだ……。私の死は……預言に……読まれている」

「なっ……ウソだろ……」

そんな……じゃあ、今までお前は……自分の死を分かっておきながら、  
変えようとしなかったのか？

「何で言わなかった？言ってくれたら何か出来ただろう？」

「無理だ……。原因は分からず……ただ死ぬとしか読まれていないのだ  
よ」

「そんな……」

違う……。何もしなかったんじゃない……何も出来なかったんだ。

俺はもうどうしようも無いと悟った瞬間、涙が溢れ出てきた。

「泣くな……まだ話は終わってないのだぞ」



「……ああ」

しかし、涙は出続ける。  
無理も無い。今まで家族として接してきた人が、死ぬのだ。悲しみはでかい。

「それでだな…私はふと思った。…私はお前たちに何もやれなかったのでは無いのかと」

「そんなこと…ねえよ」

いっばい貰ったさ。思い出を。心に沢山残してくれたじゃないか。

「私はお前達に何か残したい。…だが何がいい？こんな研究しか能のない馬鹿がやれるものなど何が有る？…私は考えた末、ある事を思いついた」

サザンクロスは興奮した様に語りだした。

「イブキ。お前は永い年月を生きる。コスモスもテアもテラも……。だがユリアは？ユリアだけ一緒に居られない。私はそれが嫌だ。お前達の幸せを終わらしたくゴホオ！ゴホ！ゴホ！」

「おい！？しつかりしろ！！もう喋るな！」

「ゴホツ！…はあ…はあ…。だから私は、ユリアをお前達とずっと一緒に生きて生ける方法を探し続けた…」

そんなの無理だ。余程の例外が無い限り、人は人の理を抜け出せない。

「そしてついに見つけたのだ」

見つけた？そんな馬鹿な！？有る筈が…待てよ…まさか…！？

「ローレライだ。…イブキとコスモスを蘇らせ、尚且つ永い年月の寿命を与えた」

だから…あの装置を作ったのか。

「だから私はローレライの研究を再開し、対話出来る装置を完成させた」

だがローレライに理由があったから、俺達は蘇ったんだ。理由も無いのに力を与えてくれる訳がない。

「そして私はローレライとの交渉の末…：願いを聞き入れてくれた…」

「馬鹿な！？そんな事許される筈がない！！」

「勿論、タダではない。代償を払う事になる」

代償？…：おいまさか！？

「お前まさか助からないからと言って、自分の命を糧にするとか言うんじゃないかねえだろうな!？」

「……………それもある」

「ふざけんな!! そんな事してユリアが喜ぶとでも思ってたのか!」  
「?」

「……………」

何とか言えよ……………くそ……………。

「……………それもいったな? 後は何だ?」

「……………代償と言うより、条件なのだが……………ユリア自身が強い意志で望み、譜歌を歌う事だ……………」

ユリアの強い意志……か。

「ユリア……お前、知っていたんだな？」

俺は後ろにいたユリアに聞いた。

「……ええ」

そうか……。だからユリアは……。

「ユリア……答えは決まったのか？」  
「……………」

ユリアは黙ったまま俺の顔を見た。

……………ユリア……お前……………。

「…イブキ。私はあなたを愛しているわ」

「……………」

「ずっと一緒に居たい。でも…私は後何十年生きれるのか分からない。でもあなたは、後何千年と生きるわ…」

「そう…だな」

「私はあなたを遺して先に逝きたくない……………」

「……………駄目だ」

「……………どうして?」

駄目なんだ…。

永く生きると言う事は、数え切れない別れと悲しみがある。そんな苦しみをユリアまでに与える訳にはいかない。

「お前を苦しめる訳にはいかない」

「そんなの、コスモス達も一緒よ」

「それは・・・」

そうだ：ユリアが苦しむのなら、あいつ等も一緒だ。結局は俺と居る事は苦しむ事なんだ。

「それは違うわ」

「え？」

ユリアは俺の心中を察したのか、否定した。

「あなたと一緒に居ても苦しみななんて感じないわよ」

ユリアは俺に近寄り、優しく抱きしめてきた。

「ほら、こつして寄り添っていれば暖かくて安らぐでしょ？」

「……………ああ」

「どんな苦しみも悲しみも愛してる人がそばに居れば、必ず乗り越えられる……」

どんな苦しみも……………どんな悲しみも……………。

「だから私達はあなたと一緒に居たいのよ……」

「……………一緒に……………居て……………くれるのか……？」

「あなたがそれを望めば、私達は居るわ」

「ユリア……………」

俺はユリアを力強く、されど優しく抱きしめた。  
ありがとう。



そう感謝をこめて。

「……決心してくれたか」

「ええ。私は、イブキと共に生きます」

「そうか……それは良かった……。これで、心置きなく逝ける……」

「おい、サザンクロス？」

サザンクロスは先ほどまでの威勢が無くなってきた。まるで、どんどん力が無くなって行く様に……。

「おい、しっかりしろー!!」

その命の灯が消えていく……。

「まだ逝くな！！もっと一緒にいろ！！ユリア！！コスモスとテアを呼んでくれ！！」

俺はユリアに二人を呼んでくるように頼んだ。

認めたくはないが、サザンクロスの死を悟ってしまった。

「……もう……充分だ……。ありがとう……。こんなに幸せ者にしてくれて……」

「まだ何もやって無い！！まだ父さんとも呼んでない！！！」

「……父……とな？……ふははは……嬉しいぞ……息子よ……」

サザンクロスは、満面の笑みで喜んだ。  
たった一言の言葉で……。

「サザンクロス！」

「サザンクロスさん！」

コスモス達が来た。皆、泣きそうな顔だった。

「おお……来て……くれたのか……。最期まで……幸せなことだ……」

「父さん……死なないでくれ……」

俺は懇願した。

それが叶わない事でも、俺は懇願し続けた。

「先生……いえ、お父さん……」

「……お父様」

「父様……」

「……嬉しい事だ……何時の間にか……息子と娘達が出来ていたのだな……」

サザンクロス……父さんはこれ以上無いくらいに、しかし弱々しい  
笑みを浮かべた。

「皆……ちゃんと幸せに生きるのだぞ……」

「……ああ」

「……ええ」

「……はい」

「……うん……。テラも分かったって……」

俺達は全員泣いていた。

しかし、俺達は笑顔だった。

最後に泣き顔は見せなくなかった。

「……今まで……ありがとう……と……う……」

B D 2 7 1 8 ノームデーカン 3 2 の日

偉大なる博士で最愛の父サザンクロスは、その命を終えた。

**果たせなかった決意（前書き）**

皆様、明けましておめでとうございます！

今年も頑張って書かして貰いますので、よろしくお願いします！！

## 果たせなかった決意

ND2000

もうあれから二千年以上経った。

フレイルもヴァルターもレオも……皆死んだ。その後出来た友人も死んだ。

正直辛かった。

何度も心が折れかけた。

死のうと思った事もあった。

だけど、俺達はそれでも立ち続けた。

隣には愛する人達がいるから。

342

今までも戦争はあった。

ユリアの預言通りに事は起こった。

何度も止めようとした。

しかし出来なかった。

唯一出来たのは、出来るだけ多くの人を生かす事だけだった。

こんな事で俺は目的を果たせるのだろうか。

ND2002

栄光を掴む者、自らの生まれた島を滅ぼす。

名をホドと称す。この後、季節が一巡りするまで、キムラスカとマルクトの間に戦乱が続くであろう。

ユリアが読んだ預言。

栄光を掴む者、ヴァンデスデルカ。  
そいつがホドを滅ぼす。

俺は何としてでもこれを回避する。

だから俺はヴァンが生まれてからずっと見てきた。勿論、誰にも見  
つからないように。

ヴァンは頭脳良し、剣術良し、性格良し、まさに理想の子だった。

こんな子がホドを滅ぼすなんて到底思えない。

となると、誰かがヴァンを利用し滅ぼすと考えた方が良さだろう。

だから俺は、ヴァンが有る程度成長した頃に、家庭教師として傍に  
着いた。

何故簡単に出来たと言うと、ヴァンの母、俺とユリアの子孫、ファ  
ルミリアリカ・サティス・フェンデ、彼女が俺達の正体を知ってい  
るからだ。

彼女が十五歳の頃、俺達は顔見知り程度の関係だったのだが、徐  
々に親密になって行き、家族全員で色々な行事をするにまで至った。  
そんな時、俺とコスモス達は昔話をしていたんだが、そこを会いに  
来た彼女が偶然聞いてしまい、洗いざらい話したのだ。

ファルミリアリカ…ミリアはそれを全く疑いもせず信じてくれた。  
誰にも言わないとも約束してくれた。……その代わり何故が一週間  
デートの約束をさせられたが。

それからミリアは結婚し、ヴァンを生みもう二十七歳。しかし、ユ  
リアの遺伝なのか、老いを知らない。



兎に角、彼女のおかげでヴァンの傍に居る事ご出来た。因みに、結婚相手もこの事は知っている。

「先生！稽古の時間ですよ！」

「ん？もうそんな時間か…。わかった、先に中庭に言っててくれ。準備してすぐに向かうから」

「はい！」

あ、先生と言うのは俺な。家庭教師の筈なんだが、ヴァンの奴め、俺が剣を使える事を見抜いて練習相手になってくれてくれて言いだしたんだ。

まあ、アルバート流はフレイルと一緒に完成さし、完璧に極めたから良いけどな。

だから俺は徹底的にヴァンに叩き込む事にした。おそらく、この時ヴァンは軽い気持ちで俺に頼んだ事を後悔しただろうな。

「ふふっ…家庭教師が剣術師範になっちゃてるわね」

「ああ、そのおかげで頭と体が一日中働きまくってるよ」

「ならやめる?」

「冗談。そんな事出来るかよ。と言うより、寧ろ楽しいさ」

「それは良かった。あの子もあなたに懐いてるし、やめて貰ったら困るわ」

「でも、何時かは別れなくちゃな。正体がばれてしまう」

ずっと一緒にいれば俺が歳をとらない事に気づがつき、話さなくてはならない。

「別に良いじゃない。もう私達はばれてるんだし。寧ろ何で隠してるのが分からないわ」

「…もしユリアが生きている事が分かったら、ユリアを手に入れる為にまた争いが起きるかもしれないからだ。そうでなくても、強引に祭り上げられて、縛られた人生を送る事になる」

「ああ、成程ね」

そんな事は絶対にさせない。何故なら、俺との時間が無くなるからだ！イチャイチャする時間が！

「いいなー、ユリア様は。こんなに愛されて」

「……おい、何で腕を絡めてくる」

「気にしない、気にしない」

「いや、お前な、結婚してるだろうが」

「だから？」

「だからって…普通夫がいたらこんな事してはいかんだろっ」

「こんな事って、なあに？」

ムギユウウ

ちよいちよいちよいちよい！？胸！胸を押しつけるな！そのでっかいメロンを付けるな！

「顔真っ赤！もう！イブキのエツチ」

「なっ！？／＼／＼お前な……」

「ふふっ…大丈夫よ。これ位なら夫も許してくれてるわ」

いや、許すなよ。

「それに、第一元々私の好きな人はあなただっただんだから。でもあなたが私の先祖だから、この恋を諦めて今の夫と結婚したんだから、これ位我慢しなさい」

………何で俺が怒られてんだ？俺は無実だ。

「それに、諦めたって言っても、まだ気持ちは変わってないのよ」

「……それ、浮気」

「まだ何もしてないから無効」

まだって…じゃあ何時か何かすんの？怖いな…。

「夫の事だっただって愛してるから大丈夫よ」

何がだよ…。

「兎に角そろそろ離してくれ。ヴァンをあまり待たせるわけにはいかない」

「む…まあいいわ」

ふう… やつと解放か。 理性との長い戦いだつた。

「じゃあ行つてらっしゃい… チュ」

「なっ!?!?!?!」

こゝこゝこいつ、頬にき、きききキスを!?

「だからそう言う事はやめろって! 誤解されたらどうすんだ!?!」

「あらゝ? 私はただ挨拶をしただけよ?」

「……もういい! 兎に角もう行く!」

こいつといたらいつつも振り回されてばかりだ!

しかし俺の顔は笑みがこぼれていた。

この幸せをもっと噛み締めていたら良かったと、後に後悔する事に

なるとは、この時の俺は知る由も無かった。

ND2002

この年にホドが滅ぼされる。

俺はいつも以上にヴァンの傍に付いている。

ヴァンを守る事が理由だが、もう一つ理由が出来た。

ヴァンの父、つまりミアの夫が戦死した。

俺はミアとヴァンの心の支えとしてやっていかなければならない。

「……………先生」

「どっした、ヴァン」

「先生は……居なくならないですよね？」

「……ああ。ずっと一緒に居てやるさ。ミアリアもコスモス達も」

絶対に守ってやるさ……必ずな……。

数週間後、世間は不安で満ちていた。

キムラスカとの戦争が始まるかもしれないと言う噂が流れ始めた。

「……そろそろか」

「何がですか？」

「ホドが滅ぶ日だ。恐らく、キムラスカが何かをやって来るだろう」

「…ヴァン、ですか？」

「そつだ。…コスモス」



「はい」

「お前はこれからダアトに行ってくれ」

「…？何故ですか？」

「そこに俺の信用の置ける男がいる。そいつに船を何隻も貸して貰って来てくれ」

「…住民の避難…の為ですか？」

「ああ…やってくれるか？」

「…任してください」

「ありがとう。ああ、それと、テアも連れて行ってくれ。あいつは案外キレ者だからな」

「わかりました」

コスモスはすぐにテアを連れてダートへ向かった。  
後は俺がヴァンとミリアを守ればホドが滅ぶ事は無い。これで守れる。

「イブキ」

「ん？どうしたユリア」

「さっき、海を見てきたんだけど、一般の船が数隻海を渡ってるだけ、軍艦は何所にも無かったは」

「そうか……」

と言う事は、すぐに此処に来る事は無いな。

「……今日は疲れたな」

「今日はじゃなくて、今日もでしょ？何時も寝て無いんだから」

「そうだったけ？」

「そうよ……。まだ夕方だけでももう休みなさい」

「いや、もう少し」や・す・み・な・さ・い「……分かった」

ダメだな。こうなったユリアは誰にも止められない。

「……そういや、今日何かガルディオス家で何かやってたな」

「ああ、あそこの長男の誕生日らしいわよ」

「そうか…ヴァルターに似ていたな」

「ええ、そうね」

「じゃあ、お休み」

「お休み」

この時、まだ起きていたら…ちゃんと休養を取っていたら…救えた  
かもしれない…。大切な人を…。

キムラ……め……ぞ……

なん……だ……？

にげ……だ……

じる……せい……

「イブキ……！」

「ッ！！！！なんだ！！？」

「キムラスカが宣戦布告を！！それと同時に此処へ攻めて来たわ！！！！」

「何！！！？そんな馬鹿な！！！？外には一般の……まさか！！？」

まさかそれに乗っていたのか！！！？くそ！！ヤラれた！！

「ユリア！！お前は住民を先導して山を登れ！！俺はミリアとヴァンを！！！」

「わかったわ！！！」

だがユリアだけでは心もとない……あいつらか……。

俺はエーテルをコアに溜めた。そして、あいつらを呼んだ。

「来い…エルデカイザーズ…!!」

バアアアアン…!!

呼んだのは、エルデカイザー、エルデカイザー・烈、エルデカイザー・ブラック、エルデカイザーだ。

「カイザーと烈はユリアと共に！ブラックとは俺と共にキムラスカへ攻撃だ！」

「<命は？>」

が聞いた。

そんなもん…。

「気にしていたら、ヤラれる…」

「< 御意 >」

「行くぞ!!」

俺はフェンデ家を目指して走った。

「わあああ!!? 助けてくれ!!」

「死ね!!」

ズバツ!!

「……?」

「おい! 大丈夫か!」

「え？・・・ヤマトさん!？」

「この先の山に登れ!! 兎に角走れ!!!!」

「は、はい!!!!」

畜生…もう此処まで来てやがる…。

周囲に目をやると、殺された住民があちらこちらにいる。

「チクシヨオオオ!!!!」

シュイン!!

俺は両腕にガトリングを転送し、トリガーを引いた。





「くそっ！ヴァン……！ミリア……！何所だ……！」

「う……イブ……キ……」

「ッ……！ミリア……！」

ミリアは床に倒れていた。ボロボロで。

「ミリア……！しっかりしろ……！エーテルドライブ・メディカレスト……！」

俺はすぐさま回復エーテルを使った。傷はどんどん癒えていった。しかし、お腹にいる赤ん坊が心配だ。

「ミリア……！何があった……！」

「マルクトの……兵が……ヴァンを無理やり……！」

マルクト……だと？何故マルクトが？まてよ？此処にはキムラスカ軍が多くいる。もしこれを殲滅出来たら……。

「くそつたれが……」

マルクトめ……ホドと一緒にキムラスカ軍を殲滅する気が！？

「ミリア、俺に掴まれ。ヴァンを助けに行くぞ」

「……ダメ……置いて行って」

「何を言っているんだ！？こんなところに置いて行けるか！！」

「私を連れて行ったら……足手まといよ……」

確かに、ミリアを担いで移動していたら反撃出来ないだろう。

「……わかった。来い……！」

バアアアン

俺は 在此処へ転送した。

「こいつを此処に置いて行く。 !ミリアを守ってくれ」

「 <御意>」

「ちゃんとヴァンを助けて来るからな」

俺はフェンデ家を後にした。

外の敵は最初に比べて減っていた。だが、それでも多い。

「どけ…屑共が!!」

俺は通る道にいる兵達の首を腕を胴を斬り落として言った。

「ヒイ!?助け!」

「誰が!!」

俺は命乞いする奴もいたが、聞く耳を持たずに斬った。

「あ…悪魔だ…」

誰かがそう言った。

今の俺は無意識の内に第一音素と黒いエーテルが体から溢れだしていた。

黒いエーテルは聞いた事が無いが、今はどうでもいい。

「ヴァン・・・何所だー！ー！！！」

何所なんだ！？…ん？あそこは……研究所？…そうか！？ホドを破壊するには何らかの装置が必要の筈だ！それを作れる場所はそこだけだ！

「くそ！間に合え！！」

俺は研究所へ向かった。

そして辿りつき、ドアを開けようとした瞬間…

カアッ！

研究所から光の柱が立った。

「うわあああああ！！？」

そして爆風で吹き飛ばされた。

「くそ……何が……あ……」

俺が目を開けて見たものは……

ホドが……俺達の思い出の故郷が……崩れていつている光景だった。

## 大切なもの（前書き）

申し訳ありません。

此方の諸事情により、更新する事が不可能な状況になり、手をつける事が出来ませんでした。

楽しみにしていた読者の皆さま、本当に申し訳ありませんでした。

どうか、これからも応援を宜しく願います。



## 大切なもの

俺が見た光景…それは破壊そのものだった。

いつも歩く道…いつも街の子供達と遊んであげていた広場…いつも通っていた気前のいい店…。

その全てが崩れ落ちていく…。

俺達の思い出の場所が…俺達の故郷が…。

「うそ……だ……」

守れなかった…皆を…守れなかった…。

「くそっ…決意したのに…約束したのに……チクシヨオオオオオオオ  
！……！！」

俺は泣き叫んだ。何も戻って来ないとわかっているのに、どうしようもないのに泣き叫んだ。

いや…だから泣き叫んだんだろう…。

「うう  
……」

「……？」

何かのうめき声が聞こえた。子供の声が……。

「……」

俺は耳を澄まし、声を拾おうとした。

「うう  
……うう  
……」

「ッ！？ヴァン！？ヴァンなのか！？」

ヴァンの声に似ていた。いや絶対にヴァンだ！！俺があいつの声を間違える筈が無い！！

俺は声が聞こえた方へと向かった。

「…ッ！ヴァン！…！」

いた。瓦礫の下敷きになりながらもしっかりと生きている状態で。

俺はヴァンに駆け寄り、瓦礫をエーテルで吹き飛ばし、ヴァンを助け出した。

「ヴァン！ヴァン！しっかりしろ…！」

「うう…イブキ…さん？」

ヴァンは俺の呼びかけにしっかりと答えてくれた。

「良かった…生きていてくれた…。痛い所は無いか？」

「あ……いえ……大きな怪我は……ッ！母上！母上は！？」

「大丈夫だ、俺の頼もしい仲間が守ってくれてる」

「……よかった……」

ヴァンは安心したのか、いったん落ち着いていた。しかし、危険なのは変わらない。いくらでもこの衝撃からミリアを守りきれてるのか分からない……。

「兎に角、ミリアの所へ行くぞ。走れるな？」

「はい！」

俺達は大急ぎで邸へと戻った。

邸は崩れ落ちていた。  
もはや邸の元型が無い程に。

「母……上……？」

ヴァンはこの光景に絶望した。

「……いやヴァン、ミリアは無事だ」

「えっ!？」

俺は大きな瓦礫の山の前に立った。

……ここだ。ここに とミリアがいる!!

「……!聞こえるか!？」

俺は山に向かって叫んだ。

「<…聞こえる。システムオールグリーン…>」

山からそう聞こえ少ししたら、山が動き出した。  
そして中から とそれに抱えられたミアリアが出てきた。

「母上！…！」

ヴァンはすぐさま駆け寄り、母の無事を確認した。

「ヴァン…！？ヴァン！」

ミアリアも気がつき、ヴァンの姿を見て、涙が出ていた。

「母上！…！」

ヴァンは母に抱きついた。ミアもヴァンを抱きしめる。

「良かった…っ！ヴァン…！」

「ミア、体は大丈夫か？」

「イブキ…ええ、あなたの力が効いたみたいよ。…ヴァンを助けてくれてありがとう」

「礼を言うのはまだだ。ここを離れないと。すぐに崩落が始まる」

「ッ！？…もう…無理なの？」

「…ああ」

もう何も出来ない。ホドを救ってやる事が出来ない。だからもう、せめて大切なものだけは守りたい！

「、お前飛べたよな？」

俺は目の前にいる に聞いた。

「<ウム、長距離は無理だが、この近辺なら飛べるだろう」

「なら俺達をあの上まで運んでくれ」

俺はユリアがいるであろう山を指した。そこへ行けば、ユリアの譜歌で崩落しても助かる事が出来る。

「<御意>」

が応え、俺達を腕に抱えようとした瞬間、大きな地響きが起こった。

「くっ！？何だ！？崩落の速度が！？」



同時に、ゆっくりと落ちていたホドが、いきなり速くなった。

「まさか！？もうデイバイディングラインを越えたのか！？」

デイバイディングライン……この外郭大地を浮かべる力を持つ磁場。それを超えたという事は、ホドは一気に魔界へ落ちる！！

「くそっ！！ヴァン！！譜歌だ！！譜歌を歌え！！」

俺はヴァンにそう言った。今この場で、ちゃんとした状態で譜歌を歌えるのはヴァンだけだ。

「え？」

「早くしろ！！このままじゃ全員死ぬぞ！！」

「ッ!…はい!」

ヴァンは譜歌を歌い始めた。

俺はエルデカイザーを全て戻した。このまま放置しておいたら、破壊されるだろうから。

俺はミリアを抱きかかえ、ヴァンの傍に近寄った。

そしてヴァンの譜歌が完成した瞬間……

ホドは魔界の海へと落ちた。

ズウウウウン!!!!!!

そして恐ろしい程大きい衝撃が、ホド全体を襲った。

「ぐおおおお！…！！？」

「うわあああ！…！！？」

「きゃあああああ！…！！？」

その衝撃にヴァンは耐えきれず、譜歌で作り出したドーム状のシールドが消えた。

「しまっ…！！？」

「くそっ…！！」

俺はミリアとヴァンを腕の中に入れ、瞬時にコアをフルドライブで起こした。

そして膨大な光を出し、俺達を包み込んだ。

イブキ s i d e a u t

ミリア side

ヴァンの譜歌が破られ、イブキが沢山の光を出してから、どのくらい経ったのだろうか？

しばらく続いた揺れもついさっき止んだ。

今は何かが稼働している様な音しか聞こえない。

イブキもヴァンも、光のせいで見えない。

そう思っていたら、光が止んできた。

徐々に視界が開き、そして、とても信じられない光景が目に入った。

「これは…」

それは空が紫色の雲で覆われ、紫の雷が幾つも現れ、海と思わしきものはドロドロしていて、これも紫色だった。

そして、その上に私達はいた。砕け散ったホドの上に…。

「ここが…魔界…まさにその通りね」

この毒々とした感じ…生きているのが不適切に感じる……。

「…ッ！ヴァン！？無事！？」

私はハッと気づき、息子の無事を確認した。

「母上…はい…無事です」

「良かった…良く頑張ったわね、ありがとう。…イブキも…イブキ？」

イブキの様子がおかしい。さっきから一言も喋らない。

私はイブキの顔を覗き込んだ。

「イブキ? . . . え . . . ?」

そこには血を吐き、生氣の感じられないイブキの顔があった。

「イブキ! ?」

私はイブキを寝かせた。

「イブキ! ! しっかりして! ! !」

いくら問い掛けても何の返事も無い。

私は治療術を掛けた。

しかし、一向に良くなるらない。

「イブキ! ! ! イブキ! ! ! ヴァン! 手伝って! ! !」

私は傍で呆然としていたヴァンに呼びかけた。  
ヴァンはハツとし、すぐに治癒術を掛けた。  
しかしそれでも変わらなかった。

「どうして！？どうして良くなるの！？目を開けてよ！！私達を置いて行かないで！！」

「イブキさん！！起きて下さい！！」

しかし、イブキになんの変化も無かった。

「何で…？どうして…」

私が諦めかけていた時、誰かが来た。

「これは…！イブキ殿！？」

「え……？」

誰？どうしてイブキの事を知ってるの？

私とヴァンの前に現れたのは、歳を取ったお爺さんだった。

「すぐに救助しろ！！」

お爺さんがそう言うと、後ろにいた何人かの人がイブキを持ち上げ、何所かに連れて行くとした。

「あ……ま、待ちなさい！イブキをどうするつもりなの！？」

「安心なされ。あなた達も助けてあげます。さあ、此方へ」

お爺さんは私の質問には答えず、私とヴァンを誘導した。



「母上・・・」

「……今は黙ってついて行きましょ」

私達はお爺さんに付いて行つた。

「さあ、此方の部屋で休んでいて下さい」

私とヴァンはユリアシティという、魔界にある街に連れて行かれた。途中でイブキは別の所へと連れて行かれた。

「イブキ……」

今はここの人達に任せるしかない。少なくとも、私達より、イブキの体の事を知っている様だし…。

しばらくした頃、部屋の扉が開いた。  
お爺さんかと思ったけど、入って来たのは予想外の人だった。

「ミリア…よく無事で…」

「コスモス…さん？」

イブキの妻の一人のコスモスさんだった。

「コスモスさん！無事だったんですね！？」

「はい、崩落した時、私とテアはホドにはいませんでしたから…」

「そう…ですか…」

あれ？それじゃあ何で此処に？

「此処には一体どうやって？」

「この街にはユリアロードと言う転送装置があって、そこから此処に来ました」

「そうですか……」

「……それで、話があるのですが……」

「……？」

コスモスさんの顔が曇り、悲しそうな顔になった。

一体どうしたんだろう？

……まさか、イブキに何か！？

「……イブキの事、ですか？」

「……はい」

やっぱり…。

私は今、寝ているヴァンを見た。

「ヴァンも聞きますか？」

「……いえ、今はあなただけで大丈夫です」

「…分かりました」

「では、付いて来て下さい」

私はヴァンを残し、コスモスさんの後を付いて行った。

「…此処です」

コスモスさんが案内したのは、一つの部屋だった。

「ユリア、テア、ミアを連れて来ました」

コスモスさんはドアをノックし呼びかけた。

…ユリア様、無事だったのね。良かった。

「…入って、良いわよ」

中からは覇気の無い、ユリア様の声が聞こえた。

私とコスモスさんは部屋に入った。  
そこで目にしたものは衝撃的だった。

「……イブキ……」

ベッドに寝かされ、何かの譜業の様な物を体中に取り付けられたイブキだった。  
譜業に付いているモニターには、何か分からない数値が沢山出ている。

「ミリア、良く無事で」

「……ユリア様も……あの……イブキは……一体」

私がそう聞くと、三人とも顔を曇らせた。

「いい？ミリア、落ち着いて聞いてね？」

ベッドの隣に座っていたテアさんが言ってきた。

「……はい」

そして、聞きたくない真実を聞かされた。

「イブキはね、一応生きてるよ」

私は『生きてる』、この言葉に喜びを抱いた。  
しかし、一応の意味が分からない。

「一応？」

「うん、一応ね。その…イブキの心臓が、コアって言う物で出来てるってのは、知ってるよね？」

「……はい」

「実はね、そのコアで異常な程の力を使って、コアが深く損傷しちゃったの」

「……え？」

ブラスト・コア。

イブキの心臓代わりの物で、力の源でもある大切な物。それが損傷、しかも深く。

ならイブキはとても危険な状態ではないのか？

「どうして、損傷を？」

「何かとても大きな力を使った痕跡があるの。何か心当たり無い？」

大きな力…？

そう言えば、あの時イブキから光が沢山出ていた。

「イブキから…沢山光が出ていました…」

「やはりそうですね…」



コスモスさんが呆れた様な声を出した。  
何でそんな対応が出来るのか、何故イブキを心配しないのか、私には分からなかった。

「……心配では無いんですか？」

「心配し過ぎて怒りしかありませんね」

はつきりと、コスモスさんは言った。ユリア様もテアさんもその言葉に同意の様だった。

「そんな！？イブキは私とヴァンを助ける為に！」  
「あなたが助かって、イブキが助からなかったら意味がありません」

「ッ！？でもっ……」

妻なら心配すべきだと、言いたかったが、言えなかった。  
コスモスさんの肩が震えているのに気付いたから。

「いつもそうでした…。誰かを助ける為に自分の事を犠牲にする…。そんな考えで一体どれだけ私達を悲しませるのか…」

彼女達が心配しない筈が無い。彼女達はイブキを愛してるのだ。だから自分の身を犠牲にするイブキに怒ってるのだ。

「……ごめんなさい」

「…あなたが謝る事ではありません。謝るのは今ここで眠っているイブキです」

コスモスさんは笑顔で言った。それにつられてか、ユリア様とテアさんも笑った。

「あの、それで…イブキは何時起きるんですか？」

「「「……………」」」

……何で、黙るんだろう？

私が疑問を抱いていたら、テアさんが口を開いた。

「…最低でも、三年後…」

「五…年…！？」

そんな、三年後って！？どうして！？

「どうしてですか！？」

「コアが損傷…これは理解出来てるよね？」

「…はい」

「イブキはね、ある程度コアが稼働してないと起きれないの」

「イブキのコアは今、その程度の稼働が出来ない状態なのです」

「そんな！？それじゃあどうすれば！？」

「このコアの設計者であるケビン・ウイニコット、もしくはその助手であるシオン・ウヅキによって修復作業を行うのですが、この世界に両名はいません。しかし、イブキのコアには、自己修復機能が付いています。それに任せておけば、時間は掛りますが元の通りに戻ります」

コスモスさんが機械の様に淡々と答える。

コスモスさんは説明をする時、偶にこんな感じになる時がある。

「それじゃあ、安静にしていれば……」

「イブキは目覚めます」

「……良かった」

「ホント、良かったわ」

「うん！」

「しかし、五年もの間イブキとイチャイチャ出来ないのですね……」

「「「……………」」」

確かにそうだ。五年間目を覚まさないという事は、五年間イブキとあんな事やこんな事が出来ないという事……。

「……頭でも殴ったら起きるかしら？」

「うん、だったらコアじゃない？」

「いえ、こう言う場合はキスで起きるとシオンから聞いた事があります」

最後はともかく、最初の二人はとても物騒な事を言い出した。

「まっ待って下さい！！そんなを事したらイブキが！！」

「だったらどうしたら良いのよ？一人だと色々と限界があるのよ？」

「一人って何ですか！？何をやる気なんですか！？」

「あら？あなたはしないの？」

「だから何を！？いえ、そうじゃなくなってますね！？イブキが早く目覚めるよう願いながら看病したら良いじゃないですか！？」

「冗談よ！するワケ無いでしょ！」

こんなのが私の御先祖様って…何かイヤ…。

イブキの身が別の意味で心配になって来たミアリアであった。

四年後。

イブキのコアの状態は順調に回復していつている。後一年すれば目を覚ますらしい。

それにしても、イブキがこのユリアシティでは結構な有名人だったとは知らなかったな…。毎日イブキ宛てにお見舞いの品が届けられてくるんだもの。コスモスさん達から聞いた話によれば、イブキはこの市長に色々はこの街の事を教え、魔界でもそこそこに快適で過ごしやすい様にしたたり、創世歴時代の遺産の解析を行い、ユリアシティの人達の為に使ったりとして、皆からもの凄く慕われているらしい。まあ、イブキ達は創世歴の人だからこの街の事や遺産の事は簡単に、と言うか当然知ってるワケだし…。

ああ、そうだ、市長の名前、テオロード・グランツと言うのだけれど、その人の世話になる事になったわ。イブキが命を賭けて守ったから、今度は私が守る番だと言い張り出したのよ。子供とでも思われているのかしら。

まあ、今は色々と助かってるから良いのだけれどね。

遅くなったけど私は無事、出産する事が出来ました。これもイブキが私に掛けてくれた力のお蔭。

女の子で名前はメシユティアリカ・アウラ・フェンデ、ヴァンの妹ととっても可愛い子よ。思わずギューって、しちやいそうな程に。そうそう、メシユティアリカったら、この前イブキを初めて見た時「カッコいい…」って言ったのよ。まだ四歳なのに、罪な男ね。これからイブキの事を聞かす時はこの子の王子様みたいに教えちゃおうかしらね。

あ、ヴァンはね、ローレイ教団に入るって言ってね、今とても頑張ってるわ。まるでイブキの様だったわ。

だから早く起きて、ヴァンを応援してあげて。

「……後一年か」

「どうしたの？お母さん？」

「何でも無いのよ。そうだ、イブキお兄さんのカッコいいお話でもしましようか！」

「うんー！」

さもないと、ティアをあなた一色にしちゃうわよ？私達のヒーローさん。

私は目の前で眠るイブキに心の中でそう伝えた。





## 暫しの休息と旅立ち（前書き）

皆様、一日遅れの投稿ですが、どうかお許しください。

今回で過去編は終了とさせていただきます。

グダグダになってしまっていたらすみません。

## 暫しの休息と旅立ち

暗い……。ここは何所だ？

俺は真つ暗な空間にいた。上下左右も分からない。立っているのか、座っているのか、寝転んでいるのかも分からない。

俺はどうなったんだ？

確か……譜歌が破られて、咄嗟に光の障壁を周りに展開して……ああ……コアがオーバーヒートでもしたのか……。それで俺は活動出来ない状態に……。

「何で……死んで無いんだ？」

俺は皆を救えなかったのに……事が起きるって知っていたのに……何も出来なかったのにッ！

俺は暗闇の中で泣いた。泣いて泣いて、泣き続けた。

暫く泣き続けていたら、暗闇の中に一つの光が現れた。俺はその光に飲み込まれた。

「ッ!?!.....ここ...は?」

光の先にあつたのは、何処かの花畑だった。  
世界の花が全て集まった様だった。

「一体.....」

何所なんだ。そう言いたかったが、あるものを見て固まった。

「シ...オ.....ン...?」

俺のとても大切な親友。俺の命の恩人。  
シオン・ウヅキがいた。

「……………」

彼女はゆっくりと此方を向いた。何千年ぶりに見る彼女の顔。思わず涙が出そうになった。

「シオン…」

「悲しい事を言わないで…」

「え…」

シオンが言ってきた。

「あなたが死んだら、コスモスが悲しむわ」

「……………」

「コスモスだけじゃない、あなたの周りに居る人、全員が悲しむ」

「……………」

「それに、イブキはやれる事を全部やったじゃない」

「……………やれてない」

「いいえ、やりきったわ。確かに、救えなかった命もあったわ。でも、それでも、イブキは沢山の人を救ったわ」

「ッ!？」

「イブキは頑張った。それは皆分かってくれるわ」

そう言い、シオンは俺に近付き、優しく抱きしめてくれた。



「……………」

目を開いたら天井が見えた。何の事も無い唯の天井…。

俺は……………生きてる…。

手に何かの感触が伝わって来た。顔をそちらに向けると、青い髪が見えた。

「……………」

俺が生涯愛し、守ると誓った女性が、俺の手を握り、顔をベッドに預け眠っていた。

俺はコスモスを起こさないようにゆっくりと体を起こした。体はちよつとダルいが問題無い様だ。

「ん……………」

「……………」



気持ち良さそうに眠るコスモスの髪を優しく撫でた。

「うんん……え……？」

「……起こしたか？」

コスモスが目を覚まし、目を大きく見開き此方を見てきた。

「イ……ブ……キ？」

「ああ、俺だ……コスモス……」

「ッ！イブキ……！」

「うおッ！？」

コスモスは俺に抱きついて来た。

一応怪我人なんだけどな。

「イブキ！やっと…やっと目を覚ましてくれたのですね！！」

「あっああ…どうやら随分と長い間眠ってた様だな」

「そうです！一体どれだけ寝坊すれば気が済むんですか！？」

「悪い悪い…」

俺はコスモスを抱きしめた。そのすぐにも折れてしまいそうな体を強く優しく抱きしめた。

「また…居なくなるのかと…思ってしまった…」

「……ホント、悪い」

「そう思っているのですから…暫くこのままにして下さい…」



パーティーが行われている。

「いやはや、イブキ殿が無事目を覚まして良かった…」

テオロードが嬉しそうな笑みで喜んだ。

「テオロード…すまない、面倒をかけた」

「いえいえ、問題はありません。私は当然の事をしたままでです」

「例えそうだとしても、あなたはミアとヴァン、ティアをこの五  
年間面倒を見てくれただろっ？本当に感謝している」

俺は椅子に座ったまま頭を下げた。

「そうですね…ではそのお気持ち、しかと受け取りましょう」

「ありがとう…」

「さあ、話は後に。今は祝福の乾杯をしましょう」

俺たちは前に置かれているグラスを持った。俺とヴァンとティアにはジュース、他はお酒が入っている。

「では、イブキ殿の回復を祝って……乾杯！」

「……乾杯！！」「」

それからは大はしゃぎだった。最初は俺達数人だけだったが、何時の間にかこのユリアシテイ全体にまで騒ぎが広がっていた。中にはホドの住民が何十人もいた。俺はその人達を見た時、嬉しさと悲しさが溢れ出てきた。救えた命と救えなかった命、その両方の重みが乗っかってきた。救えなかった命の中には救えた命の家族や友人、恋人もいただろう……。俺がホドの事を知っていたと知ったら、その人達は俺を恨むだろう……。なら俺はその罪を甘んじて受けよう。それが、救った者の責任だ。

「イブキ」

「ん？」

俺が皆を眺めていたら、ミリアが此方に来て話かけてきた。

「まだうちの子とちゃんとした挨拶はしてないでしょう？」

「ああ、そうだったな」

コスモスから名前を聞いたただけだったな。

俺はミリアの足元に隠れている女の子を見た。  
これまた可愛い子だ。

「ほらティア、御挨拶は？」

その子はミリアに言われ、オドオドしながら口を開いた。

「め、メッシュティアリカ・アウラ・フェンデです／＼／」

「おお、良く噛まずに言えたな。俺はイブキ・ヤマトだ。宜しくな、ティアちゃん」

俺はしゃがんで目線を合し、頭を撫でながら言った。

「よ、よろしく、お願いします……／＼お、お兄ちゃん……／＼／」

「……………」

……………今何と？何て言ったんだ？お兄ちゃん？お兄ちゃんと言ったか？それって俺の事か？

「……………」

俺はミリアを見た。

「……………プツ！」

「やはりお前か!?!」

「アツハハハハ!予想通りのリアクションね!」

「……………?」

ミリアは笑い出し、ティアはワケが分からず首をかしげた。

「ティアに何を聞かせたんだ!?!」

「何も言っただけだよ!ただ強いて言うなら、イブキはティアにとつて王子様の様な兄と言うことね〜!」

「待て待て待て!王子様って何だ!?!一体ティアに何を!?!?ってか



兄ならヴァンが居るだろう!？」

「それはそれ、これはこれ。これって良い言葉ね」

ミリアはその言葉にフケの分からない敬意を感じた。

「イブキさん」

ヴァンがやって来た。

「ヴァン、ミリアに何とか」

「兄は俺だけですから」

「お前もか!？」

ヴァンはまさかのお兄ちゃん宣言をしてきた。

ヴァン……お前も立派になったな……先生、嬉しいよ……。

「さあティア、イブキさんは治ったばかりだからあまり面倒を掛けさせてはいけない。だからお兄ちゃんと一緒に居よう？」

「……や(プイ)」

「がつ!?!」

ティアは俺の服を掴み、ヴァンの意見を拒否した。

「ぶっ!」

ミリア……それでも母親か……笑ってやるなよ……。

「お兄ちゃん抱っこ〜!」

ティアが両手を上げ、せがんで来る。  
ヴァンの前でやるのは気が引けるが、ティアを悲しませるワケにも  
いかず、抱っこしてあげた。

「キャッ!」

ティアは嬉しそうに抱きついて来た。

「なっ!? ティア!? 抱っこなら俺が!」

「兄さんや〜。お兄ちゃんがいい」

ティアはヴァンの事を兄さん、俺の事をお兄ちゃんと呼び分けてい  
る様だ。

「そんな…!? 何故…俺だけ兄さんなんだ…!」

ヴァン……何かごめん。

ヴァンはその場に崩れ落ちた。俺はその姿に罪悪感を感じてしまった。

「あら〜？イブキってそんな小さな子供まで手を出すんだ？」

「しかもその子供の兄の前で奪うなんてな……」

「イブキ……浮気ですか？」

後ろから三人の阿修羅が現れた。その気配をいち早く察したのかミリアとヴァンはティアを俺から取り上げ、何処かに消えていた。

「あの〜俺は別に……」

「五年間も私達を放って置いた拳句、小さな女の子に手を出すなんて……このロリコン」

「俺はロリコンじゃない！放っていたワケでもない！」

「どの口が言っつ？この口か？」

「いはい！？ふあめほ！！へか、ふあんへふあはへふあひふあふあつへふあいんは！？（痛い！？やめろ！！）てか、何でまだテアに変わってないんだ！？（）」

「テアにはまだ眠ってもらっている。……それとも私よりテアの方が良いのか？」

「んふあほほいっへへー！（んな事言っつてねー！）」

「イブキ…覚悟は出来ていますね？」

「ふあんほ！？（何の！？）」

「「「夜の楽しみに決まっつているでしよっ（だろっ）！」「」」



「愛されている証拠です」

「なら別の証拠を所望する…」

あんな激しくて長い証明方法は流石に無理がある。

「それよりイブキ殿、此処に来たと言う事は、何か用でも？」

「ん？ああ、そうだった」

俺は足を降ろし、机に肘を置き手を組んだ。

「聞きたい事がある」

「…ホド…ですか？」

「ああ…」

テオロードは少し黙った後、自分の席に着いた。

「私の応えられる範囲ならいくらでも……」

「それでいい……。ホドの崩落原因は分かるか？」

「……ヴァンの言う所によると、どうやら彼の超振動が原因です」

超振動……ありとあらゆる物質を分解し再構築する現象。

確かにそれが原因だとしたら、崩落も簡単に起こる。しかし……

「しかしそれはヴァンの完全同位体が居なければ無理だ。それに俺が行った時、ヴァンの他には誰も居なかったぞ」

超振動を起こす条件、同じ音素振動数との接触が必要だ。しかし、そんなものは世界を探して二つあるかどうかの存在だ。



「……ヴァンはマルクトの実験の対象になっていた、と言うのは知っておりますな？」

「……ああ、詳しくは調べられなかったがな」

ミリアも詳しく知らされていなかったし、ヴァンにも一度聞いた事があるが、教えてはくれなかった。大方、話したら何かをされると脅されていたのだろう。それに、侵入しようにも警備が厳しく出来なかった。

「……実は、ヴァンを問い詰めた所、フォミクリーと超振動の研究をしていた様です」

「フォミクリー？聞いた事無いな……。」

「ヴァンの話を聞く限りどうやら模造品……レプリカを作り出す事の様です」

成程……完全同位体を人工的に作り出し、超振動を起こそうと言う事か……。そんな事の為だけにヴァンを……！

「ふざけやがって…」

「イブキ殿、これはあなただから言つのですが…」

「…？」

「この事は預言に詠まれていた事です」

「ッ…」

「ですから、あなたが気を落とす事はありません。マルクトは預言通りにした、それだけなのですから」

「黙れ…それ以上言つな。」

「ですが、イブキ殿達が生きていて下さって良かった。あなた方は我々にとって始祖ユリアも同然の存在なのですから」

なら他はどうなっても良いのかよ…。預言に詠まれていた？それ位知っている。だから変えようとした。今までの戦争だって、変えたいと思った。だが力が無かった。小さな争いを止める力はあるも大きな戦争は止められなかった。今回の事だってそうだ。俺一人の力じゃあ足りなかった。だがお前らが協力していてくれたら、止められてたかもされないのに！

「そうか…ありがとう。もう聞く事は無い」

「そうですか。それではこの後、ここで会議があるのですが…イブキ殿も参加しますか？」

「いやいい。街を見まわって来る」

「わかりました」

俺は会議室を出た。そしてそのまま街をでて少し広い場所まで歩いた。

「ちくしょう…」



「アアアアアアアアッ！！！！」

俺は地面を何回も殴った。怒りをぶつけた。その地面を自分と被せて。

「はぁ……………はぁ……………」

拳を止めた時、広場はボロボロだった。

これは後で内密に修理しないと……………。

「…俺がやったって言うなよ、ヴァン」

「ッ！？」

俺は物陰に隠れていたヴァンに言った。

ヴァンはゆっくりと出てきた。

「全部聞いていたんだろ？」

「……………」

ヴァンは顔を伏せたまま黙った。

「別に怒りはしない。ただ聞きたいだけだ」

「……………」

「聞いて、どう思った？」

「……………憎い」

ヴァンはそう呟いた。

「何に？」

「…預言が…ローレライが！」

ヴァンは確かな憎悪を瞳に宿し、はつきりと言った。

「そうか…。お前は立派だよ。人を憎まず預言を憎む…俺とは違って随分立派だ」

「勿論、俺達を見捨てた奴らも憎い！けど、それよりも預言を出したローレライが憎い！」

「…その預言を世界に広めたのはユリアだが？」

「ユリア様は預言を覆って欲しいと願い、預言を詠んだ」

「…確かにそうだ。ユリアはそう願い、預言を詠んだ。争いを無くして欲しかったから。」

「……それで？お前はどっしたいんだ？」

「……まだ、わからない……」

「……そうだろうな」

「けど、これだけは言える！」

「……言ってみる」

「預言を覆す！！何としてでも！！」

「……」

「こいつ……ははっ！本当に立派な奴だ。こんなに意志の強い奴は何千年ぶりだ？」

「良く言った。ならお前はその意思を貫き通せ」



「…………え？」

「どんな壁が現れようとも、お前はそれを乗り越える！」

「っ！…………はい！」

「俺は俺で方法を探す。お前もお前で探せ」

「え？一緒に探してはくれないのですか！？」

ヴァンは共に行動してくれると思っていたのだろう、予想外の言葉に驚いた。

「多いに越したことは無い。その方が確実だ」

「…………わかりました。何時までも先生に頼っていては始まりませんからね」

「この五年間、一人で頑張っていた奴が何を言っている」



俺達は今、ユリアロードがある部屋に居る。

「そんな事はありません。此処に居て下さるだけでも我々は嬉しいのです」

「ありがとう。だが、俺は上の奴らも救いたい。未だに戦争の傷跡で苦しんでいる人がいる。俺達はその人達を救ってあげたい」

俺達は今からこの街を出て、外殻大地に行く。此処に居ても何も出来ない。預言の事もまだ何も進んでいない。いや、正確にはまだ時期じゃない。ならせめて、上に行つて誰かを救つた方がいい。だから世界を回り、尚且つ、覆すための準備をするため。

「…そうですね…わかりました。もう何も言いません」

「…ヴァン」

俺はヴァンを呼んだ。

「イブキさん…」

俺はヴァンを引き寄せ、他の人に聞かれないようにした。

「俺は上で誰かを助けながら方法を探す。お前は教団で申し上げて方法を探せ」

「はい…」

「くれぐれも知られるなよ。知られたら厄介だからな」

殆どの人は預言を成就するべきだと思ってるからな。

「わかっています。必ず見つけ出してみせます！」

「良い返事だ。…俺はたぶん何年も此処へは帰ってこれない………」

リアとティアはお前が守ってやれよ」

「はい！」

俺はヴァンを離し、続いてミリアとティアを見た。  
ティアを今にも泣きそうな顔だった。

「……………ティア」

「イブキ……お兄……ちゃん」

「……………泣くな。何ももう会えないワケじゃないんだからな。また何  
時か帰って来るし」

「ひっぐッ……………だつてえ！」

「……………ほら」

俺はティアを抱きかかえ、頭を撫でた。

「いいかティア、人は最後に見た顔を絶対に忘れないもんだ。だからその顔が泣き顔なんてのはごめんだ。だからほら、笑ってくれ」

「ぐすっ……うん」

ティアはこれでもかという位、とても良い笑顔を見せてくれた。

「ありがとう、ティア。…ミリア」

俺はミリアを見た。ミリアは半分呆れた表情でこっちを見ていた。

「…はあ、私って男運が無いのかしら？こつも良い男性が居なくなっ  
っていくなんて……」

「お前は33歳だがまだ20前半の外見だ。すぐに見つかるだろ」

「…何それ？それって尻が軽い女って事？」

「んな事言ってねえだろ」

寧ろ尻がおも「ん？」何でもありません。

「まあいいわ。…イブキ、約束して。絶対にまた会って…。」

ミリアは先程までの表情とは違い、真剣な眼差しで見つめてきた

。別。に戦争しに行くワケじゃなし、ただ誰かの助けに行くだけなのに  
な…。どれだけ心配性なんだ…。

「……………ああ、約束だ」

「本当に？」

ミリアは疑うようにジロジロと見てきた。

此処は信じる所だろおい…。

「本当だって。……なら、このペンダントをティアに預ける」

「え？」

俺は首から赤い宝石が填まってあるペンダントを取りだした。  
これは親友のシオンから貰った宝物だ。

「俺はこれを絶対に取りに来る。だから信じる」

俺はティアにペンダントを着けた。ティアは嬉しそうにしていた。

あげたワケじゃないんだが…。

「…はあ、わかった。信じてあげる。もし来なかったら、これはティアの物になるからね」



「…肝に銘じとくよ。…にしても、いい歳してんのに何でそんなに若い口調何だよ?」

「なっ!?別に良いでしょ!?違和感無いのだし!」

あ、今ちよつと変えたな。まあ、その外見だったら違和感は無いわな。

「……なら、そろそろ行くな」

俺はユリアロードの譜陣の中に入った。後はコスモス達の挨拶が終わり次第出発出来る。

「お待たせしました」

「ん、もう良いのか?」

もうちよつと長くしても良いのだが…。

「別にもう良いの。言いたい事は全部言ったし」

「そつだよ！テラも十分だって言ってるし」

「そつか……。なら行くぞ」

俺達は最後に皆の方を見た。

「「「「「いつてきます」「」「」

「「「「「いつてらっしゃい」「」「」

そして最後の挨拶をし、外殻大地へと旅立った。

イブキとヴァン、二つの意思が別れた時だった……。



再始動（前書き）

すみません！！

中々更新出来ません！！

全然波に乗らない！！

というかりアルが忙し過ぎて手が着けられませんでした！！

言い訳だとは分かっていますが、許して下さい！！

今回はちょっと展開が早いかもしれませんが！

## 再始動

ND2018

もうあれから9年の歳月が経った。

俺達はその間、世界各地を周りボランティア的な事をしてきた。一度また戦争があつて、それで親を亡くした子供達を引き取り人が見つかるまで保護したり、戦争で荒れ果てた名も無き村に食べ物や生活に必要な物を運んだり、偶に小さい争いがあつたらそこへ赴き、近くの村等に被害が出ないように喰い止めたりと、かなり無茶をした。

そのおかげで、色々とお人脈が出来たり、ユリアシティに一度も帰れなかつたりした。まあ、一応ヴァンの事なんかは教団で上に着いたとかは知っている。あいつも頑張っているんだな。

そして今俺達は、流通拠点・ケセドニアに駐在している。

「ND2018……今年か」

「そうですね……。預言によればこの年に事が起きます」

ローレイの力を継ぐ者、人々を引き連れ鉦山の街へと向かう。そこで若者は力を災いとし、キムラスカの武器となって街とともに消滅す。

これが切欠となって世界はまた戦乱の日々を繰り返す。何としても覆せねばならない。

「俺達も動くぞ。今度こそ絶対に変えてみせる」

「はい」

「コスモス、お前は二人を連れてアグゼリユスの住民をグランコクマに避難させる準備をしてくれ」

俺はコスモスに万が一の為の保険を頼んだ。覆せなかった時、せめて住民だけでも助ける為だ。

「分かりました。ピオニー皇帝陛下に頼めば動いてくれるでしょう」

「そりゃそうだ。あいつは俺に貸しがあるからな」

「…あれは勝手にイブキがそうしただけでは？」

「俺の妻をナンパしたんだ、当然だろう」

そう、俺達がグランコクマに行った時、俺が目を話した際に男がコスモス達をナンパしていたのだ。

当然、俺はそいつを締め上げたんだが、驚く事にそいつがグランコクマの皇帝・ピオニーだったのだ。

どうやらかつてに宮殿を飛び出し、街を歩いていたようだ。それからというもの、何故か気に入られ、何度か会っている。勿論、お忍びで。

「では、明日にでもグランコクマに向かいます。．．．イブキはどうするのですか？」

「俺は焔に会って来るさ」





「たぶんな。丁度ファブレ家の邸がある所からだった様だし」

ファブレ家…焔のファミリネームは確かファブレだった筈。  
おいおい、んじゃあ、昨日みた光がそれだったのかよ!?

俺は昨日、バチカルに来る途中、王都から光がタタル溪谷の方へ飛んで行くのを見ていた。その時は花火でもしてんのか?と思っていたが、まさかそれが?

「…しかし、よく聞いてみたら周りの奴ら全員行方不明の事を噂してるな」

これは行方不明と言う事は事実みたいだな。  
となれば…タタル溪谷か。

「行ってみる価値はあるな」

俺はバチカルを出て、タタル溪谷に行く事にした。





一体誰がこんなアホな事を…。

「チツ！しゃあない、 を呼ぶか。 ……来い」

俺は を転送してきた。

「＜何用かね？＞」

「俺を向こうの大陸まで運んでくれ」

俺は指をさし、指示した。

「＜御意＞」

は俺を手に乗せ、フワリと浮かび、空を飛んだ。





「はいよ！ちょっと待っててくれ！」

店の人は元気な声で答えた。

「ちょっと聞きたいんだが、昨日今日、赤髪の男を見なかったか？  
歳は17ぐらいだ」

「赤髪…ああ！居たよ！」

「ホントか！？それで、そいつは何所に？」

「たしか、少し前にチーグルの森の方に行ってたのを見たな…。はいお待ち！」

「ありがとう。感謝するよ」

チーグルの森か…。一体何の用が…。いや、まだ焔と決まったワケではないが…。





俺は巢に入り声を出した。

チーグルにはユリアがソーサリーリングと言う、特別なアイテムを渡していて、そのおかげで人と話す事が出来るのだ。

俺が返事を待っていると、多くのチーグルの内からいかにも長老ですと、言っている様な顔のチーグルが出てきた。

「ミュミュミュミュ…」

ソーサリーリングを身に着けていない状態で。

「は？おい、リングはどうし？」

「ミュ〜ミュミュみゅ」

長老は何かを伝えようとしているが、まったくもって分からん。

……あ、なら字は書けるか？

「スマン、何を言っているのか分からん。だから字が書けるのなら地面に書いてくれ」

「ミユ〜…」

俺がそう言つと、長老は落ちていた小枝を拾い、地面に文字を書き始めた。

「お久しぶりです、イブキ様」

そう書いて頭を下げる長老。  
俺は何度か此処に来た事がある。と言うか、連れて来られていた。  
ユリアに。

「久しぶり、元気だったか？」

長老は文字を書き出した。

「はい、問題が起きたりしていましたが、それも解決し、皆元気で  
ございます」

「それは何よりだ。…長老、早速ですまないが、聞きたい事がある」

「何でしょう?」

「ここに赤髪の男が来なかったか?」

「ああ、はい。来られましたよ」

「本当か!？」

「はい、ルーク殿は我らをライガからお救い下さいました」

ほう…。流石は王子、良い事してくれる。

「そうか、後で礼を言っておかないとな。…それで、どこに行った



出口付近に差し掛かった頃、何やら出口の所で人が集まっていた。俺はそいつらに気付かれないよう、その近くの木の上で止まった。

「その二人を捕えなさい。正体不明の第七音素を放出していたのは、彼らです」

人数は七人。内三人がマルクトの軍人。先程の言葉を発したのは、その内の隊長らしき男性。

残りの人は、服装から二人の少女は神託の盾騎士団オラクルの人、緑の髪の少年は…導師イオンだ！？何でこんな所に居るんだよ！？

あと一人は…まさか焔かよ！？おいおい、まさかキムラスカの王子とばれたんじゃないだろうな！？

「いい子ですね　　連行せよ」

マルクトの隊長は二人の兵に命じ、焔とオラクル騎士団の片方、髪の毛の長い少女を連行した。



「おいおいおい!!!?何なんだよ!!!?」

俺はバイクのスピードを上げ、タルタロスに近付こうとしたが、此方に気付いてしまったグリフィン数十匹が襲ってきた。

「クソッ!邪魔をするな!」

俺は右手にブラスターガンを転送し、グリフィンに撃った。

ズドン!ズドン!ズドン!

ビームはグリフィンに命中するが、数が多くキリが無い。

「ああもう!鬱陶しい!!」

俺はバイクを一旦止め、降りて両手にスマートガトリングを転送し、撃ちまくった。

ズガガガガガ！！

「グギヤアア！？」

「キシヤアア！？」

次々にグリフィンは撃ち抜かれていった。

そして五分過ぎた頃には、全てのグリフィンが撃ち落とされていた。

「…チツ、随分と離されたな」

俺は米粒位にしが見えない、タルタロスを見た。

流石は最新鋭の艦、速度が半端無いな。

俺はバイクを出し、タルタロスを追いかけた。





合流（前書き）

復活！！

やっと戻って来れた！！

異常なまでに長いテストが終わった！！

読者の皆様、大変お待たせしました！！  
これからも頑張っ て行きます！！

## 合流

バイクをとばして数十分…。漸くタルタロスに追いついたが、何やら取り込み中だった。

あのマルクトの軍人が金髪の女オラクル兵に槍を突き付けていた。何人かのオラクル兵も武器を捨てていた。

この様子から察するに、タルタロスを襲ったのはオラクル騎士団と言う事か？しかし何故？

俺は木の後ろに隠れ、様子を見る事にした。

マルクトの軍人が金髪と何か喋った後、大声で指示を出した。

「ティア！譜歌を！」

……ティア？それに譜歌だと？

俺はタルタロスから降りている階段を見た。そこには焔と一緒に連行されていた女兵士がいた。

あの時は顔がよく見えなかったが、今は鮮明に見える。

青い瞳でユリアとミリアにそっくりな顔立ち……メシユティアリカだった。

「ティアだったのかよ……ッ！」

俺はティアの後ろに何かが動くのが見えた。

ライガだ。

そう確信する前に、俺は跳び出していた。

ティアはまだその存在に気付いておらず、金髪を見ていた。

「メシユティアリカ！！後ろだ！！！」

「えっ？」

俺はティアに向かって叫んだ。

ティアはそれに反応し、後ろを向いたが、時すでに遅し。ライガは口から雷光を放った。

「きゃあッ!?!」

直撃は免れたこそ、衝撃で吹き飛ばされた。

「チイツ!」

俺はコアの力を右足に送り込み強化し、右足で跳躍し、ティアを受  
け止め着地した。

「ティア!…ッ!」

マルクトの軍人は注意が逸れ、金髪を逃してしまった。  
金髪は落ちていた自分の譜銃であろう物を拾い、軍人に向けた。他  
の兵士達も武器を拾い、俺ごと取り囲んだ。

「つたく、良い仕事しやがる。」

「余計なものが入ったが…形勢逆転だな」

金髪は不敵に笑った。

クソ、どうしたものか…。

俺はティアを抱き抱えたまま動きを止められているから、動こうにも動けない。

「アリエッタ！タルタロスはどうなった！？」

金髪はライガに…いや、ライガの隣にいた少女に聞いた。

まさか、あの少女がライガを操っているのか？

「制御不能のまま。この子が隔壁を引き裂いてくれて…此処まで来れた」

「よくやったわ！さあ、彼らを拘束して！」

チツ！手詰まりか！……ん？

俺は覚えのある音素を感じた。

これは……あいつの音素！？

俺は音素を感じた場所……空を見た。

空からは二つの影が落ちてきていた。

その内の一つは、金髪の近くに着地し金髪を突きとばし、捕えられていた緑の髪の少年を助け出し、もう一つは、俺達を取り囲んでいた兵士達を蹴り飛ばした。

「クツ！」

ズドンズドン！！

金髪は自分を突きとばした影を撃ったが、影は鞘から少しだけ刃を出し弾いた。  
そして決め台詞にこう吐いた。

「ガイ様華麗に参上！」

……さむ。何このナルシスト野郎。俺はこんな奴に助けられたのか？うわー、一生の不覚。

「失礼」

「キャツ!？」

マルクトの軍人が何時の間にか少女の後ろに回り込み、槍を突き付けて人質にした。

「さあ、もう一度武器を捨てて、タルタロスの中に戻ってもらいましょうか？」



「……………」

金髪、その他の兵士は武器を捨て、タルタロスに向かって歩き出した。

「次はあなたです。魔物を連れて、タルタロスへ」

「イオン様…あの…あの！」

「アリエッタ！言う事を聞いて下さい！」

イオン？…おいおい、まさか緑の髪の少年…導師イオンとか言うんじゃないだろうな。

アリエッタと呼ばれた少女は言われた通りに中へと入って行った。

これで一安心か…。

「あ、あの……／＼／＼」

「うん？……ああ、悪い。今降ろす」

俺はティアをゆっくりと降ろした。

「あ、ありがとう……／＼あの……ッ」

ティアはお礼を言い、何かを聞こうとして口を閉じた。

理由は簡単。俺の背後にいる阿修羅の存在に気付いたからだ。

「ほう、ほんの少し目を離したらもう他の女を作ったか」

「作ってないし、これ以上作る気なんかないし、そもそも何故ここにいる、テラ」





「いや〜探したぜ。こんな所にいるとはな」

にしてもだ、この青年、どこかで見た事がある様な…。

「なあテラ、あいつ何所かで見た事あるか？」

俺は小声でちゃっかり俺の隣に座っているテラに聞いた。

「……………」

「何だその憐れむ様な目は？」

「とうとうポケが始まったか」

「俺はまだ若い」

「二千歳を超えているのか？」

「う……」

確かに……それを言われると……ってそうじゃない。

「忘れたのか？ ガルディオス家の長子、ガイラルディア・ガラン・ガルディオスだ」

「……あの爽やかな青年があの泣き虫小僧だと？」

「私も最初は疑ったが、ちよくちよく探りを入れた結果……反応がらして大当たり」

「……マジかよ」

あの頼りなさげな子供が、たった数年でこうも変わるなんて……。いや待て、確かホドを攻めたのはキムラスカ……それもファブレ家だ。なぜガイラルディアはキムラスカ、ファブレ家の王族と親しいんだ？

「テラ、それにあんたも自己紹介をしたらどうだ？」

ガイラルディアが俺とテラに声を掛けてきた。どうやら自己紹介を  
してる様だ。

しかし、気になる事が一つ…。

「…おい、何故そんなに離れてる？」

「い、いや、これにはワケが…」

ガイラルディアが何故か俺達全員から離れていた。

「…まあ良いか。あ、俺はイブキ・ヤマトだ。世界を周ってボラ  
ンディアみたいな事をしている」

「…ッ…!？」

「おや、あなたが…」

「やっぱり…」

「ボラントエア？」

イオン？とガイラルディアは俺の名前を聞き、何かに反応（イオン？にはされる覚えは無いのだが）し、マルクトの軍人は探し物を見つけたみたいになり、ティアは何かを確信し、焔の至ってはボラントエアに疑問を抱いた。

「…何か、俺って有名人？」

「…勿論ですよ」「…」

「うわぁ…」

イオン？・マルクト軍人・ティアが同時に答えた。

「世界のあちこちで戦争の被害にあった村を歩き回り、食糧を運んだり、村の再建に多額の資金を投入したり、孤児を拾って親を探し



てあげたりと、かなり有名ですよ！あつ！僕はイオンです！」

「最近、陛下が宮殿を抜けて誰かに会いに行ったり、その人にシバかれたり、その人の奥さんは美人だとか散々聞かされてますからね。私はジェイド・カーティスです」

「騎士団でイブキ・ヤマトの名を知らない人は居ないわ。私達でも分からない文献を解読したり、どんな任務でも完璧にこなし、騎士団ではその強さと数々の功績から英雄と呼ばれているわ」

……ほう、そんな事になっているのか。ただやれる事をしていただけなのにな。

イオンが言ったのは、世界を周っていた時、ジェイドが言っているのは、まあ分かるだろうから割合、ティアが言っているのは、俺が目覚まし、ユリアシティを離れるまでの二年間、騎士団にいた事があり、その事を言っているみたいだ。

「すっかり有名だな」

「目立ちたくは無かったんだが…」

何所で間違えたんだ…？

「何かわかんねーけどヴァン師匠の方がすげーんだろ？」

「いや、ヴァン謡将も凄いが、ヴァン謡将より強いって話だぞ？」

「ええ！？マジかよ!？」

「ああ…つと、失礼。俺はガイ・セシル。隣にいるルークの使用人兼親友だ」

「…ルーク・フォン・ファブレだ」

ガイと焰…ルークが紹介をしてくる。が、ガイは何所か複雑そうな表情で、ルークは何故か睨んでくる。

「よろしくな」

「…ケッ!」

握手を求めたら拒否られた。

貴族だよな…少しは礼儀つてもんを知れよ。

「おい」

「ん？」

「私を忘れるな」

テラが不機嫌オーラを出しながら俺の肩を掴んできた。

そう言えば、テラは無視されるのが嫌いだったな。

「テラ、もしかして探してる人って、この人だったのか？」

「ああ、そうだ」

ガイがテラに確認する。

「ガイ、そいつ誰なんだ？もしかして恋人か？」

「バツ！違っつーの！」

ルークがガイをからかい、ガイはそれに反論した。

「テラとはお前を探している途中に出会って、人を探しているって言うから、一緒に行動してただけだ！」

「それでも普通そんな事はしなと思いますけどね」

「ほれみる！惚れたんじゃないのか！？」

「ちっっっ違わい！！！！」

.....。

「あ、お兄ちゃんが…」

「そこまでしておけよ」

「（姉さんも気付いたのかしら？）」

「何だよ？お前も照れてるのか？」

「え？マジ？」

「そんなワケあるか」

「そう隠すなって…ほらさっさと吐けよ」

「違うとっているだろう？潰すぞ、ガキが」

「はっはっは…」

「（あ、姉さんがキレたわ。そう言えば姉さん、こっぴどいタイプの人って嫌いだったわね）」

.....。

「（う、お兄ちゃん目が……。離れなくちゃ）」

「さっきから言っているが、私はガイみたいなナルシストに興味は無い。」「うぐ……」それとなガイ、私のファミリーネームを忘れたか？」

「え？確か、ヤマトだったよな？.....え？」

「俺の妻だが何か？」

.....

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

もう良いよな？ティアも離れている事だし、この大馬鹿者を成敗してくれちゃって良いよな？

「さっきから黙って聞いてれば、俺の女をからかいやがって…。ええ？一体誰が誰を好きになるって？ああ？」

「「すつすいませんでした！！」」

「すいませんでしたじゃねえよ。誰が誰を好きになるって？ルーク？」

「ヒイイツ！！？」

「ガイ、何ニヤケてたんだ？ん？まさか、俺の女に色目をつけてたんじゃないだろうな？」

「滅相もございません！！」





ジェイド、テラ、ティアは己の武器を構えた。

「…ガイ、ルーク、水に流してやるからしっかりやれ」

「お、おう！」

俺達もそれぞれの武器を構えた。

俺が刀を転送してきた時、ジェイドが睨んできたが、大方転送についてたろうな。

「ウオオオオオオ！！！！」

オラクル兵達が、剣を構え突っ込んできた。  
俺達もそれに応戦した。

キーン！

「そらア！！」

ズバツ！

「がああ！？」

俺は相手の剣を弾き、身体を一閃し、オラクル兵は粒子となって消えた。

「フンッ！」

ドゴォー！

「ぐほッ！？」

テラも敵の身体を譜術で強化した拳や脚で敵を沈めていく。恐らく、臓器を破壊しているのだろう。

ガイ、ジエイド、ティアも次々と敵を倒していく。が、ルークだけは剣を抜いていても一歩も動かなかった。

「ルーク！何をやっている！？」

「ひっ人…俺がっ…」

チツ！まさか人が斬れないのか！？いや、それが当然か…。

俺はルークを援護しに行こうとしたが、それよりも早く、オラクル兵が一人ルークに襲いかかった。

「ヒイツ！？」

「ッ！ルークウ！！」

俺は急いでルークの元へ走った。

「死ねえええ!!!」

「うわあああ!?!」

ズバツ!

オラクルの剣は完全に振り下ろされた。しかし、斬られたのはルークではなかった。

「てい…ティア?」

ルークはティアに庇われ無傷だったが、ティアは腕を斬られ、倒れた。

「テイアアアア！！貴様！！よくも！！！」

「ッ！？」

グシャッ！

俺は左手で兜ごと斬ったオラクル兵の頭を握り潰した。

「アアアアアアア！！？」

オラクル兵は激痛で悲鳴を上げた。

俺はそいつを上へ放り投げ、バスターライフルを出し、放った。

ズドオオオオオン！！！！

放たれた閃光はオラクル兵の身体を飲み込み、塵も残さず消した。

「ティア！しっかりしろ！」

俺は腕の傷を診た。

傷は浅い方だな。これなら治せる！

「今治療するからな！…エーテルドライブ・メディカル！」

パアアン！

俺は回復エーテルを使い、傷を癒した。

「ティア…俺…」

「………ばか」

ルークは目の前で起こった事が信じられない様だった。

「ジェイド、もう今日は休もう」

「……分かりました。ですが、場所を変えましょう。また追手が来る  
かもしれません」

「分かった」

俺はティアを背負い立ち上がった。

「……………」

ルークは下を向き、立ち上がっていなかった。

「……ルーク、戦えないのなら後ろに退いて守られてる。無理して戦  
われたら此方が困る」





「……………」

「ほら、少しは落ち着いたらどうだ」

「ッ…テラか」

テラがスープを持って来てくれた。材料は俺がU M N（俺が道具を転送している場所）にしまっていた物を使い、テラが作った。

「私が作ったんだ、ちゃんと飲めよ」

「ああ、ありがとう」

俺はスープを受け取り、一口飲んだ。

「美味い…」

「そうか」

「……………」

「……………はあ、心配し過ぎだ。傷はもう完璧に治っている。今寝ているのは疲れが一気に出ていただけだ」

「…分かっているさ、そんな事」

「じゃあ何でそんなに顔を暗くしている」

「……………また俺は大切なものを守りきれなかった」

「……………」

ホド崩落も、向こうの世界でも…俺は大切なものを守りきれなかった。1を救えば10が救えない、10を救えば1を救えない。そんな事ばかりだ。

「ドアホ」バシッ！

「痛っ!?!」

テラは俺のデコを指で弾いた。

「お前は傷ついたティアを治した。これのどこが守れていない」

「そついう問題じゃ…」

「人間は神ではない。いや、神ですら全てを守る事は出来ない」

そつ言うテラは、どことなく悲しそうだった。

「お前は出来る事を行った。それで良いではないか」

「……………」

「ティアもそれで良いと言っているぞ」

……そうか。そうだよな。シオンにも言われたじゃないか。

「何馬鹿な事考えてたんだろうな、俺」

「そうだ、馬鹿な事だ」

「ありがとう、テラ、テア」

俺はテラ（テア）の頭を撫でた。

「む……／＼分かれれば良いのだ！／＼／＼」

「フッ……。あ、そういえば、お前何でコスモス達といないんだ？」

「あの軟派帝は嫌いだ」

「そんな理由でか？と言うか、よくテアはそんなお前と交代したな」

「言っておくが、先に提案したのはテアだからな。それに、私とテアが行かずともあの二人に任せておけば問題あるまい」

「……本音は？」

「お前を一人いじめたい」

嬉しい事言ってくれる。

「まあ大丈夫か、あいつ等なら。……さてと」

「……？何所へ行く？」

「見周りついでに散歩してくる。スープ、御馳走様」

俺は暗闇の中に歩いて行った。

.....

- - - - -

俺が夜空を眺めていたら、後ろから声を掛けられた。

「な、なあ……」

「ん？ルークか、どうした？」

それはルークだった。

俺はルークの方を向き、何かと尋ねた。

「イブキは……戦うのが怖くないのか？」

「……いきなりだな」

「こっちは真剣なんだ！」

真剣ね…先の戦闘で思う事でもあったのだろう。

「そうだな…怖いな」

「イブキも…なのか？」

「誰だってそうさ。命を賭けたやり取りだ、どちらかが死に、どちらかが生きる。怖いもんな」

「じゃあ、何で戦うんだ？」

「守りたいからさ」

「守りたい？」

「ああ、親を兄弟を友を恋人を。大切なものをこの手で守りたいからな」

そう、俺が戦うと決めたのは家族を守りたかったから。シオンや皆を。

「だから、その為なら俺は怖い戦いにも立ち向かうぞ」

「……………」

「それに、意地もあるしな」

「意地？」

「ああ、男が女に守られてるなんてカッコ悪いだろう？」

「何だよ、それ」

ルークは呆れていたが、その顔をスッキリしていた。

「……………ルーク」

「何だよ」



「守る為の、意地を張る力が欲しいか？」

「え？」

「お前が望むのなら、俺はお前に色々教えてやる」

俺はルークの目を見た。ルークも目を合わす。

「いやいい。ヴァン師匠がいるから」

「フッ、だろっな」

「でもま、サンキユ」

「うっん、年上は敬えよ。こう言う時はありがとっだ」

「ケッ！うっせーよ！」

ルークは嬉しそうに立ち去って行った。

「……………フレイルに少し似ていたな、最初の反抗的な態度とか」

そうならばヴァルターはガイか？サザンクロスがジエイドでティアがユリア（生きてるけど）かな？

俺はそんな事を考えながら少しの間、星空を眺めていた。

……………

「……………あ、お帰りなさい」

俺が皆の所へ戻った時、ティア以外は皆寝ていた。

「ああ、ただいま……」

俺は起きて火の番をしていたティア右隣に腰を下ろした。左隣はテラが寝ていた。  
明日はティアになってんのかな……。

「気分はどうだ？」

「お蔭さまで、もう大丈夫よ」

「それは良かった」

「……」

俺達は会話が途切れ、火が燃える音しか聞こえなかった。

「……お兄ちゃん」

「ッ……何だ？」

先に沈黙を破ったのはティアだった。

「今まで、何をしていたの？」

「……世界を周って、困っていた人達を助けてた」

「そう……。どうして、一度も帰って来なかったの？」

「……悪い、帰ろうと思ったけどとても帰れる状況じゃなかったんだ」

ある村に食糧を届けてたら、国同士の小競合いにその村が巻き込まれてしまい、何週間も戦ったり、それで終わったら村の再建、それが終わったらまた次の場所の繰り返し。

「母さんも心配してたわよ」

「……そうか。ミリアはどうしてる？」

「お兄ちゃんの帰りを待ちながらユリアシティで学校を開いてるわ」

「学校を？それはまた、凄いな」

「街ではもの凄く評判よ。もの凄い美人教師って」

「……まさか、全然歳とってないのか？」

「そうね……まだ二十代後半位にしか見えないわね」

おいおい、もう42歳だぞ？しかもそれって、別れた時から全然変わってないって事かよ。

「いつも言ってたわ。帰ってきたら惚れさせるって」

「……帰るのが怖くなってきたな。ってか、俺がもしミリアに惚れたら俺はティアの父親になるワケだが、そこん所どうなんだ？」

「……嫌。お兄ちゃん……もしくは私の恋人がいい」

「ははっ、恋人か…。それは諦めてくれ」

「冗談よ。お兄ちゃんはそのままだいい」

ティアは俺の腕に抱きつき、頭を俺の肩に預けてきた。

「ティア？」

「眠いわ…」

「…………おやすみ、ティア」

「おやすみなさい…」

ティアはそのまますぐに気持ち良さそうに眠った。

「おい…どうなったんだガイ？」

「シッ！聞こえるだろう」

.....。

シュパッ！シュパッ！（小石を投げた音）

「ガッ！？」「ウグッ！？」（額にジャストミート）

「.....」

「.....」

「寝る」

「はい.....」

こうして夜は更けていった。





## 緊急告知

え、私、パソコンで打ってケータイで編集をし投稿しているのですが、パソコンが故障してしまい、更出来ない状況に陥ってしまいました。

ケータイで打とうにも私の場合、時間が掛かってしまうので、パソコンの修理が済むまで更新をしない事に決めました。

これまでも、色々とアクシデントがあり、中々更新出来なかったりしましたが、それも含めて深くお詫び申し上げます。

尚、修理には最低でも三週間掛かるそうなので、それまでは下準備を行っていきます。

最後にもう一度、深くお詫び申し上げます。

焰の意地（前書き）

1ヶ月もしてなかったとは……。

申し訳ありませんでした。

早く更新しようと思っていたのですが、思うように進まずこの様な結果になってしまいました。

何とか勢いをつけれるように頑張ります。

## 焰の意地

翌朝

結局俺は一睡もしなかった。俺は七日間なら眠らなくても問題無いので苦にならない。

「お早うございます」

ジェイドが目を覚まし、面白そうな物を見つけた様な目で見ながら挨拶してきた。

「お早う」

「いや、あなた達は中がとても宜しいのですね」

「そうか？これが普通だと思うがな」

「普通でその状態は無いのでは？」

俺の今の状態は、テラが胡坐をかいている俺の脚を枕にし、ティアは最初と同じで俺の腕に絡み付いたままだった。

「……この子には寂しい思いをさせたからな」

「……義理の妹、で宜しかったですか？」

「まあ、ただ妹分って事だ」

本当は子孫なんだけどな。なんて事は口が裂けても言えない。特にジエイドだけには。絶対、絶っっ対ややこしい事になる。特に

「……丁度良い機会です」

「ん？」

「貴方のその力について聞きたい」

ジェイドが真剣な眼差しで俺を睨んできた。

「力、とは？」

俺はそれに臆する事無くはぐらかそうとした。

「とぼけないでいただけない。貴方が剣を出した時、一体何をしたんですか？」

ジェイドは少し殺気を出しながら問質してきた。  
見逃してはくれないようだ。

「譜術、いえ音素フォニムも使わずしてどうやって剣を出しているんですか？それに、貴方の扱う武器はどれも見た事も無い、それに同じく音素も使用していない。貴方は何者ですか？」

何者 か。さて何て答えたものだろうか。

始祖ユリアの夫？異世界の人間？機人？

どれを答えてもジェイドには理解出来ないだろうな。

「答えられないと言うならば……それ相応の対処をしますよ」

ジェイドは静かに、素早く槍を出し、俺の首に突き付けてきた。

「俺をここで殺すか？」

「それが必要な事であれば」

ジェイドは槍に力を込めた。

やれやれ、こちらはティアを起こさない様に気を払いながら会話しているのに……。軍人さんには困ったものだな。

「そこまでしておけよ、陰険野郎」

一言。とてつもない殺気を込めた言葉が下から聞こえた。

「イブキが何者であろうと、少なくとも今は貴様たちの味方だ。それだけで十分だろう」

テラは槍を掴みながらゆっくりと身体を起こした。

ジェイドはあまりにも殺気に身体が動かせない様で、額に汗をかきながら苦しい表情で耐えていた。

「もしそれでも納得しないのなら……こちらもそれ相応の対処をする」

「…わ、分かりました」

ジェイドがそう言うと、テラは殺気を消し去り、清々しい表情で頷いた。

「分かれば良い　そうダイブキ。着替えたいから服をくれ」

そう言ってテラは手を差し出した。

「はいはい」

俺はUMNにしまつてあるテラの服を出してテラに渡した。  
受け取ったテラは少し離れた茂みの中に隠れた。

「……ま、あいつの言う通り、俺は今の所敵対する意志は無い。この力も俺でも説明出来ないからしないだけだ」

「……ふう、では一応信用させて貰います。今は出来るだけ戦力が



欲しいですからね」

ジェイドは眼鏡の位置を直しながら頷いてくれた。

ま、説明は出来ない事も無いがやはりしにくい事には変わりはないし、したとしても頭がおかしくなったと言われるだろうし。

「それと殺されなくなかったそつちを向かない事だな、ガイ」

「え！？」

俺はテラが隠れた方向を向いていたガイに忠告した。

ガイはな、何の事だ？としらばっくれていたが、俺の目は誤魔化せんぞ？お前、鼻の下伸ばしながらニヤけてたぞ。

「ガイ、今の話は……」

「ああ、何の事だい？俺、今起きたから」

「……そうか」

ガイ……

……口を滑らせなかったか！ここでテラを見てたからとか、覗いてたからと言ってくれたら俺は大義名分を得てお前を殺せてたのに！

「んん……お兄ちゃん？」

「ん、起きたかティア」

今まで寝ていた（良くあの状況で寝ていられたな）ティアが目覚まし、可愛らしく眼を擦りながら俺を見上げてきた。

「起きたのなら離れてくれないか？流石にずっとこのままではキツイ」

「え？……ッ！？／＼／＼／＼、ごめんなさい！！／＼／＼」

ティアは今の自分の状況を把握し、恥ずかしかったのか、顔をとても真っ赤にし離れた。

俺はやっと解放され、身体を伸ばしてほぐした。

「さて、後はルークとミュウだけか」

イオンはジェイドが起こしたのもう起きていた。

俺はルークとルークと一緒に寝ているチーグルのミュウを起こしにかかった。

522

「ほら起きろ。朝だぞ」

「みゅ〜…おはようですの〜…」

ミュウはすぐに起きてくれたが、ルークは未だに起きてくれない。

「起きろ」「ドスッ」

「じはあ！？」

俺はルークの腹に拳を叩きこんだ。ルークは叫び声と共に目を覚ました。

「お早う。お前が最後だぞ」

「…もう朝？それよりも、何か腹がスゲー痛えんだけど」

「何だ、腹でも冷やしたか？そんな腹出しで寝るから」

「いや、そんな痛みじゃないと思う…」

ルークは渋々と立ち上がり、大きく伸びをしてから辺りを見渡した。

「あれ？テラは？」

ルークはテラがない事に気付き尋ねてきた。

「ああ、テラなら……」

「ここだ」

後ろから声が聞こえ、振り向くとそこには黒に身を包んだテラがいた。

上半身は白の長袖のＴシャツに紺の長袖でウエストまでのレジャージャケット。

紺のホットパンツで、パンツには黒のベルトがクロスして巻かれてあり、パンツからスラツと伸びている美脚は、グレーのニーソックスと膝下までの紺のブーツによって包まれている。

両手には指が出ている黒い革の手袋を装着している。

これらの服装がテラのクールビューティーさとナイスバディなスタイルをメイド服時より数十倍も引き立てており、男達の視線を釘着けにするには一瞬だった。

「ほら、しまっておけ」

「ああ」



そんな二人の反応にテラは目を光らせ、口の端を吊り上げさせた。

「大丈夫か？血が沢山出てるぞ？」むぎゆ…（胸を両腕で寄せた）

「ぶっほあああ！！！」

二人はその場に血の池を作る事に成功した。

……って待て。

「テラ。夫の前で何やっとするか」

「いや何、こつゆつのは御約束かと」

「あつそ…」

テラはさも当然の様な顔をして更に二人を弄り始めた。

「（良いなあ…姉さん。あんなにスタイルが良くて…）」  
「（イヤ、あんたもね）」

「（…ハッ！僕は何を見ていたのでしょうか？）」「（初めてのインパクトに気が飛んだ）」

…何か、残りの二人の思考が読めてしまったのは気のせいだろうか。いやそうに違いない。

「んん！…すみません、もうそろそろ出発したいのですが」

ジェイドが咳払いをし、注意を向けさせて茶番を終わらせた。

「ああ、そうだったな。で、陣形はどうする？」

「そうですね…私とガイとティア、イブキにテラで五角形に陣を取ります。ルーク、あなたはイオン様と一緒に中心にいて、もしもの



時には身を守って下さい」

「……え？」

作戦内容を告げられた時、テラの弄りから解放されたルークは声を上げた。

「お前は戦わなくても大丈夫なことだよ」

ガイはルークが理解出来ていないと思い、簡単に説明した。

ルークは理解出来なかったんじゃない。理解したからこそ、声を上げてしまったんだ。

「ま、待ってくれ！」

ルークはさっさと陣形を組んでいくジェイド達を呼びとめた。

「どっしたんですか？」

「……俺も、戦う」

イオンの問いかけに、ルークは告げた。

「人を殺すのが恐いのだろう？」

テラがルークを睨んだ。

「……恐くなんかねえ」

ルークは顔を伏せた。  
やはりまだ怖いのだ。

「……無理しない方が良いわ」

ティアはルークが無理して言っているのだと分かり、ルークを氣遣った。

「本当だ！そりゃやっぱりちっとは恐えとかあるけど、戦わなきゃ身を守れないなら戦うしかねえだろ。イブキもガイも恐いけど守る為に戦うって言った。だったら俺も戦う」

「ご主人様偉いのですの！」

「お前は黙ってる！…兎に角もう決めたんだ。これからは躊躇なんかしねえで戦う」

ルークは拳を握りしめてそう告げた。

そしてこの言葉にはしっかりとした意志が籠っていた。

これを聞いたティアはルークの目の前まで近づいて再度確認した。

「人を殺すと言う事は相手の可能性を奪う事よ。それが身を守る為でも」

「…恨みを買う事だつてある」

ガイが付け足した。

確かに殺しは殺しを呼ぶ。

父が殺されたから殺す。

母が殺されたから殺す。

友が殺されたから殺す。

恋人が殺されたから殺す。

殺しの繰り返しだ。

「あなた、それを受け止める事が出来る？逃げ出さず、言い訳せず、自分の責任を背負う事が出来る？」

ティアはルークの目を見た。

ルークは目を逸らさずに答えた。

「お前も言つてただろ。好きで殺してるワケじゃねえって。……決心したんだ。皆には迷惑掛けないし、ちゃんと俺も責任を負う。これは…意地だ！」

……ルーク……。  
そうか、それがお前の意地か。

「でも」

「ティア諦める。男ってもんはな、意地を張らなきゃ生きていけないんだよ」

「おにっ……兄さん」

俺はティアの言葉を遮り、ルークの前に出た。

「こいつが決心したんだ。ならそう簡単に否定しないでやれ。な？」

「……兄さんがそう言うなら」

ティアは何とか納得してくれた様だ。

「ジエイドもガイも良いよな？」

「仕方ありませんね」

「そうだな。せっかくルークが決心したんだ。それを見守るのが親友の役目ってね」

二人も納得してくれた。

俺はルークの肩に腕をまわし、残りの手でルークの頭を乱暴に撫でた。

「良かったなルーク。皆が認めてくれたぞ」

「だっ！わーっだから止めろって！」

「……だがなルーク」

「あん？」

俺は手を止めてルークを見た。

「意地と言ったからには簡単に投げだせないぞ」

「……分かってるよ」

「……なら良い。もし辛くなったら何時でも言え。誰が何と言おうと俺が守ってやる。な？」

俺は弟をあやすようにルークに言った。

ルークは一瞬呆けたが、すぐに笑顔になった。

「へへッ！誰が言うかよ！」

ルークは俺の腕から抜けだし、ジェイド達の方へ走って行った。





何だ？何で赤くなる……。別に恥ずかしい事言っただろ。

「その……／＼／＼皆の前では、恥ずかしいから……／＼／＼」

ティアはもじもじとしながら答えた。

「恥ずかしいって……恥ずかしいのか？」

「（コクコク！）」

そうか、恥ずかしいのか。それが今時の女の子なのか。なら仕方がない。

「そうか。なら添い寝も無しか」

「ふえ！？／／／あ、当たり前でしょう！／／／」

「残念だ。久しぶりに会えたから期待してたんだが……」

「もう！／／／兄さんのエッチ！／／／」

ティアはそう言い残し、早々と立ち去った。

「エッチって…また可愛らしい事を」

俺は苦笑しながらティアの後を追った。

さてと、これからは休憩無しでセントビナーまで向かうのか。  
何事も無ければ良いのだがな。

城峯都市セントピナー（前書き）

イメージ通りに出来ない！

## 城砦都市セントビナー

城砦都市セントビナー

城砦と言っただけあつて街を囲うレンガの壁はそれでいて強大な存在感を放っていた。

俺達は魔物の襲撃はあつたものの、盗賊等には遭遇せず怪我無く辿りつく事が出来た。

しかし、街の入り口には二人のオラクル兵が立っていた。

「何で神託の盾騎士団がここに…」

「タルタロスから一番近い街はこのセントビナーだからな。休息に立ち寄ると思つたんだろ」

ルークの呟きにガイが返した。

「おや、ガイはキムラスカ人の割にマルクトに土地勘があるようですね？」

「卓上旅行が好きなんだ」

ジェイドの疑問にガイはスラリと返した。

……………卓上旅行…。

「なあイブキ。卓上旅行って何だ？」

「簡単に言えば、ひたすら妄想してニヤニヤする事だ」

「……………ガイ」

「待てやコラ！誤解を招くだろっが！」

ルークが尋ねてきたので分かりやすく簡単に説明したのに、ガイが怒鳴りつけてきた。

「……！大佐、アレを」

ティアが何かを発見した様だ。

ティアが指示した方を見ると、一台の馬車がセントビナーに入ろうとしていた。

当然、オラクル兵はそれを止め、何所の者が確認を取った。

「エンゲーブの者です。ご注文頂いた食材をお届けにあがりました」

「……苦勞」

「後からもう一台参ります」

そして馬車は街に入って行った。

……ぎゅるッ……

何故荷物を確認しようとしなんだ！普通するだろう！これだと何時か痛い目にあうぞ！

俺は騎士団の今後に不安を覚えた。

「これは使えますね」

「……マジで？」

「マジです」

「ええー……」

ジエイドはとても良い笑顔で答えてくれた。

「エンゲーブへの街道を少し遡ってみましょう」

「そうですね。行きましょー」

イオンが後ろに延びている道を見て提案した。  
皆はそれに賛成し、足を進めた。

「お、俺を置いて話を進めるなっ！！」

ただ一人、話に付いていけなかったルークは喚いた。  
それを見た俺は簡単に説明した。

「つまり、次に来る馬車に乗せてもらって秘密裏に街へ入ろうって  
事だ」

「…成程」

「分かったらさっさと行くぞ」

「おう！」



結果、簡単に入れた。

しかも乗せてくれた人物がルークとティアとジェイドとイオンの知り合いだった様で親切に匿ってもらった。

名前は：確かローズと言っていたな。器のデカイおばさんだった。

「で、アニスと言う娘はここにいるんだな？」

俺はジェイドに確認した。

「マルクト軍の基地で落ち合う約束です。……生きていればね」

「態々付け足すなって。気が落ちるから……。それよりその基地って所に案内してくれよ」

ガイが呆れながらジェイドに言った。

「だな。さっさと行こうぜ」

「オラクルに見つからないよう、派手な行動は慎んで」

「分かってるよ！一々うるせーな」

ルークはティアに注意され、ルークはウザがった。

「何だ？尻に敷かれてるなルーク。ナタリア姫が妬くぞ？」

そんな二人のやり取りにガイがニヤニヤしだした。

「ばっか…テラの前でティアをおちよくつたら…」。

「「……………」」

ティアとテラは冷たい眼差しでガイを睨んで…

「おせじー…」

ガイの両側から腕を絡めて密着した。  
道中聞いた話ではガイは女性恐怖症らしい。  
そんな持病を持つガイに美女二人が密着してくる等、ある意味拷問に近い。

「くだらない事を言うのは止めて」

「私の妹を茶化さないでくれるか？」

ガイは顔を真っ青に染め、全身をガタガタと震えさせた。

「わ、分かったから俺に触れるなあ！」

ガイが叫ぶと二人はガイを離し、ガイは地に伏せた。

テラはティアとヴァンを心底可愛がってたからな。シスコン、ブラコン、過保護なのである。

私の妹弟を虐める奴は例え天が許しても私が許さん。そういう奴なのだ、テラは。

いやしかし、そうなるルークはどうなる？

ルークもティアにキツイ言葉を放ったりして制裁の対象だと思うんだが。

「ルークは良い。子供だから」

だそうだ。

テラは子供にも甘かったな。

確かにルークは考えや態度が子供だからな…。

「って何時までここに居るつもりだ。早く行くぞ」

「そうですね。早く行きましょう」

マルクト軍の基地は街の中央に存在していた。

マルクト軍か……やっぱり良い思いはしないな。

俺達は中に入り、兵士に案内された場所に入ると、誰かが口論していた。

「ですから父上！オラクル騎士団は建前上、スコアラ預言士なのです！彼らの行動を制限するには皇帝陛下の勅命が……」

「黙らんか！」

「お取り込み失礼します」

怒号が飛び交う中、ジェイドはそんなの関係無いと言わんばかりに割って入った。

「ネクロマンサー、ジェイド……」

「おお！ジェイド坊やか！」

いい歳をした白髪の男性軍人と小柄で白い髭が身体全身を隠す程長い老人がジェイドに反応した。

「ご無沙汰しています。マクガヴァン元帥」

ジェイドは老人…マクガヴァンに小さく礼をした。

「僕はもう退役したんじゃ。そんな風に呼んでくれるな」

それからジェイドとマクガヴァンは他愛も無い話をしだした。

……やはり軍は嫌だな。

「テラ」

「ああ…分かった」

テラは俺の気持ちを察してくれてすぐに了承してくれた。

俺はそつと基地を出た。

「ふう…」

やはり軍事基地なんて所は嫌いだ。

いやそれは良い。

俺が嫌いなのは兵士だ。特にマルクトは。

ホドを消し去った奴らは。

俺は基地から離れ、色鮮やかな花壇の近くに腰を下ろし、皆が出て来るまで眺める事にした。

『見てイブキ！綺麗な花畑よ！』

『引っ張るなって。少し落ち着け』

『もう、何でイブキは喜ばないの？』

『男が花で喜ぶか』

『えー？だって私が渡した時は喜んでたじゃない』

『いや、アレは…』

『…？』

『…何でも無い』



『ええー！教えてよ！』

『やだね。シオンになんか教えるか』

『何よそれー！あ！待ってよ！』

「キ、 ブキ、 イブキ！」

「……あ？」

「起きたか？」

目を開けると、テラが立っていた。  
その後を見ると、ルーク達が立っていた。

「……寝ていたのか」

「ああ。随分と良い顔してな。良い夢でも見たのか？」

「……ああ。懐かしい夢を……な」

俺は立ち上がり、身体を伸ばした。

「で、アニスには会えたのか？」

「いえ、先にカイツールに向かったようです」

「そうか。なら行こうか」

俺達は街を出ようと出口に向かった。

「隠れて！オラクルだわ！」

ティアが出口を指して口にした。

俺達はすぐに物陰に隠れて出口を見た。

出口には一般兵とは圧倒的に違う雰囲気醸し出している四人がいた。

「導師イオンは見つかったか？」

四人の一人、タルタロスで襲ってきた金髪の女性が一般兵に尋ねた。

「セントビナーには訪れていないようです」

どうやら俺達の事は完全にばれていないらしい。

「イオン様の周りにはいる人達ママを大けがさせた……この子達が教

えてくれたの。アリエツタはあの人達の絶対に許さない」

同じくタルタロスで襲ってきた人物、ライガに乗った少女、アリエツタと言う娘が憎らしげに言う。

ママ？こいつらがそんな事を？

俺はティア達の顔を見たが、聞こえていなかったのか、ただ耳を立てていた。

俺は気になりながらも、再度外を見始めた。

「フォンマスターガードイアン導師護衛役がうるついでいたってのはどうなのさ？」

もう一人、緑の髪で仮面を被った少年が尋ねた。

「マルクト軍と接触していた様です。最もマルクトの奴らめ、機密事項と称して情報開示に消極的でした」

アニスの事も分かっていないようだ。

「俺があこのネクロマンサーに遅れを取らなければ、アニスを取り逃がす事もなかった。面目ない」

巨体でまるで獅子を思わせる大男が頭を下げた。  
言っている事から察するに、ジエイドと戦って敗れたのだろう。

俺が敵を観察していると、何所からか甲高い笑い声が聞こえてきた。

「ハーンツハツハツハツハッ！ だーかーらー言ったのです！ あの性悪ジエイドを倒せるのは、この華麗なる神の使者。オラクル六神将『薔薇のデイスト』だけだと！」

「……………」

俺は静かにジエイドを見た。

ジエイドは一見普通に見えるが、俺には見えてしまった。  
ジエイドが槍を投擲しようとして踏み止まった所を。

そして声の正体が空を飛ぶ椅子に座って空からやってきた。

一言で言うのなら、エリマキトカゲだ。

「『薔薇』じゃなくて『死神』でしょ」

仮面を着けた少年が呆れた。

「この美しい私がどうして薔薇でなくて死神なんですか!？」

……ナルシスト……ガイと同じか。「俺は違う!」黙れ、拒否権はない。

「過ぎた事を言っても始まらない。どうするシンク?」

「……おい」

金髪の女性が変態ナルシストを無視して話を進めた。

「エンゲープとセントビナーの兵は撤退させる」

シンクと呼ばれた仮面少年も無視して返事を返した。

「しかし！」

大男がシンクの進言に異を唱えた。

「アンタはまだ怪我がまだ完全には癒えていない。ネクロマンサーに受けた傷は致命傷だったんだ。それをアイツがここまで治したんだ。暫くは大人しくしてたら？それに奴等はカイツールから国境を越えるしかないんだ。このまま駐留してマルクト軍を刺激すると、外交問題に発展する」

「おい無視するな！」

シンクはつらつらと指摘して大男を説得する。

致命傷をたった一日で？

そんな事、譜歌でも出来ない。

そもそも致命傷を治す事など、アイツしか…。

「カイツールでどう待ち受けるかね…。一度タルタロスに戻って検討しましょう」

金髪の女性はその場を纏め、大男に目で合図した。

「伝令だ！第一師団撤退！」

大男が兵士に伝え、四人は去って行った。

第一師団…：命令を出せるって事は、大男が師団長…。ならあの大男が黒獅子ラルゴか。

なら金髪は魔弾のリグレットか鮮血アッシュのどちらか…：名前からしてリグレットか。

おいおい、六神将が集結ってか？



「キーーーーー！この私が美と英知に優れているから嫉妬しているんですねーっ！」

……………可哀想に。

結局最後まで相手にされなかったんだな。

デイストは怒り叫びながら何処かへと飛んで行った。

「しまった…。ラルゴを殺り損ねましたか」

物陰から出て、ジェイドが舌打ちをしながら悔いた。

「あれが六神将か…。中々強そうじゃないか」

テラが面白い物でも見つけた様に笑った。

「六神将って何だ？」

ルークがジェイドに聞いた。

「オラクル幹部の六人の事です」

「あれが六神将…か」

「おや？貴方はオラクルに居たのではないのですか？英雄と呼ばれていたんでしょう？」

ジェイドが少し驚いた様に目を丸くした。

「英雄かどうか知らんが、何故か顔を合わせなかつてな。名前は知っているんだが、見た事も無かつたし、そもそも女が二人もいたこと自体知らなかった。ヴァンも教えてくれなかつたし」

「ん？何でヴァン師匠が出て来るんだ？」

ルークがヴァンの名前に反応した。

「ん？ああ。黒獅子ラルゴ、死神ディスト、烈風のシンク、幼獣のアリエッタ、魔弾のリグレット、鮮血のアッシュ。この六人はヴァンの直属の部下なんだ」

「ヴァン師匠の！？」

ルークはスッゲーと尊敬した。

「けど、六神将が動いているなら、戦争を起こそうとしているのはヴァンだわ」

ティアが微かに怒りを込めて呟いた。

……ティア。どうしたんだ？  
ヴァンに対してそんな感情を抱くなんて……。

「六神将は大詠師派です。モースがヴァンに命じているのでしょ」

ジェイドはそう推測するが、それにティアが猛反発した。

「大詠師閣下がそのような事をなさる筈がありません！極秘任務の為、詳しい事を話す訳にはいきませんが、あの方は平和の為の任務を私にお任せ下さいました！」

「ちょっと待ってくれよ！ヴァン師匠だって、戦争を起こそうなんて考えるワケないって！」

「兄ならやりかねないわ」

ティアは肉親に向けられない様な感情で口にした。

「何だと！？お前こそモースとか言う奴のスパイじゃねえのか！？」

ルークは恩師を侮辱されてキレてしまった。

ルークはティアに近寄り襟を締め上げようとした。

「止せルーク！お前もだティア！少し落ち着け！」

俺は咄嗟にルークとティアの間に入り、ルークの手を掴んで止めた。

「今は言い争う場合じゃないだろう！アニスに会ってキムラスカに向かって戦争を回避する！どちらが正しいとかは今はどうでも良いだろう！」

少し怒気を込めて二人を睨みつけ黙らした。

「……そうね。ごめんなさい」

「……わかった。だけど、師匠はそんな事考えてねえ……」

二人は素直に引っ込んでくれたが、この暗い空気は引っ込んではおくれなかった。

「終わったみたいですねえ。ではそろそろカイツールに向かいましようか」

ジェイドがニコニコして発言をした。

「アンタ、イイ性格してるなあ……」

ガイは呆れてしまった。

はあ……先が思いやられるな。

それより、ティアとヴァンの間に何があったんだ？  
聞こうにも、俺が入って良いものか……。

「我儘をいってすみませんが、少し休ませてくれませんか？」

セントビナーを出ようとした時、イオンが申し訳なさそうに頼んできた。

「ん？お前、また顔色が悪いな」

ルークがイオンの顔色を覗って心配した。

「すみません」

イオンは更に申し訳なさそうになった。

「手間のかかる奴だな。おい、宿に行こうぜ」

ルークは文句を言いながらもその実、心配して皆に声を掛けた。

「おや？案外優しい所があるのですね」

「それがルークの良い所って奴さ。使用人にもお偉いさんにもわけ隔て無く横暴だしな」

……それは良い所なのだろうか。  
ルークが優しいと言うのはそうだが。

「う、うるせえ！」

ルークは顔を赤くし頭を掻いた。

「いつこれは！？まさか！？」

「どうしたテラ？」

テラがルークを見て衝撃を受けていた。

「これはまさか……ツンデレ！？」



ずるっ…

「は、はあ!？」

「物語でしか見た事がない、幻の態度…それが今目の前に!」

「あ、あのー…テラさん？」

「欲しい…アレを弟に欲しい…じゅる…」

「先ずは涎を拭け!そしてアレとか言っな!ほら行くぞ!」

「あっ!まつ待ってくれ!」

一体誰だ!?! テラにそんな物を読ませたのは!?!  
コスモスか!?! ユリアか!?! もしくはテアか!?!

俺は今後、ルークがテラに狙われるのではないかと心配し始めた。

「そう言えばイオン様。タルタロスから連れ出されていましたが、どちらへ？」

宿屋の一室、ジェイドは疑問に思った事をイオンに尋ねた。

「セフィロトです」

セフィロト、だと？  
何故セフィロトに…。

「セフィロトって？」

「大地のフォンスロットの中で最も強力な十箇所の事よ」

「星のツボだな。セルバードイクル記憶粒子フォニムって言う惑星燃料が集中してて音素が集まり易い場所だ」

ルークの疑問にティアとガイが説明した。

「しっ知ってるよ！物知らずと思って立て続けに説明するな」

ルークは馬鹿にされたと思って、口を尖がらせた。

「ニヤリ…」

「ひっ…！」

その反応が可愛かったのだろう、テラの目が光りルークを捉えた。それに気付いたルークは本能で危機感を覚えて縮こまった。

「セフィロトで何を？」



「おまつ！そんなモン喰らってたのか！？」

「ええ。御蔭で身体能力が落ちて落ちて…」

「いやいや！それでアレか！？お前もたいがい化け物だな！？」

「おや？その口だと、貴方も喰らった事が？」

「ああ、一度だけな。アレは地獄だった。動けない俺を良い事に、テラ達が俺を…俺を…！駄目だ、思い出すな！」

「アレは思い出してはいけないんだ！」

「動けない俺を剥いで為すがままに貪り喰われた事などおおおお！！」

「ああ止めろ…俺はもう疲れたんだ…頼むからこれ以上搾り取らないでくれ…」

「「「「「……」「」「」」

「アレは気にしないでくれ……／＼／＼」

「え、ええ……見なかった事にします……」

その後すぐに休む事になり、俺はテラに引きずられ、各々の部屋に戻りその日は幕を閉じた。

「ふっふっふ……さあ覚悟は良いか？」

「ちよっ、やめっ……！」

「いただきます」



浮んでくる謎（前書き）

いや、なんか最近調子が出ない。

とにかく更新を続けるしかないな。

そんなわけでござい。



## 浮んでくる謎

翌日、ティアに起こされて合流場所のカイツールに向かった。

起こされる時に、ティアにこつ酷く説教されたのは忘れようにも忘れられない。

と言うか俺は被害者だ。

なのにティアは不謹慎だとか破廉恥だとか俺だけに言って……いくら裸でテラと一緒にベッドに入ってたからってそんなに怒らなくても良いだろうに。

「……危ね」

「馬鹿者、お前がこけたら私が濡れる」

「だったら下りてくれないか？」

「断る」

そう言うテラは、現在俺の背中の上に乗っている。

実はカイツールへ向かう道、アグゼリユス周辺の道なのだが、そこが災害で通れなくなってしまうっており、フーブラス川を横断するしかなく、そこを渡っているところだ。

しかし、テラが濡れるのは嫌だと駄々をこねてしまい、強制的に俺が背負う事になってしまった。

「ここを超えればすぐにキムラスカ領なんだよな？」

「ああ。フーブラス川を渡って少し行くと、カイツールって言う街がある。あの辺りは、非武装地帯なんだ」

「めんどくせえ〜…」

ガイの説明にこれからの事を考えたのか、ルークは肩を落とした。

「ご主人様、頑張るのです！元氣出すのです！」

「おめーはづぜーから喋るなっつーの！」

ルークを励ましたミュウは蹴り飛ばされてしまった。

「ルーク！ミュウが可哀想よ！」

「知らねえよ！」

ティアはミュウを受け止めてルークに起こったが、ルークは明後日の方向を向いてしまった。

「ルーク、面倒に巻き込んですみません…」

「うっ………」

ルークはイオンに謝られ、言葉を詰まらせた。

ルークは謝られたら大抵は許す。

と言っより責められないようだ。優しい故に…。

「さあ、ルークの我儘も終わったようですし行きましょつか」

「我儘って何だよ!」

ジェイドに叫ぶルークだが、ジェイドは無視して足を進める。

「無視すんなコラ!」

どこの不良だよ…。

「ルーク、今は落ち着け。あんまり腹立ててたら逆に疲れるだけだぞ」

「ぐっ……ちえっ!」

ルークはイライラを抑えつけ、先に歩きだした。

はあ……先が思いやられるな。

ジェイドはキムラスカに向かうが、それはルークを届けるのではなくて、イオンを無事に届けるのだから、ルークの我儘に付き合ってもらえない。

対してルークは王族育ち故にか、横暴で自己中心的な考えしか持たない。

まあ、今回もだがルークには我慢してもらおうしかない。戦争が起きるか起きないかの瀬戸際なんだしな。

もっとも、俺はルークを死なせるワケにはいかないんだがな。

変えて見せる。

ルークを犠牲にせず、預言を変えて見せる。

「テラ、お願いがある」

「何だ？」

俺は走り回っている。

「今すぐに下りてくれ。若しくはテアと変わってくれ」

そしてジャンプしては避け、ジャンプして避けの繰り返し。

「嫌だ」

「この鬼畜がああー!!」

今俺は魔物共に追いかけられている。

川を渡っていたら、前にカエルの魔物や亀の魔物等々が現れて戦闘になったのだが、テラだけ俺から下りずに背負われたままだった。

俺が手を離しても手と足でしがみ付いてきて下りてくれない。さらにそこに魔物が攻撃してくるのだ。

俺を虐めてるとしか思えない。

「兄さん！」

ティアが譜術で援護してくれる。

「テラ、いい加減にしろ！これ以上駄々をこねるのならもう相手はしない！」

「ふん、どうせ欲に負ける　　ッ！」

突如、テラの目が獣の目になった。  
そしてテラは俺を思いつきり突き飛ばし、後ろへ飛び退いた。

「なん　　」

ドガッ！！

すると、俺とテラがいた場所に黄色く四本の尾を持った巨大な獣が落ちてきた。

チツ！テラに気を取られ過ぎて気付かなかった！

俺はすぐさま刀を転送し、鞘から抜いた。

「……………ライガッ！」

ティアが驚愕した。

その声に全員が気付き、身構えた。

「……………後ろからも誰か来ます」

ジェイドの言葉通り、後ろから小さな足音が聞こえてきた。



「逃がしません……！」

それは幼獣のアリエッタだった。

チツ、六神将のお出ましか。

いくら相手が幼女だとしても、いや幼女だからこそ油断できない。  
僅かその歳して六神将だ。  
どれ程の実力が計り知れない。

「アリエッタ！見逃して下さい！あなたなら分かってくれますよね  
？戦争を起こしてはならないと！」

イオンが叫び、アリエッタを説得しようとするが、アリエッタは首  
を振った。

「イオン様の言う事……アリエッタは聞いてあげたい……です。で  
もその人たち、アリエッタの敵！」

アリエッタは確かな怒りを俺達に向けてきた。

「アリエッタ、彼らは悪い人ではないんです！」

「ううん……悪い人です。だってアリエッタのママを……殺しかけたもん！」

アリエッタは泣きながらその憎悪をぶつけてきた。

幼女の筈なのに、その怒りは大人のそれより強大だった。

「何言ってるんだ？俺達が何時そんな事……」

しかし、ルーク達はまったく身に覚えが無いようだ。

「アリエッタのママはお家を燃やされてチーグルの森に住み付いたの……。ママは仔共たちを……。アリエッタの弟と妹たちを守ろうと

してただけなのに！

「まさか、ライガの女王の事？でも彼女、人間でしょう？」

ティアは驚きを隠せず、疑問を抱く。

……まさか……。

「イオン、もしかしてあの娘はライガに……」

「はい……彼女はホド戦争で両親を失って魔物に育てられたんです。魔物と会話できる力を買われて、オラクル騎士団に入隊しました」

ホド……。

俺がすっかりしていれば……あの娘の両親も……！

「じゃあ俺達が倒したライガが……」

ルークが真相に気付いた。

「それがアリエッタのママ……！お兄ちゃんのお蔭で元気になったけど……アリエッタはあなた達を許さないから！地の果てまで追いかけて……殺しますっ！！」

アリエッタは構えた。

それに合わせてライガも戦闘態勢に入った。

どうする……この様子じゃ、アリエッタも戦えるようだし……俺がライガでテラ達にアリエッタを頼むか？

しかし、あの子は俺のせいで……そんな娘に……！

「 やっちゃえ！！ 」

アリエッタが叫んだ刹那……

大地が揺れた。

それも大きい揺れだった。

俺達の足元に幾つもの亀裂が走った。

「チイツ！こんな時に！……なっ！？」

俺は咄嗟に後ろに下がった。

何故なら足元に走った亀裂から、紫の霧が噴き出してきたからだ。

「まずい！！瘴気だ！」

「いけません！瘴気は猛毒です！」

それを聞き、皆は口と鼻を塞ぐ。

しかしそれでは瘴気を防げない。

徐々に身体に侵入してきて俺達の身体から僅かながらも力が抜けていく。

「きゃっ！ー！」

「ッ!？」

小さな悲鳴が聞こえ、俺はアリエッタの方を向いた。

アリエッタは地面に倒れており、その足元からは瘴気が噴き出していた。

駆け寄っていたライガも瘴気に当たり倒れていた。

「吸い込んだら死んじゃうのか!？」

「長時間、大量に吸い込まなければ大丈夫。兎に角ここから逃げ…」

逃げようとしたティア達の前に亀裂が走り、瘴気が通さんと言わんばかりに噴き出してくる。

前も後も逃げ道を塞がれてしまった。

「どしすねば…!」

「ティア」

「兄さん？」

「詠え」

「え？…！兄さん！？」

俺は瘴気の中に突入した。

後ろでティアが叫んでいるがそれに返す余裕は無い。

いくら俺でも瘴気等の毒では一般人と同じだ。

だったら子供は？

尚更酷いだろう。

故に俺は走る。

自分の事は考えずに。

「おい！しっかりしろ！！」

俺はアリエッタに駆け寄り、安否を確認した。

息は荒いが生きています！  
これならまだ！

「エーテルドライブ・リフレッシュー！！」

俺はエーテルですぐに毒を浄化した。

これで先ずは安心の筈だ。

チャリン…

「っ………？」

アリエッタの首から、銀色の十字架で真中で赤い宝石が埋め込まれているネックレスがかかっているのが見えた。

これは……アイツの！？



それには見覚えがあった。

嘗て俺が生きていた世界で、強敵であり弟の様な存在だった奴の物  
…。それに酷使していた。

「まさか……な」

そんな訳無いと考えていたら、ティアの譜歌が聞こえてきた。

ユリアに似た美しい歌声…。

ティアを中心に陣が発現し、淡い光の粒子が現れた。

「譜歌を詠ってどうするつもりですか？」

「待って下さいジェイド！この譜歌は……ユリアの譜歌です！」

やがてティアを中心に広がっていた陣から透明な壁が現れ、俺達を覆った。

そして一瞬強烈な光が放たれた。

光が消えると、瘴気は綺麗に消えていた。

「瘴気が消えた…!？」

ガイが驚くのも無理はないだろう。

譜歌を詠っただけで瘴気が消え、揺れが止むなどある筈が無いのだから。

しかし、この譜歌はそれを可能にする。

「瘴気が持つ固定振動と同じ振動を与えたの。一時的な防御壁よ。長くは持たないわ」

ティアは驚いている皆に説明をした。

つまり、中和していると言う事だ。

「噂には聞いた事があります。ユリアが残したと伝えられる七つの

譜歌……。しかしあれは暗号が複雑で詠みとれた者がいなかったと……」

「詮索は後だ。ここから逃げないと」

「……………そうですね」

ガイの言葉に頷き、俺に近付いてくる。

そして槍を出し……………

「……………何故庇うのです？」

俺とテラがジェイドを阻んだ。

俺は刀でジェイドの喉に突き立て、テラは雷を右手に纏い、背中に爪を立てていた。

「彼女を生かしておけば、また命を狙われます。ならここで始末しておいた方が楽でしょう」

「黙れ。俺はこの娘を生かす義務がある」

刀に入れる力を強めた。

「それに、幾ら敵だからと言って、子供を殺す事には賛同出来んな」

テラも背中に爪を近づける。

「ジエイド、見逃して下さい」

イオンがジエイドに頼む。

「アリエッタは元々僕付きのフォンマスターガーディアン導師守護役なんです！」

「……そう言っと思ってましたよ」

ジェイドはフツと笑いながら槍をしまった。

「一応軍人なので形に従ったまです」

「ははは……」

ガイはそんなジェイドに苦笑した。

俺も刀をしまい、テラも雷を収めた。

「瘴気が復活しても、当たらない場所に運ぶ位は良いだろうっ？」

「ここで見逃す以上、文句は無いですね」

ガイは俺に笑いかけて合図してきた。

ガイ………すまない。

俺はアリエッタとライガを担ぎ、先の揺れで何の影響も無い場所に運んだ。

ライガを担いだ時に皆驚いていたが、何か変だったんだろうか？  
これ位どうって事無いんだがな。

「そろそろ限界だわ」

ティアは譜歌の効果が切れ始め、忠告してきた。

「行きましょっ」

ジェイドの言葉に従い、俺達はフーブラス川を出る事にした。

「……………」

「……………イブキよ」

テラが肩に手を置いてきた。  
俺はテラの顔を振りかえった。

「何だ？」

「……あまり自分を責めるな」

「……………」

「あれはお前が悪いんじゃないだからな」

そう言うとテラは先に歩いて行った。

分かってるぞ……。

けど……俺はそんな簡単に割り切れないんだよ……。

「少しよろしいですか？」

川を出て少し経った頃、ジェイドが皆を呼びとめた。  
いや、ティアを呼び止めた。

「んだよ？もうすぐカイツールだろ？早く行こうぜ」

「ティアの譜歌の件ですね」

イオンがジェイドの考えを察する。

「ええ、前々からおかしいとは思っていたんです。彼女の譜歌は私の知っている譜歌とは違う。しかもイオン様によれば、これはユリアの譜歌だと言つではありませんか」

「はあ？だから？」

ルークはそれがどうしたと言わんばかりに顔をしかめた。



「ユリアの譜歌ってのは特別なんだよ。そもそも譜歌ってのは、譜術における詠唱部分だけを使って旋律と組み合わせた術なんだ。ぶっちゃけ、譜術程の力は無い」

「ところが、ユリアの譜歌は違います。彼女が遺した譜歌は譜術と同等の力を持つそうです」

ガイとイオンが説明するが、ルークはチンプンカンプンだった。

しかし……ユリア自身が使ったら森が綺麗に吹き飛ばぶぞ。

「……私の譜歌は確かにユリアの譜歌です」

「ユリアの譜歌は、譜と旋律だけでは意味をなさないのではありませんか？」

「そうなのか？ただ詠えば良いんじゃないか？」

ジェイドはそれでも解せないと、ティアに説明を求める。

ルークはただ詠えば発動出来ると思っていた様で、少しだけ驚いていた。

「譜に込められた意味が象徴を正しく理解し、旋律に乗せる時に隠された英知の地図を作る」

ガイが呟くように口にする。

「は？意味わかんねえ」

「……と言つ話さ。一子相伝の技術みたいなものらしいな」

「え……ええ、その通りよ。良く知ってるのね」

「昔、聞いた事があってね」

ガイは慌てて誤魔化す様にそっぽを向いた。

……ヴァンか。

「あなたは何故、ユリアの譜歌を詠う事が出来るんですか？誰から学んだのですか？」

ジェイドの質問に、ティアは俺に視線を寄こした。

俺は視線で教えてやれと伝えた。

「……それは私の一族がユリアの血を引いているからです……」

「ユリアの子孫……なる程……」

「って事は、師匠もユリアの子孫かっ!？」

ルークは自分の師がそんな人物と知り、子供の様な笑顔になった。

……ユリアの子孫でそんなに驚くのなら、ユリア自身が生きてるっ

て知ったらどうなるんだろうな…。  
多分、世界的問題になるかな。

「ありがとうございます。いずれ機会があれば、譜歌の事を詳しく覗きたいですね。特に『大譜歌』について」

ジエイドが眼鏡をクイツと直し、興味の眼差しをティアに向けた。

おいコラ。人の大事な妹をそんな眼で見るな。

「『大譜歌』？なんだそれ？」

「ユリアがローレライと契約した証であり、その力を振るう時に使ったという譜歌の事です」

ルークの疑問にイオンが優しく教える。

ローレライか…。

約束はちゃんと果たしてやるからな。

「……そろそろ行きましょう。もう疑問にはお答え出来たと思いま  
すから」

「そうですね」

俺達はもう目の前に見えるカイツールへと歩き出した。

「……やっと見つけたぞ、イブキ」

そう呟く男の背中にはアリエッタが背負われていた。

男は銀の髪に白い肌を持ち、灰色のマントを着けていた。

「けど人形は一緒じゃなかった」

その男の隣でライガを背負った女性が不機嫌そうに嘆いた。

女性は同じく銀の長髪に褐色の肌で、露出が激しい機械的なスーツを着ていた。

「そう嘆くな。あいつ等は二体で一つなんだ。必ず合流するぞ」

男は口を歪ませアリエッタを背負い直した。

「もうすぐだ…。もうすぐ始まる。ふふ…ふははは！」

男は笑い声を上げ、女性と共に立ち去って行った。

弟子との再会（前書き）

遅い…。

急ピッチで仕上げたので変かも…。

## 弟子との再会

### 国境の砦カイツール

ここまで、魔物にも遭遇せずに無事辿りつけた。

後は国境を越えてバチカルに向かうだけ。……いや、ケセドニアにも寄るんだっとな。

「あれ、アニスじゃねえか？」

ルークが指をさした方を見ると、黒髪のツインテールで、ピンクの教団服。それから背中に不気味な人形を背負った少女がいた。

少女は国境の見張りとなにやらもめていた。

「証明書も旅券も無くしちゃったんですう。通して下さい。お願いしますすう」



なんとまあ。アレで引つ掛かる男はいないぞ。いたら変態だ。

「残念ですが、お通しできません」

予想通り、効果なし。あつたらあつたで大変だ。

「……ふみゆ」

落ち込んでまでもぶりっ子かい。よくやるな。

「…月夜ばかりと思うなよ」

脅し！？あんな小さな子が脅し文句！？恐っ！

少女は此方へと見張りから方向を反転させて歩き出した。

「アニス。ルークに聞こえちゃいますよ」

いやいやいや。イオンさんや、もう聞こえてるって。

「あ？きやわくん？アニスの王子様？」

ズルツ………変わり身早いなおい！

少女、アニスはルークに向かってダイブ。そのまま抱き付いた。

「………女ってコエー」

「いや、アレは例外だ………たぶん」

あれ？ガイの言った通り女って怖い？

X - B U S T E R からの D - T E N E R I T A S、グランドクロス  
を百連発、インディグネイションを五連発、殺撃舞荒拳の嵐……。  
良く生きてた、俺。

「ルーク様？ご無事で何よりでした〜！もう心配してました〜！」

「こっちも心配してたぜ。魔物と戦ってタルタロスから墜落したって?」

「そうなんです…。アニス、ちょっと怖かった…。…てへへ」

嘘だ。絶対嘘だ。俺の何千年と言っ感がそう言ってる。

「そうですよね。『ヤロー、てめー、ぶっ殺す!』って悲鳴上げてましたものね」

それ悲鳴じゃない!

「イオン様は黙っててください!」

こら、それが導師に向かって言う言葉か。……人の事言えないか。

「ちゃんと親書だけは守りました。ルーク様?誉めて?」

「ん、ああ、偉いな」

ルークはアニスの頭を撫でる。しかも優しい表情で。

……ルークはロリコンか？

「きゃわん？」

ええい！いい加減この絵表示を止めろ！苛立つ！

「無事で何よりです」

「はわー？大佐も私の事心配してくれましたんですか？」

馬鹿野郎。そんなわけないだろ。

「ええ。親書がなくては話になりませんから」

ほらな。この男はそう言う奴なんだ。

「大佐って意地悪です…」

今回ばかりは同情してやろう…。するだけだが。

「ところで、どうやって検問所を越えますか？私もルークも旅券がありません」

ティアが話を変えた直後、上から気配が飛んできた。

「ここで死ぬ奴にそんなものはいらねえよ！」

「ッ！ルーク！後ろに跳べ！」

「へ？うあああ！？」

その気配はルーク目掛けて落ちてきて剣を振るった。

ルークは何とか後ろに転がり、剣をやり過ごしたが、そいつがルークに追い打ちをしようとした。

が、その一撃は間に入った男に止められた。

「…………ヴァン、どけ！」

その男は俺の教え子で、嘗てユリア・シテイで世界を救う約束をした相手、ヴァンデスデルカ・ムスト・フェンデであった。

髭が生えていて老けて見えるが、あれは間違いなくヴァンだ。

「……どう言っつもりだ。私はお前にこんな命令をした覚えは無い。退け！」

「…………チッ」

アッシュと呼ばれた赤髪の男は、渋々と剣を鞘に納めて、何処かへと走り去っていった。

どうでもいいが、そっちは行き止まりだぞ。

「師匠！」

ルークは起き上がり、ヴァンを見た。

「ルーク。今の避け方は不様だったな」

「ちえっ、会っていきなりそれかよ……」

ルークはそれでも嬉しそうに笑って立ち上がった。

「ヴァン！」

「お、おい！ティア！」

ティアがいきなりナイフを取り出し、ヴァンに向けた。

「ティア。武器を納めなさい。お前は誤解をしている」

「誤解…？そんな言い訳が「兄に武器を向けるな！」はぎゅっ！？」

何がはぎゅっだ。

俺はティアの頭に拳骨を落とした。

金属製の腕は痛いぞ。

「ティア…俺はそんな妹に育てた覚えは無い」

続いてティアの両頬を抓って伸ばす。

「いひゃい…いひゃいはら…ほへんはひゃい…」



「分かれば宜しい」

ぱっと手を離してあげた。

ティアは涙目になりながら頬をさすった。

「まったく…。ヴァン、一体俺がいない間にどう言う教育をしてきたんだ」

「……は？ま、まさか…イブキさんですかっ!？」

なんだ。気付いていなかったのか。歳は取らない筈なんだがな。

「……イブキさん」

「ん？」

ってあれ？何時の間に俺の目の前に？そして何で両肩が砕けそうな

程強く握るの？痛いつて。

「この……大馬鹿者があああああ……！！！」

ゴチイイイイン！！

「おおっ！？」

ヴァンは雄たけびを上げながらヘッドをしてきた。つて、いてええええええええええ！！！！

「な、何しやがる……？」

「黙らっしやいっ！私とティアと母上にどれ程心配を掛けていたと思っっているのですか……？」

「ぐっ……」

「連絡一つよこさないで、母上はいつも浮かない顔をしていたのですよー!」

「そ、それは……色々と忙しくて……」

「それを母上の前でお話しますか?」

「うめんなさいでしたー!!!」

全力で土下座。

言えるワケが無い。言おうとした瞬間、インリイノクターン、フェイタルサーキュラー、シアリングソロウ、フラムルージュ、クラスターレイド、ジャツジメント、グランドクロス、イノセント・シャイン、フォーチューン・アークのウルトラコンボが炸裂するぞ。

「兎に角、宿に入りましょう。話す事もありますし」

「おう……。と言う訳で、皆宿に行くぞ」

何とも言えない空気の中、皆はヴァンに続いて宿に入っていった。

「何故ヴァン兄さんは戦争を回避しようとなさるイオン様の邪魔をするの？」

「やれやれ、まだそんな事を言っているのか」

ティアの疑いの眼差しにヴァンは呆れた。

「違うよな、師匠！」

「でも六神将がイオン様を誘拐しようとする……」

「落ち着けティア。そもそも、私は何故イオン様がここにいるのかすら知らないのだぞ」

ヴァンは興奮してきたティアを宥めて、言葉を続ける。

「教団からはイオン様がダアトの教会から姿を消したとしか聞いていない」

「すみません、ヴァン。僕の独断です」

イオンが頭を下げた。

「こうなった経緯をご説明いただきたい」

「イオン様を連れだしたのは私です。私をご説明いたしましょう」

ジェイドがイオンの代わりにこれまでであった事をヴァンに説明をした。

「…成程。事情はわかった。確かに六神将は私の部下だが、彼らは大詠師派でもある。おそらく、大詠師モースの命令があったのだろう」

顎に生えた立派な髭を摩りながら推測していく。

モースか…。俺のダアトの知り合いからはあまり言い噂を聞かないな…。

曰く、自分の利益しか考えない下衆らしい。

「なるほどねえ」

ガイは合点がいった様な顔になった。

「ヴァン謡将が呼び戻されたのも、マルクト軍からイオン様を奪い返せって事だったのかもな」

「あるいはそうかもしれぬ。先程お前達を襲ったアッシュも六神将だが、奴が動いている事は私も知らなかった」

「じゃあ、ヴァン兄さんは無関係だって言うの?」

「いや、部下の動きを把握していなかったという点では、無関係ではないな」

なんとまあ、大人っていうか、流石って言うか……。昔から律義な奴だよ。

「だが私は大詠師派ではない」

「初耳です、主席総長」

アニスがヴァンの発言に驚いた。

「六神将の長であるために、大詠師派と取られがちだがな」

成程、確かにそうか。アニスが驚くのも分かる。

……俺？俺はユリア派だ。……どんなだ？締める所は締めて自由に楽しく生きていきましょってところだ。

「それよりティア。お前こそ大詠師旗下の情報部に所属しているはず。何故ここにいる？」

「モース様の命令であるものを搜索しているの。それ以上は言えないわ」

「第七譜石か？」

「機密事項です」

ティア、それ答えを言っている様なものだから。

「第七譜石？なんだそれ？」

ルークの発言に俺を含めヴァン以外の全員が固まった。

おいおい、何で知らないんだよ。教育係はどうした。

「なんだよ、バカにした顔で……」



「箱入り過ぎるってもなあ…」

「いいかルーク」

テラがルークに説明をし始めた。ぞつと黙っているのが嫌になったんだろうな。主に空気化に。

「第七譜石とは始祖ユリアが2000年前に詠んだ預言だ。世界の未来史が書かれている。それもあまりにも長大な預言だから、それらが記された譜石は山ほどの大きさのものが七つになったんだ。それが様々な影響で破壊され、一部は空に見える譜石帯に。一部は地表に落ちた。で、地表に落ちた譜石は、マルクトとキムラスカが奪い合いになって、これが戦争の発端になってしまった。とまあ色々説明したが、ようは七番目の預言が書いてあるのが第七譜石だ」

はい、長い説明をありがとう。お疲れ様。

「ふん」

あらま、ふ〜んで終わったよ。もうちょい反応してあげなよ。

「第七譜石はユリアが預言を詠んだ後、自ら隠したと言われている。故に様々な勢力が第七譜石を探しているのですよ」

ジエイドの言う通り第七譜石を狙う愚か者がいたな。別に未来を変えてくれるのなら渡しても良いが、世界を手に入れようとする奴にはやれんな。

「ああ、それに伴い面白い噂があるのですよ」

「噂？何だそれ？」

ルークが面白い噂とやらに喰い付いた。

噂か……ちょっと気になるな。

「第七譜石には悪魔あり」という噂です」

「ぶっ!?!」

「悪魔?」

ちよ、ちよつと待て。あ、悪魔……?そ、それって……。

「はい。なんでも、第七譜石に近付いた者は、そこにいる悪魔に喰われるらしいのです」

「く、喰われるって……冗談だろ?」

「いいえ。過去に、第七譜石の手掛かりを見つけたマルクト軍が一個中隊で探しに行かせたところ……」

「……どうなったんだ?」

ジェイドは眼鏡をクイッと直して、溜めてから言った。

「……ほんの数人は帰ってきたのですが、後は全員殺されたらしい

です」

…………… ああ、これは確定だ。

「殺されたって…！じゃあ、帰って来た奴らは？」

「私も良く知らないのですが、聞いた話によると、その兵達は翌日第七譜石の全ての資料と共に、何処かへと消えたらしいのです」

「消えた？それまた何でだ？」

「さあ？一部では悪魔に連れて行かれたと言われていますよ。面白いでしょ？」

「おいおい……」

ジェイドの楽しそうな顔にガイは呆れて肩を落とした。

「おい」

テラが肘で突いてきた。

それから耳元に顔を近づけて来た。

「この話って、アレだろ？」

「恐らくな。……言うなよ？」

「何でだ？面白そうじゃないか」

「恐がられるから駄目だ」

「…仕方が無いな」

テラは残念そうな顔をして俺から離れた。

言われたら困るんだよ。色々と。

「…話がそれたが、兎に角私はモース殿とは関係ない。六神将にも余計な事はせぬよう、命令しておこう。効果の程は分からぬがな」

ヴァンは本題に戻して、話を進めた。

「ヴァン 謡将。旅券の方は…」

ガイが肝心な事を聞いた。

旅券が無いと、国境を渡る事が出来ないからな。

「ああ。ファブレ公爵より臨時の旅券を預かっている。念のため持ってきた予備もあわせれば……」

そこで言葉を切ってヴァンは旅券と俺とテラの顔を交互に見だした。

……ああ、そうか。

「ヴァン。俺達はもう持っているぞ。旅には必要だからな」

俺達は世界中を周る為、旅券が必要不可欠になってくるのだ。だから永久に効果のある旅券を持ち歩いているのだ。

「そうですか。それは良かった」

ヴァンは安心し、旅券をルークに渡した。

「ここで一晩休んで行くがいい。私は先に国境を越えて船の手配をしておく」

「カイツール軍港でおち合うつて事ですね」

「そうだ。イブキさん達がいるから迷う事は無いだろうが、気を付けてな」

ヴァンはガイにそう言つと、宿の出口に歩き出した。

その時、俺の横を通り過ぎた時にヴァンは言葉を呟いた。

そしてヴァンは宿から出ていった。

「…………テラ」

「分かっている。行って来い」

テラはフツと笑った。

それを見てから俺は宿を出た。

「…………で、話って？」

宿の近くに建っている建物の裏に、俺とヴァンはいた。

ヴァンは俺を通り過ぎる時、この建物の裏にきて話したいと伝えて来た。



「イブキさん。何か、世界を預言から救う方法を見つけましたか？」

ヴァンは開口一番、そんな事を尋ねてきた。

「方法か…。今の俺には、目の前の大きな預言を変えていく事しか考えられないな」

「…アグゼリユスの事ですか？」

「ああ。クローストスコア秘預言はお前も知っているだろ」

「……はい」

ND2018

ローレイの力を継ぐ若者、人々を引き連れ鉦山の街へと向かう。そこで若者は力を災いとし、キムラスカの武器となって街と共に消滅する。

「俺はこれを何としても変える。変えて戦争を起こさせやしない」

「……そうですか」

ヴァンは何故か浮かない顔になり、視線を地面に向けた。

「…では私も、ルークを守り抜きましょう」

「ああ」

「そう言えば、コスモス殿とユリア殿はどうしているのですか？」

「ん？二人なら、アグゼリユスの人達を助ける為に、マルクトの皇帝の皇帝の所に行ってるよ」

「…？私の調査によると、マルクト側からはアグゼリユスには向かえない筈ですが…」

「いや、それは普通の街道だ。もっと細かく探せば、進入経路は幾

つもある。……間に合えばの話だが」

瘴気は刻々と溢れ出てくる。その道まで塞がれたら、いくらあの二人でもキツイ。

「……これは、もしかして保険ですか？」

ヴァンはこの行動の意味を見抜いた。

「ああ。もし消滅が免れなかった場合、せめて住人だけでも……。それに、もし全員が避難出来たら、アグゼリユスにルークが向かう必要が無くなるかもしれんしな」

「……預言はそう簡単には覆せない（ボソッ）」

「……ヴァン？」

「……では、私は行きます。そろそろ行かないと遅くなりますので」

「あ、ああ……」

ヴァンは別れを告げた後、すぐに国境を越えてカイツール軍港に向かった。

「……分かってるさ。これで変えられると思って無いさ」

でも、そう思わないと気が重いんだよ。

今はもう、遠くに見えるヴァンの背中に向かって呟いた。

イブキside out

ヴァンside

イブキさんは甘い。そんな考えでは預言など覆せない。  
いや、変えることなど無理なのだ。

預言は根元から消さなければ、この人は預言から逃れられない。  
そう、預言から成り立っているこの世界を、人を消さない限りは…。

「だが、イブキさんはそれを許さんのだろうな」

あの方の事だ。こんな考えをする私を全力で止めに来るのだろうな。

「そうだったら私は…イブキさんを…師を…兄を斬れるのか…？」

……私らしくないな。もう決めたではないか。この世から預言を消滅させる為には、どんなことでも成し遂げると。

「それに、あの“二人”もいる。全ては、私の手の上だ」

イブキさん、いえ兄上。私は貴方が敵になろうとも、私は私の意志を貫く。貴方がそうしてきた様に！

遠くに見えるカイツールを眺めながら、私は決心をした。

私の中にまだ、イブキさんが私の味方になってくれると思っ  
ていても……。

ヴァンside out

イブキside

……これは一体どうゆう状況だ？

宿に帰って目にした光景はどうかしていた。  
それは……。

「ああっ！可憐い~~~~~！！！！／／／／／」

「ふにゃあああ！？／／／／／てい、ティアちゃん！！！！／／／／／やめ

てえ〜〜！！！！／／／／」

「耳っ！！すっげー！！尻尾だっ！！」

「〜〜〜ツ！！！！／／／／たまんっ！！！！／／／／」

「この女を見世物にしたら……売れる！売れるよこれは！」

「二重人格？しかしそれではこの身体の変化は……。面白いですね。取り敢えず解剖を……」

ティアが“テア”に抱き付き、耳としっぽをこねくり回したり、頬ずりしたり、ルークはただ純粹に耳としっぽに驚き、ガイじゃ女同士の激しいじゃれあいに鼻血を噴き、アニスはテアを見世物にした算段を考え、ジェイドはこの身体の性質が気になり解剖をしたいと言いだしていた。……って待てやゴオラア！！

「そこまでー！！！！」

俺の大声が響き渡り、全員の動きが止まった。

「ティア、テアを離しなさい」

「そ、そんな…「離せ、な?」「は、はい!」

ティアはすぐにテアを離し、直立不動になった。

「ううゝ…イブキいゝ…」

「よしよし、もう安心だから」

よよよと、泣きながら俺の傍まできたテアを優しく抱きしめて安心させた。

「さて……ガイ、アニス、ジェイド。取り敢えず死んどけ」



ブラスターを三人の頭目掛けて放つ。  
しかし、ガイとアニスは慌てつも辛うじて避け、ジェイドに至ってはニコニコと笑いながら避けた。

「「な、何するんだ（すんだゴラァ）！！」「」

「ですか」

「黙れボケ。なに人様の女に手を出そうとしている」

「お、俺は手なんか「鼻の下伸ばして見ている時点で同罪だ」理不尽だ！」

ガイは泣きながら地面に手をついた。

「まあまあ。アニスもジェイドもなにも本気で言った訳ではないのですから」

「イオン。言うておくが、何も言わずに傍観している時点で同罪だぞ」

「うっ…」

小学校で習っただろ。一人の罪は皆の罪と！連・帯・責・任！なんと素晴らしい言葉か！

「なあなあ！何でテラの頭から獣の耳が生えてんだ!?!」

ルークが目をキラキラと輝かせて肩を揺らしてくる。

まったく、テラめ、厄介な事しやがって。

「落ちて着けルーク。ちゃんと説明するから」

俺は事情を知らない人達に説明をした。

「ふむ…“テア”ですか。テラとは別人の女性…」

「そつだ。どう言う理由でこうなったのかは教えられないが、テアの身体にテラの身体が入り込み、一つの身体として生きる事になった」

理由、実は知らないんだよな。聞こうにも頑なに口を閉じて言わなかったから聞かない事にしてるんだよな。

「しかし、それではその耳やしっぽの事が…」

「すまないが、それも説明できない。一種の副作用とでも思っけてくれ」

テラに理由があるようだが、あまり触れてほしくないらしいからな。

「……分かりました。これ以上は詮索はしないでおきましょう」

「ありがとうございます。ほら、テアもお礼」

「……ありがとうございます」

テアは俺の後ろに隠れながら、小声で言った。

「すまないな。過去に色々とあってな、他人には何時もこうなんだ」

「いえいえ。逆に面白そうが良いですよ」

ジェイドの顔は少し怖かった。まるで悪魔が笑った様に…。

「……つう事は、イブキって二人と結婚したって事か？」

「わお！もしかして貴族様！？だったら私も入れてほしいーなあ！」

はいはい。俺はロリコンじゃないからな。絶対に入れない。それ以前に俺はもう結婚しないぞ。

「しかし、二人も妻にしていると云う事から、貴方は何処かの貴族

なのですか？」

「……大昔はな」

ユリアの夫だから、多分貴族の部類に入ってると思う。

「そうだったの？」

ティアが少し驚いていた。

そうか、ティアは俺がホドの一般住人と聞かしてたな。

「昔の話さ。それに、俺の何所に貴族らしさがあると思う？」

「そう言えば、そうね」

「……ちょっとは否定して欲しかったのかな……」。

「さて！明日は早いんだ。この話はこれで終わりだ。とっとと寝よう」

パンつと、手を叩いて皆を各部屋に解散させる。

ジエイドは残念です、と肩を落として部屋に向かった。

「はあ〜…テラめ、何故このタイミングで入れ替わるんだ」

「えっと、面白そうだからって…」

「……そうだよな。それしかないよな」

今度出てきたらどうしてくれようか。あの耳と尻ぽをティアとユリアに差し出そうか。あの二人の弄りに少しは懲りてくれるか？

「…で？何故お前はそわそわしている」

「ふえっ！？／／／／」

ベッドに寝転んでテアを見ると、テアは髪やしっぽを撫でて何所か落ち着きが無かった。

「ええええつと、その…／＼／＼／」

「………言っておくが、今日は相手しないぞ」

「づぐつ！………ケチ」

そんな可愛く言われても駄目なものは駄目だ。

「………ならせめて抱きしめてよう」

「………それだけな」

そう言うと、テアはパアッと明るくなって俺のベッドに入り込み、抱き付いて来た。

「えへへ…／／／」

「……お休み」

「うん、お休みなさい」

「で、こんな夜中にどうしたんだ？」

ガイは夜中にルークに起こされ、街の外に連れて行かれた。

「ちょっと、剣の相手をしてくれないか？」

「剣の？」



「ああ。少しでも人に慣れておきたいから」

「それは良いが……」

「俺、この意地を貫きたい。俺が絶対、イオンを、皆を守りたい」

ルークの目は真剣だった。

ルークが邸に軟禁されてから、ガイはこれ程真剣なルークの顔を見た事無いだろう。

「……分かった。気が済むまで付き合ってやる」

「……行くぞ」

「来い」

この日は、それが薄く白くなるまで剣を振り続けた。

イブキという存在は、ルークにとって少なからず師という存在にな

ってきたのだろうか。

それとも、ただ何も出来ないのが嫌だったのだろうか。

この行いが、後にどのような結果になるのかは、まだ誰も知らない。  
そう、ローレライでさえも…。

## 過去の傷跡（前書き）

ヤバイよ……。久々に更新したけど、内容が矛盾してる所がありそう  
で怖いよ……。つてか今まで更新しないでごめんなさい。

## 過去の傷跡

朝。それはとても気持ち良くなる時間。または、眠くてしょうがない時間でもある。

ぱっと眼が覚める者もいれば、中々起きれない者もいるだろう。

だが俺の様な朝を迎える者は中々いないだろう。

「……………」

「じゅゆ〜…す〜…」

テアの胸に顔を俺の顔を押し付けられて今にも窒息死しそうな朝は…。

「フガッ！ フフンガッ！」



あるう事がティアは腕の力を強め、更に締めてきた。

あ…もつだめ……。

その後、起こしに来てくれたティアに助けられた。

危うく妻に殺されかけた朝を向かえ、俺達は国境を越えた。

後はカイツール軍港に向かい、ケセドニアまで行き、そこで乗り換えバチカルに到着か…。

さて…その後はどうしようか…。ルークがアクセリユスに向かう事はほぼ間違いないが、俺は一応部外者だし…。同行とかは出来るのか？ それ以前に向かう事はやはり止められないのか？ コスモス達からは何の連絡も…って、伝える手段は無かったか…。チツ、通信端末があつたら良かったのにな。この世界には無いし…。

「  
」

「……………なあ、イブキ」

「なんだ？」

ガイが小声でテアを指した。

「なんでテアはメイド服なんだ？ アンタの奥様なんだろう？」

ガイの言う通り、テアはメイド服に着替えている。テラの格好ではやはり可愛くないと言って、駄々をこねたのだ。

俺はテラのような格好でも十分可愛いと思うんだがな。

「あまり気にしないでくれ。本人が気に入ってるんだから」

因みに耳と尻尾は隠している。

しかし不思議だよな。隠してるって言っても、本当に消えてるんだよ。一体どういう仕組みになってんだ？

「……まさかアンタが着せたんじゃないだろうな？」

「愚門だな。俺なら丈の短い浴衣を着せる」

「ゆかた？ それは一体……」

「世界で一番脱がしやすい服」

「……………男だね」

「当たり前だ」

向こうの世界にいた頃は、よくコスモスに着させようとしてシオンに半殺しされてたっけ……。つてか浴衣姿が見たいのならジン兄さんを見てなさいよ！ とかあんまりだろ？ 何で三十路を走ってるお



っさんの浴衣姿なんて見なくちゃならんのだ！ ころっ言っちゃ悪いけどよ！

「ねえイブキ様〜！ イブキ様って何処に住んでるんですか？」

「アニス、様付けは止める何度も言ってるだろ」

「だってえ〜、イブキ様は騎士団じゃあ伝説的だし、イケメンだし、（お金ありそうだし）尊敬しちゃんですよ〜！」

アニス……心の声は表に出さないものだ。顔に出てるぞ。それに俺はロリコンではないからどんな事があってもお前が考えてる様な事は世界が崩壊してもあり得ない。

「なら、さん付けにしる。さもないとジェイドの実験台にさせるぞ」

「ぶう〜！ いくら大佐でもそんな事はしませんよ〜！」

「そつとも限りませんよ〜？ 丁度、薬の試作品を飲んで下さる十三歳くらいの女の子を探しているんですよ」

「えっ？ 大佐、それ本気じゃないですよね？ ってその瓶に入ってる液体は何ですか？」

「ふふふ……大丈夫、ちょっと死の一步手前に行くだけですから」

「い、いやアアアアア！」

全く騒がしいお子様だ。だが元気があってよろしい。子供はそうでなくてはな。

「兄さん？ どうしたの？ そんなにスッキリした顔して」

「ん？ 子供は元気だなーって」

「…？」

そうこうしている内に無事、カイツール軍港に辿り着いた。

魔物との戦闘もあつたが、問題無く勝つた。

……ん？　なんで魔物と会話できるテアがいるのに戦つのかつて？  
それはテアと会話できる魔物は、人で言うなれば一般人だ。殺人鬼とかの凶悪犯に通して下さいつて言つても無意味だろ？　俺達と戦つてる魔物は皆そういつた殺す事しか頭に無い、本能のままに行動する奴らだけだ。お分かり？

ギヤア！！　ギヤア！！

ほらこつ言つた鳴き声の……何！？

「……ああ？　何だ？」

「魔物の鳴き声……」

ルークとティアも気づき、空を見上げた。

すると一匹の魔物が空を飛んでいた。

「あれって……根暗ツタのペットだよ！」

「根暗ツタって……？」

アニスの言葉にガイは首を捻った。そしたらアニスがむっとなってガイにひっ付いた。

「ひっ……」

「アリエッタ！ 六神将妖獣のアリエッタ！」

「わ……分かったから触るな〜！！」

ガイは女性恐怖症によりアニスにビビり腰を引いた。

……ダサ。

「港の方から飛んできたわね。行きましよう」

ティアが走って行ったので、俺達も行く事にした。

「ほら、ガイ。喜んでないで行きますよ」

「嫌がつてるんだ〜〜!!」

「……変態さん?」

「んなっ!?!」

ティア、お前の無垢な一言は時に人を大きく傷付けるんだぞ。

軍港の奥に進むと、ライガの死体と数人のキムラスカ兵の死体が転がっていた。船は破壊され、火災を起こしていた。

「……………」

「ルーク、大丈夫か？」

「……………ああ……………」

ルークの背中を摩り、この惨状をみた。

すると視界にヴァンとアリエッタが入った。

「アリエッタ！ 誰の許しを得てこんな事をしている！」

ヴァンは険しい表情でアリエッタに剣を向けていた。

「やっぱり根暗ツタ！ 人に迷惑かけちゃ駄目なんだよ！」

この際怒る理由が子供っぽいとかは突っ込まない。

すぐさま俺はまだ生きている兵たちに回復エーテルを当てた。

ティアとテアも回復術で傷を癒していく。

「アリエッタ、根暗じゃないモン！ アニスのイジワルウゝ！！！」

「何があったの！？」

治療を終えたティアがヴァンに尋ねた。

「アリエッタが魔物に船を襲わせていた」

「総長……ごめんなさい……。アッシュに頼まれて……」

「アッシュだと……？」

アリエツタはガルードを呼びだし、その足に捕まり空を飛んだ。

「船を修理できる整備士さんはアリエツタが連れて行きます。返して欲しいければ、ルークとイオン様がコーラル城へ来い……です。二人が来ないと……あの人たち……殺す……です」

そう言い残すと、アリエツタは飛び去っていった。

「ヴァン謡将、船は？」

ガイがヴァンに聞いた。

「……すまん、全滅のようだ。機関部の修理には専門家が必要だが、連れ去られた整備士以外となると、訓練船の帰還を待つしかない」

「アリエツタが言っていた、コーラル城と言うのは？」



ジエイドが聞いた。それに答えたのはガイだった。

「確かファブレ公爵の別荘だよ。前の戦争で戦線が迫ってきて放棄したとかいう……」

「へ？ そうなのか？」

おいおい、何故息子のルークが知らないんだよ……。

「お前なー！ 七年前にお前が誘拐された時、発見されたのがコーラル城だろうが！」

……誘拐……だと？ 何だそれは？

「俺、その頃の事ぜんっぜん覚えてねーんだってば。もしかして、行けば思い出すかな」

おいおい……何やら大変な事を聞いた気がするぞ、おい……。

「行く必要はなからう。訓練船の帰港を待ちなさい。アリエッタの事は私が処理する」

「……ですが、それではアリエッタの要求を無視する事になります」

「今は戦争を回避する方が重要なのでは？」

「一理ある……。だがあの子の要求を無視した場合、人質が殺される可能性がある。あのアッシュとか言う赤髪……恐らく本気で殺るだろうな。それに……俺自身も確かめたい事があるし……」。

「ルーク。イオン様を連れて国境へ戻ってくれ。ここには簡単な休息施設しかないのだ。私はここに残り、アリエッタ討伐に向かう」

「は、はい、師匠」

「ヴァン、俺も行く」

「イブキさん、貴方にはイオン様とルークの護衛を頼みたい。それに、これは我々騎士団の問題です」

「俺だって一応騎士団に所属していたんだが？」

「申し訳ありません。どうか、お分かり下さい」

ヴァンはどうしても俺に来て欲しくないようだ。ヴァンの目はそう語っていた。

「……分かった。だが殺すなよ。あの子には聞きたい事があるんだからな」

「分かっておりますよ」

そう言うと、ヴァンはコーラル城に向かう準備をし始めた。

俺達も国境に戻る為に軍港の出口に向かった。

「お待ちください！ 導師イオン！」

二人の若者が俺達の前にやってきて行く手を阻んだ。

「導師様に何の用ですか？」

アニスがイオンの前に立ち、少し強めの口調で問質した。

「妖獣のアリエッタに攫われたのは我らの隊長です！ お願いです！  
どうか導師様のお力で隊長を助けて下さい！」

「隊長は預言を忠実に守っている敬虔なローレイ教の信者です。  
今年の生誕預言でも、大厄は取り除かれると詠まれたそうで、安心  
しておられました！」

「お願いします！　どうか……！」

二人は深く頭を下げ、イオンに助けを求めた。

「……分かりました」

ま、そうなるわな。

「よろしいのですか？」

ジエイドがイオンに確認を取った。

「アリエッタは私に来るよう言っていたのです」

「私もイオン様の考えに賛同します」

ティアもイオンの意見に賛成した。

「冷血女が珍しい事言って……」

ルークが嘲笑うかのように呟く。どうやらルークとティアの間で俺の知らない何かがあったようだ。

「厄は取り除かれると預言を受けた者を見殺しにしたら、預言を無視した事になるわ。それではユリア様の教えに反してしまう。それに……」

「それに？」

「……何でも無い」

「確かに預言は守られるべきですがねえ」

ジェイドがティアの意見に肯定の意を表した。

違う……。ユリアは預言を覆して欲しいと願っているんだ。守るべきものではない……。だが今回は、預言で詠まれているいないに関わらず、助けるべきだな。

「あのお、私もコーラル城に言った方がいいと思うな」

「コーラル城に行くなら、俺もちょっと調べたい事がある。ついてくわ」

「アリエッタも女性ですよ」

「お、思い出させるなっ！」

アニスもガイも行く事に賛成のようだ。後はルークとテアだが……。

「私も行くよ。あの子の魔物とも会話できるし、役に立つと思うよ」

だそうだ。ならルークはどうだ？

「ご主人様も行くのです？」

ミュウが首を傾げてルークに尋ねた。

「……行きたくねー。けど……」

ルークは少し考えてまた口を開いた。

「なんか思い出すかもしれねーしな。行くか」

満場一致。コーラル城に向かう事に決定した。



「ありがとうございます！」

「コーラル城はここから南東の海沿いにあります。お気を付けて」

「…だそうですよ。では行きましょうか」

「ジェイド…お前どつでもいいだろう」

「無論です」

「つたく、いい性格してやがる。」

「俺達はコーラル城に向かった。」

「コーラル城…又の名を幽霊屋敷…」。

「うわー…ボロボロだね」

「ああ、そうだな…」

サザンクロスの邸を思い出すな……。

「ここが俺の発見された場所…？ ボロボロじゃん。なんか出そう  
だぜ」

「どうだ？ 何か思い出さないか？ 誘拐された時の事とか」

「ルーク様は、昔の事何も覚えてないんですよね？」

「うーん…。七年前にバチカルの屋敷に帰った辺りからしか記憶が  
ねーんだよな」

俺は隣にいたガイを肘で突いた。

「おい、ルークは昔誘拐されたのか？」

「ん、ああ…。ルークが七歳の時、マルクトに誘拐されて、帰って来たら今度は記憶を失ってたんだ」

「そうなのか…」

だからあんなに中身が子供なのか？ それとも両親に甘やかされたとか？ どっちにせよ、こりゃ面倒をみるのが大変そうだな。

「……おかしいわね。もう長く誰も住んでいない筈なのに、人の手が入っているみたいだわ」

……ええ？ ティア、何所にそんな目印が？ 俺にはそんなもの視えませんが…。

「魔物いるのです…。気配がするのです」

「そうなのか？ テア」

「……うん。それも話が通じない魔物……」

チツ、厄介事は消えてはくれないか。

「整備隊長さんとやらは、中かな。行ってみよつぜ」

俺達は中に入った。

中はジメジメしており、匂いもカビ臭いのが一番の印象だった。

「ここがウチの別荘だったのか……」

ルークは物珍しげに辺りを見渡し、一人先にずいずいと進んで行った。

「ルーク、あんまり離れるなよ」

ガイがそんなルークに注意を促した。

「っせなー！ わーかってるって……」

ゴゴゴと、ルークの後ろにあった石像が動き出した。

ルークは気付いておらず、ガイ達の声にも反応出来なかった。

「へ？ ツ！？ わああっ！？」

ズドンッ！！

「あああ……あれ？」

「ったく、少しは気を張れ」

俺はブラスターガンを右手でくるくると回し、収納した。

石像がルークに攻撃を仕掛けた瞬間、ルークに攻撃が届く前にブラスターで撃ち抜いたのだ。

「さ、サンキュー……」

「こんな奴が他にもいるかもしれない。出来るだけ離れるなよ」

「お、おう……」

ルークは冷や汗を流して頷いた。

分かればよし。これから気を付けると良い。

その後は建物の中を隈なく探索し、アリエッタを探したが、何処にも姿が見えない。

そして、とある書齋で怪しい扉を見つけた。

「何だこの扉？ 開かねえぞ……」

「特殊な音素で封印されている様ね。奥に大事な物でもあるのかしら？」

「……ジェイド、ここが怪しくねえか？」

「……そうですね。では 雷雲よ、我が刃となりて敵を貫け、サンダ ブレード！」

ズバァァアン！！

ジェイドがいきなり上級譜術をぶっ放し、扉にぶつけた。

「おや？ 変わりありませんか……」

しかし扉には何の変化も無く、傷一つ付いていなかった。

「あぶねえなっ！いきなり物騒な事してんじゃないねえ!!」

「これは失礼しました」

「アホな事やってんじゃない。ちょっと退いてろ」

俺は皆を退かし、扉の前に立った。そして……。

「ぶらあああああつ!!!!!!」

ドゴオオッ!!

右腕で扉をブチ抜いた。



「「「ええー！ー！！？」」」

ルークとガイとアニスが目玉をひん剥いて驚いていた。

ふはは！ 俺の両腕右脚は超合金だぞ！ このぐらいどつって事無い！

「やりますね。貴方は人間ですか？」

「ワケありのな」

「そうですね」

「「「いやいや！ イイのかよ！？」」」

「やっぱりイブキは凄いなー！」

「流石兄さんね」

「「「いや、おかしくね!?!」「」」

はいはい、こつこつするのは大人の事情と言つものだ。気にしない気にしない。

扉を潜ると、中は外からではとても想像が出来ない程の空洞があり、さらに通路が続いていた。

しかも、空洞の中心部分には、巨大な装置が置かれていた。

「なんだあ!?! なんてこんな機械がウチの別荘にあるんだ?」

「これは……!」

ジェイドが中々崩さない表情を崩した。

「大佐、何か知ってるんですか？」

「……いえ……確信が持てないと……。いや、確信できたとしても……」

出会って二日だが、ジェイドがあそこまで動揺する姿は、普段の姿からは想像が出来ない。

ジェイド……何を隠しているんだ……。それに何故ルークを見る……。

「な、なんだよ……。俺に関係あるのか？」

「……まだ結論は出せません。もう少し考えさせて下さい」

と言う事は、少なからずルークに関係あるかもしれないと言う事だな。誘拐と何か関係が？

「珍しいな。あんたがうるたえるなんて……」

ガイがジェイドの傍に寄り、装置を見上げた。

「俺も気になってる事があるんだ。もしあんたが気にしてる事が  
ークの誘拐と関係あるなら」

「きゃー……っ!!」

突然アニスがネズミに驚き、ガイの背中に飛び付いた。

するとガイの顔から色がドンドン抜け落ちて……。

「う、うわぁっ!! やめろぉっ!!」

アニスを強引に振り払い、地面に蹲った。ガイの身体は異常なほど震えていた。

「な、何……？」

「……あ……俺……」

「……今の驚き方は尋常ではありませんね。どうしたんです？」

確かにおかしい。ただ驚いたただけなら声を上げるだけで済む……。なのにガイは異常なほど震え、女に優しいガイがアニスを振り落とすなんて……。

「………すまない。体が勝手に反応して……。悪かったな、アニス。怪我はないか？」

「う、うん……」

「何かあったんですか？ ただの女性嫌いとは思えませんよ」

イオンがガイに尋ねた。

「悪い…。わからねえんだ。ガキの頃はこうじゃあなかつたし。ただすっぽり抜けてる記憶があるから、もしかしたらそれが原因かも……」

「お前も記憶障害だったのか？」

ルークが驚いた。

「違う……と思う。一瞬だけなんだ……。抜けてんのは」

「どうして一瞬だとわかるの？」

「わかるさ。抜けてんのは……。俺の家族が死んだ時の記憶だけだからな」

「……ッ！？」

ガイの家族……ガルディオス家……ホドにいた……ヴァルターの……

…。

「……………イブキ」

テアが俺の手をそつと握ってくれた。気付けば俺の手は震えていた。どうしても考えてしまう…。もつと俺が上手くやっついていればガイの家族は…ホドの皆は全員助かったんじゃないかって…。……………もしガイが、俺が預言を知っていたと知ったら、俺を恨むのだろうか…。

「俺の話はもういいよ。それよりあんたの話を……………」

「あなたが自分の過去について語りがらないように、私にも語りたくない事はあるんですよ」

ジエイドは肩を竦め、足を進めた。

まるで何かから逃げるようにして…。

「俺達も行こうぜ」

ガイもジェイドに続き、奥へと進んで行った。

俺達も何とも言えない雰囲気の中、足を奥へと進めて行った。

「過去……か」

「……ねえ、イブキ」

「ん？ 何だ？」

「イブキも私達の過去……ティアやヴァンにこれからもずっと話さないの？」

ティアとヴァンに……。だが話してどうなる……。何かが変わるのか？ 少なくとも、預言を人一倍嫌っているヴァンには恨まれるのではないだろうか……。それだけが怖い……。気がする。



「……何時かは……な」

「そう……。大丈夫だよ、ヴァンとティアはミアに似て優しいから」

俺の心を感じ取ったのか、笑顔で励ましてくれた。

「そうだな。怒ったら恐いだろうな」

「うふふ……ミアも恐かったもんね」

「おい！ 何やってんだよ。さっさと行くぞ」

ルークが離れた所で手を振っていた。

おっと、これ以上は話してはられないか。

「悪い、すぐに行く。…行くぞ、ティア」

「うん！」

今はまだ、話さないでおこう。預言を覆して、ユリアの願いを叶えてから話そう。そうすれば、ヴァンに嫌われないで済むかもしれない……。

今は……まだ……。

謎の存在（前書き）

水樹奈々様のライブに  
行ってきた作者です。

もう感動しました。

あの方こそ女神です！  
また会いたい！

## 謎の存在

更に奥に進むと、足音が聞こえた。

その方向に視線を向けると、一匹のライガが立ち去っていた所だった。

あからさまに誘っている様な感じだった。だが先に進まねばならぬ事に変わりはない、注意しながらも奥へと進んだ。

「むう〜！」

「な、なんだ？」

突然、テアが頬を膨らませた。

「さっきからあのライガが『こっちまで来てみる、ノロママ』ってか  
らかってくるの〜！」

「ははは……、そう言えばテアとテラは魔物と会話できるんだっとな」

「あのアリエッタってー子も会話できるんだろ？ やっぱ他にもそういう奴っているのか？」

「世界を隈なく探せば、何処かにいるんじゃないですか？」

ジエイド、適当に言うなよ。ほら見てみる、ルークが本気で信じ込んだだろ。絶対家に帰ったら探しに行こうぜとか言いそうだよ。面白がって。

「ムカツ！ もう怒った！ 絶対にゴメンなさいって言わす！」

「お、おい！ 勝手に走り出すな！」

テアが屋上に出たライガを追っかけて一人走り出した。

「面白そう！俺も行くぜ！」

「アニスちゃんも！」

「ミュウも行くですよー！」

「あ、待って下さい。アリエッタに乱暴な事はしないで下さい！」

ルーク、アニス、ミュウ、イオンも走って俺達から離れてライガを追って屋上に向かった。

「待って！罾かもしれない……！」

「おやおや、行ってしまいましたね。気が早い」

「アホだなー、あいつらっ！」

「まったく……」

ひと昔前のフレイルのようだ……って、昔過ぎるか。

俺達は呆れながら後を追った。

俺達が屋上に出ると、青くデカイ鳥型の魔物、フレスベルグにルークとテアが気を失って捕まえられていた。

「テア！」

「ルーク！」

「もっ……ドジね……！」

フレスベルグは柵の外に出ると、ルークとテアを落とす。

するとルークは何処からか現れたディストに受け止められ、連れ去

られてしまった。

そしてテアは灰色のフードを被った人に抱きかかえられていた。

「あ！ 大変ですよ！」

ミュウが叫んだ方向を見ると、人質とアリエッタを乗せたライガが城の屋根を伝って消えて行った。

テアを抱えた灰色フードはまだ俺を見ていて動かなかった。

「デイストまで絡んでいましたか。やれやれですねえ」

「大丈夫かなあ……もう……」

「……ん？ ティア、どうした？ 何か言ったか？」

「い、いえ。何でも無いわ。それより……」



灰色フードは未だに俺を見続け動かなかった。何か策があるのだろうか……。それとも……。

「……お前等はルークと人質を助けに行け」

「兄さんは？」

「どうやら相手は俺と一騎打ちを望んでいるようだ」

フード野郎はその言葉に満足したのだろうか、見える口元を吊り上げた。

「分かりました。では我々はルークの救出に向かいます」

ジェイドが指示を出し、俺以外の皆を連れてルークを助けに向かった。

「……さて、貴様の望んだ通りに俺だけになったぞ。……テアを離

せ

「……………」

「…ッ！」

相手がテアを俺に向かって放り投げてきた。

俺はテアの落下地点に潜り込み、テアを受け止めた。相手はその瞬間を突いて腰にさげていた剣を振り下ろしてきた。

俺は右腕でガードし、受けた剣は折れた。

相手はすぐに飛び退き、俺から離れた。

「随分と人様の女を手荒に扱うな。余程殺されたいらしいな」

「……………」

クイクイ…

「……………テメエ……………」

相手は人差し指を動かし、屋根を伝って隣の塔に移った。

良いだろう…その余裕、何時まで続くかためしてやる。

テアを屋上に続く階段に下ろし、フード野郎のいる塔に移った。

「さっきので剣を無くなったぞ。素手でやり合つのか？」

「……………！」

相手は鼻で笑った後、俺に向かった突っ込んできた。

「ハッ、武器など必要ないってか？ 舐めるなよ！」

俺は刀を展開し、相手を迎え撃った。

しかし相手はあろう事か、腕一つで刀を受け止めた。

籠手でも仕込んでるか！

「やるな……だがっ！」

腕を弾き、更に刀を胴体目掛けて振るう。

相手もそれに反応し、手で受け流していく。

馬鹿な、この俺がこうも簡単に受け流される？ しかもコイツ、何も付けていない掌で刀を受けているだと？

「」

「ぬうッ！！」

相手が右脚で蹴り上げてきた。俺は左手で受け止めようとしたが、  
いとも簡単に打ち負け、顎を蹴られた。

「がっ…!？」

マズイ…… もろに入った！ 体勢が…！

「  
」!

敵は俺の鳩尾に的確に掌底を入れてきた。

「ゴハアッ…!？」

「  
」!

更に第三音素を纏った蹴りを腹に入れられ、俺は吹き飛ばされた。

ま、マズイ…！ このままでは海に落とされる！

咄嗟に刀を地面に刺し、屋上から落ちる事を防いだ。

「  
「！」

相手は詰め寄ってきて音素を纏った拳を叩き込んできた。

「  
「図に乗ってんじゃねえ…！」

「  
「……！？」

拳を左手で受け止め、そのまま投げ飛ばした。

しかし相手は地面に叩き付けられる事はせず、体勢を整えて着地した。

「それがどうしたッ…！」

「……………!!」

ブラスターガンを展開し撃ち出す。相手はバク転しながら避け、俺はその間に立ち上がり、刀に第五音素を纏わした。

「霸道　　滅封!!」

巨大な灼熱波を放ち、相手を呑みこんだ。しかし……………。

「……………!!」

「な　　に　　?」

相手が片手を振り払った瞬間、いとも簡単に熱射が拡散した。

馬鹿な…!!　結構な威力だぞ!　それを…!!　一体コイツは…!!

「やれやれ……まさかこんなものだったとはな」

「何……？」

相手が喋った。

だがその声に何処か覚えがある様な気がする……。  
何処か遠い昔に……。

「……何だ？ まさか気が付いていないのか？ これは傑作だ」

「何……？」

「俺だよ。この顔を……！」

相手はフードを取ろうとした手を止めた。

それから舌打ちをし、手を下ろした。



「どつやら向こうも終わりに近づいている様だな」

「何を……！ 皆ッ！」

元居た屋上を見ると、ライガ、フレスベルグ、アリエッタと戦っているルーク達が見えた。

しかしその戦いも終わりに近づいていた。

何時の間に…。

「サンダ ブレード！」

「ッ……！」

ズドオオオン……！！

何処からともなく雷の剣が相手に向かって降り注いだ。しかし相手はソレを避けて別の屋根に移った。

「イブキ、大丈夫!？」

「テア!？ 何故ここに!？」

そしてテアが屋根を伝って此方にやって来た。どうやら身体は大丈夫な様だ。

「くっ…邪魔が入ったか」

「今度は外さないよ」

「調子に乗るな、死人が」

「…ッ!？」

死人？ 何を言っただがる。

「まあ良い。向こうも終わりそうだし、楽しみは取っておこう。じやあな」

そう言っただけから飛び降り、何処かへと消え去った。

何だったんだ？ 俺はアイツに一度会っているのか？ だが覚えが無い…。それに死人って…一体なんだ？

「……………テア？」

「イブキ、無事で良かった。早く皆の所へ行こう！」

テアは俺に抱き付いて来て、腕を引っ張った。

「あ、ああ……………」

「じゃあ抱っこしてね。テラがめんどくさいって変わってくれないの」

ああ、屋根を伝って来たのはテラだったのか。そう言えば、テアにそんな身体能力は無かったな。

「はいはい…」

俺はテアを横抱きにして、屋根を伝って戻った。

その際、テアが何かを呟いたが、すぐに忘れてしまった。

「待って下さい！ アリエッタを連れ帰り、教団の査問会にかけます」

俺達が戻ると、丁度戦闘が終わったらしく、イオンがジェイドからアリエッタを庇っていた。

「ですから、ここで命を絶つのは……」

「それが宜しいでしょう」

屋上の入り口からヴァンが出てきた。

随分遅い登場だが、どうでも良いので何も言わなかった。

「師匠……」

「カイツールから導師到着の伝令が来ぬから、もしやと思いここへ来てみれば……」

「すみません、ヴァン……」

「過ぎた事を言っても始まりません。アリエッタは私が保護します

「が宜しいですか？」

「お願いします。傷の手当てをしてあげて下さい」

そう言われると、ヴァンは気絶しているアリエッタを抱え、出口に向かった。

「やれやれ……。キムラスカ兵を殺し船を破壊した罪、陛下や軍部にどう説明するんですか？」

ガイの問いにイオンが答えた。

「教団でしかるべき手順を踏んだ後処罰し、報告書を提出します。それが規律というものです」

「カイツール司令官のアルマンダイン伯爵より、兵と馬車を借りました。整備隊長もこちらで連れ帰ります。イオン様はどうされますか？私としてはご同行願いたいが……」

「このコーラル城に興味がある人もいるようですけど……」

そう言ってイオンはルークを見た。ルークはうぐんと頭を捻って答えた。

「俺も馬車がいい」

「……と言う人もいますから一緒に帰ります」

「わかりました」

俺達はヴァンが用意した馬車に乗る事にした。

「……………どぞ、ヴァン」

「……………はい」

「……………何なの、コレ？」

「……………何でしょう」

城の玄関前に戻って来たら、来る時には無かった筈の剣が床に突き刺さっていた。しかも変な音素丸出しで。

俺達が警戒していると、面白かったルークがその剣に触れてしまった。



すると何処からか「我は妄執……。叶わぬ願いに捕らわれ、さまよ  
う御魂さび付いた剣……。汝は我が望む我を断ち切る剣たり得る者  
か？ なれば、その力の全てを我に振るうがいい」…とかなんとか  
聞こえてきてさ、いきなり剣がさ、二刀流の武者みたいな化物にな  
ってさ、剣を振り下ろしてきたわけよ。それをさ、今さ、俺がさ、  
白刃取りで受け止めてる状態なんだよ。

ゲゲゲ…。

「くらくらくらくらっ！ 力強めんなって！」

「ではイブキさん、後は宜しくお願いします」

「何いっ！？」

「お願いしますね。我々は先に行ってますから」

「ジエイド、きさってコラッ！ もう片方で斬ってくるなッ！」

「イブキ〜！ 頑張れよ〜！」

「おいこら元凶!! 何他人事みたいにしてやがんの!?!」

ちよつ!? なんのなこいつら!? ってかテアは!? ティアは!?

「ティアちゃん、…ゴニョゴニョ…」

「……えっ／／／／」

「いいから言ってみて」

「ううゝ…／／／／ お、お兄ちゃん!／／／／ 頑張つてゝ!  
!／／／／」

「うおおオオ!! もつどつでもいいわゝゝ!! (泣)」

俺の馬鹿野郎ゝ!! そして男の馬鹿野郎ゝ!! そんなもってさ  
つきから鬱陶しいんだよこの落武者風情が!! 機人馬鹿にすんな  
やっ!!

ドゴズカバキゴゴトズバ……………。

「……………ついに我を断ち切る　「喧しいっ!!」……………我は　「知る  
かっ!!」……………待つ　「あっそっ!!」……………」

やっと終わったぞ！　こっちは仲間に見捨てられた気分で落ち込んでんだ！　生きてるだけで有り難いと思え！

剣は跡方も無く消え、禍々しい音素も消えた。

俺はクルリと玄関の方を向いた。

「……………いや、分かってはいたさ。こうなるってな。……………本当にお

いなくなよー！ー！！！！」

皆はもう馬車で軍港に向かっていった。もう馬車の姿が視えない程に。

「チクシヨー！ー！！！！」

俺はバイクを出して馬車を追いかけた。

向こうについて、全員の頭に拳骨を喰らわせたのは言つまでも無い。ジエイドだけには避けられたが…。

バチカルまであと少し（前書き）

うん……上手く文章に出来ない。どじすねばいいんだらうし……。

バチカルまであと少し

整備隊長が帰還した事により、無事に船の修理も終わり、現在は船に乗ってケセドニアに向かっている。

そして今俺は宛がわれた部屋にテアと共に過ごしていた。

「ふうふうん　　ふうふうん」

「随分ご機嫌だな」

「だって海だよ！　広い広い大海原だよ！　これが黙っていられますか！」

そう言えば、テアは海が好きだったな。と言うか、水浴びが大好きだったな。

「久しぶりにティアちゃんと遊びたいな！　そう言えばティアち

「やん海初めてだったよね？ 水着を用意しなくちゃね！」

「……………」

ティアの水着……。あれから九年だよな……。ティアもだいぶ成長して……。

「……………なぐに考えてるのかなぐ？」

「い、いや何も……………」

「ふん……………」

ティアは疑いの眼差しを向けてきたが、すぐに窓から海を眺めた。

数十分後、船はケセドニアに到着した。

「私はここで失礼する。アリエッタをダアトの監査官に引き渡さねばならぬのでな」

アリエッタを抱えたヴァンが俺達にそう言った。

「えーっ！ 師匠も一緒に行こうぜ！」

「後から私もバチカルへ行く。我儘ばかり言うものではない」

「……だってよお」

ルークは不満がって落ち込んだ。どんだけヴァン依存症だ。

「船はキムラスカ側の港から出る。キムラスカの領事館で聞くとい。ではイブキさん、ルークとティアを宜しく頼みます」



「ああ」

俺が返事をする、ヴァンはマルクトの領事館へと入って行った。

「ご主人様、新しい街ですのっ！ 砂だらけですのっ！」

「うるせえ、ブタザル」

こらこら、動物は大切に扱いなさい。ジン兄さんの刀が飛んでくるぞ……って、くるわけないか。

それから少し街を歩いていると、ルークがいきなり現れた女性に絡まれた。

……ん？ この女は……。

「あらん、この辺りには似つかわしくない品のいいお方……？」

……おいおい、こんな処で何やってんだよ。って、アニス。そんな頭抱えんな。この女にそんな気はないから。

「あ？ な、なんだよ？」

「せつかくお美しいお顔立ちですのにそんな風に眉間に皺を寄せられては……ダイ・イ・ナ・シですわヨ」

そして女性はルークから離れた。

はあ……性懲りも無くまたやってんのか。

「きやう……。アニスのルーク様が年増にい……」

ぶっ……！ 今の言葉でカチンときてるよ。ほら、額に血管が浮いてきてる。

「あらうん。ごめんなさいネ。お嬢ちゃん……。お邪魔みただか

ら行くわネ」

と言って、俺の方向に歩き出した。しかも俺に気付かずに。

当然、俺にぶつかり、俺の顔を見た。

「いたつ……。ちょっと、ボケっと立って……。ない……。で……」

「よう、久しぶりだな。ノワールくん」

「だ、旦那……」

ノワールは冷や汗をタラタラと流し始めた。

まあ、それはそうだろう。なんたって、俺が孤児院に寄付した資金をまるまる盗んで、俺がとっ捕まえて説教したからな。

「さ、その懐にしまった財布を出しな」

「へ？……あーっ！！ 財布がねーっ！！」

ルーク、今気付いたのかよ。だから狙われるんだ。もっと周りにだな……今はいいか。

「な、なんの事かしらネ……」

「あと三秒で出さなかったら、あの時の説教の三倍をくれてやる」

「わ、わわわ分かったよ！ ほらっ！」

ノワールは大急ぎで財布を渡し、そそくさと近くにいたヨークとウルシーの三人で逃げ去った。

「まったく、漆黒の翼の名が聞いて呆れるな」

「あいつらが漆黒の翼か！ 知ってりゃもう、ぎったぎたにしてや

ったのに！」

「あら、財布をすられた人の発言とは思えないわね」

「はははっ……。ほらルーク、大切にしとけよ」

財布をルークに渡した。

「ケツ、後で俺が捕まえようと思ってたんだ！」

「はいはい」

まったく、素直じゃないな。そんな顔で言っただって説得力無いぞ。

「ところで大佐はどうしてルークがすられるのを黙って見逃したんですか？」

「やー、ばれてましたか。面白そうだったので、つい」

「教えるよバカヤロー！」

まったくだ……。ニコニコしながら犯罪を見逃しやがって……。それでも軍人か。

しれからまた少し歩くと、今度はティアが店の品を見ていた中年の男性に反応した。

「……ん？ やあ、あんたたちか！ ちょうどいい。礼が言いたかったんだ」

その男性はルークとティアを見て頭を下げた。

なんだ？ 人助けでもしたのか？

「何がだ？」

「橋が壊れて帰れなかったんだが、あの時の宝石をグランコクマで売ったら、船大に釣りまで出てね」

「う……売ったんです……か？」

あれ？ ティアは何でそんな焦った表情を浮かべてるんだ？ そして、何か俺も嫌な感じがするんだが。

「ああ。ホントにありがとうな。またいつでも馬車を利用してくれ。ま、橋が直ってからだがな」

そう言っつて男性は人混みの中に消えた。

一体なんだったんだ？ と言っつかティア、だから何故泣きそうな顔になっている？

「おい、どうした？」

「……う、ううん。なんでもない……」

「ふーん？」

ルークは興味無さげに先に進んで行った。  
俺はちよつと気になり、ティアに声をかけた。

「ティア、どうしたんだ？」

「…………お兄いちゃん…………！」

うおっ！ えっ！？ 何で！？ 何で泣いてんの！？

「……………そうか」



「うめんなさあ〜いいいい！！！！」

何故ティアが泣きながら謝っているのか。それはつまりこう言う事だ。

ルークと超振動を起こし二人、タタル溪谷に飛ばされる 軍人であるティアが責任を感じルークをバチカルに送る 馬車を見つけたがお金無し 過去に俺がティアに預けたペンダントを代金に そのペンダント何処へ。

「はあ〜……。ティア、もういいから。泣き止みなさい」

「でもあ〜…！！」

「別にこの世界から消えたわけじゃないんだ。探せばいいさ。だから、な？」

「……いいの？」

「ああ」

「……ありがとう、お兄ちゃん」

「いえいえ。…それより口調が戻ってるぞ」

「あっ！／＼／＼／＼」

はははっ！ 可愛い奴だ。………はあ、一体何処にいったんだ、俺のペンダントは。ああ〜またシオンに怒られる〜！ もう新作カレーの試食は嫌だ〜……。

さて、今俺達はケセドニアの商人アスターの屋敷に来ている。

何でも、ガイが烈風のシンクから奪った音譜盤フォンディスクを解析しておきたいそうさ。だからアスターの屋敷にきて、解析機を借りたいそうさ。

で、今は解析の結果を待っている。

「イオンはこいつと知り合いだったのか」

「私どもは導師のお力で、国境上にこうして流通拠点を設けることができたのでございますよ」

「商人ギルドはダアトに莫大な献金をしているの。見返りに教団はケセドニアを自治区として認めさせている訳」

ティアがルークに説明を施した。

まさにその通り。自治区のお蔭で俺達がどれだけ助かったか。

「アスター様つてすっごいお金持ちですよね？ わたS「はいはい。腹黒小娘は黙りましょうねー」むっ！ イブキ様、私腹黒くありません！」

どうだか……。って、様付けは止めろって。

「それよりアスター」

「はい、何でしょう？」

「俺宛に何か届いてないか？」

もしかしたらコスモス達から何かきてるかもしれない。

「少々お待ちを……これ、誰かおらぬか！」

アスターは召使いを呼び、何か届いてないか聞いた。

「……そうか。申し訳ございません。何も届いていないようです」

「そうか。手間を掛けたな」

「いえいえ。イブキ様には我らケセドニア商人に良くしてもらっていますから」

何もきていないか……。一旦、向こうの様子を知りたかったんだが……。ん？ 何だお前等、そんな驚いた顔して。

「兄さん、アスター様と面識があったの？」

「ん、まあな。ここを拠点にしてボランティアしていたからな。大量に買い取ったり、その街との商売を助けたり、あとそこいらの盗賊を消し飛ばしたり、その他諸々……」

「イブキ様にも本当に感謝しています。イブキ様は我らケセドニア商人の恩人です」

「そんな大層なもんじゃないさ」

「いえ、とても誇らしい事です。導師としてお礼を言わせて下さい」

「いや、別にそんな為にやった訳じゃないんだが……。まあ、いいか。」

暫くの間、他愛ない会話をしていると、ディスクの解析結果が出来上がったが、その量が多いので船の上で読む事にし、アスターの屋敷を後にした。

少し歩いていると、キムラスカ兵が一人やって来た。

「こちらにおいででしたか。船の準備が整いました。キムラスカ側の港へ……」

「…ッ！ 危ない！」

「…っ…っわっし」

突然の襲撃にティアが気付き、襲撃を受けたガイは咄嗟に反応し避けたが、右肩に掠ってしまった。

襲撃を仕掛けたのは緑の髪で仮面を付けた少年……烈風のシンクだった。

「それをよこせ！」

ガイが持っている解析結果が目的か…！

「ここで争いを起こしては迷惑です。船へ！」

「くそっ！ 何なんだ!？」

「逃がすかつ！」

俺達は船に逃げ出したが、シンクが追ってくる。

くっ、烈風なだけあって速いな……。ならこちらも速くなれば！

「エーテルドライブ！」

俺は味方全員に速度上昇効果の『クイック』を掛けた。すると、俺達はシンクからドンドン離れて行った。

「ルーク様。出発準備完了しております！」

「急いで出港しろ！」

「は？」

「追われてるんだ！ 逃げ！」

俺達が船に駆け込んだ直後、船は出港し、シンクから逃れる事が出来た。



「はあ……はあ……。逃げ切れたみたいだな」

「そうみたいですな」

「お、おいイブキ。さっきの……一体なんだったんだ？」

ルークが息を切らしながら聞いてきた。

「身体の色を一定時間上げる技だ。と言っても、ある程度の実力を持つ奴にはあまり意味が無いがな」

「面白い技を持っていますね。是非どう言う仕組みなのか知りたいですね」

「絶対教えん」

「つれないですね」

教えたところで理解は出来ないだろうからな。

「テア、大丈夫か？」

「だ、だいひょうぶだひょ……。げんひげんひょ……」

……悪い、体力無いの忘れてた。ってか、テラよ。何故変わってやらなかったんだ。

取り敢えず俺達は一つの部屋に入った。

「ここまで来れば追って来れないよな」

ルークが椅子に深く腰をおろして安心した。

ルーク、油断は禁物だからな。ほら、よくあるだろう。実は既に船に仕掛けを施していてボカンって。

「くそ……。烈風のシンクに襲われた時、書類の一部を無くしたみたいだな」

「見せて下さい」

ジェイドはガイから受け取り、書類に目を通した。

……早っ！ えっ！？ 一ページ読むのに三秒！？

「同位体の研究のようですね。3・14159265358979  
323846……。これはローレライの音素振動数か」

うそっ！？ いやいや！ 円周率だろ！？ この世界に円周率無  
いのか！？

「ローレライ？ 同位体？ 音素振動数う？ 訳分からねー」

ルーク、家帰ったら勉強しよーな。俺と言うスパルタ教師が付いてやるから。

「ローレライは第七音素セブンスフォニムの意識集合体の総称よ」

「音素は一定以上集まると自我を持つらしいですよ。それを操ると、高等譜術を使えるんです」

「それぞれ名前が付いてるんだ。第一音素集合体がシャドウとか、ファーストフォニムシックスフォニム第六音素がレムとか……」

「ローレライはまだ観測されていません。いるのではないかという仮説です」

ティア、アニス、ガイ、ジエイドがルークに説明をしてあげた。  
…俺？ 欠伸してた。

「はい、皆よく知ってるな」

「まあ……。常識なんだよ、ホントは」

そうだな。この世界の常識だな。それをどっかの誰かさんが教えないからだろ、世話係のガイ君？

「仕方ないわ。これから知ればいいのよ」

「なんか……ティアってば突然ルーク様に優しくなったね」

……何？

「そ、そんなことないわ」

……ティア？

「そ、そうだ！ 音素振動数はね、全ての物質が発してるもので、指紋みたいに同じ人はいないのよ」

「もの凄い不自然な話の逸らせ方だな……」

「ガイは黙ってて！」

ま、まさかティア……！

「同位体は音素振動数が全く同じ二つの個体のことよ。人為的に作らないと存在しないけど。そうよね、兄さん？」

「兄さんは許さんぞ！」

「ふえっ!?!」

「お前にはまだ兄離れはさせんぞ！ 恋愛なんてあと二、三年経つてからにしろさい！」

「ちよっ、ちよっと!?!?!?!」

「はいはい、向こう行きましょうねー」

「こら！ テア何をする！？ まだ話は……ちよっ、何所へ連れて行くー！？」

「バタン……」。

「おい、何処まで連れて行く気だ。俺はもう落ち着いた」

「だったらその拳をどうにかして」

「……ッ！」

俺は無意識のうちに拳を握りしめていた。

「……すまん」

「いいよ。あそこで暴れるよりマシだから」

暴れるって、そんな事はしないって……。はぁ……。やっぱりまだフォミクリー関連の話になると体が勝手に反応しちまうか……。

人為的に同位体を作る……。それはフォミクリーの事だ。フォミクリーはホドを……。

ドガーン……！！

「きゃっ！……？」



「何だ!？」

突然、爆音と共に船が大きく揺れた。すると今度はオラクル兵が窓から船に乗り込んできた。

「じいっら…！」

「ハッ！」

テアが手を向けた瞬間、雷が召喚され兵士達を薙ぎ払った。

流石だ……。無詠唱でも強力だ。

「行くっ」

「ああ」

俺達は部屋に戻った。

部屋に戻ると、どうやら此処でも襲撃があつた様で、ちょうど死体が音素になり消えたといった。

「やっぱりイオン様と親書をキムラスカに届けさせまいと……？」

「船ごと沈められたりするんじゃないかねえか？」

「ご主人様、大変ですよ！ ミュウは泳げないですよ！」

「うるせえ。勝手に溺れ死ね！」

「水没か……だがそれなら突入してくるか？」

「そうですね……。おそらく制圧が目的でしょう」

「やれやら、制圧される前に船橋ブリッジを確保しろってか？」

「そういふことです」

「オラクル神託の盾の奴ら、そんなに戦争させたいのかよ。めんどくせーな  
あ………」

「めんどくさがるな。行くぞ、ルーク」

さあ、制圧競争の始まりってな。

バチカルでの再会（前書き）

長い。だから変な部分があるかも。  
そして今回であの方達が！

多少、変かもしれませんが、そこは暖かい目で読んでください。

## バチカルでの再会

艦内にいる敵を斬り伏せながら船橋を制圧し、甲板に俺達は出た。

「敵のボスはどこにいるんだよ！ とつとと終わらせようぜ」

「だな。流石に鬱陶しくなってきた」

さっさと出てこいよ……俺がじっくりと敗北を味あわせてやるからさ……！

「ハーツハツハツハツ！ ハーツハツハツハツ！」

……訂正、瞬殺してやる！

上空から下品な笑い声が聞こえ、空を見上げるとそこには空飛ぶ椅

子に座ったディストがいた。

「野蛮な猿ども、とくと聞くがいい。美しき我が名を。我こそは神オ託ラケルの盾六神将、薔薇の……」

「おや、鼻垂れディストじゃないですか」

「薔薇！ バ・ラ！ 薔薇のディスト様だ！」

「死神ディストでしょ！」

「黙らっしゃい！ そんな二つ名、認めるかあつ！ 薔薇だ、薔薇あつ！」

「…………アホらし…………そして本当にウザいな。ブラスト・ドライブの餌食にしてやるつか…………。」

「なんだよ、知り合いなのか？」

ルークがジェイドとアニスに聞いた。

「私は同じ神託の盾騎士団だから……。でも大佐は……？」

「その陰険ジェイドはこの天才ティスト様のかつての友」

「どこのジェイドですか？ そんな物好きは」

「何ですって!?!」

「ほらほら、怒るとまた鼻水が出ますよ」

「キーーーーー!!! 出ませんよ!」

……駄目だ、頭が痛くなってきた。よくこれで騎士団やっていけたな。それとも騎士団自体が落ちてしまったのか？ まったく、なんて嘆かわしい……。

「まあいいでしょう。さあ、フォンディスク音譜盤のデータを出しなさい！」

「これですか？」

そうやってジエイドがデータを出した瞬間、ディスクが猛スピードで迫り、データを奪って行った。

「ハハハッ！ 油断しましたねえジエイド！」

「差し上げますよ。その書類の内容は全て覚えましたから」

「「「……………」」」

流石………… 人を怒らせる天才…………。

「ムキ……………！！ 猿が私を小馬鹿にして！」



キーキー言ってるお前が猿だろ。

「この私のスーパーウルトラゴージャスな技を喰らって後悔するがいい！ 出でよ！ カイザーディストー！！」

ディストは大きく両手を上に上げた。

すると空から頭がタコのような譜業が落ちてきた。

右手には爪を、左手にはドリルを付けた不格好な譜業だった。

つて！ お前が戦うんじゃないんかい！！

「やれやれ、まったく面倒くさいですね」

「まったくだ。……皆下がってる。俺がやる」

「兄さん！？」

「おいおい、こんなモン一人でどうにか出来る訳ねえだろ！」

「まあ見てろ」

さて……… 機人と譜業、どちらが強いかな勝負だ！

敵の譜業、命名『タコ』が右手の巨大な爪を振り下ろしてきた。

なんともまあ、酷い動きだ。

「見え見えなんだよ」

ガシんと爪を左手で掴み……

「うおおおらあああっ……！」

ブンブン振り回して真上に放り投げた。

「か、カイザーディストロー!!」

その間にブラスト・コアから右腕に第七音素を溜めながら右腕を引いた。

そして落ちてきたタコとディストが重なった瞬間、打ち抜いた。

「ブラスト      ドライブ!!」

右腕から放たれた太い閃光は、タコとディストを巻き込み、空へと伸びて行った。

754

「お、覚えてらっしゃー……いい……」キラーン

「ふう……もう忘れた」

いやー、久しぶりに使ったな、ブラスト。作動は良好つと……。

「お疲れさまでした」

「ああ。だがいいのか？ 一応知り合いなんだろう？」

「殺して死ぬような男ではありませんよ。ゴキブリ並の生命力ですから」

「そうか。ならよし」

「「「つて、待て待て！ 何普通に会話してんだ！？」「」」

「は？」

ルークとガイとアニスがツツコンできた。一体なんだと言うんだ。

「イブキ！ お前は人間か！？ なに片腕で巨大譜業を振り回してんだよ！？」

「それにさっきの技はなんなんだ！？ まるで破壊光線だぞ！！」

「その怪力でひと商売しませんか!? 絶対儲かりますよ!」

……うん、一先ずアニスには鉄拳制裁を与えようか。なに人様を売りものにしようとするか、この守銭奴が。

「まあ、俺はそこいらの奴らに比べて鍛えてるからな。そしてアニス、金金うるさい」

「ひどーい! 私の家計状況を見たら分かりますよ!」

「はいはい、馬鹿な会話は止めて、怪我人が居ないか確かめますよ」

ジエイドの一声により、皆は艦内を周って怪我人を探す事にした。艦内の搜索が終わった頃、目的地のバチカルへと到着した。

「お初にお目にかかります。キムラスカ・ランバルディア王国軍第一師団師団長のゴールドバーグです」

俺達が船を降りると、髭を生やした年配の男性と、その後ろにクリーム色の髪をした女性が立っていた。

「この度は無事の帰国おめでとございます」

「くろく」

ゴールドバーグにルークが労いの言葉をかけた。

「アルマンダイン伯爵より鳩が届きました。マルクト帝国から和平の使者が同行しておられるとか」

ほう、鳩ね。その手があったか。気付いてればコスモスに持って行かせたのに……。

「ローレライ教団導師イオンです。マルクト帝国皇帝ピオ二九世陛下に請われ、親書をお持ちしました。国王インゴベルト六世陛下にお取り次ぎ願えますか？」

「無論です。皆様の事はこのセシル將軍が責任を持って城にお連れします」

と、後ろの女性が口を開いた。

「セシル少将であります。よろしくお願い致します」

「ッー！」

ん？ ガイ、どうしたんだ？

「どづかしましたか？」

セシルもガイの反応に気付き、尋ねた。

「お、いや私は……ガイといいます。ルーク様の使用人です」

何を動揺してるんだ？　つと、俺達も自己紹介しないと。

「ローレライ教団神託の盾騎士団情報部第一小隊所属、ティア・グランツ響長であります」

「ローレライ教団神託の盾騎士団フォンマスターガードイアン導師守護役所属、アニス・タトリン奏長です」

「マルクト帝国軍第三師団師団長ジェイド・カーティス大佐です。陛下の名代として参りました」

「俺は貴公があのだジェイド・カーティス……！」……おい」

人の自己紹介に被せるもんじゃないぞ、セシルさんよ……。



「ケセドニア北部の戦いではセル將軍に痛い思いをさせられました」

そしてお前も何事も無いかのように進めるな。

「ご冗談を。……私の軍はほぼ壊滅でした」

……いいさ、いいさ。どうせ俺なんか眼中にないんだろ。ああ  
そうかい。だったらこの肩書きを使ってやろうじゃないか。ええ？  
驚くんじゃないぞこの野郎。

「んん！ まだ私の自己紹介がすんでないのだが？」

「…ん？ ああ、申し訳ありません」

聞いて驚くなよ。いや、あまり言いたくない肩書きだからやっぱそれなりのリアクションが欲しいか。

「『ローレイ教団神託の盾騎士団最高教導官兼第零師団師団長、イブキ・ヤマト奏将』だ」

「『ローレイ教団神託の盾騎士団第零師団所属、テア・ヤマト謡士』です」

「『『なっ!?!』』』」

その場にいたティア以外が驚いた。  
それもその筈。騎士団の最高教導官はともかく、第零師団と俺とティアの階級が高いのだ。

「第零師団……嘗て騎士団最強師団だった……」

「それに奏将……確か導師を抜いて一番上の階級では……」

因みに、テアは三番目でテラも同じ。

コスモスは謡将で二番目、ヴァンと同じだ。

ユリアは教団自体に属していない。偶に教団内で子供たちの相手をしている。

「まあ今は無期限の休暇中だから、あまり気にしなくても良い」

「……分かりました。ではルーク様は私どもバチカル守備隊とご自宅へ……」

「待っていてくれ！」

ゴールドバーグの言葉を遮ってルークが待ったをかけた。

「俺はイオンから伯父上への取り次ぎを頼まれたんだ。俺が城へ連れて行く！」

ほお！　今までめんどくさがっていたルークが！　いったいどういった心の変化なんだ？

「ありがとうございます。心強いです」

「ルーク、見直したわ。あなたも自分の責任をきちんと理解してるのね」

「えらい、えらい!」

「う、うん……まあ……」

ティアとテアがルークを褒めた事で、ルークの顔は少し赤くなつたが、その表情にどこか苦痛を感じているような気がした。

763

「承知しました。ならば公爵への使いをセシル將軍に頼みましょう。セシル將軍、行ってくるか?」

「了解です」

「では、ルーク。案内をお願いします」

「おう、行くぞ」

俺達はルークの案内……というよりルークが外に出た事が無いので  
実質ガイの案内になっているが、城に向かった。

その途中、昇降機に乗っている際にルークに話しかけられた。

「イブキって、騎士団じゃ凄いのか？」

「ん〜…俺は別にそうは思って無いが、他から見ればそうらしい」

「奏将って事はヴァン謡将よりも上だしな」

「モース様と同じ階級……お金持ち……」

だからアニス、金はやらんぞ。

「それより、何でイオンまで驚いてたんだ？ お前は導師だろ」

「ははは……すみません。僕はあまり軍事には関わらせてくれないので」

関わらせてくれない？ 馬鹿な。導師は教団、騎士団のトップだぞ。なのに何故……。ああ、あのゴミか。あのクソ野郎……。何時かぶっ飛ばしてやる。

「第零師団というのは、今も健在で？」

「……ジェイド、お前は自分の師団の状況を外に漏らすか？」

「ああ、そうですか。それはすみませんね」

ちっとも思って無いくせに。…と、そうこうしている内に城に辿り着いた。

「……デカイな」

「大きいねー……」

どうしてこう王様って奴らは大きな建物にするかね……。威厳を保つためか？

と、そんな税金の事を考えていたら後ろから誰かが抱きついてきた。

「んなっ!?!」

「あっ!」

「「「「「はっ?」「「「「「」

なっなんだ!?! 刺客!?! いや俺は狙われる覚えはあるけどこんな白昼堂々と!?! いやそれより俺に気付かれずに近づいただと!?!

俺が驚いていると、相手が口を開いた。

「会いたかったわよ! イブキ!」

……あれ？ この声……。

俺はゆっくりと抱きついてきた人物の顔を見た。

「なっ！？ ユリア！？」

「「「「「ユリア！？」「」「」「」

その人物はアグゼリユスの救援に向かっている筈のユリアだった。

「お前っ、どうしてここに！？」

「そんなの決まってるでしょ。終わったのよ」

「は、早かったな……」

「ええ。皆が頑張ってくれたからね」



「そうか。……コスモスは？」

「別行動で買い物をしてるわ。私は貴方が見えたから追ってきたの」

おいおい……それをコスモスが聞いたら怒るぞ。

「そうか。……無事で良かった」

俺はユリアと向き合い、抱きしめた。

「……んん！ ……仲がいいのは宜しいですが、場所を弁えて下さ  
い」

「「あ……」」

しまった……ジエイド達の前だった……！ 嬉しさと吃驚で懸念し

ていた！

「それで、こちらの方は誰ですか？」

「ああと……彼女は……」

「初めまして。私はユリア・ヤマト。イブキ・ヤマト妻です」

「「「妻っ！？ ええっ！？」「」「」

「そうですか」

ジエイドだけは驚かず、笑ってすました。

「姉さん！」

「ティア〜！ こんなに大きくなって！ もう恋人とか出来たんじやない？」

「こ、恋人って……／＼／＼／ もう、姉さん、私は軍人よ？」

「軍人である前に女の子でしょ？ ちゃんと見つけなくちゃ駄目よ」

ユリアとティアはとても仲がいい。コスモスとテアとテラとも仲がいいが、ユリアとは一番仲がいいみたいだ。血が繋がっているからか？

「ユリアって……始祖ユリアと同じ名前……」

「私の両親がユリア様を敬愛しててね……私にその名前を付けたのよ、アニスちゃん」

「ほえ？ どうして？」

「昔、一緒に子供達と遊んだじゃない」

「昔……？ あっ！ あの時の！？ でも九年も前ですよ？」

「私は覚えがいいのよ」

いや、そんな問題か？ まあユリアは出会った時から記憶力は半端無かったけどな。

「お、おいイブキ。妻って……テアとテラだけじゃないのか？」

ガイが肘で突いてきた。

「ああ。あと一人いるぞ」

「……四人の妻ですか。……羨ましい」

何を言う。ガイも元は貴族なんだから、その恐怖症を治したら夢ではないぞ。……貴族階級つを取り戻せたらな。

「それで、今は何をしてるの？ 導師まで連れて……」

「キムラスカとマルクトの平和条約を結ぶんだってさ」

「知ってるわよ」

「じゃあ聞くなよ!」

ああ、このやり取りも懐かしい……って思うか!

「失礼。何故知っているのですか? これは機密中の機密なのですが……」

ジエイドが警戒してユリアを睨んだ。

「貴方がジエイド・カーティス?」

「何故それを?」

「軟派皇帝から聞いたもの。『アイツは可愛くない』って

「……そう言う事ですか。…はあ、あの愚帝は……」

「ま、諦める」

「そうですね」

ジエイドは溜息を吐きながら肩を落とした。まああんな皇帝、面倒をみるのは大変だからな。

773

「ねえ、私も行っていい？」

「は？ 行ってどうするんだ？」

「暇つぶしになるかなーって」

「コスモスは？」

「その内来るでしょ」

いや来るでしょって……。

まあユリアがいた方が今後の方針を決めやすくなるかもしれない。  
アグゼリユスの事もあるし……。

「ルーク、イオン、良いか？」

「別に良いんじゃないの？ イブキの連れなんだし」

「僕も構いませんよ」

「…だとさ」

「ありがとう」

「んじゃあみごとに行けば」

ルークが城の扉を開き、中に入っていた。  
俺達もそれに続いた。

そして謁見の間に入る扉に二人の兵士がいて、その二人に止められた。

「ただいま大詠師モースが陛下に謁見中です。しばらくお待ちください」

何？ モースだと？

「モースつてのは戦争を起こそうとしてるんだろ？ 伯父上に変な事を吹き込まれる前に入ろっぜ！」

よく言ったぞルーク！ それでこそ王子だ！

「おやめ下さい！」

「俺はファブレ公爵家のルークだ！ 邪魔をするなら、お前をクビ



にするよう申し入れるぞ！」

……王子……か？　ちと横暴じゃないか？

「ルーク、いいのでしょうか。こんな強引に……」

「いいんだよ。じゃないと手遅れになるかもしれない」

なんだ、ちゃんと考えてるのか……。見なおしたぜ。

そのままルークは扉を大きく開け、中にズカズカと入った。  
やる〜……。。

中では王にモースがペラペラとありもしない事を話していた。

「マルクト帝国は首都グランコクマの防衛を強化しております。エ  
ンゲーブを補給拠点としてセントビナーまで……」

「ちょっと待った!!」

ルークは大声でモースの言葉を遮った。

いいぞルーク、今のお前はカッコいいぞ。

「無礼者! 誰の許しを得て謁見の間に……」

「うるせえ、黙ってる!」

「ムゲっ……」

チビの爺さんがルークの一喝に押さえこまれた。

「その方は……ルークか? シュザンヌの息子の……」

「そうです、伯父上」

「そうか！ 話は聞いている。よくマルクトから無事に戻ってくれた。すると横にいるのが……」

「ローレライ教団の導師イオンとマルクト軍のジェイドです」

「ご無沙汰しております、陛下。イオンにございます」

「導師イオン……お、お捜ししておりましたぞ……」

何を白々しい……。お前は導師の権力だけが欲しいだけだろ。

「モース。話は後にしましょう。陛下、こちらがピオニー九世陛下の名代、ジェイド・カーティス大佐です」

ジェイドは跪いて陛下に口を開いた。

「御前を失礼いたします。我が君主より、偉大なるインゴベルト六世陛下に親書を預かって参りました」

アニスが前に出て、小さな爺さんに渡した。  
これで親書は無事に届けられた。

「伯父上。モースが言ってる事は出鱈目だからな。俺はこの目でマルクトを見てきた。首都には近付けなかったけど、エンゲープやセントビナーは平和なもんだったぜ」

「な、何を言うか！ 私はマルクトの脅威を陛下に……」

……チツ、もうキレたぞ。

「黙れモース！！ 貴様はそれでもユリアの教えを受けた身か！？」

「なっ！？ 無礼者が！ いった何様のつもりで……」

「この顔を見て分からないか？ 第零師団師団長のヤマトだ！」

「なっ！？ ま、まさか」

「モース、貴様は出て行け！ この恥さらしが！！」

「ぐう……！！！」

モースは悔しそくに顔を歪め、謁見の間から出て行った。

ああくそっ！ まだ腹が立つ！ いっその事刀の錆にしてえ！！

「……陛下、お見せ苦しいところを申し訳ございません」

「いや良い。あの有名な師団の長を見れたのだ」

ほっ、器のデカイ陛下で助かったぜ。下手したら不敬罪で死罪とかなりかねん。

「皆の者、長旅ご苦労であった。まずはゆっくりと旅の疲れを癒さ

れよ」

「使者の方々のお部屋を場内にご用意しています。よろしければ」  
案内しますが……」

「もしもよければ、僕はルークのお屋敷を拝見したいです

」ではご用がお済みでしたら城へいらして下さい」

よし、これで一段落は付いたかな？ あとはアグゼリユスの件か……。崩落はさせたくないな……。

「ルークよ。実は我が妹シュザンヌが病に倒れた」

「母上が！？」

「わしの名代としてナタリアを見舞いにやっている。宜しく頼むぞ」

「はい……」

それを聞いたルークは早足で謁見の間を出た。

病か……俺とユリアの力で治せたりしないか？

ファブレ邸

ルークが家に帰ると、キムラスカ兵の鎧とは違う白銀の鎧を纏った兵たちがルークを暖かく迎えた。

どうやらルークにはそれ程の人望があるようだ。

そしてルークを先頭に扉を開けて中に入った。

「父上！　ただいま帰りました！」

中に入るとルークよりも濃い赤髪の男性とセシル少将がいた。

ルークの言葉からこの男性がファブレ家の当主、クリムゾン・ヘアツォーク・フォン・ファブレだろう。

こいつがホドを攻めた……ヴァルターの子孫を殺した張本人……。

「報告はセルシル少将から受けた。無事で何よりだ。ガイもご苦労だったな」

「……はっ」

気安くガルディオス家の名を口にするな。  
それに、息子に対して何だその態度は。それでも父親か。

「使者の方々もご一緒か。お疲れでしょう。どうかごゆるりと……」

そこでファブレと俺の視線が合った。  
その瞬間、ファブレは踊りた表情になり、俺は少し殺気を出してしまっていた。



「……ホドの悪魔？ いや、それにしては……」

何をブツブツ言ってるんだ、コイツ……。人が斬りかかるのを我慢してやってるのに……。

「……ところでルーク、ヴァン謡将は？」

ファブレは視線を外し、表情を戻した。

「師匠？ ケセドニアで分かれたよ。後から船で来るって……」

「ファブレ公爵……。私は港に……」

「うむ。ヴァンのことは任せた。私は登城する」

そう言ってファブレは歩きだし、俺達とすれ違った。

その時、ティアの横で止まり、小声で何か話していたが、ヴァンと

共謀していたのではないかと訳の分からない事をティアに聞いていた。

コイツ……俺の弟妹を侮辱するか。本気で殺してやるうか？

更に俺とすれ違った時も、俺を一瞥してから通り過ぎた。気に入らん。

「なんか変だったな。旦那様」

ガイが首を捻った。

旦那様……家族の仇にそんな風に接する理由が分からない。

「ヴァン師匠がどうしたんだろう……」

共謀から……おそらくキムラスカはヴァンがルークの件に関わっていると疑っているんだろうな。

「イブキ、どうしたんだ？ 怖い顔してるぞ」

ガイが俺の顔を覗きながら尋ねてきた。

俺は殺気云々を表情から消し、何時もの表情に戻した。

「いや別に。ただ息子のルークが帰って来たのに、お帰りの一つも無い事にちょっとな……」

「そつだよね。父親ならもっと心配するでしょ。ねえ、ルーク君」

「……さあな」

「……」

ファブレ……何故息子に気を向けない。同じ子を持つ同士、少なくとも子に向ける愛情は同じだと思っていたのに……。

「あの、私は……」

ティアがおずおずとそう言った。

「まあ待てティア。今回の騒動はティアが原因なんだろう？ だったらルークの母親に謝っていけ。子を心配する母の気持ちは、お前も知っているだろ？」

「……うん。そうする」

「いい子だ。俺も一緒に行くから」

「私も」

「なら私もね」

ティアとユリアも顔をひょっこり出した。

「ありがとう。でも私ももう子供じゃないわよ」

「そう言われちゃあ、ね……」

ユリアは少し残念そうに引っ込んだ。

ティアも仕方なく引っ込んだ。二人はこう見えてシスコンである。勿論俺も。コスモスは……姉というよりも母？ みたいな姉だな。

ルークとティアが母親の所へ向かおうとしたら、金髪の少女がやって来た。

「ルーク！」

「げ……」

ルークはあからさまに嫌な反応をした。

「まあ何ですの、その態度は！ 私がどんなに心配していたか……」

「いや、まあ、ナタリア様……ルーク様は照れてるんですよ」

ガイがルークのフォローをする。  
だが、ガイ。ルークの態度は照れるという態度とは程遠いぞ。  
っていうか、ナタリアって確かインゴベルトが言っていた娘……所  
謂姫様か。

「ガイ！ あなたもあなたですわ！」

姫様はガイに近付いた。  
当然の如くガイは数歩下がった。

「ルークを捜しに行く前に私の所へ寄るようにと伝えていたでしょ  
う？ どうして黙っていったのです！」

更に近付き、遂にガイは柱の後ろに隠れてしまった。

「俺みたいな使用人が城に行ける訳ないでしょう！」

「何故逃げるの!」

「存じでしょう!」

「私がルークと結婚したらお前は私の使用人になるのですよ。少しは慣れなさい」

「無理です!」

うわー……惨め。男として惨め。ヴァルターの血は何処へ行った。アイツはアレで堂々としていたぞ。女も落としていたし。

「おかしな人。こんなに情けないのに何故メイドたちは、ガイがお気に入りなのかしら」

訂正だ。十分継いでるよ。いよっ、女誑し。

「言っておくけどイブキもそうよ」

「へ？」

「……教団の女性全員惚れさせたくせに」

「はい？」

ユリアさん？ テアさん？ なしてそないな怖い顔をしてるのですか？

「それにしても大変ですわね。ヴァン謡将……」

姫様がルークに向き直った。  
ガイは離れてくれてほっとした。

「師匠がどうかしたのかよ？」

「あら、お父様から聞いていらっしやらないの？ あなたの今回の出奔はヴァン謡将が仕組んだものだと思われているの」



やはりな……。ヴァンがそんな事してどうなる。ほんの少し考えたら分かる事だろ。これだから軍人は……。まあその軍に俺も二年間いたけどさ。

「それで私と共謀だと……」

「あら……そちらの方は……？」

姫様はティアをじっくり見た後、とんでも無い事を言い出した。

「ルーク！ まさか使用人に手をつけたのではありませんわよね！」

ぶふっ！？ おいコラ姫様！ ティアの何所を見たら使用人に見える！

「何で俺がこんな冷血女に手えだすんだ！ つーか、使用人じゃね

「よー！」

「でしたら！ そちらにいる方は明らかにそうではありませんか！」

「そうだけどちげーよ！ テアはその隣にいるイブキの女だよ！  
それに、コイツは師匠の妹だ！」

「……あら、そうでしたの？」

うんうんとテアとティアは頷いた。  
姫様は顔を赤くして咳払いをした。

「ええつと……あなたが今回の騒動の張本人の……ティアさんでしたかしら」

「んなことより、師匠はどうなっちまうんだ！」

「姫の話しが本当なら、バチカルに到着次第捕えられ、最悪処刑と  
いうこともあるのでは？」

ジェイドが落ち着いて推測した。

「ほうあ！ イオン様！ 総長が大変ですよ！」

「そうですね。至急ダアトから抗議しましょう」

「なあ、師匠は関係ないんだ！ だから伯父上に取りなしてくれよ！ 師匠を助けてくれ！」

ルークが姫様の肩を掴んで頼みこむ。

その顔はとても必死だった。弟子があんなに頼んでいるのに、師で兄である俺が何もしないでいると言っただけじゃない。当然、俺も頼んだ。

「姫様、ヴァンは私の弟子であり弟なのです。どうか、助けていただけないでしょうか？」

「私もお願いします。彼は私の弟でもありますから」

「お願いします」

ユリアとテアも俺と一緒に頭を下げてくれた。

「……わかりましたわ。父上に頼んでみますわ」

「ありがとうございます」

この姫様なら信用しても問題は無いだろう。  
街を歩いている時、この姫様の名前が良い意味で挙がっていた。民  
の為に動き、尽力を尽くすからの結果だろう。  
少なくとも、俺は信用できると思っている。

「頼むな、ナタリア」

「ええ。任せて下さい、ルーク」

姫様は優雅に部屋を邸から出て行った。

「じゃあ、ティア。お前はルークと一緒に行ってこい」

「ええ……」

「お前らはガイに付いて俺の部屋にでも行っててくれ」

「分かった」

ルークとティアは母親の所へ向かった。

俺達はガイに案内され、ルークの部屋に向かった。

ルークの部屋は中庭の奥で、中々広い。窓も沢山あり、日当たりも良好だった。

暫く談笑して待っていると、ルークとティアが入って来た。

ティアの表情から察するに、許して貰えたようだ。

「じゃあ俺も行くわ」

少し話した後ガイが切り出した。

「お前の搜索を、俺みたいな使用人風情に任されたって、白光騎士団の方々がご立腹でな。報告がてら、ゴマでもすってくるよ」

白光騎士団、つまりルークを護衛する白銀の鎧を着た騎士団のことのようだ。

「僕たちもおいとましますね」

「ルーク様。アニスのこと……忘れないで下さいね」

「……なかなか興味深かったです。ありがとうございます」

まともに挨拶をしているのはイオンだけだよ。  
アニスは媚びて、ジェイドに至っては棒読みもいいとこだ。

「私達も行くわよ。それではルーク様、お元気で」

「バイバイ、ルーク君」

ユリアとテアも別れの挨拶をした。

ユリアが様付けなのは、まだ会って間もないからだ。まあその内呼び捨てになると思う。

「じゃあなルーク。元気でな」

「ああ。……イブキ」

「ん？」

「その……色々と教えてくれて、助かった」

「いいさ。……お前を見てるとな、ある弟を思い出すんだ」

「ヴァン師匠か？」

「いや、別の……。もういないけどな。そいつの最初の言動に良く似てたからな。ついつい面倒を見たくなくなってしまっただよ」

「俺は子供か……」

「子供だろ？」

「ぐっ……」

ルークは何も言えなくなって口を閉じて拗ねた。

ほら、そんな態度するから子供なんだ。

「ま、今度会う時は少しは大人になってるよ？」

「……見てろよ、ぜってー驚かしてやるからな！」

「はっはっはっ！ 期待してるよ。じゃあな」



俺とユリアとテアは部屋から出た。  
ティアも何かルークと話しているようだ。

さてと……これからどうしようか。折角ユリアと再開できたし、コスモスと合流して久しぶりに遊ぶというのもありか。

少ししてから出てきたティアと共に邸を後にして街の方に向かった。

「それで、コスモスとは何処で合流するんだ？」

「闘技場の前よ。コスモス、驚くでしょうね。イブキとティアが一緒にいるもの」

エレベータを使い、下層にある闘技場に向かった。  
このバチカルは確か、巨大な譜石が落ちてきて出来た窪みに作っている。故に縦に以上に長い。

「コスモス姉さん、私って分かるかしら？」

「分かるわよ。コスモスは記憶力が良いんだし」

「そうだよな……。何千枚もある資料をものの数秒で丸暗記しちゃうから……。アレには驚いたな。」

「ねえ、ティアちゃん」

「なに？」

ティアがティアに顔を覗きながら尋ねた。

「どうして昔みたいに、『お姉ちゃん』って呼んでくれないの？」

「そ、それは……／＼／＼／」

「そう言えば……私の事も『ユリアお姉ちゃん』って呼んでたのにね」

「そつだよ。ほら呼んでよ」

「うう……／＼／＼／」

ティアは真つ赤になって顔を伏せた。

そんなに恥ずかしいものなのかね……。まあ俺に姉はいないからな。義兄はいたけど。

「」  
「ほらほら」  
「」

「うう……お、お姉ちゃん……／＼／＼／」

ズギュンッー！

な、何だこの可愛さは……！ 九年前よりも遥かに可愛さがパワーアップしているぞ！ 身体も成長してそれが更に刺激的……って、俺は妹に何て事を考えてる！？ 落ちつけ、落ち着くんだ。……よし良いぞ。落ち着いてきた。

「ん〜！ やっぱりティアは可愛いわ〜！」

「きゃっ！？ / / / / お、お姉ちゃん！ 抱きつかないで！ / / / /」

「良いではないか、良いではないか！」

おいコラ！ 誰だユリアにこんな言葉を教えたのは！ あの軟派帝か？ そうなのか？

「ほらユリア、ティアが困って「まったくです。少しは自重しなさい」そうだ、コスモスの言う通り……」

あれ？ ここにいない筈のコスモスの声が聞こえた様な……。

俺はゆっくりと後を見た。  
そこには長くて綺麗な青髪、赤い瞳、白い肌、それを包む露出度の高い服、機械めいた装備……俺が一番に愛した女性、コスモスがいた。

かなりご立腹のご様子で。

「コスモス……久しぶりだな」

俺は動揺を隠してコスモスに手を振った。

「ええ、久しぶりです。……ちょっと宜しいですか？ ユリア」

「えっ！？ い、いや、私より先に挨拶すべき人が「宜しいですね？」……はい」

コスモスはユリアの後襟を掴み、路地裏に連れ込んだ。

『ご、ごめんなさいコスモス！ 別に出し抜こうとしたんじゃないのよ！ 偶々見つけて……』

『何を謝っているのですか。別に私は何十分も待たされた上にイブキと会っていた事に怒ってなんかいませんよ、これっぽっちも』

『だったらその剣とガトリングを返して！ 止めて！ 振らないで！ 撃たないでー！ー！ー！』

「……」

あのコスモスが……冷静で大和撫子ともいえるコスモスが阿修羅と化してる……！？

俺とティア、ついでに周辺にいた人達が驚いていると、いつもの美しい笑顔を浮かべたコスモスと、ボロボロになったユリアが出てきた。

「では改めて……お久しぶりです、イブキ」

「あ、ああ……元気でなによりだ」

「凄い……もう何時も通りだ……」。

「それに……ティアも。大きくなりましたね」

「……うん、姉さん。……久しぶり」

「はい。お久しぶりです」

コスモスはティアを優しく抱擁し、頭を撫でた。  
ティアはユリアとテアの時とは違い、恥ずかしがらなかった。

二人はしばらくしたら離れた。

「ミリアはお元気ですか？」

「うん。ユリアシティで子供達の教師をしてるわ。お母さん、ずっと待ってるわ」

「そうですか……。帰ったらタダでは済まなさそうですね」

「……俺に言うな」

どつしろと言っただ……。ミリアの鬱憤を俺が全て受けると？ 死ぬわ。攻撃譜歌を全てぶつけてくるわ。 死

「ティア、これから時間がありますか？」

「モース様に報告する事があるけど……」

「構わん。俺の権限で後でいい」



本当は会わせたくないんだがな。ティアは真面目だからそうもいかんし……。

「ほら、騎士団のトップがそう言ってるんだから」

「……そうね」

トップと言っても、モースと同じ階級だ。だが俺はモースよりも強いし賢いし容姿も良いし信頼も厚いから事実上、俺がトップの様なもんだ。導師を除けば。

まあ俺がどうやってこの地位に就任したのかはまた後ほど。イオンは関わっていない事は確かだ。

「ではこれからお茶でもしましょう。ちょうど良い所を見つけましたから」

コスモスの案内で俺達は店に向かった。

そこで暫くの間談笑し、有意義な時間を過ごせた。

そしてティアはその真面目さを発揮し、モースの所へ仕事の報告をしに行った。

「……それで、完全に終わったのか？」

俺は雰囲気を変え、三人に聞いた。

「はい。全ての住人をマルクト側からの街道から非難させました」

「もう少し遅かったら障気で完全に塞がっていたわ。いくら私の譜歌でも、完全に防げなかったと思うわ」

「ルーク君達がアグゼリユスに来ても怪しまれない様に、師団の人達を住民になりすまさせてるよ」

「そうか……」

この計画は誰にも知られてはいけない。

ただ一人、ピオニーにだけは知らせている。俺達が預言を知っている事を。<sup>スコア</sup>

アイツはアレで信頼できる奴だ。誰にも口外しない。

「住民はピオニーさんが保護してくれてる。グランコクマの近くに避難所を作ってくれたよ」

「表向きは第零師団の野営としているけど、それも何時までもつか……」

「師団の優秀な団員を残していますから、そんなに直ぐに気付かないと思います」

「……そうか、よくそこまでやってくれた。後は俺達がアグゼリユスの崩落を止めれば……」

だが一つ思う事がある。

それはアグゼリユスの預言を止めたとして、預言はそれで終わるのか？

アグゼリユス崩落は、今後の事に大きく左右される。

預言にはアグゼリユスの崩落が原因で戦争が起こると詠まれている。なら、崩落しなかったら？ 戦争は無くなるのか？ それとも何か別の原因が出来るのか？

今は考えても仕方が無い。アグゼリユスに残った団員の為にも、住民の為にも救わなければならぬ。それがユリアの願いなのだから。もう預言で死んでいく人を見たユリアの顔を、俺は見たくない。

「それで、どうやって崩落を止めるのですか？」

コスモスが尋ねてきた。二人も気になるのか、こちらを見てきた。

「……預言にはルークが崩落させると詠まれている。だからルークに注意を払い、アグゼリユスのセヒイロトツリーに近付けさせない。これで先ずは崩落の心配はない筈だ」

崩落はセヒイロトツリーの消失によって起こる現象だ。ならそれを消させなければいい。

「救助中、必要な場合、障気は俺とコスモスのエーテルドライブで和らげる。……最悪、ユリアとティアの譜歌で一定時間、中和してもらおう」

「……そう」

ユリアが讃歌を詠うこと即ち、素性がばれてしまうこと。

そうなったら、またユリアを祭り上げる者が現れるかもしれない。

祭り上げられ、世界の全てを背負わせられることになる。

そうで無くとも、預言を恨む者がいて、それを詠んだユリアを恨む者がいるかもしれない。

「障気を完全に消すのは、また追々に考える。今は預言の回避だ」

「「「……」」」

勝負はもうすぐだ。必ず変えてみせる。もう誰も、預言で死なせたりしない。

ルークも、絶対に死なせやしない。

## 回避の始まり（前書き）

ああ、ホント文才が欲しい！

そしてそれなのに新しいのを書こうとしている俺の馬鹿！

## 回避の始まり

朝、俺は城の一室で目覚めた。

コスモス達は街の宿屋で休んでいる。

テアとテラは城の部屋でもいいのだが、コスモスとユリアと共に宿で休む事にした。

用意された朝食が済んだ頃、城のメイドが部屋に来て、謁見の間に来てほしいと伝えてきた。

いよいよか……。なんとしてでもアクセリウスを、ルークを救ってみせる。

何時も通り黒のコートを着て、謁見の間に辿り着いた。

中にはジェイド、ファブレ、陛下、姫様、内務大臣のチビ爺がいた。

俺は陛下に一礼して、ジェイドの横に立った。

「おはようございます」

「おはよう。アニスとイオンは？」

「アニスが付きっきりで部屋にいると思いますよ」

という事は、救助には来ないと。まあ導師だし当たり前か。

暫く待っていると、ルークとティアとモースがやってきた。

「おお、待っていたぞ、ルーク」

陛下はルークの顔を見て表情が綻んだ。と思つたら、表情を引き締めて王の顔になった。

「昨夜、緊急会議が招集され、マルクト帝国と和平条約を締結することで合意しました」



内務大臣の……確かアルバインがそう告げた。  
続いて陛下が口を開いた。

「親書には平和条約締結の提案と共に、救援の要請があったのだ」

「現在、マルクト帝国のアクゼリユスという鉱山都市が、障気なる大地の毒素で壊滅の危機に陥っているということです」

「マルクト側で住民を救出したくても、アクゼリユスへ繋がる街道が障気で完全にやられているそうよ」

内務大臣と姫様が言葉を繋ぐ。

「だが、アクゼリユスは元々我が国の領土。当然カイツール側からも街道

が繋がっている。そこで我が国に、住民の保護を要請してきたのだ」

もうしてますよ、第零師団とピオニが。……あれ？ これってキ

ムラスカを騙してるのか？

「そりゃ、あつちの人間を助けりゃ和平の印にはなるだろうな。でも俺に何の関係があるんだよ」

ルークが心底だるそうに聞いた。  
そしてファブレの言葉でもの凄い嫌な顔をした。

「陛下はありがたくもお前をキムラスカ・ランバルディア王国の親善大使として任命されたのだ」

「俺え！？ 嫌だよ！ もう戦ったりすんのはごめんだ！」

「ナタリアからヴァンの話を聞いた」

っ！ ヴァン……。そう言えばアイツはどうなったんだ？

「ヴァンが犯人であるかどうか我々も計りかねている。そこで、だ」

……おいおい、まさかヴァンを餌にルークを強制的にアクゼリユスに向かわそうとしているんじゃないだろうな？

「お前が親善大使として、アクゼリユスへ行ってくれれば、ヴァンを解放し協力させよう」

……チツ、誰の入れ知恵だ。こうなったらヴァンを慕っているルークは頷くしかないだろうが。

「ヴァンせんせい師匠は捕まってるのか!？」

「城の地下に捕えられているわ」

「……わかった。師匠を解放してくれるんなら

……」

ルークは渋々と頷いた。

これで、ルークのアクセリユス行きが決まった。  
出来れば向かわせたくなかったが……。

「よく決心してくれた」

よく言う……脅してたくせによ……。

「実はな、この役目、お前でなければならぬ意味があるのだ」

「……え？」

「この譜石を」

ファブレが譜石を持たせた兵士を前に出した。

「これは我が国の領土に降った、ユリア・ジュエの第六譜石の一部

だ  
」

「ティアよ。この譜石の下の方に記された預言を詠んでみなさい」  
スコア

陛下の命令に従い、ティアは譜石の前に立って詠み始めた。

「『ND2000。ローレイの力を継ぐ者、キムラスカに誕生す。其は王族に連なる赤い髪の男児なり。名を聖なる焰の光りと称す。彼はキムラスカ・ランバルディアを新たな繁栄に導くだろう。ND2018。ローレイの力を継ぐ若者、人々を引き連れ鉾山の街へと向かう。そこで……』……この先は欠けています」

……何？ 欠けている？ それも都合よくルークが死ぬ所で……。

「結構。つまりルーク、お前は選ばれた若者なのだよ」

「今までその力を狙う者から護る為、やむなく軟禁生活を強いていたが、今こそ英雄となる時なのだ」

何だ？ 何故こんなに称えるんだ？ それに、あの時のファブレの態度から、不自然さを感じる。

「……………ジェイド」

俺は小声でジェイドに呼びかけた。

「ええ……………。何か隠していますね」

ジェイドも何かを感じ取った様だった。

「何か？ お二方」

「……………いえ。それでは同行者は私と誰になりましたしょう？」

ジェイドは内務大臣の唐突な疑問に冷静に返事し、先に進めた。

「ローレライ教団としては、ティアとヴァンを同行させたいと存じます。ヤマト奏将、よろしいですか？」

モースが気持ち悪い顔で俺を見てきた。

一応、俺とモースは同じ階級で導師の次に偉い。

導師に話さず決めるのは些か悪い気がするが、此処にいないので仕方が無い。

「いいだろう。なら俺達ヤマトも同行する」

「お願いします」

「ルーク。お前は誰を連れて行きたい？」

「あゝ……じゃあガイを連れて行く」

「いいだろう」

ガイか……また俺の妻に鼻を伸ばさないでほしいな。女性恐怖症のくせに。

「お父様、やはり私も使者と一緒に……」

「それはならぬと昨晚も申しした筈！」

姫様の願いは陛下の一喝で終わった。

だが、その方が良いかもしれない。

万が一、億が一、アクゼリユスが崩落した場合、姫様に危険が及んでしまうからな。

「伯父上。俺、師匠に会って来ていいですか？」

「好きにきなさい。他の同行者は城の前に待たせておこう」

んじゃあ、俺はコスモス達を呼んでくるか。……ああそうだ、俺も譜石を見てみるか。変に途切れていたしな。細工している場合もあるし……まあその場合、キムラスカは何かを隠している事が確定す



るな。

結果から言うと、あの譜石には手を加えていた。キムラスカはルークの今後を知っていると云う訳だ。反吐がでる。まあ見過ごす俺も同類なんだろうが。

宿へ三人を呼びに行き、これからの事を話した。

三人は承諾し、テキパキと準備をしてから城に向かった。

しかしまあ……そこに行くまで随分と他人の目を引いたよ。

コスモスは露出が凄い、この世界の格好じゃない、ごっつい美人の三拍子。

ユリアはあのドレスで、ケープと頭飾り無しバージョン。しかし美人でセレブオーラ。

テアは……言うまでも無いだろう。

そんな訳で、城の前に到着するまでに男共の嫉妬と言つ名の殺人視線を浴びせられ、女共からは噂話のネタにされた訳よ。

「どう思う、ガイ」

「それは独り身の俺に対する嫌みか？」

「なら女性恐怖症を治す事だな」

顔と性格はいいんだから、それさえ治せばモツテモテだぞ。

「それで、そちらの女性は？」

ジェイドが眼鏡を弄りながら聞いてきた。

「ローレライ教団神託オラクルの盾騎士団第零師団副師団長コスモス・ヤマ  
ト 謡将です」

「そうですか。私はマルクト軍第三師団師団長ジェイド・カーティ  
ス大佐です」

「俺はガイ・セシル。ルークの使用人だ。しかしまあ、ホントに四  
人なんだな」

「羨ましいか？」

「羨ましいね」

「……」

「あゝ……ティアア？　なんでそんな冷たい目をしているんだい？」

「……別に」

フツ………ガイよ、お前呆れられてるよ。

その後、少し談笑していると城の扉が開き、ルークとヴァンが出てきた。

「兄さん……」

「ヴァン……」

「話は聞いた。いつ出発だ？」

ヴァンは既に謡将としての顔付になっていた。

「その事で、ジェイドから提案があるらしいですよ」

ガイがジェイドに促した。  
俺も聞いていないので、注意を向けた。

「ヴァン謡将にお話するのは気が引けるのですが……まあいいでしょう」

何だ、警戒しすぎじゃないのか？

ジェイドは警戒心たっぷりで内容を話した。

「中央大海を神託の盾の船が監視しているようです。大詠師派の妨害工作でしょう」

あの豚野郎……やはり今度会ったらブチのめす！

「大佐  
」

「事実です。まあ大詠師派かどうかは未確認ですが。      とにか  
く海は危険です」

「じゃあどうするんだよ？」

ルーク、最後まで話は聞こうな。ヴァン、教育がなってないぞ。ガ  
イも。

「海へ囀の船を出港させて我々は陸路でケセドニアへ行きましょう。  
ケセドニアから先のローテルロー海はマルクトの制圧下にあります。  
船でカイツールへ向かうことは難しくありません」

「なるほど。では、こうしよう。私が囀の船に乗る」

「えー!?」

ルークがもの凄く驚いた。

まあルークはヴァン依存症だからな、仕方が無い。

「私がアクセリユス救援隊に同行することは、発表されているのだろうか？ ならば私の乗船で信憑性も増す。神託の盾は尚の事、船を救援隊の本体だと思っだろう」

「宜しいでしょう。どの道あなたを信じるより他にはありません」

ジェイドはヴァンの案に賛成した。

確かに、主席総長が囿になる筈が無いと奴らは考えるだろうしな。九年間も姿を消していた俺より、信頼性は高い方だろう。

「だけど！」

「ルーク。私を信じられないか？」

「……わかったよ」

ヴァンにああ言われたらそう答えるしかないよな……。

「まあルーク。そう落ち込むな。ヴァンの代わりに、俺が色々教えてやるから。剣とかその他諸々」

「そうしてもらいなさい。イブキさんは私の剣の師でもあり、家庭教師でもあったのだ」

「ホントかよ！？　ってか何歳だ!？」

「三十そこらだ。誕生日は忘れたな」

嘘だ。実際は二千歳を超えている。ただ肉体が元のまま。この歳は設定だ。

「三十!? 結構歳くつてんな……」

「俺よりも年上だったのか……」

「全然そう見えない……何かしてるのかしら?」

「ははは……まさか私と同年代とは」

「イブキさん……そうだったのですか?」

「「「ええっ!?」「」」

おいこらヴァン、お前には昔に歳を教えといた筈だぞ!? 実際お前って馬鹿なのか!?

「ほら、早くした方がいいんじゃないか?」

俺は話を終わらせて皆を急かした。



「そうですね。では、私は港へ行く。イブキさん、ルークをお願いします」

「ああ」

ヴァンは昇降機に乗って俺達の間から姿を消した。

「なあ、ヴァン師匠の師匠ってことは、ヴァン師匠よりも強いって事か？」

「今は手合わせした事がないからな。昔はルークくらいだったな」

「ホントか！？ だったら俺も師匠みたいに強くなれるかな！？」

「それは努力次第だな。お前は運動神経も剣の腕も一流とは言えないが、トップクラスだ。訓練次第でヴァンを越せるかもな」

実際、ルークってフレイルの太刀筋によく似ているんだよな。

フレイルみたいに扱けば強くなる可能性はあるんだよな。

「では私は話を通してきますので、街の出口で待っていて下さい」

ジェイドも、この作戦の事を伝えに姿を消した。

「……で、ガイはいつまで鼻の下伸ばしてんだ？」

ガイはコスモスを凝視していた。

「えっ！？ な、何の事かな？」

「……最低」

「はあ……ガイ……」

「ティア！？ ルーク！？ ち、違っんだ！！」

ガイは二人に弁明しようとするが、二人は相手にしなかった。

「……………アクゼリユスが崩落する前にガイの精神が崩落しそうだな」

「……………私、着替えてきた方が……………」

「あのライダースーツみたいなの？ それもアレじゃない？」

「ここはやっぱりメイド服だよ！」

「……………そうですね。私の戦闘服、どうしてもか際どいのばかりですし……………」

後でも話し合っているがコスモス、メイド服ではコスモスの戦いは出来ないぞ。

それからその服の趣味は恐らくアイツの……………何も言わないでおこう。

結局、ガイの言い訳は聞いて貰えず、街の出口にく事になった。  
コスモスも、俺がメイド服は止めてくれと言ったら、止めてくれた。  
別に、テラの服を借りたら問題解決なんだが……他に装備と合わせると変だしな……。

昇降機で降りて、一つ下の階、軍の会議室がある場所に降りると、  
アニスが走ってきた。

「ルーク様あ！」

「ひっ……」

ガイは近付いてきたアニスを恐がり避けて、ティアはアニスに押されて退かされた。

そんなにルークに近付きたいか……。

「逢いたかったです。……でもルーク様は何時もティアと一緒にですね。……ずるいなあ」

と、アニスはティアを見た。

「あ……ごめんなさい。でも安心して、アニス。好きで一緒にいる訳じゃないから」

ルークの心を代弁してやる。なんか傷つく……。

「アニス。イオン様に付いていなくていいんですか？」

ジェイドが会議室から出てきた。

そこにいたのかよ。

「大佐！ それ……朝起きたらベッドがもぬけの殻で……。街を捜したら、どこかのサーカス団みたいな人が、イオン様っぽい人と

街の外へ行つたつて……」

アニス……何故それを早く言わない。お前の中ではルークの方が上から。

それに、サーカス団つて……ノワール達か。

「漆黒の翼か。あの馬鹿共……」

「追いかけてようぜ」

「駄目だよ！ 街を出てすぐのトコに六神将のシンクがいて邪魔するんだもん」

「まずいですね。六神将がいれば、私達が陸路に行く事が知られてしまいます」

コスモスが作戦の心配をした。

どっかに抜け道とかないのかよ。



回だけだろう。

「だからと言って、モースが戦争を求めていることの否定には繋がりませんがね」

ジェイドは冷たくティアの考えを否定した。

まあ十中八九、モースは戦争を求めているだろうな。

「六神将はイオンをどうしたいんだ？ 前の時は確か……セフィロトってここに連れて行かれてたよな」

「推測するには情報が少ないですね。それよりこの街をどうやって脱出するかです」

「待てよ。……いい方法がある。旧市街にある工場跡へ行こう。天空客車で行ける筈だ」

ガイがいい方法を閃いた様だ。俺達はそれに従い、工場跡へ向かった。



そこで、頭を痛めることになるうとは、この時はまだ誰も知らなかった。

姫様登場（前書き）

あゝ本当に文才が欲しい〜っ！

## 姫様登場

ガイの案内に従い、如何にも使われていませんと言っているような場所にある、天空客車にやってきた。

「おつかしいな。いつもここには兵士がいる筈なんだが……」

ガイは頭を捻って辺りを見渡し始めた。

「兵士？ 何で？」

ルークがガイに尋ねた。

「立ち入り禁止なんだよ」

立ち入り禁止なだけで兵士が警備に付くものなのか？ 何かもの凄い危険とかがあるんじゃない……。

俺がそんな事を想像していると、ガイは近くに居た人にこの兵士はどうしたのかと尋ねていた。

「ああ、そのの兵士さんなら城から呼び出されたとかでいなくなっちゃったよ。あんた達も工場跡に行くのかい？」

あんた達も？ ということは誰か先に入ったのか？ まさか……六神将か？

「さつきも若い女の子が天空客車に乗ったけど、最近はそのうちの流行ってるのかねえ」

若い女の子……？ あれ？ 何故かそこはかたく嫌な予感がしてきたんだが……。

「ん？ 誰が行ってるってこと？」

「そう言う事なんじゃね？ ま、さつさと行くつぜ」

アニスも疑問に思ったが、ルークは気にせず天空客車に乗り込んだ。もう少し危機感を覚えたほうがいいと思うが、時間が惜しいので俺達も乗り込んだ。

工場の中は真っ暗でカビ臭かった。こんな所には長くは居たくない。

「バチカルが譜石の落下跡だったのは知ってるな？」

歩いている途中、ガイがそう言ってきた。

「ここから奥へ進んで行くと落下の衝撃でできた自然の壁を突き抜  
けられるはずだ」

「なるほど、工場跡なら……」

「排水を流す施設がある」

「そついうこと」

ガイの説明でジェイドとティアはここに来た理由が分かった。

「この排水設備はもう死んでるが、通ることは出来るはずだ」

「まあ、ガイ。あなた詳しいのね」

……来たな。これが嫌な予感の正体か。

俺達はゆっくりと声がした後を振り返った。

そこには笑顔で仁王立ちしているナタリア姫がいた。

「見つけましたわ」

見つけるなよ……。

「なんだ、お前。そんなカツコでどうしてこんなトコ……」

「決まっていますわ。宿敵同士が和平を結ぶという大事な時に、王女の私が出て行かなくてどうしますの」

「……アホか、お前。外の世界はお姫様がのほほんとしてられる世界じゃないんだよ」

ルーク、それはもっともだがお前も人の事は言えないからな。

「下手したら魔物だけじゃなくて人間とも戦うんだぞ」

「私だつて三年前、ケセドニア北部の戦いで、慰問に出かけたことがありますもの。覚悟は出来ていますわ」

「慰問と実際の戦いは違うしい、お姫様は足手まといになるから残られた方がいいと思います」

「失礼ながら、同感です」

「ナタリア様。城へお戻りになった方が……」

アニス、ティア、ガイも反対の姿勢を取り、ジエイドや俺達も頭を抱えた。

「お黙りなさい！ 私はランバルディア流アーチエリーのマスターランクですわ。それに、治療師としての学問も修めました！ その頭の悪そうな神託の盾や無愛想な神託の盾やメイドごっこしている神託の盾や一般人より役に立つ筈ですわ」

「……何よ、この高慢女！」

「私のメイド魂を馬鹿にするんだ、高飛車女のくせに」

「一般人って……言うておくけど、私が本気を出したらこの都市吹っ飛ばわよ？」

「と、都市って……何て野蛮な方！」

テア、ユリア……どうどう。怒る気持ちは分かるが今は抑えなさい。殺るなら後で見えないところできなさい。俺も自分の妻と妹もとい子孫を馬鹿にされて今にも斬りかかりそうなどころを我慢してんだからなあ。

「呆れたお姫様だわ……」

「これは面白くなってきましたねえ」

「……だから女は怖いんだよ」

はあ、これは先が思いやられるな……。特に人間関係がちゃんと出来るかどうか……。

「とにかくついてくんな！」

ルークはシッシと手を払ったが、姫様……もうナタリアでいいや。が、ニヤリと笑い、ルークの近くで呟いた。

「あの事をばらしますわよ？」

「あ、あの事って、何だよ？」

「私、聞いてしまいましたの。あなたがヴァン謡将と城の地下で」

刹那、ルークはナタリアを引っ張って俺達から離れた。

ルークはヴァンと何か話してたのか？ いや、まあ隠し事の二つや二つはあるだろうが、そんなに隠したい事なのか？



「……ルーク、将来尻に敷かれるわね」

「……ユリア、何故俺を見る」

「別に」

「……え、俺って尻に敷かれてるのか？ そんな、まさか……いや、でも……」。

俺が過去を振り返っていると、ルークとナタリアが戻ってきた。

「ナタリアに来てもらう事にした」

「……」

その場の全員に白い眼で見られ、ルークは目を逸らした。

「宜しく願いますわ」

ナタリアはそんな状況でもケロツとしていた。

ナタリア……お前は大物になるよ。

「……ルーク、見損なったわ」

「ルーク君、男の子ならしっかりしなくちゃ駄目なんだよ」

「う、うるせーなっ！　しっかりするし、俺は親善大使だ！　俺の言う事は絶対だ！　いいな！」

ティアとテアに言われて、ルークは怒鳴った。

「あ、そうですね。今後私に敬語は止めて下さい。名前も呼び捨てること。そうしないと王女だとばれてしまつかも知れませんか」

ああそうですね。ま、その方が楽でいいわ。

その後、ナタリアと名前を交換し、一緒に行動する事にした。

道中、魔物が襲う事もあった。スライム型のコールドールやトカゲ型のバジリスク、コウモリ方のビックバットにブラックバット、あとよく分からんフワフワしたラップオン。

当初、ナタリアが戦えるかどうか心配だったが、アーチエリーのマスターランクと言うだけあって、かなりの戦力だった。治療術も、ティアとユリアよりは下だが、非常に役に立った。

「よし、こっちは終わったぞ」

ブラスタージェンで魔物を蹴散らし、皆を確認した。

「こちらも終わりましたわ」

ナタリアも何本もの矢を一斉に放ち、魔物を串刺しにした。

えげつねえ……。

「ナタリア、中々やるわね」

「ユリアさんこそ、兵士でもないのに素晴らしい譜術ですわ。何かしていらしたのですか？」

「少しだけ譜術の専門家の元にいたわ」

そういうユリアは、先程から魔物が現れてからとても美しい笑顔で譜術をバンバン放ち、魔物が可哀想に思える程容赦がなかった。

ストレスでも溜まってるのかねえ……。

「なあ、イブキ」

「ん？」

ガイが神妙な顔つきで近付いてきた。

「アンタが使ってる武器もそうだが、コスモスが使ってる武器も、  
いったいどういった仕組みなんだ？」

「企業秘密だ」

「そこを何とか！ このままじゃ眠れそうにないんだ！」

「ええい！ ひっ付くな！ おいルーク！ お前の使用人兼親友を  
どうにかしろ！」

俺はルークを呼んだが、ルークはああ、またか……と、頭を抱えた。

「ガイは譜業に目がないんだ。こうなったらどうしようもねえよ」

「くっ……」

「頼む！ ほんの数分でいいんだ！ 俺に見せてくれー！」

「無理と言っとうろつが、この変態め！」

「変態でいい！ 変態でいいから俺にその素晴らしい宝をおおお！」

ああ、駄目だこりゃ。もういつそのこと、魔物の群れに放り投げるか？ よしそうしよう。ちょうど前方に群れがいるし。

「よしガイ。これをやるから取ってきてな」

俺は懐から機械（という名のゴミ）を取り出し、群れに向かって放り投げた。

「いやほおおおおー！！」

するとガイはそれを取りに、まるで犬のように取りに行った。当然……。

「よし取った！ って、これはただのゴミじゃ うわっ！？  
魔物！？ おい！ 誰かたすけ……いやあああああー！！」

「よし、皆行くぞー」

「……アホらし」

「時間が勿体ないですしねえ……」

「……私の夫に手を出した報いです」

「コスモス姉さん……」

俺達はガイを放って先へ急いだ。

ガイ、お前の死は無駄にはしない。だからガイ、そこでゴミでも弄つてな。

その数分後、凄い形相で刀片手に戻ってきたのは、言うまでもない。

「おい、ナタリア！ もう少しゆっくり歩けよ！」

ルークが俺達よりも一人先に進もうとするナタリアに叫んだ。

「なんですの？ もう疲れましたの？ だらしないことですわねえ」

「そ、そんなんじゃないよっ！」

「うはー。お姫様のくせに何、この体力馬鹿」

アニスの言うとおり、さっきから戦闘続けの上にナタリアは早歩きのペースで移動し続けている。

姫様だよな？ 城で一体何してたんだ？ まあそんな事言ったら、ユリアだって姫様みたいなもんだけどな……。

「導師イオンが拐かされたのですよ。それに私達は、苦しんでいる人々の為に、少しでも急がなければなりません。違っていませんか？」

ナタリアは自信たっぷり胸を張った。

確かに違わないが、根本的な事を考えてないな。

「あのな、急いで俺達に万が一の事があつたら、救える事が出来なくなるだろうが！」

「ルーク……」

お？ ルークが俺の言いたい事を先に言いやがった……。ナタリアも驚いてるし。

「ルークの言う通りです。ナタリア、この六人で旅をする以上、あなた一人に皆が合わせるのは不自然です。それに、この場ではあなたは王族という身分を棄てているのですから」

コスモスが優しくナタリアに注意した。ナタリアはそれに気付き、

謝った。

「確かにそうですね。ごめんなさい」

「あれ、案外素直」

「一々うるさいですよ」

アニスの言葉にナタリアは頬を膨らませた。

案外ナタリアはこのメンバーと相性が良いのかもな。特にアニスとは良いかも。

その後は不満も解消し、問題無く先に進む事が出来た。

「にしても暗いな。明かりとか無いのかよ?」

ルークがこの暗さに不満を漏らす。

「ああ、その事なら問題ないわよ」

「え? 何々? 何か持つてるんですか?」

ユリアが閃いた様に手を叩いた。アニスはこの暗さを解決出来るの



かと期待した。

「イブキ、宜しく」

「何で俺に振るんだよ」

「だって光るじゃない、貴方の身体」

「そうなのか!？」

何故かルークが目をキラキラさせて俺を見てきた。

「あの人……それはコアに音素を送り込んで、余った力が光の粒子が溢れ出てくるだけだ」

「でも光るんでしょ？」

「そりゃ光るけどさ……」

「暗くて歩きづらいよー！ イブキ様助けてよー!」

「助けてくださいな」

「頼みます」

「兄さん……」

「お願いします、イブキ」

「お願い、テラも言ってるよ」

「はははっ、やってやったらどうだ？」

何で皆乗り気なんだよ。そんなに俺が光るところを見たいのかよ。それとガイよ、自分は関係ありませんよって言ってるんだな？ また群れに放り投げるぞ、今度は女の群れに。

「……もうやらんからな」

俺はコアに音素を送り、力を溢れださせた。

「うわー……何かダサイ」

「よーシアニス、奏将の権限において減給だ」

「そそそ、そんな〜!？」

何がダサイだ。そんな事は自分がよく分かってら! 眩しくないように調整してピカー!!! な所をペカー………にしているんだからな! ダサいに決まっとうろうが! ああっ!?

「スゲー！ 光ってる！」

「ルーク……お前だけだ、俺の味方は」

純粹な心に乾杯。俺はルークをそのまま純粹に育て上げたい。

俺はルークに感謝しつつ、皆の灯台になった。

俺の光りのお蔭でどんどん進み、天空客車も使ってやっと出口に着した。

「なんか臭うな」

「油臭いよう！」

ルークとアニスが顔を歪めた。

「この工場が機能してた頃の名残りかな？ それにしちゃ……」

その時、何かが動く音がした。

「待つて！音が聞こえる……。何か……。いる？」

ティアがその音に気付いた。

……。いるな。この気配は……。魔物か？

「まあ、何も聞こえませんかよ？」

「いえ……。いますね。魔物か？」

「ああ……。それもデカイぞ。皆、武器を構えろ」

俺の指示に皆は武器を構えた。

どこからだ……。ッ！

「上だ！」

「危ない！」

魔物が上から降ってきた時、反応に遅れたナタリアをティアが押し助けた。

「何だよこれは……!?!」

「驚くのは後にしろ! 来るぞ!」

敵の魔物は巨大なスライムだった。しかし、スライムにしては形がおかしい。まるでクモのよう……。

「まさか……」

俺は一つの仮定が出来た。しかし、それを確認する前に敵が攻撃を仕掛けてきた。

「譜術かよ!? クソツ!」

ルークは敵が発動したネガティブゲートを、舌打ちしながら避けた。

「ハアツ!」

ガイがその隙に魔物を斬り付けた。が、斬り付けた部分はすぐに再生した。

「何て再生力だ!？」

「違う! 恐らく奴の本体はスライムの中だ! 周りのスライムで攻撃を防いでる筈だ!」

「ならそれを吹き飛ばせば……」

「出来るのか、ジエイド?」

「無理です 今は力が完全ではないですからね」

「言つと思つたよ……」

「なら纏めて消滅させるか? いや、そんな事したらこの廃棄工場も消しかねんしな……」。

「……ん? この臭い……」

「油臭い……あの魔物からか? ……そうか!」

「皆そいつから離れろ! テア、ジエイド! 火の譜術を使え!」

「……ああ、そう言う事ですか!」

「ふえ!?! どういう事?」

「いいから!」

急かすと、ジエイドとテアは詠唱に入った。  
ジエイドはティアに風のF O F、風の音素の力を展開しろと指示した。

「コスモス、ユリア、ナタリア、アニス! 奴をこれ以上近付けさせるな!」

「了解!」

「ええ!」

「分かりましたわ!」

コスモスはガトリングで、ユリアとアニスは大きくない譜術で、ナタリアは矢で牽制し始めた。

「ルーク、ガイ! 俺が合図をしたら敵を斬れ!」

俺もスマートガトリングを展開し、牽制に加わった。

「けど、俺達の攻撃は効かねえんじゃ!?!」

「大丈夫だ。俺を信じる！」

「……分かった！」

ルークは剣を構え、何時でも動けるようにした。

「いきますよ！」

「いくよー！」

二人の詠唱が完了した。俺はガトリングを収納し、刀と剣を展開し、コアの力を込めた。

「フレアトーネード！」

「イグニートプリズン！」

炎の渦、炎の檻が魔物を包み込む。そして激しい炎が収まり、現れたのは……。

「く、クモ〜！？」

「やはりな……」



アニスが叫ぶのも無理は無い。ただでさえ女の子はクモが嫌いなのに、それが巨大でグロいクモだと叫びたくもなる。

あのスライム状の粘膜は油の塊。油ならば燃やす事が出来る。俺の予想は当たっていた。

「今だ！」

「うおおおおっ！」

「はああああっ！」

俺とルークとガイは駆け出し、クモの足を、顔を、胴を斬りおとした。

クモは力なく崩れ落ち、音素となって消えた。

「ふう………」

「よっしゃあっ！」

「いっちょ上りっつてね！」

俺達は武器をしまい、ハイタッチをした。

「皆もお疲れ」

「いえいえ」

「全然疲れて無いだろ……」

ジエイドはにこやかにしていた。

まったく、こいつの底が知れないよ……。

「あ、あの…ティア」

「何？」

「ありがとうございます。助かりましたわ。あなたにも皆にも迷惑をかけてしまいましたわね」

ナタリアがティアに謝罪した。

姫様のくせにプライド高くても自分の非は素直に認めるか……。こんな姫様、滅多にいないだろうな。

「いいのよ」

ティアはそんなナタリアに優しく返した。

「だから危ねーって言ったろ？ これからは気を付けるよな」

「ええ、ルーク」

ルークも言い方はキツイが、ナタリアの事を心配していた。

……ツンデレ？ いや、これは違うか。

「……あれは……。イブキ、あれが出口ではありませんか？」

コスモスが奥の方を指した。そこには確かに出口があった。  
俺達は近寄り確認した。光も僅かだが見えた。

……つてか崖かよ。しかも外、雨が降ってるし。

「よし、ここから梯子を降ろせば外に出られるな」

ルークは近くに会った梯子を降ろした。

「はいですの、ご主人様。ここを抜ければ、あとは目指せケセドニア！ ですね」

ミュウが可愛らしく大きな耳を揺らしながら意気込む。

「ケセドニアへは砂漠越えが必要よ。途中にオアシスがある筈だから、そこで一度休憩しましょう」

ティアがこの先の行動を提案した。

そうだな、恐らくこの雨も砂漠に着く頃には止んでるだろうしな。

「ガイ。貴方が先に降りなさい。私が足を滑らせたら貴方が助けるのよ」

「……俺がそんなこと出来ないの知ってて言ってるよな」

ガイ、諦める。お前は弄られキャラで決まってるんだから。大人しく弄られる。

「だって早くそれを克服していただかないと、ルークと結婚した時に困りますもの」

困りますって……結婚したら頻繁にガイと一緒にいる事になるのか？ そこんとこどうよ？

「ルーク様はもつとず〜つと若くてピチピチの娘がいいですよねっ！ 婚約なんていつでも破棄できますし！」

「……………何ですか？」

「何よう……………！」

ああ……………俺の目の前で繰り広げられる光景はホントにバカだ。大体、アニスのは若くてピチピチじゃなくて、単にガキなだけだろ。そんでもって王族の婚約はそう簡単には出来るもんじゃない。ま、それをこいつ等に指摘しないがな。

「もういつその事、どっちとも結婚しちゃえば？」

「ぶっ！？」

隣でユリアが面白そうに提案しだした。

「はあっ！？ 何で俺がそんなことしなくちゃならねーんだよ!？」

「あら、嫌なの？ ナタリアは美人だし、アニスちゃんもあと五、六年したら美人になるわよ？」

「あら……………もう、ユリアさんったら／＼／＼／＼」

「ぶう〜……なんか納得出来ない」

事実だアニス。観念しろ。

「実際、私達がそうだし」

と、俺の腕を組んでくる。

……って！？ 俺はそんな理由で結婚したんじゃない！

「兄さん……ついでにルークって最低だわ」

「なっ……！！？」

「俺ついで！？ ってか俺のせいだよ！？」

「いやー、皆さん仲がよろしいようですね」

「「アンタの目は節穴かっつーの！」「」

ジエイドに俺とルークのツッコミが炸裂した。

ってかティア……俺はそんな軽い理由で選んだんじゃないのに……。



俺は急いでルークの後を追いかけた。

アッシュはルークに気付き、腰にぶら下げていた剣を抜き放ち、ルークの剣を受け止めた。そして、見えた。あのアッシュの顔が、はっきりと……。

「なっ………!？」

同じ……顔……？

ルークとアッシュの顔は瓜二つだった。似ているという表現では済まされない。同じなのだ、一から十まで。

「お前かつ!」

「うっ!」

アッシュはルークの剣を弾き、ルークは後ろに下がった。

「アッシュ、今はイオンが先だろう」

フード野郎がアッシュに言った。

「分かってる!」



アツシユはタルタロスに乗り込む前にチラリとルークを見て口を開いた。

「いい御身分だな！　チャラチャラ女を引き連れやがって」

そう言い放ち、アツシユはタルタロスに乗り込んだ。  
ただ一人、フード野郎だけは俺を見ていた。

「……まったく、お前は変わらないな。戦いに非力な女を連れ歩くのは」

「……何？」

フードから僅かに見える口元は吊り上っていた。

「こんなに声を聞かせても分からないとは……腑抜けたか？」

「何だと……!？」

「フン、まあいい。いずれ思い出さだろう。その時は、是非とも戦いたいものだ」

そう言い残し、フード野郎はタルタロスに乗り込み、タルタロスは出発した。

一体誰なんだ……聞いた様な声だがまるで思い浮かばない……。

「……あいつ……俺と同じ顔……」

「ルーク!? 大丈夫か!？」

ルークはアッシュと同じ顔にショックだったのか、地面に蹲り震えていた。俺は背中をさすってやり、落ち着かせた。落ち着いたルークは俺の手を借りて立ち上がり、皆の元へフラフラと戻っていった。

「……どういふこと?」

「ところで……イオン様が連れて行かれましたが」

後ろでナタリアが疑問を口にするが、ジエイドが話を変えた。

「あああ!… しまったーっ!」

「でもどつちみち、六神将に会った時点でこの囷作戦は台無しね」

「バチカルに戻って船を使った方がいいんじゃないか?」

「無駄ですわ」

「……何で？」

ナタリアの言葉にルークが理由を聞いた。

「お父様はまだマルクトを信じていませんもの。囹の船を出向させた後、海からの侵略に備えて港を封鎖したはずです」

チツ……モースの入れ知恵か。厄介な事してくれる。

「陸路を行って、イオン様を捜しましょう」

ティアがそう提案した。

「仮にイオン様が命を落とせば、今回の和平に影響が出る可能性もゼロではないわ」

「そうですよ！ イオン様を捜して下さい！ ついででもいいですから！」

「決めて下さい、ルーク。イオン様を捜しながら陸路に行くか、或いはナタリアを陛下に引き渡して、港の封鎖を解いてもらうという

のも……」

ジェイドがぶつきら棒にルークに託した。

「そんなの駄目ですわ！ ルーク！ 分かってますわね！」

ナタリアはバチカルへ帰りたくないのか激しく反対した。

「あー！ うるさいっ！ 大体何で俺が決めるんだよ！」

「責任者は貴方なのでしょっ？」

「ジェイド、止せ。…ルーク、お前はどっした？」

「陸路！ ナタリアを連れて行かないと色々ヤバいからな」

「だ、そうだ。それに、タルタロスが向かったのは東だ。ちよつどオアシスがある。イオンを追うには丁度良いだろう」

「……そうですね」

つたく、一々ジェイドはルークを刺激し過ぎだ。冗談ならともかく、お前が口にする本気にしか聞こえないんだからな。

「……ルーク、本当に大丈夫か？」

ルークはアッシュが去った方向を、顔色悪そうに見ていた。

「……ああ。ただ気味がわりい……」

「あまり気にするなよ。世界には同じ顔の奴が三人いるって話もあるしな」

「……だよ、な……」

ルークは歩き出した皆について行った。

「……どうした、コスモス？」

コスモスは歩き出さず、ただジッと俺を見つめていた。

「……先程のフードを被った人……」

「ん？ ああ、コーラル城で戦った奴だ。恐らく、俺以上の力を持つてる」

「いえ、そうではなく……似過ぎています」

コスモスは神妙な顔つきになり、ルークと同じように去った方向の空を見た。

「……………誰にだ？」

「……………“シヴァ”にです」

「なっ……………！？」

シヴァ……………だと？　しかしアイツはもう……………いやだが、そう言われると確かにあの声はシヴァと……………。それにシヴァならあの強さも領ける……………。

「だが、そんな筈は無い。この世界に来たのは俺とコスモスだけだ。シヴァが来ている筈がない」

「そう……………ですね。私の思い過ごしだと思います」

「……………取り敢えずイオンを追おう。それでアクゼリユスを救おう」

「はい……………」

俺達は皆の後を追いつけた。

目指すはイオンとアクゼリユスの救出だ。



## 砂漠での料理（前書き）

すみません、マジでスランプです。今回の話はなんとか克服しようと頑張ったのですが、上手くいきませんでした。



## 砂漠での料理

イオンが連れ去られた後、俺達はザオ砂漠の方角へ向かった。砂漠に入る前に、日差しで火傷しないようマントを纏い、砂漠の中を歩き続けた。ただでさえ暑いというのに、マントを着なければいけないというのは、何というか……暑い。

「……………」

「ナタリア、大丈夫かい？」

ナタリアの辛そうな表情を見て、ガイが尋ねた。

「アクゼリユスの皆さんの苦勞を思えば、これしきのこと……………」

「とはいえ、辿り着く前に倒れては無意味です」

「え、ええ。それは」

「私かガイの後ろを歩きなさい。今なら日差しの関係で日陰になっています。少しはマシでしょう」

「私はっ！」

ジェイドがナタリアを気遣い、そう伝えた。しかし、ナタリアはそれを自分がお荷物になっていると取ったのか、拒否しようとした。

「女性が体力的に劣るのは当然のことです。あなたには別の力を期待しています」

「そういうことだ。ナタリア、分かるね？」

「……ええ。そうですね。お気遣いありがとうございます」

ジェイドとガイにより、ナタリアは素直に従い、ジェイドの後ろを歩き始めた。

ガイの後ろじゃあ、女性恐怖症で意味無いもんな……。

「……ん？ ちょっと待てよ。何で俺はひさし扱いにならねえんだ？」

ルークはひさいの方に自分の名前が挙がっていない事に気づき、尋ねた。

「背が低いからじゃないか」

ガイは何の躊躇いもなく、男にとって重要なポイントであるかもしれない事を口にした。

「き、気にしてる事を……！ 今に伸びるんだよ！」

ルークって確か十七歳って言ってたよな？ 伸びるのか？

「待てよ？ つーことは、イブキも小さいって事か？」

「ではルーク。貴方はあの状況の中に飛び込めますか？」

と、ジエイドは俺を指した。

「……無理だな」

「無理ですわ」

「無理だわ」

「でしようっ？」

……何だよ、その呆れた目は。俺のせいじゃないからな、これは。

「暑いわね〜」

「ええ。ですがゼレツホ火山よりは幾分かマシでしょう」

「うわ〜……汗ダクダク〜……」

「……なら離れたら？」

「」「嫌です／嫌よ／やだ」「」

あっそう……。

コスモスは右隣から、ユリアは左隣から、テアは後ろから俺にくっ付いて歩いてきた。

いやな、いくら再会したからって、砂漠のど真中までくっ付くことは無いだろう。それに暑い以前に動きづらい。

「うわ〜……リアルハーレム……」

「兄さん……」

ティア？ 何で呆れてるんだ？

「この様子では、あの噂は本当のようですね？」

「噂？ 何だそれ？」

「こらジェイド！ お前はまたルークに嘘を言っつもりなのか！？」

「『曰く、第零師団の団員は全てが女性』『曰く、第零師団の団長は全ての団員と関係を持つ』『曰く、第零師団の団長の愛人は全ての団員』『曰く、第零師団の全ての団員はヤマト姓』だとか言う話ですよ。ある所では騎士団の女性は全てイブキ・ヤマトの女とも言っていますよ」

「……やべえ……。左右後ろからの視線がハンパねえ……。！ それと何か音素を溜めてる音がすんだけど……。」

「まあ！ なんて破廉恥な！」

「この……羨まし……いやいや、最低だ」

「あー……なんか煩そう」

「この誑し野郎が……アニスちゃんもそれに入れて下さいよう。お金もちようだい？」

「最低だわ、兄さん。母さんに報告させて貰います」

「いやいや嘘だからな！！ そんな事実一切無いからな！ 俺はそ

んな事しない！」

なんだその噂は！？ 俺を妬む奴らの仕業なのか！？ だとしたら効果抜群だぞ！

「どういう事かしら？」

「説明して頂けますよね？」

「ちゃんと本当の事を言うんだよ？ じゃないと……捻じるからな？」

「て、テラ！？ あいたたたたたっ！？ もう既に捻じって……！  
ああっ！？ 何をする！？ お、俺は！ 俺は無実だ……！！」

俺はそのまま引き摺られ、何処かへと連れて行かれた。

「……さあ、行くっぜ」

「だな。この暑さの中、立ち止ってたら持たないしな」

「ええ、そつね」

「さんせー！」

「行きますわよ」

「行きましようか」

「待てやお前等！ 特にジエイド！ てめえ、生きて帰れたら真っ先に殺してやる！ ピオニーを使って可愛い方のジエイドを広めてや 待てっ！ それは何だ！？ それで俺に何をするつもりだコスモス！？ い、いや…！ ああああああああああああああつ！……！！！」

砂漠のオアシス。ここは巨大な譜石が落下し、水脈が溢れ出て来た場所である。その周りには、古い遺跡の残骸がチラホラしている。

「大丈夫かよ、イブキ」

「……ああ。なんとか生きてるよ」

ルークが声をかけてきたので、俺は声を絞り出した。

四人の猛攻を受け、俺は死にかけた。が、死ぬ訳にはいかず、身体に鞭を打ちながらここに辿り着いた。そして俺は力尽き、泉の傍で腰を着いた。

「ホントに大丈夫かよ……」

「ルーク、お前だけだよ。心配してくれるのは」

「ばっ！／＼／＼ 誰が心配なんか！／＼／＼」

「ミュウもしてるですよ！」

「ああ……ありがとう」

因みに、泉の傍で休んでいるのは俺とルークとミュウだけだ。後の皆はこのオアシスの住人に聞き込みをしている。

何故かと言うと、オアシスに辿り着いた時、ルークが激しい頭痛に襲われ、その時にアッシュの声が聞こえ、ザオ遺跡に来いと言われたいらしい。そこにイオンもいるらしく、遺跡の場所を尋ね回っているのだ。

ついでに言うと、ルークは過去にマルクトに誘拐された後遺症なのか、頭痛と幻聴がする時があるみたいだ。

それはたぶん……アイツだろ。ローレイとかだろうな。ルークとローレイは同位体だから、向こうからコンタクトを取ろうとしてんだろ。

「で、何でルークは聞き込みをしてないんだ？」

「何で親善大使の俺が、そんな事しなくちゃならねえんだよ？」



「我儘も程々にしろよ？ ジェイドの嫌みが飛んでくるぞ？」

「それは勘弁だな」

ルークは俺が言った事を冗談と思ったのか、笑ってすました。

本気で言ってるんだがな……。まあ被害を受けるのは俺ではなくてルークだから別に良いけどな。

「兄さん、ルーク。場所が分かったわよ」

ティアが俺とルークを呼んできた。

「何処だ？」

「ここから東だそうよ」

「そうか……分かった。よし、行くぞルーク」

「ええ〜？ もうちっと休んで行くこうぜ〜。暑いし」

おいおい、そんな事言っちゃあ、何時まで経っても出発できんぞ。

「ルーク君」

「テア？」

テアがニコニコとルークに近付き、ポケットから何かを取り出した。

「アイスあげるから、頑張ろうよ」

「へ？ やりい！ アイスだ！」

「これが欲しかったら頑張る？」

「いよっしゃっ！ 皆いつくぞー！」

ルークはアイスを片手にご機嫌に歩き始めた。

子供か……子供だったな。ってかテア、ポケットにどうやってアイスしまってた。しかも裸で。

「譜術の応用です！」

可愛らしく胸を張るテア。その姿に一瞬クラっときたのは気のせいだ。うん、暑さのせいだな。

そんなこんなで、俺達は東にあるというザオ遺跡に向かった。

砂漠を歩いて数十分、砂漠に風が吹き、砂埃が俺達を襲う。

「にしても凄い砂埃だ。後で服を脱いだら、きっと砂の山が作れるな。あちこちに入りこんでやがる」

ガイが服を叩きながら愚痴を零した。

確かにこれはたまらんな。人口皮膚で覆ってるとは言え、万が一中まで入って来たら厄介だな。掃除がしんどい。

「確かにそうね。流石に私も水浴びしたい気分だわ」

「水浴び……」

ルークが何かを考えながらそう呟いたのが聞こえた。しかも鼻の下が徐々に伸びてきていた。

「ルーク！ 何鼻の下を伸ばしているんです！」

そこは婚約者ナタリアが気付き、ルークを睨みつけた。

「な、な、なんだよっ！ 何もしてないだろ！」

「ルーク様！ えっちなこと考えてる暇があったら、早くイオン様を助けて下さいよう」

「き、決めつけるな！ いつ誰が何を想像したってんだ！ 勝手な事言っなっつーのっ！」

「不潔ですわ！ あなたがこんな方だったなんて！」

「ひどーいひどーい！」

「あーもうるせーっつーの！」

そのままルークとナタリアとアニスは先に進んで行った。

ふむ……ルークも男。そんな事を考えるのは至極当然のこと。恥じる事は無い。

「ガイ。ルークに救われましたね」

「な、何が？」

「口。涎。ばれたら袋叩きですよ」

「あ、じゅる……」

ほほう……俺の妻と妹の水浴び姿を想像して涎を垂らすか……。しかも俺の目の前で。

「ガイ、後ろ」

「へ……?」

ジェイドに指されてガイは後ろ、つまり俺に振り向いた。俺はガイの肩に手を乗つけた。

「ガイ、ちよつくら俺に付き合ってくれ」

「……ちよつ!?! ジェイド!? アンタ、ワザとイブキに聞こえるように言ったな!?!」

「さあ? 何の事でしょう?」

「ガイ、最っ低!」

「ガイ君……同じ使用人仲間として信じてたのに……」

「貴方はもう大人でしょう? いくら何でも最低よ」

「自粛してください。さもなければ、撃ち抜きます」

「だそうだ。では、行くうか」

「い、いやああああっ!」

さあて、どうしてくれようか。もう男として生きていけない様な身体にしてやるうか。だがそれだとヴァルターの血が途絶えてしまうしな……。

「おたく、何かとてつもない事考えてません!？」

「気のせいさ。どうやって今後を生かしてやるうか考えてただけさ」

「何か物騒だな!？」

「何を言う。俺の女と妹を穢そうとした愚か者には甘い判決さ」

嗚呼、今からの料理が楽しみだ。最近料理してないからな。手元が狂ってうっかり殺してしまわないようにしないとな……。

「ふふっ……楽し過ぎて狂っちまいそうだ……!」

「誰かマジで助けて!？ まだ死にたくない……!」

「やれやれ、楽しそうな方達ですね……」

その後、ルーク達と合流したガイの身体には、赤いソース的な何かがかかってたそうなの……。

ザオ遺跡での再会（前書き）

うん……いまいぢ出来が悪いな……。ってかコスモスの口調が難  
しい。



## ザオ遺跡での再会

砂漠を東へ歩き続けて数十分。砂に埋もれた遺跡に辿り着いた。

「中は暗そうですね……」

「ミュウが火を吹くですの」

「ずっと吹き続けるのか？ 無理無理」

ルークがミュウの提案を笑って否定した。そして俺を見てきた。

「それならイブキが……」

「もうやらんと言ったろう」

最初に言っただろうが、もう二度とやらん。

「風があるせいか、周囲に陸艦の痕跡が残っていませんね」

「立ち去った後か。それともまだ居るのか……」

ジェイドの検索にティアが推測をした。

「どの道行くしかないだろ。さっさと行くぞ」

「そうそう！ レッツゴー！」

俺が先に進む事を薦めると、アニスが一人で中に走って行った。

「ふふっ……子供は元気ね」

「元気過ぎても困りますからね」

「……どうして二人は私を見るの？」

ユリアとコスモスは微笑みながらティアを見つめた。

確かにな。ティアって子供見たく元気だからな……。

ああ、そうだ。遺跡の中だから体力の無いティアにはちとキツイよな。それ以前に砂漠で体力を消耗し過ぎてるよな。

「おい、ティア」

「何……？」

随分疲れているようだ。汗が流れ出ている。

「テラに入れ替わっておけ。たぶん、辿り着く前に果てるぞ」

「うん、そうだね……」

そう言つとテアはテラに入れ替わった。

「イブキ、着替え……」

「メイド服で我慢してくれ」

「……スカートの中が見たいのか？」

「何故そうなる。ってかベッドの上で散々見てるからいい」

「兄さん！／＼／＼ 何言ってるのよ！／＼／＼」

「す、スマン……！」

ティアが顔を紅く染めて俺に怒鳴ってきた。

まったく、初なティアめ。だがそれで良い。そのまま育ってくれ。

「ほらほら、遊んでないで行きますよ」

「あ、ああ」

俺達は奥へと進んだ。

中はそれ程暗くはなかった。しかし瓦礫が行く道を塞いでいたり、魔物が住み着いていたり、色々と面倒が存在していた。

魔物方は問題にはならなかった。俺達にそんなもん障害にすらならないからだ。

そして瓦礫や巨大な岩も、意外な生物の活躍により解決された。

「アターック!!」

「よし！ もっとやれやれ！」

なんとミュウが道中、第二音素の塊を、ソーサラーリングに譜として刻み、通称『ミュウアタック』なる技を身に付けたのだ。

それは強化されたミュウがその名の通りアタックし、瓦礫や岩を砕いていくのだ。しかし……。

「ああっ!? ミュウちゃん駄目よ! そんなに打ち付けたら可愛い頭がへっこんじゃうわ!」

「ミュウ、痛くない!? 大丈夫!?」

この通り、ユリアとティアが瓦礫や岩に体当たりするミュウの姿を見て良心が痛んでいるのだ。

「少し考えたのですが……」

「何だ、コスモス?」

「イブキの力ならば、ミュウを使わなくても砕けるのではないでしょうか?」

「……コスモス、偶にはミュウに出番をあげようぜ」

「ご主人様、やったですよ!」

「いいぞ! その調子でドンドン行け!」

「はいですよ!」

「……そうですね」

頑張れミュウ。君の存在は必要不可欠だ。

更に奥へ進み、やがて広場へと出た。その広場にはまだ綺麗な建造物があり、その入り口あたりの所にイオンとアッシュの姿が、そしてその前には黒獅子ラルゴと烈風のシンクが待ち構えていた。そしてもう一人、フード野郎が建造物の屋根の上に座っていた。

「ここは……セフィロトの……」

「ユリア、喋るな」

「……ええ」

そうか、ザオ遺跡と言えばセフィロトが置かれている場所だったな。俺とした事が、忘れていた。

「導師イオンは儀式の真つ最中だ。大人しくしてもらおう」

「六神将……！」

ラルゴの威圧感に、ティアが息を呑んだ。

「なんです、お前たちは！ 仕えるべき方を拐かしておきながらふてぶてしい！」

「シンク！ ラルゴ！ イオン様を返して！」

ナタリアがラルゴの態度に怒り、アニスはイオンを返せと怒った。

「そうはいかない。奴にはまだ働いてもらう」

しかしシンクが静かに拒否した。

「なら力ずくでも……！！」

ルークが剣を抜いて構えた。

「こいつは面白い。タルタロスでのへっぴり腰からどう成長したか見せてもらおうか」

「はん……。ジェイドの負けて死にかけた奴が、でかい口叩くな」

「わははははっ！ 違いない！ だが今回はそう簡単に負けぬぞ小僧……」

「はっ、そんな台詞吐く奴は、大抵やられるんだぞ？」

「これはヤマト元帥。確かに元帥相手ではそう簡単にいかないでしょう。しかし……」

「アンタの相手はアイツだよ」

シンクがフード野郎を指した。

フード野郎は相変わらず口元だけをさらして笑っていた。

「六神将烈風のシンク。……本気で行くよ」

「同じく黒獅子ラルゴ。いざ、尋常に勝負！」

ラルゴは大鎌を、シンクは拳を構えて向かってきた。

「ルーク！」

「分かってら！ かかって来いよ！」

「あまり無茶すんなよルーク！」

「やれやれ、面倒ですね！」

「イオン様は貸してもらってからね！」

「行きますわよ！」



ルーク達はラルゴ達に立ち向かった。

さて、こちらは……。

「おい、降りてきたらどうだ？」

「ふん、俺の事を思い出したのなら、降りても良いぞ？」

「……………」

コスモスはアイツの雰囲気グシヴァに似ていると言った。しかしシヴァは向こうの世界の存在だ。

それにシヴァはもう……死んだ。生きている筈が無い。

だが、あのアリエッタがしていた首飾りはシヴァの物に似ていた。

なら、そういう事になるのか……………？

「……………チツ、貴様はやはり優柔不断だな。……………おいKOS・MOS、お前はもう分かっているのだろう？」

「……………」

「コスモス？ 貴方あの男を知ってるの？」

「隠すなよ?」

……やはり、そうなんだな。アイツは……。

「シヴァ……だな」

「ッ! そうだ! やっと思い出したか! 俺だよ、シヴァさ!」

シヴァはマントを脱ぎ棄て、その姿を見せた。

「……え?」

「イブキと……同じ顔……?」

そう、シヴァと俺の顔は同じだ。違っるのは髪の色が黒ではなく白。瞳の色は。そして身に纏う服は俺のに形は似ているコートで色は白。俺と対をなす存在……それが、シヴァ。

「久しぶりだな、シヴァ」

「ああ。だがまだあの死闘が昨日のように思える」

シヴァは屋根から飛び降り、俺達の前に着地した。

「ところで、貴様がここにいると言つ事は、死んだのか？」

「……ああ」

「フハハハッ！ あれ程俺に世界のあり方を説いたのに、無様に死んだか！」

「黙りなさい！ イブキは私を庇って……！」

「だが！ 貴様も結局は死んだのだろうか？」

「っ……！」

「止めるシヴァ。これ以上俺の女を貶すのなら、また斬り伏せるぞ」

俺は刀と剣を展開し、シヴァに構えた。

「ふん、コーラル城での戦いを忘れたか？ 貴様の攻撃は俺の片手だけで消し飛んだのだぞ？」

確かに、シヴァは俺の攻撃をいとも簡単に消し去った。  
前の時はそんな事は無かった。

「……お前も、力を得たんだな？」

「そうとも！ 貴様が音素を手に入れたように、俺達も音素を手に入れたのだ！」

「……俺、『達』？」

「……ッ！ コスモス！ 上だ！」

「えっ！？ うっ！」

突如、コスモスの真上から誰かが蹴りを落としてきた。

「……そんな、まさか」

コスモスの驚く声が聞こえた。

何だ？ 誰なんだ？

「久しいな、人形……」

「この声……まさか！」

「そう！ この世界に来たのは俺だけではない！ 俺と共に作られた、唯一のパートナー！」

「……T - e l i o s<sup>テロス</sup>」

テロス……コスモスをも凌ぐ性能を持った戦闘用アンドロイド。銀髪で瞳は紫で褐色の肌の色をし、顔はコスモスと同じ。露出が激しい格好をしている。

「貴女もどうやって……」

「人形に教える義理は無い。消えろ！」

「ッ！」

テロスはコスモスに向かってブラスターガン……MAGDALE N16（マグダレン・シックスティーン）を放った。

「ふっ！」

コスモスは射線上から飛び退き、テロスの向かってブラスターを放つ。

「よそ見している間があるのか？」

「ッ！ シヴァー！」

シヴァが剣で攻撃を仕掛けて来た。  
俺は刀で受け止め、鏢迫り合いになった。

「くっ！」

「今度は飾り物の剣ではないから……。そっちの武器が折れないようにしろよ？」

「ほざいてる！」

俺はコアの力を上げ、刀と剣に力を込めた。

シヴァとの戦いでは一瞬の隙が命取りになる。最初から全力で行かないと駄目だ。

「ユリア！ テラ！ 二人はコスモスの援護をしろ！」

「でも！」

「俺は一人で十分だ！」

「……分かったわ！ テラ、行くわよ」

「……死ぬなよ！」

二人はコスモスの方へと援護に向かった。

「フン、見ない間に女が増えたな」

「羨ましいのか？」

「まさか。俺はただ破壊出来れば良い！」

「だろうなっ！」

剣を弾き、刀でシヴァの腹に斬りかかる。

「フンッ！」

だがシヴァは弾いた剣を力任せに戻し、刀を弾く。

「でやあああっ!!！」

左手の剣で上から斬るが、シヴァはそれも弾く。

「どうしたイブキ！ 女に夢中になって鈍ったか!？」

「はっ、お前こそ少し力が弱くなっただんじやないか!？」

「そうか？ ではこれはどうだ？」

シヴァは片手を上にあげ、指を鳴らした。  
すると、何十という剣が転送され、空中に待機した。

「さあ、いったい何本避けられるかな？」

「全て避けてやるさ」

「ふっ……踊れ、ブレイド・ワルツ」

瞬間、全ての剣が俺に降り注いだ。

コスモスSIDE

「どうした人形！？ その程度か！？」

「くっ！」

おかしいですね……。確かにテロスは私より能力は上。しかしそれは私がシオンとアレンに生み出されるまでの話……。今ではもう私



の方が圧倒的でした。

なのに今のテロスはそれが全く感じられません。一体何が……。

「ホーリーランス！」

「何……？」

光りの槍がテロスを囲み、一気にテロスを襲いました。

「コスモス！」

「ユリア！ イブキはどうしたのですか！？」

「アイツなら一人で十分と言っていた」

「そうですか……」

そんな筈はありません。イブキはシヴァより決して強くありません。あの時は私と二人で戦って漸く勝てる相手なのですから。

「小賢しい。私にこんなもの喰らうか」

テロスは無傷で立っていました。

「コスモス！ お前は一人では戦えない臆病者か！？」

「あら、独りでしかいられない貴女よりよっぽどマシだと思うけど？」

「フン、胸だけのババアが黙っている」

「　　ッ！　　ふふ、イイわね。久しぶりに本気になれそうだわ」

「おいおい、たかが露出魔の言う事だろ。真に受けるなよ」

「お前もだ。男に腰を振る事しか出来ないクソ狐が」

「もういっぺん言ってみろ、この　　が！！」

ユリア、本気は出さないで下さい。遺跡が壊れてしまいます。それとテラ？ それだと私もそんな感じの女になってしまいますよ？ お尻とか少し見えている様な気がしますし……。

「殺るわよテラ……人妻を怒らせると恐ろしいと、あの焦げた肌に教え込んであげましょう？」

「教え込むだけじゃ足りない。刻み込んでやる」

「ザコが吠えるな。お前等は腰振って鳴いてろ」

「消し去ってやる!」「」

……イブキ、こちらは早く済みそうです。恐らくすぐに向かえそうですよ。

「どうした人形!? お前も男に溺れて戦えないか!?!」

「……テロス、覚悟はいいですね?」

やはり遅れそうです。

徹底的に打ちのめしますから。

## 兄弟（前書き）

申し訳ありません。

ネットの接続が出来ず、一か月も更新出来ませんでした。

この愚作を読んでくださっている方々にお詫び申し上げます。

## 兄弟

剣が降り続ける。

絶え間なく、隙なく、容赦なく俺へと降り続ける。

「そろそろそろあつ！！ 逃げ回るだけでは何も出来んぞ！！」

「だったら少しぐらい緩めろ！！」

俺は走りながら剣を避け、ブラスターガンを放つ。

「阿呆が！ くだらんわ！」

だがシヴァは全て片手で打ち消した。

相変わらずその強さは健在か……！

「シヴァ！ お前は何故イツらと組んでいる！？ 誰も信じないお前が！？」

「はっ、アレも俺の目的の為の駒に過ぎん。俺の事よりも自分の事を考えた方が良くぞ！！」

「くっ！」

剣の速度と数がまた増えた。  
俺は瓦礫の影に身を隠した。

くそっ、瓦礫の影に隠れてもすぐに破壊される。  
あの時は皆がいたから……。

「……ここで立ち止まってても意味は無いか」

俺は両手に持った刀と剣を握りしめ、大きく息を吸ってその場から飛び出した。

「はあああああつ!!」

「そつだ！俺の所まで辿り着いて見せろ!!」

向かってくる剣を、直撃する剣だけを弾いて行く。

臆するな、前へ出る。退けば負け、死だ。

俺は剣を弾きながら前へ足を進み続けた。

「そつだ、お前は俺と同等の存在だ。こんな墓地みたいところでくたばるお前では無い！」

「良い評価を……ありがとうっ！」

第一音素を刀に纏わし、斬月破を放った。

斬月破は剣を弾きながらシヴァへと向かって行った。

「いいぞ！　それがお前の力か！」

シヴァは剣の展開と射出を停止し、自らが持つ銀の剣で斬月破を切り裂いた。

今だ！　道が開いた！

「であああああっ！！！」

剣の射出が止んだ隙を狙い、シヴァへと一歩で近付いた。

「ぬるいわっ！」

刀を振り下ろしたが、シヴァはいとも簡単に受け止めた。

「そもそも何故この世界にいる!?!」

「それを教える義理は無い。聞きたくば、俺に膝を着かせてみよ!」

「だったら、そうさせて貰おう!」

「ほう……」

コアの力を刀と剣に送り、剣はシヴァの剣に叩きつけた。

「ブラスト・コアか……。お前にはお似合いの宝石だ!」

「そう羨ましがるなよっ!」

罅迫り合いから右脚でのサマーソルトを繰り出し、シヴァの剣を大きく弾いた。

「空破絶掌撃!」

すぐさま鋭い突きを刀で放ち、シヴァの後ろに回り込んでまた剣で鋭い突きを放った。

「くうっ!?!」



シヴァは大きく吹き飛び、地面に転がった。

「已え………！」

「ふん、堅さも相変わらずだな」

シヴァには傷一つ付いていないだろう。  
何故なら奴は………。

「はっ、お前を越える為に“作られた”のだ。この程度で傷が付く  
筈は無い！」

作られた。そう、シヴァは作られたのだ。  
コスモスとテロスを凌駕する存在、殺戮兵器として作られた、戦闘  
用アンドロイド。  
シヴァの身体は全て機械で出来ている。

「そら、膝を着かせたぞ。 答える」

「……ふん、良いだろう」

シヴァは立ち上がり、汚れを掃った。

「お前と同じだよ、イブキ。俺も蘇られさせられたのだ、あの神モドキに！」

「なっ！？ ローレイがだと！？ 何故だ！？」

「そこまで教える訳にはいかな。……向こうも終わったか」

ルークの方を見ると、ラルゴとシンクが膝をついていた。

コスモスは……？

俺はコスモス達を捜した。コスモス達は後ろでテロスとまだ戦っていた。

「そろそろ潮時だな……。名残惜しいがイブキよ、今日はこれで終いよお！」

そう言うと、シヴァは自分の真上に巨大な砲台を転送した。

「テロス！ 戻れ！」

「お前等伏せろっ！！」

俺はコアの質力を全開に上げ、全ての力を右腕に集めた。

「ではな、“兄弟”」

「シヴァッ!!」

「オルトロス!」

「ブラスト・ドライブ!!」

赤の閃光が砲台から放たれ、白く光り輝く閃光と衝突した。

二つの閃光は互いを消滅し合い、残ったのは激しい衝撃だけだった。

「くっ……」

衝撃が止み、顔を上げると、シヴァとテロスの姿はもう無かった。

「馬鹿野郎が。崩れたらどうする」

「イブキ!」

「コスモス……。怪我は無いか?」

「はい。ですが、テロスの力が強力になっていました。次も凌げるかどうか……」

「そうか……」

コスモスにそこまで言わせる程だ、相当強くなってるんだろうな。

「そっちはどうだったの？」

「……遊ばれた」

「ほう………そんなにか」

アレは本気のホの字すら見せていない。

もっと力を付けないとシヴァには勝てないか……。世界を渡っても、俺はシヴァの下に行くのか。

「ルークの所へ行こう。なんだか話し合ってるみたいだし」

俺達とルーク達の距離は開いていた。戦闘に集中し過ぎて離れていつている事に気付かなかったようだ。

俺達は急いでルーク達の元へと向かった。

俺達が到着すると、ちょうどイオンがルーク達の所にやってきた。

「そのまま先に外へ出る。もしも引き返してきたら、その時は本当に生き埋めにするよ」

シंकが仮面越しに睨んで来てそう脅した。

よく分かんが、取り敢えずイオンは奪還出来たみたいだな。

「お、イブキ」

「ルーク、取り敢えず終わったんだな？」

「ああ。そつちこそ、さっきものスゲー衝撃と音が聞こえたぞ」

「困りますね、我々を生き埋めにするつもりですか？」

「悪かったな」

俺達は六神将が見えなくなるまで振り向かず離れて行った。

「ふゝ、何はともあれ、無事イオンを救出出来たな！」

ガイが空気を明るくしようと、笑顔でそう皆に言った。

「ホントですよ。イオン様あ、心配したんですから」

「すみません、僕の為に」

「全くだ！ ヴァン師匠が待ちくたびれてるぜ」

ルークはイライラした態度でイオンに怒鳴った。

「ちよつ」

「ごめんなさい。でも、ありがとうございます。助けてくれた事、本当に感謝しています」

「ッ……」

素直に謝られ、尚且つお礼を言われたルークは、一瞬だけ表情を引き攣らせた。

「導師イオン！ 何を仰られるのですか！」

イオンの言葉にティアがもの凄く反応し、慌てふためきだした。

「大事に至らなかったとはいえ、このような危険な目に遭わせてしま……」

「いいですよティア。……ありがとう。さあ、ケセドニアに向かいましょう」

……噂には聞いていたが、イオンの性格がこれ程までとは。あの豚野郎がつけ入るのも頷ける。

俺はイオンの性格に頭を痛めながら、出口へと足を進めた。

外に出ると、眩しい日差しが俺達を容赦なく照り付けた。

「ふー。やっぱり暑くても砂だらけで埃っぽくても外の方がいいっ」

「……暑い、暑いぞ。ティアめ、ここぞとばかりに逃げ込んだな。しかも感覚を遮断……チツ、どこで学んだ」

テラが忌々しそうにティアへの文句を俺の真後ろでブツブツと口にする。

何故俺の真後ろなんだよ。影か？ 影があるからか？

「皆さん。ご迷惑をおかけしました。僕が油断したばかりに……」

「そうですね、イオン様！ ホント大変だったんですから！」

アニスが私、怒ってますと主張しながらイオンを叱った。

「ところでイオン様。彼らは貴方に何をさせていたのです？ ここもセフィロトなんですね？」

ジェイドが何故イオンがここに連れて来られたのかを尋ねた。

「はい。ローレイ教団ではセフィロトを護る為、ダート式封咒ふうじょうまという封印を施しています。これは歴代導師にしか解咒出来ないのですか、彼らはそれを開けるようにと……」

「何でセフィロトを護ってるんだ？」

ガイがイオンに護る訳を聞いた。

「それは……教団の最高機密です。でも封印を開いたところで何も出来ない筈なのですが……」

その先にもユリア式封咒が施されてるからな。



ユリアの血を引く人間にしか手を付ける事が出来ないから、今の世界にはユリア、ティア、ヴァンの三人にしか解咒出来ない。しかもヴァンとティアにはその解咒方法を教えていない……のだが、ヴァンなら自力で見つけ出すだろうな。

「んー、何でもいいけどよ。とつとと街へ行こうぜ。干からびちまうよ」

ルークがあちいくと愚痴りながら手で顔を仰いでいた。

「そうね。ケセドニアへ向かきましょう」

「賛成ですわ」

「ミュウもですのー！」

「ブタザルは黙ってる。暑苦しい」

「みゆう……。ごめんなさいですの」

てな訳で、俺達はケセドニアへと向かうとにした。

ケセドニア。相変わらず活気の良い街である。

「ようやくケセドニアまで来たな」

ガイが街を眺めながら一息ついた。

「ここからカイツールへ向かうのね？」

「マルクトの領事館へ行けば船まで案内してもらえる筈ですよ」

ティアはジェイドにこの先の行動を確認し、ジェイドが領事館へ行けば良いと答えた。

「っ……………また……………か！」

「おい、ルーク！ 大丈夫か？」

ルークが俺の目の前で頭を押さえ、痛みで顔を歪ませた。

「またか？ 頻繁になってきたな……………」

ガイはルークの頭痛が頻繁になってきた事を心配したが、ルークはすぐに痛みが退いたのか、表情を戻した。

「……大丈夫。治まってきた」

「無理はするなよ」

俺はルークの頭をポンッと叩いてそう言った。

ルークは少し呆けた顔になり、俺を一瞬見たがすぐに皆の方に視線を戻した。

「念の為少し休んだ方がいいな」

「そしたら宿に行こうよ。イオン様の事もどうするか考えないと…」

「…」

「………わかった」

ガイがルークの事を心配し、それならとアニスがイオンの事もついでにと提案し、ルークはそれに了承した。

宿屋に到着し、中へ入ろうとした時、ルークに異変が起こった。頭を押さえ、ぎこちない動きで歩き出した。

「ルーク！　しっかりして！」

ティアがルークに近付き、ルークの肩に手を触れようとした時……

「黙れ……！　俺を操るな……！」

ルークが剣を抜き、ティアに突き付けた。

「ルーク！　どうしたの!？」

「ち……ちが……う！　身体が勝手に……！　や、やめろっ！」

「ティア！」

ルークの腕が上にあがり、剣をティアに振り下ろした。

偶々近くに居た俺はティアとルークの間に入り込み、ルークの剣を肩の辺りで受け止めた。

「ルーク！　しっかり自分を保て……！」

ルークの肩を掴んでそう怒鳴った。

「っ……！」

ルークはギュッと眼を閉じ、少しすると身体の力が抜け意識を失った。

「ガイ、すぐに部屋を取れ。ルークを休ます」

「ああ！」

ガイは急いで中に入り、部屋を取りに行った。

俺はルークの剣を鞘に戻し、ルークを背負った。

さっきのルーク、誰かに操られていたのか……？　だがそんな術は知らないぞ……。

「ルーク……」

「安心しろ、ティア。さっきのはルークの意味じゃないさ」

「う、うん……」

「イブキ！　部屋が取れたぞ！」

ガイが飛び出す様にしてで出来て、中へ入るように言ってきた。

俺はルークを刺激しないように運び、部屋に備え付けられているベッドにゆっくりと寝かせた。

「……ルークの奴、どうなっちまったんだ？」

ガイは頭を抱えてルークの顔を見た。

ルークの表情は安らいでいて、苦しんでいる様子は無かった。

「健康に難ありかあ。介護するぐらいならばゆっくり逝きそうなお金持ちの爺さんの方が……」

「アニス、それ本気で言ってるんだったら撃ち抜くからな」

「じよ、冗談！ 冗談ですってば！」

取り出したプラスターをしまい、隣のベッドに腰をかけた。

あゝ、コートが破れちまつてるな。後で縫つとくか。

「イブキ、傷は大丈夫ですか？」

イオンが俺の肩を見てそう聞いてきた。

ああ、そう言えば俺の身体が金属で覆われてるって知ってるの、ほ

んの数人しか知らないんだっとな。

「大丈夫だ。咄嗟に譜術で防いだから」

「凄いですね……」

「これくらい、訓練したら誰だって出来るぞ」

出来る訳無いな、うん。

「……大佐。ルークのこと何か思い当たる節があるんじゃないですか」

ティアがジエイドに尋ねた。

「そうですねえ……」

「アッシュというあのルークにそっくりの男に関係あるのでは？」

ナタリアの言う通り、あの酷似さはハッキリ言って尋常じゃない。まるで複製した様な、そんな感じだった。よく思い出せば、声まで似ている気がする。

「……今は言及を避けましょう」

「ジェイド！もったいぶるな」

ガイがジェイドの態度に少し苛立ちを感じたようだ。

「もったいぶってなどいけませんよ。ルークの事はルークが一番に知るべきだと思っただけです」

……何か知っているな、これは。ジェイドの態度から恐らく何も話してくれないだろうな。

……ルークとアッシュか……。さてよ？ そっくり……。複製……。レプリカ！？ フォミクリーか！？ これなら異常な酷似さは納得できる。だがルークにそんな事するメリットが無いだろう。

それに王族だぞ。そう易々と実験体出来る訳が無い。いや……。国自身が……？

くそ、今は情報が少な過ぎる。第零師団の連中はアクゼリユスで一杯だろうし……。

「ご主人様が目を覚ましたのですの！」

ルークの傍に居たミュウがピョンピョンと跳ねて嬉しそうな声を出した。

ルークはゆっくりと起き上がり、ジェイドを見た。



「……俺がどうしたって？」

聞こえていたのか。

「いえ、何でもありません。どうです？ まだ誰かに操られている感じはありますか？」

ジエイドは首を振り、ルークの容態を尋ねた。

「いや……今は別に……っ！」

ルークはいきなり眼を大きく開き、俺の顔を見てきた。

「い、イブキ！ お、お前剣が……！」

「大丈夫だつて。ほれ、コートが斬れただけ。ってか、年上にはもつと敬意を払え」

「年上つて……そう言えば何歳だよ？」

「内緒」

「何だよ、それ」

ルークは興味を失ったのか、ジエイドに視線を戻した。

「恐らくディストがコーラル城で何かしたのでしようね。あの馬鹿者を捕まえたら、術を解かせます。それまで辛抱して下さい」

「頼むぜ。もしこれで皆を傷付けたら後味がワリイからな」

遠まわしにデレたと。やっぱルークは優しい奴なんだよなあ。

「で、イオンの事はどうするんだ？」

ルークはイオンの事を思い出して、俺達に聞いた。

「取り敢えず六神将の目的がわからない以上、彼らにイオン様を奪われるのは避けたいわね」

ティアは最低でもイオンの安全を考えた。その考えにコスモスがある提案を出した。

「では、イオンを私達と共に行動させれば宜しいのでは？」

「そんな事したらモーヌ様が怒りますよ！」

アニスがそれは駄目だと否定した。が、コスモスはとても綺麗な笑みでこう言った。

「怒ったところで私達に何かして来れるとでも？」

「で、出来ませんよね……」

コスモス、黒い。黒いからな。確かにあんな野郎どつって事もないけどな。

「そうですね。それに、僕はピオニー陛下から親書を託されました。ですから陛下にはアクゼリユスの救出についてもお伝えしたいと思います」

「よろしいのではないですか。アクゼリユスでの活動が終わりましたら、私と首都へ向かいますよ……ああと。決めるのはルークでしたね」

ジェイドは何時も一言二言多い。その最後の言葉さえなければ穏便に済むというものだ。

「勝手にしろ！」

案の定、ルークは怒った。

「またしばらく宜しくお願いします」

イオンの言葉を最後に、今日はここで一泊する事にし、各自用意した部屋に別れた。

今回は男女で別れる形の部屋割だった。

「なあ、イブキ」

「ん？」

ベッドに寝転んでいると、同じく寝転んでいるルークに話しかけられた。

「ザオ遺跡でイブキが戦ってた相手、誰だったんだ？」

「あー……俺の弟……だよ」

「あ……悪い」

「気にするな。……アイツとは出会った時から敵同士でな。けど、ある理由から俺達が兄弟だって知ったんだ。でもそれでも俺達は敵であり続けた。それがアイツの存在理由だったから……」

「……………」

「ルーク。家族や友は大切にしろ。それが何時か自分と相手の幸せに繋がるから」

「……………ああ」

「明日は早いから、もう寝よう。お休み」

「ああ、お休み」

……………シヴァ。俺達は、やはり解り合える事は出来ないのか……………？  
出来ればお前たちとも生きていきたい。

魔弾（前書き）

遅くなりました！ ごめんなさい！

## 魔弾

砂漠での日光は慣れていないと辛い。下手をすれば熱中症になりかねない。俺はそんな日差しの中、外に出ていた。

今の時間帯は朝。他の皆も朝食を取っている最中だ。

さて、何故俺だけが外に出ているかというと、とある届け物を受け取る為だった。

その届け物を届けてくれたのは、今俺の左肩にのっている伝書鳩である。

あいつ、タイミング良過ぎるんじゃないのか？ 俺がケセドニアに来なかつたらこの手紙は読めなかつたぞ。

俺は手紙を開いて内容と呼んだ。

「……………そうか」

内容はこうだ。

『部下たちがあ不満をたらたらと漏らしています。さっさと来なさい。給料あげて貰います』

……………良い部下を持ったもんだなチクショウ。

確かに障気の中で過ごさせてのは酷だけどさ……………。ケテルブルクのスパのフリーパスを用意させたたる。

俺は鳩に餌を与え、鳩は空高く飛んで行った。  
暫く飛んで行った鳩を見続けた後、宿の中へ入った。

マルクト領事館。

俺達はそこにいる女性にヴァンからの伝言を聞いていた。

「グランツ謡将は先遣隊と共にアクセリユスに向かわれるそうです」

「えーっ!?!? 師匠早過ぎだよ!」

「僕たちも急がなければ」

その時、ガイが急に右肩を押さえながらしゃがみこんだ。

「ガイ!?!」

ルークが近付いて様子を見ようとすると、いきなりガイがルークを殴り飛ばした。



「いてて……！ お、おい。まさかお前もアツシユに操られてるんじゃない？」

「いや……別に幻聴は聞こえねえけど……！」

ガイは苦しそうに答える。

ジエイドが押さえている肩を見ると、何か傷の様なものが出来ていた。

「おや。傷が出来ていますね。……この紋章のような形。まさか『カースロット』でしょうか」

「カースロット？」

カースロット……確か人間のフォンスロットへ施すダアト式譜術の一つで、脳細胞から情報を読み取り、そこに刻まれた記憶を利用し操る力……。それが何故ガイに？

「……俺は平気だ。それより船に乗って、早いとこヴァン謡將に追いつくぜ」

ガイが何でも無い様に振舞うが、明らかに無理をしているのが分かる。

「でも、ヤバくないのか？」

「カースロットは術者との距離で威力が変わるんです」

「という訳だ。ガイをここから離れさせた方がいい。ガイ、踏ん張れよ」

「あ、ああ……」

ガイに肩を貸して領事館を後にする。

だが変だな。ダアト式譜術を使えるのは導師だけだぞ。この傷を負わせたのは……確かシンクだったはず。

疑問を残しつつも、俺達は船に乗ってケセドニアを出港した。

「おっかしいな。ケセドニアを離れたらすっかり痛みがひいたわ」

船の上でガイが腕を振りまわしながら言った。  
「どうやらケセドニアに術者がいたようだ。」

「何だよ、心配させやがって」

「悪い、悪い」

「チツ、このまま敵に回ってくれたら大義名分を得て、斬れるのにな」

「何でだよ!？」

「鼻の下伸ばしたろ。俺の妻たちに」

「ギクツ」

なんなら撃ち抜いてやっても良いんだがな。こつ…男の勲章をバーンって。

その後もガイを弄りながら到着を待った。

カイツール軍港に到着し、あとはそこからデオ峠を越えてアクゼリユスに到着。

上手く進めば良いんだけどな……。

デオ峠に到着し、その長い道のりを俺達は見上げた。

「ちえつ。師匠には追い付けなさそうだな。砂漠で“寄り道”なん

かしなけりゃよかった」

寄り道。その言葉にアニスが反応した。

「寄り道ってどう意味……ですか」

怒鳴りそうにもなったが、そこは何とか堪えた。

「寄り道は寄り道だろ。今はイオンがいなくても俺がいれば戦争は起きねーんだし」

「あんた……バカ……？」

流石のアニスも、ルークの言い分に怒りを通り越して呆れてしまった。

「バ、バカだと……！」

「ルーク。私も今のは思い上がった発言だと思うわ」

「この平和は、お父様とマルクトの皇帝が、導師に敬意を払っているから成り立っていますのよ。イオンがいなくなれば調停役が存在しなくなりますわ」

ティアとナタリアもルークの発言が癪に障ったのか、少し強い口調で説明した。

しかし、それにイオンが首を振った。

「いえ、両国とも僕に敬意を持っている訳じゃない。『ユリアの残した預言』が欲しいだけです。本当は僕なんて必要ないんですよ」

(と、言っているがユリアさん。貴女はどうします?)

(そんな輩に教える訳無いじゃない。これ以上戦争が広がったらたまらないわ)

(もし手に入れようとする奴が現れたら?)

(サーチ・アンド・デストロイよ)

(……おぞまじや)

「おーい、何やってんだ？ 行くぞー」

ユリアと話していたらガイに呼ばれた。どうやら話は終わっていたようだ。

俺とユリアは皆の後を追いかけた。

歩いて一時間ほど。ちょうど山頂付近の所で、イオンが膝をついてしまった。

どうやら体力切れを起こしてしまったようだ。

「大丈夫ですか？ 少し休みましょうか？」

「いえ……僕は大丈夫です」

ティアの提案を、自分のせいでこれ以上遅れる訳にはいかないと断る。が、イオンの顔は真っ青に近かった。

「駄目ですよお！ みんな、ちょっと休憩！」

アニスが強引に休憩に持ち込むが、それにルークが反対した。

「休むう？ 何言ってるんだよ！ 師匠が先に行ってるぞ！」

「ルーク！ よろしいではありませんか！」

「そうだぜ。キツイ山道なんだし、仕方ないだろう？」

「親善大使は俺なんだ！ 俺が行くつて言えば行くんだよ！」

その言葉に皆は呆れかえった。

ルーク、お前は我儘が過ぎるぞ。それでは周りから見放されるぞ。

「ルーク、どの道急いでももう追い付けない。それに、アクセリユスに向かう前にはててしまつたら意味がないだろう。ヴァンの前でそんな不様な格好を見せたいのか？」

「うっ……わ、分かつたよ。休憩、休憩！」

「よし、良い判断だ」

グリグリとルークの頭を撫でて休憩に入った。

休息中、ルークは一人離れて休んでいた。というよりも、誰もルークの傍に寄ろうとしない。

俺はルークの隣に座り込んだ。

「ルーク、何をそんなに焦ってんだ？」

「別に……ただ早くヴァン師匠に追い付きたいだけだ」

「ヴァンにねえ……。なあ、ルーク」

「んだよ？」

「何か隠してることを無いか？」

ルークのこのヴァンへの執着。どうにも異常のような気がする。いや、俺の気のせいだったらそれで良いんだが。

「なっ、何にもねーよ!」

「ルーク、落ち着け。焦り過ぎ」

それじゃあ隠してますって言っている様なモンだぞ。

慌てるルークを落ち着かせて話の続きをする。

「まあ、深くは聞かないが。もし急いでいる理由があるんだったら、皆にそれとなく説明しておけよ。何にも説明しないで突っ走る奴は嫌われるからな」

「別にねーよ」

「……そっか。なら良い。じゃあしつかり役目を務めますか、親善大使殿」

「ケッ、分かってるっつーの」

ルークは舌を出して返事をした。



休憩も終わり、再度峠を歩き始めた。  
そして出口付近に到着した時、俺達の足元に一発の弾丸が撃ち込まれた。

「止まれ！」

女性の声がかから響き、視線を上げた。そこには魔弾のリグレットが立っていた。

「ティア。何故そんな奴らと何時までも行動を共にしている」

「モー스様のご命令です。教官こそどうしてイオン様を攫ってセフイロトを回っているんだすか！」

「人間の意志と自由を勝ち取る為だ」

人間の意志と自由だ……？ 何を言っているんだ。

「この世界は預言に支配されている。何をするにも預言を詠み、それに従って生きるなど可笑しいと思わないか？」

まあ、確かに。

リグレットにイオンが反論を出す。

「預言は人を支配する為にあるのではなく、人が正しい道を進む為の道具に過ぎません！」

「導師。あなたはそうでも、この世界の多くの人々は預言に頼り支配されている。酷い者になれば、夕食の献立すら預言に頼る始末だ。お前たちもそうだろうか？」

な訳無いだろ。それ以前に俺とコスモスに預言は無いし。ってか主婦のしんどさを知らないからそう言えるんだ。考えてみる、毎日毎日違うメニューを考えるんだぞ？ 栄養バランスも感が、マンネリを起こさないようにしなくちゃならないんだぞ？ それを出来るのか貴様はあ！？（経験談）

「まあ、その方がまだ楽だしねえ……」

「はい。毎日違うメニューを考えるのはしんどいですし」

「結局の所、預言に頼るのは楽な生き方なんですよ」

ジェイドがコスモスとユリアの話を簡潔にまとめた。

「そういうことだ。この世界は狂っている。誰かが変えなくてはならないのだ。そうでしょう？ ヤマト教導官」

「ん？ 俺お前に教導したことあったか？」

「……まあ良いでしょう」

あ、今ピクってなった。気にしてんだ……。

「貴方も世界を変えようとお聞きしましたが？」

「ああ。この預言だらけの世界は嫌いだし、約束したからな」

「では、私たちと」

「断る」

「何故ですか？」

「具体的な方法も聞けてないのに行ける筈がない。それに、お前等はシヴァと行動している。アイツは破壊の為にしか動かない。ソイツと行動しているって事は、そういう過程があるって訳だ。俺は反対だね」

シヴァは破壊の為に生まれ破壊だけにしか動かない。ならば必ず破壊という方法が取られている筈だ。俺はごめんだね。

「しかし！ そうしなければ世界は！」

「くどい」

「……ならティア、お前は？」

「私はまだ兄を疑っています。あなたは兄の忠実な片腕。兄の疑いが晴れるまでは貴女の元には戻れません」

ほう……あいつヴァンの片腕なのか。どれ、どれくらい使えるのか試してみるか。

俺の教導を受けたんだったらそれなりに実力を見せろよ。

「では、力尽くでもお前を止める！」

リグレットが二丁の譜銃を構え、俺達に向かって撃ってきた。

「散開！」

俺の指示で全員は散らばる。

俺は岩陰に隠れ、ブラスターガンを二丁、展開する。

成程……思い出したぞ。リグレットは確かに俺の教導を受けたな。だが確か名前はリグレットでは無かった気がするが。今はどうでも

良いか。

俺は岩陰から飛び出し、リグレットの足場を撃ち抜いた。足場は崩れ、リグレットは地面に着地した。

「今だ！」

ルーク達前線メンバーが飛び出しリグレットに迫る。

リグレットは銃で対抗しようとするが、俺とコスモスのブラスタースマートガトリングにより攻撃のタイミングを逸らす。

その隙にルークが斬りかかるが、譜銃で防ぎ、体術でルークを蹴り飛ばす。

やるな、だがまだまだ！

ガイが入れ替わるように迫り、素早い攻撃でリグレットを翻弄する。

そうだ、遠距離型のスタイルは接近されたら攻撃する術がない。

リグレットは体術こそ習得しているが、それ程実力は無い。

ならば、離脱させる隙を与えず攻撃を繰り返すだけだ。

「エナジーブラスト！」

ジェイドがリグレットの後ろに爆発の術を放つ。

「くっ！」

リグレットはガイを蹴り飛ばし、その場から飛びあがり術を避ける。

「隙あり！ エーテルドライブ！」

電撃を放つサンダーボルトを発動し、空中にいるリグレットに命中させた。

「うああっ！」

リグレットはまともに喰らい、地面を転がった。だがすぐに立ち上がり距離を取った。

チッ、タフな女だな！

「レイジレーザー！」

リグレットは俺に極太いレーザーを放つ。俺は側転でよけ、ブラスタを放ち、すぐさま刀に持ち替える。

リグレットはブラスタを避けるが、そこには俺がすでにいる。

「はぁあっ!」

「ぐっ!」

刀を振り下ろすが、銃で受け流され、もう片方の銃で俺の胸を撃つた。

だが残念。そこは装甲だ。

「化け物か!？」

「酷いな、ただの機人さ」

驚いて隙が出来ているリグレットを蹴り飛ばし、刀を構える。

「ホーリーランス!」

「クラスターレイド!」

ティアの光りの槍、ユリアの結晶の槍がリグレットに降り注ぐ。

リグレットは辛くも避けるが、テラがすかさず懐に潜り込み拳を放つ。

「煉獄掌！」

燃え盛る拳を叩き込み、爆発をさせる。

え、えげつねーな……。

「があっ……！」

痛みに耐えながらリグレットは銃を放ち、テラは離れる。その隙にリグレットは離脱し、崖の上に入った。

「やる……！」

「お前こそ、この人数にこのメンバー相手に良く持っているよ。合格点だ」

本音で称賛する。

うん、ヴァンの片腕なだけはある。

「ティア……。その出来損ないの傍から離れなさい！」

リグレットがルークを睨みつけながらティアに言った。



「出来損ないって俺の事か!？」

「……そうか。やはりお前達か！ 禁忌の技術を復活させたのは！」

どんな時でも冷静なジェイドが珍しく動揺しながら前に出て来た。

「ジェイド！ いけません！ 知らなければいいことも世の中にはある」

イオンにはジェイドの言いたい事が分かるのか、真剣な表情でジェイドを止めた。

「な……何だよ？ 俺を置いてけぼりにして話を進めるな！ 何を言ってるんだ！ 俺に関係ある事なんだから!？」

「誰の発案だ。デリストか!？」

ルークの訴えを無視してリグレットに問いただした。

そして、リグレットの口から俺にとって怒りの元になる言葉が出て来た。

「“フォミクリー”の事か？ 知ってどうなる？ 采は投げられた

のだ。死霊ネクロマンサー使いジエイ

ズドオオオオオン!!

リグレットの横を人がまるまる入りきる程のビームを撃った。

リグレットはいきなりの攻撃に反応出来ず、ただ立ち尽くしていた。

「 フォミクリー、だと? 貴様、まさか使っているのか? 」

リグレットにバスターライフルを突き付けて質問する。

「 答える。使用したのか? していないのか? 」

「 ……そこに居る死霊使いに聞いてみる! 」

リグレットは閃光弾の様なものを使い、俺達の目を絡ませて逃げ出した。

「 くっ……冗談ではない! 」

ジエイドが隣で怒りをあらわにする。

……という事は、こいつ。

俺はライフルをジェイドに向けた。

「……何のつもりです？」

「ジェイド。さっきの会話から察するに、貴様フォミクリーに  
関わっているな？ しかも研究者側で」

「……………」

ジェイドは黙ったまま何も言わない。  
俺は空に向かってバスターを放つ。

「もう一度聞く。関与しているんだな？」

「に、兄さん！ 止めて！ 今はこんな事してる場合じゃないで  
し  
ようー!？」

「…………ジェイド。もし貴様がフォミクリーに何らかの形で関わって  
いる場合、俺はそれ相応の行動を起こす」

ライフルを収納し、ジェイドに背を向けた。

ジェイドは落ちつきを戻し、皆と共に先に歩き始めた。

ただ二人、俺とルークはその場に立ち止まっていた。

「なあ！ フォミクリーってのが俺に関係あんのかよ！？」

「……分らん。だが、恐らくリグレットはお前の何かを知っているな」

「何なんだよっ！ くそっ！」

まさか……ルークがフォミクリーと関係して……レプリカ……？  
いや、そんな筈は無い。ルークは王子だ。そんな危険な事をする理由も必要も無い。

「どいつもこいつも俺をバカにしゃがって！ 俺は親善大使なんだぞ！」

「……ルーク。今は分からない事だらけだ。ヴァンなら何か知っているかもしれない」

「っ……ああ。……師匠とお前だけ……。俺の話聞いてくれるのは……」

「……アイツらだっけ聞いてやりたいんだろ。自分の事で一杯一杯なんだろ」

とはいっても、確かに皆はルークに何も説明をしなさ過ぎだな。  
コスモス達はそうでもないが……。いつかこれが問題になりそうだ。  
ルークに関してもヴァンにもっと自分で調べるようにい教育しろと言っておくか。

俺は怒るルークの愚痴を聞きながら歩き出した。

七割がた我儘だったが。教育し直さないと……。……。

## 最悪の結末（前書き）

二週間ぶり……。どうもこの小説の更新速度が遅い。やっと友人に小説を借りれたから、これからはもう少し早く書けるかな？  
短いですが、どうぞ。

## 最悪の結末

「これは……酷い」

アクセリユスに到着して俺が始めて口にした言葉がコレだ。

障気が辺り一面を覆いつくし、まさに地獄の風景だった。

不味い……この状態ではユリアとコスモスが術とエーテルを施した身体でも危険じゃないのか？

俺は走り出し、近くで座り込んでいた俺の“部下”を揺さぶった。

「おい！ 大丈夫か！？」

「うっ……隊長っ！？」

「しっ！ ……大丈夫か？」

「はい、私は。ですが、何人かはこの障気の異常さにやられてしまい、アステイル響士が治療に当たっています」

「そうか………すまない。俺達もっと早く到着指定いれば……」

「何を今更。我々は承知の上で貴方の部下になっているんです。誤

「られると困ります」

「……ああ、感謝する」

「おい、イブキ！」

「ガイが近寄ってきた。どうやら向こうで誰かと話をつけ、作業に移っているようだ。」

「これから住民を避難させる。まだ奥にいるみたいだ」

「わかった。なら俺は向こうを探す」

「ああ。大丈夫か？」

「ガイは隣にいた部下を肩に抱え、運び出した。」

「さて、俺は……。」

「ゴウ」

「はっ」

「名を呼ぶと、黒い衣を身に纏い、顔と頭を黒い布で隠している人影が現れた。」



背中には二本の刀と腰には二本の短刀をつけていた。

「リリースは？」

「この先で治療に専念しております。この障気です。早急に撤退したほうが宜しいかと。後、何やら不穏な空気が漂っています」

「不穏……？」

「はい。障気ではない、何か黒い空気が……」

「そうか。ではお前も住民に成り済まし、避難を手伝え」

「はっ」

「ああ、それとヴァンは何処だ？」

「数刻前、一人で奥に入ってゆきました」

「……一人で？」

何故だ？ 先遣隊はどうした？ どこかに待機させている？ 住民の避難をさせずに……？

「……ゴウ、先程の命令は撤回だ。ヴァンを探し、先遣隊の居場所を聞き出せ。避難を手伝わせる」

「はっ」

人影は消えた。俺は駆け出し、奥へと進んだ。

奥へ進むに連れ、息苦しくなってきた。障気が濃くなっている証拠だ。

「チツ、エーテル・ドライブ」

浄化の効果を持つリフレッシュを使用して、数分の間は自身だけ安全になった。

そして更に奥へ進み、広場に出た。そこには小さな小屋があり、その場だけ障気が微妙に和らいでいた。

ユリアの譜歌がコスモスのエーテルだな。だがもう効果が薄い。

俺は扉を開き中に入った。

中も地獄……とまではいかずとも、酷い有様だった。

苦しそうに唸りながらベッドに寝転び、女性の教団兵が何人か動き回っていた。

「症状が酷い人から教えてください！ 残りの人には少しでも楽になるよう治療術を施しておいてください！」

「リリイ！」

「っ、ヤマト師団長！」

この医神分隊アスクレピオスのリーダー、リリイ・アステイルに声をかけた。  
水色の長髪に緑の瞳を持ち、白を基調とした教団服を着た女性兵士。

「すまない、遅くなった」

「まったくです！ 手伝ってください！」

言われるまでも無く、俺は全員にリフレッシュと回復のメディカを使用した。  
すると寝ていた者たちは気分がよくなったのか、喋れるまで回復した。

「し、師団長……！」

「来てくれた……！」

「皆！ 待たせてすまない！ これからアクセリユスを脱出する！  
動けるものは自力で！ 出来ないものは医神分隊の手を借りても脱出しろ！」

「了解！」

指示を出すと、皆はそれぞれ動き出した。自力で動ける者は立ち上

がり、動けない者に手を貸して行動し始めた。  
俺ももう一度エーテルを使用使用とした時、扉が勢い良く開かれた。  
そして倒れ込むようにゴウが入ってきた。

「師団長……！」

「ゴウ！ 何があった!?!」

ゴウは血が流れている肩を押さえ、息も荒かった。  
ゴウを抱き起こし、何があったのか尋ねた。

「ヴァン・グランツは……セフィロトを消すつもりです！」

「何っ!?!」

「ルーク・フォン・ファブレの超振動を使用して……！」

「ルークが!?! だがは同位体がいなければ超振動は……！」

「ヴァン・グランツが口を零しました……ルークは完全同位体……  
更に一人で超振動を発生できる　ゴホッ！」

「ゴウ!?! くっ!」

メディカを使用し、ゴウを治療する。しかし、横から手が出された。

「リリイ……！」

「行ってください！　ここは私達が！　皆を守ってください！」

「……頼む！」

ゴウをリリイに預けて小屋から飛び出た。

何故だヴァン！？　お前は預言を覆すんじゃないのか！？　消し去るんじゃないのか！？　まさかりグレットが言うように世界を破壊するつもりなのか！？

俺はアクセリユスのセフィロトがある場所に急いだ。

しかし、あと少しでセフィロトの場所に辿り着く前に、大きな地震が起こりだした

嘘だろ……！？　まさか本当に……！？

「くそっ……！」

俺は封印が解除され、洞窟になっている場所に入った。

セフィロトは巨大な音叉の形をしており、その周りに輪がある。しかし、俺が目の当たりにしたセフィロトにはその輪が無かった。

「なっ　　!？」

消滅した。不味い、アクゼリユスが崩落する。また、何も出来なかった。今回の為だけに何十年も準備した。

教団の最高地に着き、自分だけの最強の師団を作り、世界各国に人脈を作り……だが、それもはや無意味に終わった。

下であざ笑っているヴァンに……俺の弟子に……俺の弟に……!

「ヴァアアアアアアアンンンン!!!」

刀を展開し、崖から飛び降りる。地面に着地し、ヴァンへ向かって駆け出した。

「お前は！　お前は何をやったのか分かっているのかっ!？」

刀を振り下ろし、ヴァンは剣で受け止める。

「イブキさん！　貴方は分かっている！　この世界を破壊しない限り預言は無くならない！」

「何故そう言い切れる!？」

「では何故そうでないと思える!？　貴方は、二千年も見てきたの  
でしょっ!？」

「何っ　　!?!」

ヴァンは剣で刀を弾き、横に振り払った。俺はそれをかわし、座り込んでいたルークの前にでた。

「シヴァか!」

「そうです! 奴から全て聞いた! 貴方は二千年前からローレライの力で今まで生きてきた! そしてユリアも!」

「それを知って、何故こんな事をする!?!」

再び切りかかり、ヴァンと剣を交える。火花が散り、刃がぶつかり合う音が響く。

「そんな事は関係ない! 私はただ、この世界から預言を葬り去る! それが、例え破滅の道だとしても!」

「ヴァン!」

「畜生! 間に合わなかったか!」

そんな声が聞こえ、上を見るとアッシュがいた。

「アッシュ！ 何故ここにいる！？ 来るなといったはずだ！」

「……残念だったな。来たのは俺だけじゃない。あんたが助けようとしてた、大事な妹も連れて来てやったぜ！」

アッシュの後ろにティアが、ジェイドが、ガイが、アニスが、ナタリアが現れる。

「くっ　　！」

ヴァンは俺から離れ、指笛を吹いた。すると二匹のグリフィンが現れ、一匹はアッシュを掴み、一匹はヴァンを乗せた。

「ヴァン　　！？」

ブラスターを撃とうとしたが、剣の雨が目の前を降り注ぎ、咄嗟に手を引っ込めた。

くそっ、シヴァがいるのか！？

辺りを見渡したがシヴァらしき姿は何処にも見なかった。

「放せ！ 俺もここで朽ちるー！」



アッシュは暴れたが、グリフィンは全く放さない。

「イオンを救うつもりだったが仕方が無い。お前を失うわけにはいかぬ」

「師匠……なんで……師匠……師匠……」

「っ、ルーク！」

ルークに駆け寄ろうとしたが、再び剣の雨が降り注ぎ、行く手を阻む。

くそっ！ ルークを殺すつもりか！？

「兄さんっ！ やっぱり裏切ったのね！」

ティアの泣いているような叫び声が聞こえた。

「この外殻大地を存続させるって言ってたじゃない！ アクゼリユスの人も、タルタロスにいる神託の盾も皆死んでしまうわ！」

「……メシユティアリカ。お前にもいずれ分かるはずだ。この世界の仕組みの愚かさや醜さが。それを見届けるためにも……お前だけ

には生きていて欲しい」

「ふざけるな！ お前のやっている事こそ愚かな事だ！」

「……メシユティアリカ、お前には譜歌がある。それで……」

「ヴァン！！ ヴァンデスデルカツ！！」

ヴァンはグリフィンの腹を蹴ってアツシユと共に穴の開いた天井に向かつて飛んで行き、空へと消えていった。

「不味い！ 坑道が崩れます！」

ジエイドが叫んだ。

不味い、早くルークを！

俺はルークに駆けつけようとするが、剣の雨が邪魔をする。どうしてもルークを殺しておきたいようだ。

なら、そっちがその気なら俺は！

駆け出し、雨の中を進む。剣が肩に、腕に、背中に刺さる。

シヴァの持つ剣は全て俺の装甲を貫くほどの威力を持つ。その様な目的に作られたからだ。

「ルーク！」

ルークの腕を掴み、引き寄せた。その間も剣は降り注ぐが、その場で左腕を上にあげ、コアによる光の障壁を展開して防ぐ。だがこのままでは移動できない。向こうでガイが叫んでいるが、剣で邪魔をされて動けない。

……こうなれば。

「ルーク、ちゃんと受身をとれよ」

聞こえているのか分からないルークにそういい、右腕にコアの力を送り込む。

そしてルークを掴み、渾身の力でガイに向かって放り投げた。その瞬間、ブラスト・ドライブをルークの頭上に撃ち出した。

これでルークが移動する射線上に剣は降り注がない。放った砲撃はガイたちの頭上も越え、壁にぶつかる。

ルークはガイにキャッチされた。その時、ルークは一瞬だけこっちを見た気がした。

そして、剣が降り注ぐ中、俺は崩れ落ちた地面と共に魔界クリフォートに落ちていった。

う……何処だ……ここ……？ 一体何が……！

ようやく役に立ってくれたか、レプリカ。

ヴァン師匠の言葉が頭を過ぎった。

そうだ……俺、師匠に……捨てられたんだ。

そんな事無いと自分に言い聞かせてもまったく無駄だった。

「ご主人様、よかったですの！」

ミュウの嬉しそうな声が聞こえる。それが癪に障った。

「う、うるせえ……」

俺は立ち上がって辺りを見渡した。辺りは紫の靄に包まれていた。視界が利かないほどじゃないが、どことなく不気味だった。直ぐ傍にはどろどろした紫の海のようなものが広がっていた。

「……………ここは……クリフォート魔界？」

イオンの声が聞こえた。

「ティアのおかげで助かりました。そうでなければ、我々も障気によって死んでいた」

障気？　ちよつと待てよ。障気は俺の超振動で消えたんじゃないのかよ？　超振動を使えば、障気を中和出来るって師匠が……！

愚かなレプリカルーク。

何なんだよ……！？　一体何が起こってるんだよ！？　そつだ！  
イブキなら！　あいつなら教えてくれる！

「な、なあ！　イブキは！？　イブキは何処だ！？」

「「……………」」

「ど、どうしたんだよ…………？」

何で皆黙るんだ？　そついえば、コスモス達もいねえ……………何処に行つたんだ？

「ルーク……………イブキはお前を庇って……………」

「ガイ？……！」

言われて思い出した。あの時、ヴァン師匠において行かれたとき、イブキが俺を放り投げて……。

「おち……た……？」

「っ……！」

ティアが唇を噛むのを見た。

嘘だ……イブキも俺を置いて……！

「そんな……！　嘘だ……あいつが死ぬなんて……！」

「……アクゼリユスの住民の姿が見えません。泥の海に呑まれたの  
でしょう」

「っ……！」

ジエイド……今、なんて行った？　泥に呑まれた？　誰が？　アク  
ゼリユスにいた人たちが？　じゃあ、ここにいないコスモス達も？

「タルタロスに行きましょう。緊急用の浮標が作動しているようで

す。この泥の上でも持ちこたえている」

「でも、あそこには神託の盾が」

ティアの言葉にジェイドは首を振った。

「我々が助かったのは、あなたの譜歌のおかげです。彼らにその加護は無かった。行きましよう」

ジェイドは歩き出し、俺もふらふらと後に続いた。

「……………」

。

「……………?」

今、何か聞こえたような……………?」

い。

「……………!」

聞こえた！ 確かに何か聞こえた！ 人の声のような……！

「おー……い！ ルーク、こっちだー……！」

「この声……イブキか!？」

「えっ!？」

思わず叫び、ティアがそれに反応した。

俺は声がある方に向かい、そして見つけた。瓦礫の山で死角になっていて、声が聞こえなければ見つからない場所にいた。ただし

「おう、ルーク。見つけてくれたか」

「 なっ」

「お兄ちゃ                   !？」

「おっと、あまり今の姿は見ないほうが良い」

頭以外の皮膚がボロボロになっており、血と銀の何かが見えていて、まるで譜業みいだった。

頭からも血が流れており、腕が可笑しい方向に曲がっていたり、もはや生きているほうが異常な状態だった。



「悪い、右足が岩で挟まっちゃまってさ。この状態の腕じゃまともに力が出ないんだ。手伝ってくれ」

「あ、ああ……」

俺は恐る恐る近付き、イブキの足を岩から抜いた。

「助かった。ありがとうよ」

「い、いや……けど、その身体……」

「ん？ ああ、落ち着いたときに話すさ。皆のところへ行こう。落ちてるときに見えたが、コスモス達も無事に“降下”していたから大丈夫だ」

「え、あ、ああ……」

イブキは身体の傷なんて何とも無いかのように歩き出し、今だ放心状態のティアに近付き、我に返ったティアに「お化け……!!」と、泣き叫ばれた。

もう一度……（前書き）

今回はまあ……勝手な訴えです。不快に思ったらどうもすみません。

もう一度……

動きずらい身体を動かしてタルタロスまで歩いた。ジェイドが中を確認し、安全が確認され俺以外は全員乗り込んだ。俺はコスモスたちが来るのを外で待っていた。

「イブキ！」

「っ、コスモス！」

俺達が来た方向とは別からコスモスたちがやって来た。傍にはゴウとリリイもいた。ゴウ以外全員怪我は無いようだ。

「イブキ、貴方その身体は……！」

「大丈夫だって。やられたのは全部パーツの部分だけだ。臓器とかには傷一つ出来ていない」

そう……出来ていなかった。刺さった剣は全て機械部分だけだった。まるで、意図的にそうしたように綺麗に……。

「師団長、せめて何かで隠してください。見つければ問題になります」

リリイが痛々しい表情を浮かべて注意してきた。

「あ、そうだな。……ところで、他の団員は？」

「安心してください……“彼ら”が全員を“転送”してくれました」

「彼ら？ 転送って」

「この俺だよ、イブキよ」

コスモスたちの後ろから男の声が聞こえた。  
俺はソイツの姿を目に入れて驚いた。

「シヴァ……！？ 何故貴様が！？」

シヴァとテロスが立っていた。シヴァはニヤリと笑って腕を組んでいた。

「それは焰を殺そうとした事か？ それとも俺が哀れな騎士共に慈悲をくれてやった事か？」

「後者だ！ お前は決して人を助けなどしなかった！」

「気まぐれというものだ。もしアレで全員死んでいたら、貴様は今後まともに戦えんと思ったからな」

「っ……」

そつだ。今回の件で俺は何百という団員を失うところだった。もし全員死ねば、そいつらの死は全て俺が招いた事になる。そうなれば、俺は……。もう、立てなくなっているかもしれない。

「フン、まあ良い。それより早く乗らんか。こんな場所、流石の俺でも立っていたくない」

シヴァおテロスは俺を通り越し、タルタロスの中へ入っていった。

「むっ！ 何なんですかあの銀髪は!？」

「……イブキ」

テアがプンスカと腹を立て、コスモスが俺を心配している眼で見つめてきた。

「……大丈夫だ。俺達も行こう。……ユリア？」

ユリアは魔界クリフトの景色をずっと見つけていた。  
いや違う。魔界の景色じゃない。崩落したアクゼリユスの残骸を見  
つめている。

「ユリア……」

「……何でもないわ。行きましょう」

ユリアは笑みを浮かべたが、やはり辛そうな表情をしていた。

中は神託オラクルの盾の死体だらけだった。恐らく、崩落の衝撃で皆死んだ  
のだろう。ティア達とユリア達は譜歌で助かり、俺はコアの力を全  
身に纏って衝撃を和らいだ。下が地面であって良かった。まあ、そ  
のおかげで身体全身が大変な事になっているが。

……エルデカイザーを呼んだほうが良かったか？

「貴方達は……何者です？」

っと、甲板でジェイド達とシヴァとテロスが鉢合わせたようだな。

俺は足を引き摺りながら甲板に出て、ジェイドに待ったをかけた。

「待てジェイド。こいつらは敵じゃない。少なくとも、戦闘の意思は無い」

「……………」

「そう殺気立つな。思わず殺してしまう」

だからさ、そういった煽りは止めるって。せつかくジェイドが槍をしまったのに、また殺気立ったじゃないか。

「……………ジェイド、こいつらの事は放っとけ」

俺は壁に背をつけて座り込んだ。

これはユリア・シティに戻ったら大掛かりな修理が必要だな。何日かかる事やら。

「大佐、今はユリア・シティへ急ぎましょう」

「……………分かりました。後でこの場所の事と、貴方のことも説明してもらいますよ？」

……………さてさて、何と説明したものか……………。

「行けども行けども、何も無い……なあ、ひよっとして、ここは地下か？」

泥の海を進むタルタロスの手摺に掴まって、不気味な色の海、そして空を見ながらガイはそう聞いた。

「……ある意味では、そうね」

そう答えたのはティアだった。

「あなたたちの住む場所は、ここでは『外殻大地』と呼ばれているわ。そこは、この魔界から伸びる、セフィロトツリーという柱に支えられている空中の大地なのよ。そしてアクゼリユスにはその柱の一本があつた」

「意味が……分かりませんわ」

ナタリアが眉を細める。そりゃそうだろう。いきなりこんな事を言われても、意味が分からないだろうからな。



「……昔、外殻大地はこの魔界にあったのよ」

この場にいたほとんどの人間が眼を見開いてティアを見た。

「二千年前、オールドランドを原因不明の障気が包んで、大地が汚染され始めた。その時、ユリアが七つの預言<sup>スコア</sup>を詠んで、滅亡から逃れて繁栄するための道筋を発見したの」

ティアの説明に、当の本人　　ユリアが肩をビクつかせた。

そして、ティアの説明をイオンが引き取った。

「ユリアは　　預言をもとに、地殻をセフィロトで浮上させる計画を発案しました。それが外殻大地の始まりです」

ああ、アレは骨が折れたな。何せ、全世界の人間に計画の説明をして、セフィロトを設計、製作、実験と、寝る間も惜しんで遂行したのだから。

「ですが、これを知っているのは、ローレライ教団の詠士職以上と、あとは　　魔界出身の者だけです」

「じゃあ、ティアは魔界出身の……?」

アニスが怯えたような眼でティアを見る。

「……僕達は崩落したようです。助かったのは、ティアの譜歌のおかげのようですね」

「ですが、何故こんなことになったんです？ 話を聞く限りにおいては、アクゼリユスはセフィロトにツリーに支えられていたのでしょうか？」

ジエイドがイオンに尋ねる。

「それは……柱が消滅したからです」

「どうしてですか？」

アニスがそう質問すると、ティアは黙って後ろを振り返った。そこには俺の前にいるルークがいて、見られたルークは一步下がった。

「……お、俺は知らないぞ！ 俺はただ、障気を中和」しようとしたただけだ！ あの場所で超振動を起こせば、障気が消えるって言われて……」

「貴方は兄に騙されたのよ。そして、アクゼリユスを支える柱を消してしまった」

「そんな！ そんなはずあるか！」

ゴウの言うとおりだったか。信じたくは無いが、ルークの様子から、ヴァンがそう言ったのだろう。

ヴァンを尊敬しているルークだ。ヴァンの事を完璧に信じていたのに違いない。俺も……全く疑わなかっただろう。

「僕が迂闊でした。ヴァンがルークにそんなことをさせようとしていたなんて……」

「せめてルークには事前に相談してほしかったですね。仮に障気を中和することが可能だったとしても、住民を避難させてからで良かったはずですし……。今となっては言っても仕方無い事なのかもしれませんが」

ジエイドが眼鏡を押さえて溜息を吐いた。

「そうですね……。アクセリユスは……消滅した。何千という人間が、一瞬で……」

ルークはまた下がり、俺の隣まで来て、壁に背中を付けた。

「お、俺が悪いつてののか？ 俺は……俺は悪くねえぞ！ だって、

師匠せんせいが言ったんだ……そうだ、師匠がやれって！こんなことにな  
るなんて知らなかった！誰も教えてくんなかっただろっ！何が  
事前に相談だ！自分だけわかったような口ぶりで、勿体つけて何  
も説明しないような奴に、どうして言えるってんだ！非難させて  
からだど！師匠がそれじゃ駄目だって言ったんだ！住民を避難  
させず障気を中和しなくちゃ、俺は一生、キムラスカの道具だつて  
！だから……だから俺は……俺は悪くねえっ！俺は悪くねえっ  
！！」

ルークは吼えた。まるで自分が壊れてしまわないように、蓄積され  
た何かを吐き出すように吼えた。  
ルークの瞳は涙で溢れていた。拳も握って真っ白になっていた。

するとジェイドは、眉をひそめ、踵を返した。

「大佐？」

ティアの呼びかけに足を止める。

「ちょっと他を見てきます。……ここにいと、馬鹿な発言に苛々  
させられる」

そう言い残すと、ジェイドは何処かへと行ってしまった。

「なんだよ、あいつは！俺はアクセリユスを助けようとしたんだぞ！」

「変わってしまいましたのね……」

ナタリアが怒りと悲しみを混ぜ合わせたような表情で首を振った。

「記憶を失ってからのあなたは、まるで別人のようですよ……」

「お、お前らだって何も出来なかったじゃないか！俺ばっか責めるのかよ！」

「貴方の言うとおりです。僕は無力だ。だけど」

「イオン様！こんなサイテーな奴ほつといた方がいいです」

アニスはイオンの腕を引き、ナタリアと共に出て行った。

「わ、悪いのは師匠だ！俺は悪くないぞ！なあ、ガイ！そう  
だろ！？」

ルークは唯一の親友を見た。ヴァンと自分を良く知る者ならばと。  
だが、現実はず違った。

「ルーク……あんまり幻滅させないでくれ」

苦しげに言って、ガイもまた立ち去ってしまった。

ルークはゆっくりとティアを振り向いた。しかし、やはりティアの眼を冷たかった。

「少しはいいところもあるって思ったのに……私が馬鹿だった……」

そう言い捨て、ティアも立ち去ってしまった。

「ど、どうしてだよ！ どうして皆俺を責めるんだ！」

ルークは膝をつき、床を殴りつけた。

「……シヴァ」

「何だ……？」

「……少し、頼まれてくれないか？」

俺は左手をシヴァに伸ばした。

「……ふん、今回は頼まれてやろう。俺も少々、くるところがある」  
「ありがとう……」

シヴァは俺の左手を握り、俺はコアの光を流した。  
俺とシヴァの間だけに出来るシステム……記憶送還データバックで、俺の記憶を渡した。

「テロス、行くぞ」

「ふん……」

テロスは俺とコスモスを睨み付けた後、シヴァの後を追いかけた。

「コスモス……少し、ルークと二人きりにさせてくれないか？」

「……分かりました。……私達は決してルークを見捨てたりはしませんと、伝えてくださいね」

コスモス、ユリア、テア、リリイ、ゴウも甲板から出て行った。

俺は倒れないようにゆっくりと立ち上がり、ルークに近寄った。ルークの傍には、ミュウだけがいた。

「ルーク」

「……何だよお……お前も、俺を責めるんだろお……！」

ルークは涙で顔を歪めていた。そんなルークを俺は……。

「ルーク……歯ア食いしばれ！」

俺はルークを、顔が潰れないように加減して殴り飛ばした。

「がつ　　！？」

「ルーク！ お前は確かにとんでもない間違いを犯した！ それは決して許されない事だ！」

「っ！？」

「それを認めず、逃れることは決して出来ない！ お前は一生業を背負って生きてゆけ！」

「っ　　んだよお……！　　やっばお前も俺を……！」

「ああ、責めてやる！ お前が自分が犯した間違いを認めるまで！  
だがなあ！　俺はアクゼリユスを崩落させた事を責めたりはしない！」



「…………えっ？」

座り込んでいるルークの襟元を掴み上げ強引に立たせる。

「俺はお前が間違いを認めないのを責めてるんだ！ いいか！ 人間ってのは、必ずしも大きな間違いを起こす！ それを認め、逃げずに立ち向かうのも人間だ！ 俺だってそうさ！ 俺のミスで、何百人って人間を殺してしまった！ そして見捨ててきた！ 俺はそれから逃げたりしない！ 何故ならそれが俺の意地だからだ！」

「っ…………！」

「俺は絶対に逃げない！ どんな困難であろうとも、俺は必ず乗り越える！ お前も、乗り越えて見せる！」

床に投げつけ、ルークを呆然と俺を見上げる。

「…………けどよお…………！ 俺は皆に見捨てられて…………」

「俺がいるだろうがっ！！」

「っ…………！？」

「俺だけじゃない！ コスモスもユリアもテアもテラもミュウも！ お前を見捨てない人間は絶対にいる！ 見捨ててなるものか！」

だから！ 立て、ルーク！ 立ってお前の意地を見せてみる！」

「……………」

ルークは黙って俺を見上げていた。そして自分の手のひらを見つめ、拳を握った。

「…………俺は…………まだ、一人じゃない…………？」

「ああ！」

「そうですね！」

「…………俺は…………俺は……………」

ルークは静かに泣き出した。俺はそつとルークの頭を撫で、胸を貸してやった。

こんななりでも、ルークはまだまだ子供だ。なのに、こんな残酷な運命を背負うのは限界がある。人こそは殺していないが、本当なら殺していたんだ。傍に誰かがいてやらないと、こいつは…………絶対壊れる。

俺はアイツの頼みを特別に聞き入れ、あの愚か共がいるであろうブリッジに向かっている。

「どうしてあのガラクタの頼みを聞いたんだ？」

「ふん、アレは腐っても俺の兄で、宿敵だ。ソイツが俺と同じ事を考えたのだ。聞き入れんわけにはいかん」

「だが、何時かは壊すんだろう？」

「そうさな……一応、俺達も“アレに頼まれた”身だ。それが終われば、な」

そう、俺達が復活したときに頼まれた願い。それを叶えたら、俺は奴と今度こそサシの勝負を着ける。

「……ここだな」

俺は扉を開け、中に入った。中には馬鹿どもが全員いて、こちらを見てきた。

「……何のようですか？ 貴方も親善大使の言葉に苛立ちを覚えたのですか？」

眼鏡……イブキの記憶によればジェイドだったか。そいつが俺に向かって言った。

「ちょうど良い。ここで貴方達のことを話してもらいましょうか？」

ジェイドは右手に槍を出現させて脅してきた。

ふん、くだらん。その程度のこと、俺には全く意味を成さん。

「黙れ愚か者め。貴様程度の如き、俺と口を利くことすら許されん」

「……………」

ジェイドは眉一つ動かさなかったが、明らかに苛立っている。

「さて、俺がここに来たのはアイツの頼みで、貴様らを説教してやるからだ」

「説教？ なに言ってるの、コイツ？」

「黙ってる、ガキが」

「んなつ！？」

馬鹿なガキ……ア二スを黙らせて全員を見渡す。

「いいか貴様ら。あの坊主は確かに愚かしい事をした。それは貴様ら偽善者にとっては許される事ではないだろう」

「偽善ですって？ その言葉、聞き捨てなりませんわ！」

「だから黙れと言っておろう、偽善の塊が！」

ナタリアを黙らし、俺は続ける。

「善というものは、決して意識して行うものではない。生まれながらにして、極自然に、必然的そうになってしまうのが善だ！ それを意識してやるなど、己の欲を満たすための行為にしか過ぎん！ そうであるう、キムラスカの姫よ！ 貴様は善行を成し、そしてこう感じただろう……ああ、良い事をしたなと」

「その何処がいけませんの!？」

「全てだ！ 真の善とは決して報われない。それがさも当然のようになり、何も感じず、誰からにも褒め称えられない。だが偽善は違う。自分の行いに達成感、喜び、優越感を感じ、あまつさえ誰かに称賛される」

そうだ。だから人間は薄汚く、卑しい。自分が褒められたいから、崇められたいから。その優越感を味わいたいから愚かな行為に走る。

自分の糧にならない者は見捨て、糧になるものだけを助ける。しかし、だからと言ってどちらも助けるようにする奴はもつと愚かだ。それが身を滅ぼし、結局はどちらも巢くえない。真の善というのは、当然のように助け、それが当たり前のように感じられ、言葉すらかけてもらえない。それが現実であり、当然の理である。

「でだ、故に俺は一刻もここから立ち去りたいわけだが、イブキの頼みを果たすでしょう。まず……ジエイド」

「……何です？」

「貴様はルークに馬鹿な発言と言ったな？ 苛々させられると」

「それが何か？」

「では聞こう。ルークの発言の何処が馬鹿らしい？」

「……なに？」

俺の言葉にジエイドだけでなく、全員が反応した。

こいつら……まったく分かっていないようだな。

「自分は悪くない……まあこれは半分真実だ。ヴァンに騙されてやったのだからな。そして貴様はこうも言ったな？ 事前に相談してほしかったと。そしてルークはこれに対し何と言ったか？」

「さあ？ もう覚えていませんね」

「何も教えてくれなかった奴に相談できるわけないだろうと言った。これは実に……その通りである。話も聞かない、教えてくれない人間に相談ごとなど、するわけがない」

「……………」

「次は……ナタリア、貴様だ」

「な、何ですか？」

ナタリアは俺の顔を睨みながら恐れていた。

ふん、この程度のことでは臆するか。キムラスカも終わりだな。

「貴様はルークに対してこう言ったな？ 記憶を失ってからルークは別人だと」

「え、ええ……………」

「貴様は馬鹿か？ 当たり前だろう。何だ？ 記憶がなくなっても人格、性格は失っていないとも思ったのか？」

侮蔑を込めて笑ってやった。

「人格というものは今まで生きてきた経験から作られる。甘やかされた環境で育てられたのなら何も出来ず、ただ威張るだけの愚図に。何も無く、我武者羅に生きてきたのなら、そいつは立派に自立し、大した人間となる。即ち、いくら貴様の知っているルークが後者のような人間であったとしても、生きてきた経験……記憶を全て失えば、人格は無くなる。例え、前に出来た根本的な人格が残ろうとな」

「そ、そんな筈はありませんわ！」

「そして今のようなルークに育て上げたのは貴様らがつくった環境の所為だ。前のルークに戻って欲しいからと今のルークを見ようとせず、自分の理想をなすりつけ、その結果捻くれた。そしてヴァンという人間に付け入られる隙を与えた。……これは貴様にも言えることだ、ガイ」

「……………」

ガイは思うところがあるのか、何も否定しなかった。

こいつは……まあ、この中では一番マシか。

「貴様はまがりなきにもルークの唯一無二の親友であろう。なのに、何故見捨てた！」

「ち、違う！ 見捨ててなんか

」



「結果的にルークはそう思い込んでいる！」

「っ……………！」

「そしてアニス……………。貴様は金目当てにルークに近付いた……………この中でもっとも愚かな存在だ」

「……………んだとコラ？ 何も知らないくせにデカイ口たたくな」

ほう、それが本性か。やはり醜い。

「貴様、フォンマスターガーディアン導師守護役であろう？ なのに、何故貴様はイオンから離れた？ 貴様が離れなければ、アッシュが辿り着くまで時間は稼げた筈だ」

「違います！ それは僕が……………」

「守護者とは、どんな事があるうとも守るべき対象からは眼を離さない。……………教団で教わったはずだ」

「そ、それは……………」

「そして導師イオン。貴様は純粹すぎる。世界の悪をもっと学ばべきだ。そして自分の置かれている立場ももっと理解しろ。それが、上に立つ者の義務だ」

「はい……………」

……素直な奴だ。だが同時に頑固だ。このような人間が一番手強い。

「そして最後に……ティア・グランツ。イブキの……いや、これは俺からは言わないでおこう」

「……？」

いずれ近い内にイブキから言っただろう。それまで取っておいてやろう。

「貴様はヴァンの企みを感じていたのだろうか？」

「……ええ」

「なのに、ヴァンを疑いきれず、口ではいつておきながら何もしない。俺が貴様の立場なら、是が是非でも、相打ちでも殺す。だが貴様は出来なかった。そしてその結果が崩落を招いた」

俺はここで一息つき、全員を睨み付けた。憎悪と嫌悪、侮蔑と怒りを込めて。

「つかむところ……この崩落は貴様ら全員が引き起こした事だ。ルークだけを悪に染め上げ、自分たちは関係ない、無実だと責任を全て！ ルーク一人に押し付けた！ 違うか！」

俺の問いに、誰も答える事はしなかった。いや、出来ないのだろう。自分でちゃんと気づいてしまっているのだからな。

「ルークも悪い。だが貴様らも同じ、いや責任をすべて押し付けている時点でそれ以上だ。己の愚かしさを嘆き、恨むがいい」

俺はブリッジを出て行った。

言う事は全て言った。これでイブキも満足なはずだ。

正直、俺は今すぐにでも葬りたい気分だが、それではいかんだ。

俺はテロスを引き攀れ、どこか適当な部屋に入った。

それから程なくして、ユリア・シティに到着した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6369n/>

---

テイルズ・オブ・ジァビスサーガ

2011年12月2日01時55分発行